

兄弟子のおしごと！

如月屋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは九頭竜八一、空銀子。その2人にいた兄弟子。天災と言われた棋士。一ノ瀬悠斗、その人のお話し。

もし九頭竜八一に兄がいたら。もし空銀子に兄がいたら。もし八一の弟子達に伯父がいたとしたら。もし神と並ぶほどの兄がいたとしたら。もし最強が身近にいたら。みんなはどうなったのだろうか。八一は、銀子は、弟子達は、清滝家は どう変わっていったらだろう。

そんなifの未来を書いたお話しが今始まる。

目次

盤外編

盤外編 トリック・オア・トリート

1

本編

第零局	最強の兄弟子	11
第一局	弟弟子	17
第二局	新しい家族	24
第三局	将棋会館	30
第四局	九頭竜 vs 神鍋	38
第五局	もう1人のあい	46
第六局	弟子入り	53
第七局	試験前日	62

第八局	入会試験 前半	71
第九局	入会試験 後半	79
第十局	完璧な将棋	91
第十一局	師匠と弟子	99
第十二局	天衣無縫	106
第十三局	捌きの巨匠	116
第十四局	振り飛車	123
第十五局	将棋星人	133
第十六局	ゴキゲン	141
第十七局	らしい将棋	148
第十八局	TOKYO	158
第十九局	大盤解説	165
第二十局	天神研	174

第二十一局	玉座戦第一局	183
第二十二局		191
第二十三局	一ノ瀬、人間やめるって	199
よ		
第二十四局	ハワイ	209
第二十五局	前夜祭	217
第二十六局	兄弟子のおしごと!	224
第二十七局	臥竜鳳凰	232
第二十八局	第四局前夜祭	240
第二十九局	竜王戦1日目	249
第三十局	最後の審判	257
第三十一局	竜王 九頭竜八一	

第三十二局	指し始め式	275
盤外編	メリークリスマス	283
天衣		283
盤外編	メリークリスマス	289
万智		296
第三十三局	AI将棋	304
盤外編	新年のご挨拶	309
第三十四局	1人じゃない	316
第三十五局	壁	323
第三十六局	本音	330
第三十七局	望み	337
第三十八局	順位戦	
265		

	第三十九局	A級順位戦最終局	
347	第四十局	そうだ、京都行こう。	
356	第四十一話	トップ棋士のおしごと！	
	第四十二局	4人と1人	364
	第四十三局	桜花爛漫祝福が如し	375
383	第四十四局	名人戦第一局	394
403	第四十五局	女王戦第一局前夜祭	
	第四十五局	女王戦第一局	412
	第四十六局	名人戦第二局	
	第四十七局	茨姫とシンデレラ	
427	第四十八局	師匠のおしごと！	
437	第四十九局	女王戦第三局	
	第五十局	天災という名の少女達（少女達という名の天災）	444
	第五十一局	三段リーグとは…	451
460	第五十二局	名人戦第七局	
	第五十三局	名人戦第七局 2日目	470
477			

第五十四局	天災と災害	485
第五十五局		492
第五十六局	コップ一杯の水	499
第五十七局		506
第五十八局		514
第五十九局	ユメ	521
閑話	おいでよ。棋士室の森	526
第六十局	前夜	532
第六十一局	棋帝戦第一局	539
第六十二局	0か1もしくは1000	545
閑話		553
第六十三局	兄弟という名のライバル	553

第六十四局	名人の思考	558
大事なお知らせ。		569

盤外編

盤外編

トリック・オア・トリート

今年も例の季節がやってきた。研修会のちびっ子どもに菓子をあげる例のやつだ。

「ほら！みんなで！セーの」「トリック・オア・トリート!!」「」

「とういと!!!」

それぞれネコミミやらなんやらを生やしたり三角帽子をかぶったりと中々可愛らしい格好をしてやって来たのは八一率いるJS研のみんなだ。シャルちゃんはまだトリートが言えないようだ。仕方がない。

「はーい。君たちにはこれをあげよう」

割とガチでお手製のクッキー。焼くの大変だった。

「おじさんが焼いたんですか!?!?」

「うん。まあ頑張ったよ」

「すごいです！師匠と違いすぎます！」

「おーい、八一が泣いてるぞー」

「一ノ瀬先生！ありがとうございます！」

「ございます!!」「しやう、ちえんちええのくつきーうえしいんだをく!?」

「よかったよかった。ほら、事務の人とかにも貰えるかもだから行っておいで!」

「「はーい!」」

るんるんでみんなは他のところに行った。その後は研修会所属のちびっこがたくさんもらいに来たわけだが・



それから結構なちびっこがきたが唯一来ていない子がいる。いや正確には来たけどもらいに来ていない子がいる。その名も・:

「なにやってるの?」

夜叉神天衣。うちの弟子だ。壁に隠れている。

「なっ!何もやってないわ!ただ見ていただけよ」

「別に入ってこればいいじゃん。もっとも女流棋士のお前は棋士室に居ればいいがな」

「そ、それもそうね」

ソワソワしまくってる。

「で、プロのあんたこそここになんではいるのよ?よっぽど私の方がおかしくなと思うけど?」

「お菓子を配りにきたただだよ」

「お菓子？」

「ハロウィンだろ？」

「あ、ああ。そういえばそうね！今日はハロウィンだったわね！」

忘れてた様に振る舞うが絶対知ってた。その下手っぴな劇が見ていて面白い。

「天衣もいるか？」

「べつ別に要らないわよ！で、でもどうしてもって言うなら」

「いや無理してもらわないで。せっかくのお手製だ。余ったら俺がポリポリ食う

よ」

「お、お手製？？だ、だれの？」

「もちろん俺だが？」

「師匠の・・・お手製……………うゝ」

「いるのか？」

「ふっふん！貰ったあげるわよ。どうせあんたなんてちびっこしか相手してくれなくて女流棋士とか奨励会員は貰ってくれないでしょうから余ってるでしょ？食口スは良くないから貰ってあげるわ！」

「はいはい。じゃ、言わないとな」

「は？」

「ほら、トリック・オア・トリートって言わないとな。あ、ついでにこの帽子かぶって俺が取り出したのは魔女が被るあの三角帽子だ。」

「だ、誰がこんな！」

「ほーら。あげないぞ〜？」

「っ！…… 晶！殺つちやいなさい！」

「すみませんお嬢様。不覚ながら私、お嬢様が帽子被ってトリック・オア・トリートと言う姿が見たくて堪りません。私は先生に従うのをお勧めします」

「さあ、ビデオカメラを構えた晶さんを味方につければ百人力！視線を合わせてかたい握手をする。」

「ず、ずるいわよーう〜」

「恐る恐る帽子を被る。この時点でかわいさ数千倍だ。」

「と、トリック…… オア…… トリート？」

「ぐはっ！」 チーン

「ガハア！」 チーン

「これはずるい。可愛すぎる。ズルすぎる。仰げば尊死である。」

「ほら！お菓子ちゃんとよこしなさいよー！」

「は、はい。あげる」

「ん…… ありがとう」

大事そうにそのクッキーを抱える天衣マジ天使。



さて、ちびっこには一通り配った。次は銀子だ。銀子は普段棋士室に引きこもっているがこの際だけはここに来る。

「あ、兄弟子！」

俺を見つけるとどこか嬉しそうに、そしてモジモジしながら銀子がやってきた。

「と、トリック・オア・トリート」

頬を紅くしながら小声で聞こえないように言う銀子。元々とても白い肌をしているため少し紅くなっただけでもとてもよく見える。この子もめっちゃ恥ずかしやがり屋だからな。頑張った銀子ちゃんには素晴らしいご褒美を。

「そんな銀子にこのケーキ！」

てってれてーお手製チョコケーキ!! (ドラ○もん口調)

「え!? 本当に!」

どこぞから取り出したチョコレートの入った箱。それを見た瞬間、銀子の顔は喜びに染まる。実は銀子、スイーツに目がない。特にこう言うケーキとか大好きなのだ。ちなみにガチ作成したやつだ。大変なんだよ?

「もちろん。自信作だ！」

「ありがとう!!」

めっちゃニコニコだ。そんなケーキ好きだったっけ？こちらもちちらで大事そうにケーキの入った箱を持って満面の笑みで歩いていく。おーい、その箱振るなよ。ちなみに後日談だが八一曰くその日の銀子は過去数年以内で1番機嫌が良かったらしい。よかつたよかつた。



さて、最後は1番の難敵。供御飯万智だ。今日の夜、うちに来るらしい：・本当は是非やめて頂きたいですね。でも問答無用でLINEだけ入れて後の返事はなかつたし多分意地でもくるよな。

ダメと言っても来ることはわかっているので用意のために家に帰る。ちなみに用意とは木刀や湯呑みなど投げれそうなものをなんでも用意して最大限の抵抗を取る用意だ。将棋駒などは死んでも投げない。

そんな思いを胸に部屋に入ると…

「悠斗サン。トリック・オア・トリートどす♡」

部屋の中には三角帽子と魔女服に身を包んだ最強にかわゆい女性がいた。万智だ。わーおトリックだ☆

「トリックしたな。じゃあトリートはなしだ」

「え〜」

「毎年そうだがお前はトリック・アンド・トリートしか出来んのか？」

「そーどす！」

「はあ……………」

こいつの場合はトリック・オア・トリートではない。トリック・アンド・トリートなのだ。

「ほらよ…と、行きたいがまずはなぜお前が俺の部屋にいるかを聞きたい。どうやって入った！」

「普通に合鍵どすえ？」

「そんな『どすえ？』とか、さも当たり前のように言わないでくれるかい？」

「まーまー将来的には一つ屋根の下に住むんやさかいええやないどすか〜」

あれ？今、ものすごい事言われた気がするの俺だけ？

「すごい良くない気がするが今は放置しといてやる。あとでそれについてはあらいざら

い吐いてもらうとして、ほらよ」

こいつは良いお家ご出身なのでそこそこ良いものを用意しないといけない。チョコレートだが抹茶を使ったりなんやらで割とガチで作った。こんな奴にチョコわざわざ作って渡す俺も俺である。

「わーい」

嬉しそうに受け取るとあつという間に食した。食している間は静かなのでありがたいが食べ終わると次第に構ってオーラ全開になる。

俺があぐらをかいて座ると寝そべったままコロコロと転がってきて俺の膝の上に座る。そして膝の上に座ると一切離れなくなってしまうから困ったものだ。

「悠斗はん。もう一度、トリック・アンド・トリートどす」カマツテーカマツテー
ペシペシと俺の膝を叩きながら言う。

「却下だ！」

「えくあと一回やけどす」

「ダメだ！」

全力で却下するが万智は狐みたいに笑う。なんかやばい事思いついたらしい。

「何度やっても却下だ…… あ？」

俺がそれを改めて拒否った瞬間、俺の頬にほのかに感触ができた。その感触はすぐに

離れニコニコとした万智の姿のみが俺の顔に飛び込んでくる。変わらず膝の上に乗っかっているが満面の笑みだ。

「ふふふふ♪ちこそーさまどす♡」

「お前……まさか!?」

まさかのまさか、頬にキスされたのだ。未だに微かに残る感覚、それは一瞬だったが永遠のように感じるものだった。俺は自分の頬を手で撫でる。

「そやさかい言うたやんな？」

トリック・アンド・トリート
「悪戯なキスつて」

「……………まいました」

どうやら今対局は俺の完敗らしい。本当に強くなったものだ。あ、みんなもハッピーハロウィン！

一ノ瀬悠斗天あ、八一は消し炭になったよ☆みんな、ハロウインは楽しいけどルールは守ってね？

本編

第零局 最強の兄弟子

「…… 負けました」

「ありがとうございます」

その言葉と同時に大量の記者が対局室に流れ込んで来る。そして対戦相手の背後から自分に向かってフラッシュをたいて写真を撮る。そのフラッシュは俺に喜びを与え、また責任を与えた。

…… side in ??? ……

「…… 負けました」

「ありがとうございます」

対局が終わると周りの人たちは一斉に騒ぎ出す。理由は明白。妹弟子の空銀子や弟子の九頭竜八一もとても熱かった。しかし……

「遠くに行っちゃいましたね。兄弟子」

「そうね。でも私達もいつか行こうね」

「はい。もちろんです」

それ以上に辛かった。寂しかった。兄弟子が遠くに飛んで行ってしまった事が。

神に勝った棋士の名は一ノ瀬悠斗。清滝鋼介九段の一番弟子にして今玉座戦の挑戦者だ。ただの挑戦者では無い。17歳にして七段で名人戦の順位はB級2組。将棋界でも超新星であり数多い先輩棋士をなぎ倒しまくっている棋士だ。

対する防衛側は『神』と呼ばれる棋士。名人だ。竜王を除く全てのタイトルで永世位を持ちタイトル100期が近づいている天才。まさしく将棋界の神。

最強と呼ばれ神の二つ名を持つ者が超新星とはいえ若手に負けた。とんでもない出来事だ。一見、名人が歳により弱体化していたのでは？と思われるが決してそういう訳では無い。むしろ、名人が勝ち筋が見えた時に出ると言われる手の震えが起きて誰もが名人が勝ちを確信したと思われた。誰もが一ノ瀬の快進撃がここで止まると思った。

しかし結果は逆。悠斗の勝利だった。この結果から言えるのは名人が弱くなったのでは無く”悠斗が限りなく強くなったのだ”。名人に及ぶほど。名人と並ぶほど強くなったのだ。他の棋士を出し抜いて。

それ故に自身が超えられるか分からないほど大きな階段を先に登られた気分だった。片手で数え切れるほどの年の差しか無い兄弟子の事を。大好きな兄弟子の事を。…凄

まじく遠く感じた。

最後には何か言葉を交わして2人は部屋を後にした。

棋士として圧倒的に強く深い一手を指す。まるで名人の様な。おそらくまだ七冠全てを保持していた全盛期の名人には及ばないがそれでもそれを彷彿とさせる。それは他の棋士にとって恐怖以外の何物でも無かった。まさしく将棋界において災害の様な強さ。その強さに畏怖を込めて棋士や将棋ファンは彼の事をこう呼んだ。

『天災』と。

「『天災現る！』だつて〜！」

自身の師匠。清滝鋼介師匠の娘さん。清滝桂香さんが雑誌を見ながら言う。どうや

ら茶化している様だ。割と気にしているからやめて欲しい。

「天災かあ。兄弟子、カッwカッwカッwカッwカッwカッwカッwカッwカッwですよ?」

「ふふふwそうね、お兄ちゃんwカッwカッwカッwカッwカッwカッwカッwカッwカッw?」

辛い! 妹弟子と弟弟子に自身の二つ名で笑われる日が来るとは。それと銀子はまだ抑えようとしているが八一。てめー抑える気無いだろ。腹抱えて笑ってるもん。

実は本人は別に相手を殺そうともしていない。とても優しくまた将棋に関して真っ直ぐなだけだ。いつの間にか天災の二つ名のもとに恐怖されているが本人曰く「悲しい。」らしい。

極め付けは弟弟子と妹弟子、さらに桂香さんに笑われた事でもはや開き直った。

「てめーらそんな事一ミリも思ってたねえだろ! あーあ、そうですよ。私は天才じゃなくて天災ですよ!!」

銀子と八一、2人の髪の毛をわしやわしやとやりながら言った。

「兄弟子やめてくださいよ!」「お兄ちゃん:」

ぐつ。無言の圧が凄い。これはずるい。

こーなつたらやけくそだ! もつとやってやろうと思つたら師匠に止められた。

「ええじゃ無いか、悠斗! 二つ名が付いただけ! それを銀子に当たるなや」

「師匠、俺は!?？」

八一というワードが出てこなかった事に対して八一が聞き返した。

「八一にはやってよし」

師匠からは残酷な回答が降ってきた。

「よっしゃー！」

「うそお」

全力でやってみる。髪の毛はボツサボツサになり形なんてどうの昔に崩れていた。

ちなみに師匠は二つ名が付いただけ良いと言う。確かに活躍してそういう名がつくのは嬉しいが……でももつとなんかあつたらー！よりもよつて『天才』じゃなくて『天災』なんだよ！てか俺、災害なの!?？え、将棋界において俺はそんな災害レベルなの?？名人の方がよつぽど災害だろ！

「ちなみに良く無いですよ師匠！この名前は活躍によつてついた二つ名。場合によつては将棋人生において半永久的に付き合う名ですよ!?？それが災害つて辛すぎですよ！」

「まあそう言うなや！」

師匠はそう言うが辛いものは辛いのである。ネットや雑誌、新聞の記事などでも『天災』と書かれておりもはや災害呼ばわりが定着してしまった。個人的には辛いものがある……

まあ一門のみんなもそう言ってるし仕方がない。玉座就任を祝ってくれたしまあ良しとする。

兎にも角にも玉座になりより一層身が締まる。そんな事を胸に仕舞いながら師匠の家を後にした。

優しくも強い。しかし世間的には冷酷極まりない名人と並ぶ最強の棋士というイメージがすっかり定着してしまった天災こと一ノ瀬悠斗玉座。これが将来、竜王となる者の。女性最強と呼ばれる者の兄の今である。この先、彼は2人や師匠、桂香にその他の皆とどの様に関わっていくのか。『兄弟子のおしごと』が始まる。

第一局 弟弟子

あれから数年……………

それぞれが成長した。

俺は21歳になり棋士としてもA級棋士にまで昇り詰めた。タイトルは…相変わらず玉座一つ。いや一つだけでも奪取して連続4期続ければ凄いなだけだね。もつと頑張りたいたいよね。銀子も女王、女流玉座の二冠を獲得し女性最強と謳われている。

しかし1番変わったのは我弟弟子。九頭竜八一が竜王を奪取しました。しかも俺の最少タイトル奪取記録を塗り替えて。いや凄くね？

一応説明するが竜王とは将棋界における7つのタイトルのうち名人と共に最高位にいちするタイトルだ。

しかしだ……………

『竜王スランプ！11連敗!!』

とある雑誌の見出し。八一は竜王を奪取してからというものの公式戦11連敗という大スランプに陥っていたのだ。竜王という最高位のタイトルを取ったことへの重圧や責任感が重すぎるのだろうか。辛いだろう…

「はあ……………少し行つてやるか」

まだまだ16歳の子供とはいえプロ棋士として、竜王として溜め込んでしまふものがあるのだろう。兄貴としてしつかり聞いてやらなければならぬ。あと、竜王奪取のお祝いしてなかったし行くか。という考えのもと手土産を買つて八一の住むマンションに向かう。

……………悠斗移動中……………

ピンポン♪俺はバイクで移動し、八一の部屋のドアのインターホンを押した。すぐに慌てた声で返事が帰つてきた。

「は、はい！つてええ!?兄弟子!」

扉の向こうから八一の驚いた声が聞こえてきた。

「そうだぞ八一。俺だ。悪いがドア開けてくれないか?手土産持つてきたし」

「えつ、えつとその…すみません!少し待つてくさい!!」

何やら慌てている様だったこつちとしては手塞がつてるし開けて欲しいのだが…

「ん?どうした?」

「えつと……………その」

「まあ良いわ。合鍵使うわ」

もうしゃーないので自分の持つている合鍵を使う。

「え？」ガチャ

「やつほく。八一、元気し……………て……………たか？」ガチャ

八一がロリの上に覆いかぶさっている。ナニコレ、ドウイウジヨウキヨウ？とりあえず警察に連絡しようかな？え〜つとスマホは…

「掛けないで！兄弟子、掛けないでください！僕はそんな事やってませんから!!!あと、そんな社会的ゴミを見る目でやるのやめてくださいよ!!!」

すぐに八一が言った。

「いやいやいや、どう見てもヤバい現場でしょ？お前、まさか犯罪を犯すとは…兄弟子として悲しいよ」

「犯してませんから!!話しを聞いてください!!」

「……………」

「信じて！お願い!!兄弟子!!」

「……………」 わかった。とりあえず弁明の余地は与えてやる。部屋に入れろ」

「はいー」

そして俺は八一の部屋に入り説明を求めた。八一と共にいた女子小学生がいたのだ。やっぱり通報した方が良手なんじゃないかと思う。

「それで八一。この子は？」

「えっと雛鶴あいちゃんです。竜王戦でお世話になった雛鶴旅館の娘さんだそうです」

「なるほど… 雛鶴旅館って金沢にあるあの旅館だよな。あいちゃん。ちよつと良いかな？」

「は、はい！」

「ははは。そんな緊張しなくて良いから。なんで八一のところに来たのかな？」

「えっと…」

回答は至ってシンプル。将棋を指す八一の姿に憧れてきたらしい。なんだ… 俺と同じじゃないか。

「八一。お前、この子と指したか？」

「は、はい。指しました」

「実力の程は？」

「とても強かったです。特に終盤の長考が凄かったです」

「そうかい。あいちゃん、1局おじさんとやってみようか？」

「はい。でもおじさん強いんですか？」

「な!!? 兄弟子の事も知らないの!!?」

「は、はい。すみません」

「ははは。それぐらい普通さ。俺の事知らない奴なんていくらでもいるさ。一応自己紹介しておくね？僕の名前は一ノ瀬悠斗だ。一応、八一の兄弟子でプロ棋士やつてる。よろしく」

「兄弟子は玉座のタイトルを持っていて、A級棋士。その規格外の強さから天災と呼ばれているんだ」

八一が誇らしげに言うが俺としては天災呼ばわりはやはり辛い。自分の事のように思ってくれるのは嬉しいんだがなあ。

「そうなんですか？それじゃあよろしくお願いしますー！」

「あの……兄弟子。平手で指してもらっても良いですか？」

「平手？何故？」

「いや、この子の強さをちゃんと見て欲しくて」

「……わかった」

そうして始まった将棋。先手があいちゃん。後手、俺。

初手から

▲2六歩 △8四歩 ▲2五歩 △3二金 ▲7八金 △8五歩 ▲2四歩 △同

歩 ▲同 飛 △2三歩 ▲2八飛

………
相掛かり棒銀か。

中盤まで完全に俺の優勢。というかそれでなければプロとしてどうかと思うけど……………

急にあいちゃんの手が止まった。

「こう、こう、こう、こう、こう、こう……………んっ！」

「っ！」

置かれた手を見て驚いた。何手読んできたんだ、10手？いや20手？…………… 30

手!!?

「どんどんと読みを進めていくうちに気づいた。この子の恐ろしさに。強さに。才能に。ならやってみようじゃ無いか……………」

「負けました」

「ありがとうございます…………… 八一」

「はい！」

「この子、育ててあげろ」

「え？」

「とりあえず師匠の家に行くぞ。師匠と相談しよう。あと、この子のご両親に連絡をしてもらうぞ」

「わかりました！」

八一はバタバタと準備しにいった。

「あいちゃん」

「は、はい！」

「あいちゃんは強いね。だけれどもまだまだ粗いし、伸びるよ。だから八一に教えてもらいなさい」

「はい！」

元気良くあいちゃんは頷き、目をキラキラと輝かせていた。それだけ嬉しかったのだろう。この子がどこまで行くか、俺も見たいし憧れの人に教えを受けれるのはとてもいい事だ。だからこそあいちゃんには是非八一が教えてあげて欲しい。

そんな思いを胸に秘めた俺は八一、あいちゃんは師匠の家に向かった。しかし、八一のやつ命拾いしたな。もしも銀子がこれ見つけてたら殺られるだけじゃあ済まなかつたぞ。

第二局 新しい家族

八一の家を出て数十分。俺達は師匠の家に着いた。あらかじめ来ると言う事は伝えている……が師匠が発狂するといけないので用件はまだ伝えていない。

「師匠……こんにちは！」

「おお、悠斗に八一。よう帰ってきたな！ほら3人とも上がったあがつた！」

予想に反してすんなり上がった。というか何故驚かない。普通、弟子が小さい女の子を連れてきたなんて言ったら屍になるか慌てるかな？ 択な気がするが。

「師匠、どうしてそこまで落ち着いているんですか？」

「さつき連盟から電話があつたんや。まあ話しの続きは座つてからや」

師匠の家の居間なんてめちやくちや久しぶりに入ったなあなんて考えながらふつーに部屋に入った。しかしそれは少し間違えていた様だ。

銀子が怖い。これで全てを察してくれ。頼むから。これ以上思考を働かせていたら消される。

座布団に腰を落としつつ師匠が話した。

「さてと…… あいちゃん。いくら将棋が指したいからって家出はいかんよ」

「家出^ワ？」

八一は驚いているが俺はそんな気がしていた。あの頃の俺とそっくりな目だからだ。

「将棋連盟に連絡があつたそうや」

「なるほど」

八一は納得した。

「やはりそうでしたか。まあ俺は人の事言えませんが（笑）」

俺も薄々そんな気がしていたので納得した。

「せやな」

師匠も笑って同意する。

「あいちゃん。親さんからの反対があつたんやろ？」

「は……………い……………」

「師匠。俺の弟子にしてはダメなのですか？約束もあるし……………」

八一は真剣に言う。師匠はそれに対して難しそうに言う。

「そうやなあ。とりあえず金沢支局に連絡して…………… 向こうの道場を「いやです!!」

大きな声で言った。目を真っ赤にして。八一に対する憧れ、熱意その全てがヒシヒシ

と伝わってきた。

銀子は反対した。本気では無い。知らなすぎる。と思ったのだろう。この厳しい世界がどれほど厳しいのかを。確かにこの世界はただのモヤモヤとした憧れで生きていける世界では無い。しかし俺は言った。銀子に八一に、そしてあいちゃんに。

「憧れとは時に力を生む。憧れとは時に力を生む。憧れとは時に天才、否天災を生む」
「?」「っ」「……」

「俺は元々、多治見という陶器づくりの有名な町に生まれた。親はその関連で働いているから俺もそうなると思うが俺はそうしなかった。師匠の元に押しかけた。その時は師匠の指す将棋が単純に好きで、憧れて来ただけだった。そうですね、師匠?」

「せやな。突然来た時は驚いた。今思えば正直、強かったが同じぐらいの時の八一より才能は無かったかも知れん。だけれども強くなった。憧れで、己の努力で。それを体現した最初の棋士がお前や。だからワシはええと思うで。あいちゃんがどこまで強くなるかわからんが……八一。やってみい。ワシからご両親に話しは通しておく。『研修会試験』に通れるよう鍛えておけ」

最初は八一も戸惑った。プロ入り2年目にして、17歳で、しかも11連敗中の俺が弟子を。しかも内弟子をとつても良いのかと。

しかし師匠は頑なだった。八一に取らせようとしたり。何故なら本当の意味での恩返しは『タイトルを取ることに』そして『新たな弟子を育てる事』だからだ。だからこそ言った。宣言した。

「やります！………俺の弟子として研修会試験に申し込めます！」

ようやく話しが纏まったようだ。

「そうか。よう言った！」

師匠も良い笑顔をしている。俺はあいちゃんに聞いておく。

「あいちゃん。棋士への道は凄い厳しいよ。それでもやる覚悟はある？」

「はい！」

「うん。なら良いよ。一緒に頑張ろうね」

「はい!!」

×に師匠が大きな声で桂香さんに言った。

「めでたいで！今日の夜ご飯は赤飯や!!」

それに対してホットプレートを用意しながら桂香さんは言った。

「今日の夜ご飯はお好み焼きです」

「そうか。まあ小さい子もあるしその方がええやろ」

すんなり納得する師匠。孫弟子(仮)も出来たことだしご機嫌なんだろう。しかし、こうしてハッピーエンドで今日がおわる……………この一門においてはそんな訳がない。

「私と銀子ちゃんもついにおばさんか〜」

桂香さんが半爆弾発言をしたのだ。

「おばさん?」

とあいちゃんが言った。即座に銀子が反論した。

「小童。私はおばさんじゃない」

「なんですかお・ば・さ・ん!」

「……………」

氷の様な視線が八一に降り注ぐ。辛そうだなあ……………いいぞもつとやれw

「じゃあ俺のことはおじさんになるのか?」

「おじさん?」

首をちょこんと傾げて言うあいちゃん。これは……………強い。

「ずるいぞ悠斗! あいちゃん、ワシのことはおじいちゃんであええからな?」

「おじいちゃん?」

「……………」

あ、やばい。師匠があいちゃんの発言を受けてただの屍になってる!?!?

向こうではいつも多いソースを怒りからか数倍増量してお好み焼きを食べる銀子。その銀子に死ぬほど怯えている八一。その八一にめっちゃ懐いているあいちゃん。その様子を見てさらに不機嫌になる銀子。それを見てさらに怯える八一。

ああ、世界よ。我ら一門は今日も平和です。

第三局 将棋会館

翌日。俺は八一とあいちゃんとの3人で大阪将棋会館にやってきた。まあとりあえず道場に向かう。あいちゃんにはそこで思い切り将棋をさしてもらおう為だ。

「あ、お疲れ様です。竜王に玉座。揃ってどうされましたか？」
馴染みの係員がいたので説明する。

八一の説明中すこーしずつ、すこーしずつ八一から遠ざかり、また手がスマホが入っているであろうポケットに近づいていく。スツゲー面白いw

「……………」
一ノ瀬玉座。それは信用して良いんですね？」

俺に確認を取るな！まあいいか。

「もちろんだ。なんなら八一の今年の賞金全額かけても良い」

「ちよつと！兄弟子!!」

「なるほど。それなら信用できます♪どうぞ」

満面の笑みで通してくれた。いやゝ人の金をかけるって良いねw

なお、八一が破った場合にはもし竜王を防衛した時に入る4000万はこの職員のものになる。軽く宝くじ当選したぐらいだ。

こうして俺と八一、あいちゃんは道場に入場した。それと同時に中にいた子供達が一斉にザワつき寄ってくる。

「あードラゲンキだ!」「ドラゲンキ!!」「ドラゲンキ、サイン頂戴!!」「ワラワラと子供達が集まってきて軽く騒ぎになる。そりやそうだ、こいつは竜王だからな。

しかし同じくタイトルホルダーである俺の所には集まってこない。否、集まろうとしないのだ。理由は単純明白であり至極当然なのだがどうやら『天災』の二つ名と冷徹なイメージが今やファンだけで無く小さな子達にまで広がってしまった。中々声がかげづらいのだろう。俺はそう信じている。

まあそんな事は会いといてだ。

「八一!」

「あ、はい!どうかしましたか兄弟子?」

「そろそろあいちゃんにやらせてあげな。もう目がやりたくて仕方がないって感じだ」

「そうですね。あ、すみません。これ、この子の席料です。一日中指させるので」

「はい。わかりました」

八一は席料を払いそのままいちゃんについている様だ。俺は少しばかり用事があるのでお暇する。

用事というのは本来は呼び出しの事を指す。呼び出しを喰らった相手の元へ向かうとその部屋の前で見知ったか人がいた。

「男鹿さん、こんにちには」

「ええ。こんにちには、一ノ瀬玉座。さつそくですが会長がお待ちです。どうぞお入り下さい」

「はい」

一度、息を吐き俺は部屋に繋がる扉をノックした。

「失礼します。一ノ瀬悠斗です」

中から「どうぞ」と聞こえてきたのではいる。扉を開けて中に入るとそこには伝説がいた。

その伝説の名は月光聖市である。20代の若さで失明しながら名人など合計27期にもわたるタイトルをもつ。永世名人の資格を持ち現在も順位戦では俺と同じくA級に在位するまさしく天才。現在では日本将棋連盟の会長も務めている。名人や他のトップ棋士と並び現在でも将棋界を牽引し続けるまさに伝説である。

「久しぶりですね。前にあったのは弟さんの就任式ですかね？」

「そうなりますね。お久しぶりです」

「まあ座ってください。話しはそれからです」

「はい」

言われるがまま席につき会長と向かい合う。

「実はですね少し君に相談がありまして」

「相談？」

「はい。貴方、まだお弟子さんをとっていませんよね？」

「まあそうですね」

あ、嫌な予感がする。

「実は連盟に多額の寄付をしてくださっているとある実業家さんのお孫さんが師匠を探している」と

「なるほど。それで俺に師匠になれと？」

「はい」

はいビンゴー！

「でも私はまだまだ人に教えられるほどの力は無いですよ？それにもつと先輩で教えるのが上手な方々なんていくらでも……」

残念ながら俺は弟子は取りたくない！！！！！！

「実はですね、その子がA級棋士、又はタイトルホルダーでなければ嫌だと条件を出してきていますね」

「ほう」

ん？中々強欲な条件をぶっ込んできたな。まず前提としてだこの将棋界にタイトルは7つ。さらにA級棋士はたった10名。

関西でタイトルホルダーとなれば俺、八一に玉将というタイトルを持つ生石先生の3名。A級棋士となればそれに八一を抜いて月光会長を入れる。それだけだ。それ即ちかなりぶっ込んだ要求を出してきた訳だ。

「中々すごい要求を出してきましたね。ですがA級やタイトルホルダーであれば生石先生や八一。月光会長自身でもよろしいのでは？」

「私はもう歳ですし、目が見えませんかからね。それに竜王は今スランプ気味ですし、弟子を取ったばかり。生石玉将も銭湯経営の事があります」

「なるほど。その中で一番都合が良さげなのが俺だったと」

「その通りです」

まあ確かに、確かに安定して勝っててA級で九段で玉座のタイトル持つててそのくせ弟子もいなくて暇してそうだけど！これでも他の仕事（オタク活動）があるのだよ！それにこれから夏に向けて玉座戦も始まるし今年は特に永世位がかかっているんですよ、は

い。

「……………」

「……………」 はあ。分かりました、家で少し考えてみます。結論はその後でもいいですか？」

「ええもちろん。よろしく頼みましたよ？」

「はい」

唐突な弟子入りをお願いされた。悠斗はどんなのが出てくるのか期待と恐怖心を胸に秘めつつ少しばかり考え始めるのだった。

「さてと、もうそろそろ八一の対局だし一度行ってみるか」

10時から八一の対局が始まるのだ。八一は11連敗中で中々の崖っぷちなのだ。勝ってもらわなければな。

下に降りてみれば八一達がいたのだがその向かいに白いマントをした奴がいた。あれは…………… 神鍋歩夢君かな？

神鍋歩夢君。関東所属の棋士であり八一と同期。若手最強と呼ばれている。その名に恥じないような見事な将棋を見してくれるがまだ当たったことが無いのだ。確か今日の八一の相手である。

「よう、こんなところで道草食ってんなよ八一！それと…君が神鍋君かい？」

「あ、兄弟子！」

「おじさん！」

2人は即座に反応したが神鍋君は中々首が向かない。ギギギと音を立てそうなくらいゆっくり、そして重苦しうに首が曲がった。

「ね、ネイチャーディスター?!？」

ネイチャーディスター…ネイチャーディスター…あ、Natural

disasterね。直訳で災害↓天災。俺の事ね。というかなんでそんなに重苦しうなの？

「噂には聞いていたよ。というか対局、見させてもらったよ。とても良い将棋を指すじゃないか」

「ネイチャーディスターにそう言ってもらえてとても光栄です」

「ふふ。まあ君にも期待してるから頑張ってくれよ？」

「は、はい!!さあ、待っているぞドラゲキン!!」

ルンルンで上へと上がっていった。

「八一！」

「は、はい！」

「あんな事言つといてなんだが実際、俺はお前に勝つてほしい。だからこそ兄弟子として言つておく。」お前らしい」将棋をしろ。竜王だからとかプロだからとか言う事にごだわるな。どれだけ泥臭くても良い、どれだけ諦めが悪くても良い！とにかくお前らしい、そして諦めない事だ」

「え、でも……………」

やはり抵抗があるのだろう。そうやって叩かれた棋士は数知れずいる。でもな。

「昔つから俺たちはそうやって立ち向かってきた。師匠にライバルに強い人に。だからやって来い、八一！」

「……………はい！」

目が変わつた。久しぶりに見る目だ。自信を持って、己を見て、勝負をしに行く奴。強いやつ目の目になった。あとは……………信じるのみだ。

さあ、始まるぞ。強いやつとの戦いが。

第四局 九頭竜 v s 神鍋

俺はあいちゃんを道場に送り届けてから棋士室に向かう。

俺が部屋に入るとそこにいた若手棋士や奨励会員が少しざわつく。基本的に俺はあまりこの部屋に来る事は無い。研究会などを自身から誰かとやる事もないしなんなら1人でひたすら考えている事の方が多い。

そんな俺がこの部屋にやって来た理由はたった1つ。弟の将棋を見届ける為だ。来る午前10時。ついに2人の対局が始まった。

先手、後手の決まっている戦いのため、どちらとも己の作戦通りの陣を作り出す。神鍋君の陣形は矢倉囲い。固めてくる気だ。

何やらいつも通り神鍋君が厨二発言をしている様だが淡々と記者の人がメモをしていく。八一も静かに駒を打っていく。すごいシールドだ。言い忘れていたが本日の対局は帝位戦の予選だ。ちなみに俺も出ている。神鍋君はここまで全勝。今日勝てば挑戦者決定戦への道が大きく開ける。俺は同じく全勝。ひよつとすれば決定戦で当たるかも知れないのだ。対して八一は完全なる消化戦。

しかしそれでも本気でぶつかるとなる事に意味があるのだ。

対局開始からの30分で46手も進んだ。まあ相矢倉なので当然と言えば当然なのだがな。

そこで神鍋君が囲いを穴熊に発展。固くなってきた。それに対して八一は様子見。しかし、神鍋君は攻撃を始める。

持ち上げた駒は香車。盤の右端から鋭く直進してきた香車は凄まじい。銀捨てしてまでの猛攻。八一もさぞ戦慄しているだろう。これが噂に聞く『神鍋流1五香車』だ。

ここで香車を取る事は簡単だがそれだとそれに対しての研究が発動する。それを厄介がつて中々次の一手を決めれない。八一はだからこそ中々打てないのだろう。

最終的に打った手は香車を取らないと言う選択肢だった。

この局面で昼を迎え八一はあいちゃんと弁当を食べに行く。午後からは本当に私用がある為、一度棋士室を離脱する。

再び向かったのは理事長室。なんか2度目のお呼び出しを喰らいましたとき。

もう一度同じ動作を踏み部屋に入る。そこには理事長と堂々とした風貌のお年寄りがいた。何かこう、優しさの中に覇気を感じる。

「理事長。そちらのお方は？」

「夜叉神 弘天さんです。先ほど話していた子のおじいさんです」

「夜叉神 弘天と申します。一ノ瀬先生、この度は孫の弟子入りの件。”引き受けてくださりありがとうございます”」

「いえいえ、そんな事……………ん？デシイリデスカヲヒキウケル？」

「はい。本当にありがとうございます。孫はとても気が強くてですね」

そこに追つかぶせるように会長が言った。

「一ノ瀬玉座もそろそろ”弟子が欲しい”と言っていて丁度良かったですからね」

「……………」 嗚呼、お父様にお母様。師匠に桂香さん。愛する

我が弟に妹。どうやら私は何処かで発言ミスをしていた様です。

「夜叉神さん。まあひとまず席にお座りください。一ノ瀬玉座もどうぞ」

「ありがとうございます」「アリガトウゴザイマス」

「その孫というのがこの子なんです。天衣と言います」

弘天さんが一枚の写真を取り出す。その写真に写っていたのはあいちゃんといいて歳が変わらなさそうな口リ、もとい子供だった。

八一と同じ運命を辿れと会長は言ってるのか?!?死ねと?俺にはあのスーパーウルトラとんでもない記事(ガッツリ捏造記事)を作りやがる供御飯万智とかいうとんでもないのが付き纏っていたいるというのを知ってのことか?!?

「……一ノ瀬先生?大丈夫ですか?」

あまりの衝撃で色々飛んでいたのを見兼ねたか夜叉神さんが声をかけてくれた。

「……………あ、はい。少し仏を感じていたくらいで至って大丈夫です」

危ない危ない。あまりの衝撃に逝ってたらしい。人は極限まで思考回路を動かし、訳が分からなくなると仏を感じるとは本当だったのか。

その後はまあなんだ。その子の事や現状、置かれた環境などを一通り聞き、後日改めて俺が天夜叉さん宅にお邪魔して天衣ちゃんと対面という形となった。

弘天さんがお帰りになった後、俺は月光会長と話しをした。

まずはだ

「会長！なんて事してくれてるんですか!!? あれ、確実に俺が弟子を取らなきゃいけないルートじゃないですか!!!」

「はい。だって弟子欲しいって」言つてたじゃないですか?」

「どこをどう聞いたらそうなるんですか!! 一言もそんなこと言つた覚えは無いです!!」

「まあもう言つてしまった事ですから。ひとまず頑張つてくださいよ?」一ノ瀬玉座「……………」分かりました」

将棋界の先輩であり人生の先輩。そして尊敬する棋士の一人であり。将棋界の顔ともいえる会長を務めているこの人に逆らうことは出来ない。もう分かりきつている。そんな人が言つてしまった事だ。もう引き返せない。ここで俺が天衣ちゃんという子を弟子に取らなければ恐らく将棋界全体に多大な影響を及ぼしかねないのだ。

何故ならA級棋士を要求してそれが通るほどの資金援助による経済的影響力を持っているという事だ。ここで断るのは色々とまずい。

「それと。あの夜叉神さんのお父さん。昔、会長と対戦した事あつたでしょ? アマ名人として」

「よく知っていますね」

「夜叉神なんて苗字中々みないですからね。まあなんの縁か知らないですかどその記録係したの俺なんで少し気にはなります。なのでひとまず行つて、弟子入りに値するの

か、この世界で生きていけるかを見てきます」

「わかりました。改めてよろしくお願いします」

「はい」

その後、会長と色々な事（特に清滝師匠）のことについて長々と話し込んでしまい会長室を後にした頃にはもうどつぷり夜に浸かっていた。なんだかんだであの人も自身の弟子（清滝師匠）のことが心配なのだろう。同じ兄弟子としてめっちゃ分かる。

勝負はついていていると思っていたがどうやらまだ終わっていないかった。なので棋士室に戻ると奨励会員の子どもが棋譜を取っていたので見してもらおう。

「……………っ！」

これは……………もういつ投了していてもおかしくない状況だ。並みの精神力では到底耐えれない。そんなところだった。しかし八一はそれでも駒を打ち付ける。

その根元にあるのは『あいちゃん』の存在か？弟子を取って、タイトルを取ってその先に見たものは心だったのか？何を見出したかは兄にも分からない。

ただ分かるのは関西らしい。否、あいつらしい棋譜に囚われず争い続ける将棋を久しぶりに見れた。あいつが帰ってきた。それだけだ。

第60期 帝位戦 紅白リーグ

先 ▲ 六段 神鍋 歩夢 (三勝)

△ 竜王 九頭竜八一 (三敗)

将棋会館の一番神聖な場所『御上段の間』。ここで行われた戦いは数知れず。多くのドラマがあつた。そんな所で今日、過去に類を見ないほど熱い戦いが行われた。

いつの間にか史上最長手を越え八一がノータイムで指せば神鍋君もノータイムで指す。その繰り返しが続く。そんな時間になっていた。同世代として譲れないものがあるのだろう。お互いがお互いを倒す為、意地と意地のぶつかり合いが起きている。そんな戦いは

「まいりました」

神鍋君の宣言で幕を閉じた。

戦いから解放された八一を労いに行く。

「八一」

「兄弟子！」

「お疲れ様。よう諦めなかったな。一瞬、その様子が垣間見えたけどよう耐えた」

「……………あの時、兄弟子が言ってた自分らしくやれって言うのが分かった気がします。どんなに泥臭くても酷い棋譜でも良いから諦めない。確かに大事でした」

「そう言ってくれてありがとう。でも、可愛い弟子がいるからだろ？行ってあげろよ、ずっと待ってたんだから」

「はい！」

こうして八一はあいちゃんの元にかけて行く。俺も……………まだ見ぬ天衣ちゃん
とあんな風になれるのかな？そんな一筋の気持ちを胸に関西将棋会館を後にした。

ああ寒い。今日は大人しく帰るか。

第五局 もう1人のあい

「……………でかつ」

翌日。俺は自宅からバイクで神戸まで向かった。やってきたのは神戸市灘区の閑静な高級住宅街だ。その一角に目的地はあった。立派な門構えでありこりや将棋連盟に對してもとんでもない額寄付してておかしくないな。と思えるほどの家だ。

「おい」

背後からがたいの良い黒服&サングラスのその道感満載の方に声をかけられた。

「一ノ瀬悠斗先生でいらつしやいますね？」

「はい。一ノ瀬と申します」

「どうぞお入りください」

「お邪魔します」

門を潜る。それと同時に黒服の人が「先生がお着きだ!!」と大声で叫ぶ。

すると玉砂利が敷き詰められた前庭にずらつと黒服の方々が並び、膝に手を置いて「お疲れ様ですー」とお辞儀をしている。それと同時にドーン！ドーン！つと陣太鼓が鳴り響く。

あ、これ確定しました。通りで昨日、弘天さんにお会いした時凄まじい気を感じたんですね。間違いなくそーゆー道の方々だ。いつも護身用としてバッグに入れてある警棒。初めて使うかも知れん。

そんなことを考えていると後ろから「主人がお待ちです。お早く」と声をかけられた。「はい」と答えて歩き出す。もう腹はくくった!!

そして玄関に到着すると見覚えのある人がいた。

「先生、昨日ぶりですね。ようこそお越し下さいました」

「こちらこそ歓迎ありがとうございます。早速ですが天衣ちゃんに挨拶しても?」

「もちろん。こちらからです」

そしてとある部屋の前で弘天さんは止まりふすまを開けた。

「っ!」

将棋盤を挟んで向こう側に1人の小さな子がいた。雛鶴あいちちゃんとは似ても似つかない彼女が、この子こそが夜叉神天衣ちゃんなのか。

「ふん! 貴方が天災? 天災なんて異名がついてるからどんな奴が来るかと思えば腑抜けた顔してるじゃない」

俺に向かっての第一声はそれだった。というかキツイな。性格は。かなりのジャジャ馬だ。

「君が夜叉神天衣ちゃんだね？」

「そうよ。あんたが一ノ瀬悠斗ね。私は貴方を師匠とは認めない」

「まあまあひとまず指そう」

「ええ。もちろん良いわ。速攻でやってやるわ」

「どうやら俺の弟子にはなりたく無いようだ。理由は知らんが多分、この子は実力はあ
る。が、力ある者はこういう風に天狗になり」本当の強者に殺られて強くなる。だか
らこそ俺はこの子の目を覚まさせる事が大切だ。」

「…弘天さん。先に謝っておきます。私はなにぶん将棋についてはいかなる人間が相
手でも手加減できません。何故なら相手がどんな人であれ私は差別したくないから。
本気で屠っていいですね？」

「もちろん」

一応、保護者様の許可なく泣かせたくは無いです。

「まずは君に何枚落ちにして欲しいか選択権を与えよう。俺は何枚でも落とすよ。平手
でも良いよ。それに文句もなしだからね？」

「文句？そつちこそ負けた後保身にはするんじゃないわよ！もちろん平手でいくわ！」

平手…プロ相手にそれは無理があると思うのだが…

「わかったよ。ただ、覚悟しておけよガキが」

「っ!!」

俺は将棋が始まると殺気と言うものを出すらしい。自身では全く意識していないのだがね。名人すら少し引くほどの殺気だったらしいが自身ではよくわからない。こうした方が集中力が出るからこうしているだけなのだが。

子供相手に大人気ない? 知らないな。俺は言ったる”差別しない”って。だから俺は決して手加減しない。ハメ手も使わない。使ったのは居飛車穴熊。こんな子にはまあまず壊されない。

「.....」

「.....」

「.....」ウルウル

手数を重ねるごとに明らかに開いていく差。その差はいつしか圧倒的なものとなり自身が選んだ平手というのも、挑発的な言動もその全てがここで帰ってきていると思いが知らされる。それどころか、”平手”では無くコマ落ちでやっけても恐らく惨敗していた。そう思い知らされた。

目の前にいる天災と名高い最強に畏怖の念さえ覚える。

「.....」ま.....まだ!

まだ.....戦える!」

へえ。心折れたかと思っただけ強いねえ。それぐらいは無いと多分、俺は育てられない。

そうして自陣に駒を打ちつけ俺の攻めを受ける『受け』の将棋となっていた。いつの間にかその自陣は強固となり俺の攻撃を受けれる戦力となっている。この子は攻めでは無くです受けの将棋の様だな。

確かに強く、才能はピカイチ。だがこの程度で負けていたら天災の名がなく。サクッと詰ませた。そこには荒れ狂う天災が通り過ぎた後の荒れ果てた大地の様な盤面のみが残っていた。

ズタズタのポロポロにやられた天衣ちゃんは一粒、また一粒と大粒の涙を落として悔しがる。何も言わずに立とうとする天衣ちゃんに鋭く冷たい声で言った。

「挨拶」

「うるさい!!あんななんて大っ嫌い!」

かなり怒っているがそれを見かねた弘天さんが叱責する。

「これ天衣。先生の仰る通りだ。しっかり挨拶しなさい」

「おじいちやまのバカ!」

そう言っただけ部屋から出て行ってしまった。

「すみません。やり過ぎてしまつて。なにぶん将棋になると見境が無くなつてしまうも

のでした」

「いや、あれで良いのです。最初は女流棋士の先生にお願いしようとしたのですが」

「弱いから嫌だとも言ったのでしよう」

「その通りです。中堅や年配の先生方は手加減してくださるのであまりよろしくなくて。一ノ瀬先生の様に本気でやってくくださる方が良かったのです」

「なるほど」

「あれは不幸な子なのです。小さい頃に両親を亡くしてからは3人にとってかけがえの無い思い出である将棋にのめり込みました。しかし、我が家に将棋をさせる者はおりません。だからずっと1人で指していたのです」

「独学ですか・・・」

「独学であのレベルまで到達したのであれば相当なセンスだろう。」

「一ノ瀬先生。どうかあの子を弟子にしては頂けないでしょうか？」

「そうですね・・・ひとまずあの子を追いたいのですがどこに行ったかわかりますか？」

「・・・恐らくあそこか。お連れします、どうぞ」

そうして連れられ、そろーっと入った部屋には天衣ちゃんと一つの仏壇がある和室だった。

仏壇には写真が。よく見ると片方の男性に見覚えがあった。俺の見間違いでなければそれは夜叉神天祐さん。俺があの時、棋譜をつけた人だった。

部屋にそろりと入り天衣ちゃんの横に正座する。そして仏壇に手を合わせる。このタイミングでようやく天衣ちゃんは俺の存在に気づいた。

「天祐さんか。お前のお父さんだろ？」

「そうよ。あんたの名前もお父様から沢山聞いてきたんだから」

そういうと天衣ちゃんは懐かしそうにお父さんの事を話し始めた。

第六局 弟子入り

「俺の事をよく話していたってどういう事だい？」

「貴方が当時の名人とお父様の一戦の記録係をしていたんでしょ？」

「ああしていただ。まだ奨励会時代だったけど」

確かに俺は天佑さん vs 月光会長（当時名人）の対局で記録係をしていたのだがその時天衣ちゃんは例え生まれれていても生まれてすぐだ。記憶は無いはず。

「その時に名人側に23手の即詰みがあるのを見つけて感想戦の時に言ったでしょ」

確かにあの対局で俺は名人（月光聖市会長）に23手の即詰みがある事を見つけた。

「んゝ…… 確かに言ったな。鮮明に覚えている。記録つけてた時に見つけてその通りにくるかと思っただけど違って残念だったな」

「それよ。お父様はそれに衝撃を受けたの。中学生でもそれに気付けるなんてって。それを見てから口癖で『天衣が大きくなったら悠斗君に弟子入りさせてもらおう！』ってずっと言ってたわ。それにあんたがプロ棋士になった時、タイトルを取った時、昇段した時、それに毎年のように昇級していった時。名対局をやった時なんかにもずっと凄いで、凄いで言ってたわ」

「……」
その話を聞いて恥ずかしいというか嬉しいというか。少なくともとても誇らしかった。

「なんか言ったらどうなの悠斗！」

「まあ嬉しいな。そう言ってくれていたのは」

そんなに評価してもらって俺に娘さんを弟子入りさせる事を願い、そして何よりこの子がタイトルを取る事を願った。それを叶えられるのは……否叶えられるまで支え続けるのは俺なのかもしれない。俺に出来るかわからないがその前に俺はもつと大切な。例えばこの子の天佑さんの願いを叶える橋になれたら。

「……」 天衣ちゃん

「なによ」

「もう一度指さないか？」

「はあ？また無様にやられるって言うの？」

「いや、良いから良いから」

「わかったわよ」

なにかば無理やり始めた将棋。

「……くっ！」

「苦しんでるね?」

「当たり前よ!こんなガチガチのやつ落とせる訳ないじゃない!」

ガチガチに固めて、そして強い。だがこれは俺が考えたやつではない。これを考えたのは

「これが天佑さんの組んだ将棋だ」

「え?」

「強いだろ?これは正真正銘、君のお父さんがあの時辿った棋譜だ。完璧には覚えていないけどそれでもアマチュアでこれが指せるなんて恐ろしいの一言だよ。そりゃ君は強くなるし、お父さんも教えるのがうまい訳だ」

記憶に今でも鮮明に残り、たまに棋譜並べすらする盤面だ。自分としてはこの対局は「衝撃を残し」アマチュア”でもあんなに凄い将棋がさせるのだとずっと憧れていた。娘さんという事を聞いてもう一度棋譜を見てきたのだ。

「当たり前よ、私のお父様なんだから」

しかし、途中で俺はガラリと戦術を変えた。天佑さんの指した後なんて全く無いぐらいに。ここからは俺のオリジナルである。

「っー!」

「ここからは俺のオリジナルだ」

「でしようね。全然違うもの」

「つまるところそういう事だ」

「どういうことよ！」

「俺は天佑さんじゃ無いから天佑さんみたいに指せないし、教える事も出来ない」

「そりやそうよ。貴方とお父様は全く違うから！」

「だけどな。天佑さんに出来なくて俺には出来る事がある」

「なによ」

「君にタイトルを”目指させる事”」

”取らせる”じゃ無いのね？」

「そりやお前だつて確実に取らせまして言つて取れなかつたら怒るだろう。俺は詐欺はしないんでね」

「……………」

「でも……俺は君を目指せる環境までは確実に引つ張つていける。それは約束する。君は強い。それ故に己を過信しすぎている。悪いが女流でも君より強い人はいっぱい」

「……………」

「俺はその人達をなぎ倒せるぐらいの刃を君にあげる。そこからタイトルに届くかは

やってみなきゃ分からない。だけど目指さなきゃそれは0だ。俺はそれを0・1%とか1%とか上げるのがやれる事だ。その先は支えがあっても己を信じなきゃいけない」「ふーん、タイトルホルダー様が言う事は違うわね。貴方について行けばそこまで連れて行ってくれるの?」

「もちろんだ。俺が、君が天佑さんと天衣ちゃんと」俺の”夢を目指せる様にしよう。そして夢を叶えよう」

「俺の?」

そこに天衣ちゃんは違和感を覚えたらしい。

「弟子の夢は師匠の夢だ。俺はそれを叶えてみたくなつた。」

「ちよつと!いつあんたが私の師匠になつたのよ!」

「今」

「勝手すぎるわ!」

「そんな事無い。というか、こつちから頼むわ。俺の弟子になつてくれ!」

この子を育てる。俺が尊敬した一人、天佑さんが願ったものを俺は引き継ぐ。その為にだ。

「……………」

「ダメか？」

「……………分かったわ。ただ、言ったからにはちゃんと連れて行き

なさいよ」

「了解。よろしくな」ナデナデ

「撫でるなあ!!!」

ブンブンと頭を左右に振って嫌がる。可愛い↑ロリコンでは無いぞ？

「はっはっは！すまないすまない」

「もう……………一応、言っておいてあげる。…よろしく願います。お師

匠様？」

この時、初めて俺はこの子の笑顔を見た。こうして天佑さんの願いは1つ叶った。後もう一つは…………俺が叶えさせてあげなきやな。

弘天さんと話し合い師弟関係となった天衣に俺がレッスンに行く事なった。ちなみに「師匠なんだから呼び捨てで呼びなさいよ！」と言われたので呼び捨てで呼んでいる。

「それではこれからよろしく願います」

「はい。こちらこそ本当に…………本当にありがとうございます。これからよろしく願います」

最後に弘天さんを交えて事務的な話をした。そのあと何回も何回もお礼を言われた。別に大丈夫なのに……でも弘天さんにとってそれは大きな意味だったのだろう。

俺は新たに弟子を取り夜叉神家を出た。なんか不思議な気分だった。自分の中で弟子を取るという行動に違和感を覚えたからだ。でもまあ悪い気はしない。ともかくあいちさんの研修会入会の件もあるし暫く黙っていて終わったら話そうしよう。まあ多分師匠には連絡いつてると思うけど。

と思っていたら俺のスマホが鳴った。電話だ。番号を見るからな大阪府だ。

「もしもし」

「もしもし一ノ瀬悠斗さんの携帯ですね？」

「はい。どちら様でしょうか？」

「月光聖市です」

あ、会長降臨。

「あ、月光会長でしたか。失礼しました」

「はい。弟子入りの件はどうになりましたか？」

「ひとまず弟子として取りました。レッスンやら何やらは私がやります。しかし、弟達にはしばらくは黙っておこうかと」

「そうですね。竜王のお弟子さんの事もありますから」

「はい。それではこれで」

「はい。急な弟子入りに対応していただきありがとうございます」

「いえいえ」

そこで電話は切った。午後から暇……では無いな。もうすぐ順位戦もあるし帝位戦の挑戦者決定戦にも出る。勝てば棋帝戦で現帝位と戦うし玉座戦も本戦トーナメントの大詰めが近づいてきた。今年は弟子が出来たしひよつとしたらマイナビに天衣が出るかもしれないから教えなきやいけないしワンチャン東京……いやもし挑戦権を獲得したら帝位戦と被るし。

そして何より玉座戦が伸びれば竜王戦とも被る。俺にもまだ出場の希望はある。何にしても恐らく八一にとって最大の山場だ。出来ればついてやりたい。

夏……ヤバくね？過労死しそうなんだけど？

「……………とりあえず野良試合やる為に行くか」

珍しく悠斗は将棋会館の棋士室に行くらしい。バイクに跨り一路、関西将棋会館を指す。

暫くバイクで走り関西将棋会館に到着した俺は将棋会館の玄関に立つ。ふと脇を見ると玄関横にある館内図を見ている夫婦がいた。一応声はかける。

「失礼?どうかされましたか?」

「あ、すみません。雛鶴あいの父と母ですが九頭竜先生はいらつしやるでしょうか?」

「……………へ?」

あまりの唐突な発言に俺はとんでもなく素っ頓狂な声を上げてしまった。どうやら新たな嵐はもうすぐそこまで来ているらしい。

第七局 試験前日

「雛鶴……… 雛鶴あいちゃんのご両親のお方ですか？」

「はい」

oh…… あいちゃん見たく明るくて活発な方かと思いきや落ち着いて何という背筋が凍る？ 的な？ まあ少なくとも旅館の女将感はある。

「そうですか…… 雛鶴あいちゃんなら恐らく、九頭竜八一と将棋会館にあります。案内いたしますのでどうぞお入りください」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます。ところで、貴方は？」 「ちよっ！ お前！」

何やら夫さんの方が慌てているがそんな事ない気がするぞ？ だって俺って将棋界限とある界限（アニメとか鉄道とかミリタリー）の中でしか有名じゃ無いし逆に将棋を知らない方は知らない人の方が多いんじゃないか？ 一応タイトルホルダーだけどね！！？

「いえいえ、そんな気にすることありません。申し遅れました。私、九頭竜八一の兄弟子の一ノ瀬悠斗と申します。八一と同じくプロ棋士をしております。以後、お見知り置きを」

「そうでしたか、これは失礼いたしました。早速案内して頂いても?」
「もちろん。どうぞこちらへ」

なんというかやつぱりこの人苦手。なんか怖い。よく殺意がどーたらこーたらとか言われるけど殺意つてこういうのなの? え? ひよつとして俺、こんな恐ろしいもの放つてたの? そりゃ名人にもドン引きされるし後輩も声かけなくなるわ。気をつけよ。

兎にも角にも2人を連れて研修会が行われている部屋に入る。

「八一!」

「あ! 兄弟子!? と……」

「あ、お母さん!? お父さん!?」

「へ?」

○○●○

「ご注文はうs…… ウウン! ご注文は以上でよろしいでしょうか?」

「はい。よろしく願います」

将棋会館一階の『トウエルブ』にやってきた。今のは俺がごちうさのキーホルダーを持ってきて以来仲良くなり、俺単体の時はもう分かるよね? ということだ。

ってそれどころじゃなかった。テーブルを挟んで向かいにはあいちゃんのご両親。

一方こちらには俺、あいちゃん、そして八一というふうにあいちゃんを真ん中にして座っている。まず口を開いたのはあいちゃんのお父さんだった。

「あいの父親の雛鶴隆と申します。九頭竜先生も一ノ瀬先生も竜王戦では大変お世話になりました」

「い、いえ。こちらこそ……」

八一はあまり慣れていないのだ。年上に敬語使われるってなんか複雑だよね。俺の場合、何故か若手、先輩問わず敬語になる。あれ？なんか俺ってやらかしたっけ？ひよつとしてそれも殺気のせい？目から汗が止まらない。そうだ、俺も返しはしておかなければ。

「いえいえ、そんなこと。こちらこそ竜王戦では兄弟共にお世話になりました」

「私は板場に立っており、ご挨拶出来ず失礼いたしました。九頭竜先生は史上最年少での竜王襲位おめでとうございます。また、この度は手前共の娘が大変ご迷惑おかけいたしました。お詫びの言葉もございません。一ノ瀬先生や清滝先生にもご迷惑お掛けしたようで本当に申し訳ありません」

と、深々頭を下げられてしまった。いや、ゆーて俺は少しの事務仕事しかしてないから。一番大変だったの八一だから。謝られると逆に罪悪感湧くから！本当にこちらこそすみません。

しかし、本当にやばいのはこれからだ。

「雛鶴亜希奈でございませす」

ひとまず言えるのは八一がやばい。だって俺が本気になった時に出るらしい殺気を纏った時と同じく小鹿みたいに震えてるよ!? というかあれだ。なんかお母さん、某週刊誌で数年前まで連載されてた松井先生作品。暗○教室の理事長みたいになってるから！ラスボス感やばい。

「旅館『雛つる』の女将をしております。竜王戦では九頭竜先生や一ノ瀬先生を始め、将棋界の皆さまには、大変お世話になりました。」

あーはい。あの忌々しい竜王戦の打ち上げは空の彼方に打ち上げておこう。そうしないとやばい。もうこれ以上は語りたく無いのでどうしても知りたい奴は後で神（投稿主）にでも聞くと良い。

と、ここで注文した昼食が運ばれて来て皆で食す。うまい。食べ終わればコーヒーが運ばれて来て再度、話しを再開する。

「それです。夫婦で話し合った結果、反対させて頂こうと思います。今までご迷惑おかけしました」

「っ!!」

思わずあいちちゃんは立ってしまった。それほど衝撃が強いのだろう。

「そうですか。私は彼女が将来恵まれない環境下に置かれるとは思いませんが？」

「っ！」

「兄弟子^ワ? い、いや、大前提として赤の他人の家にまだ小さい子を置くなんて馬鹿げてますよね。ご両親が反対なさるのは本当にその通りです」

「いや、それは良いのです。料理人や職人の世界でもそういつて小さいうちから修行を積むのは良くあることですから」

「あ、そうですか」

そういうものなのだ。うちの実家もまさしくそれだからだ、皆さんお忘れかも知れませんが私、一ノ瀬家は代々陶器作りの家系です。俺もプロとしてやっていけるのかという観点で心配された。

「問題は一ノ瀬先生が仰った通りです。色々調べさせていただいたのですが女流棋士というのは不安定な職なのですよね? 早いうちに引退されたりする先生方が多いようですよ?」

「はい。確かにその通りです。女流棋士というのはあまり未来が明るいものではありません」

八一はそう言うにあいちちゃんは心配そうな視線を八一に送る。それを見て八一は領

くとさらに続けた。

「でも、その心配はあいちゃんにはないでしょう」

続けて

「何故なら才能が圧倒的であるからです。元気で明るい性格のあいちゃんであれば将棋以外の仕事もあると思います。普通のOLより恵まれた生活は出来るでしょう」

「……………」

「好きを仕事にするほど難しいものは無いですし、辛い事もたくさんあります。でも、やはり好きを仕事にして生きて行けた時、幸福を感じれると僕は思います」

「……なるほど。ですが、才能とはどれくらいなのですか？それを測れる正確さは？九頭竜先生は今までにどれほどの弟子さんを？取ったものの無いことを測れるなんて無茶です。随分な物言いですが正確で無いものを根拠に、他人の人生に介入するのは如何なものでしょうか？」

「お前！先生に向かって」「貴方は黙っていてください」

「はい」

「どうやらお父さんは婿養子らしく頭が上がりませんようだ。」

「九頭竜先生！もう一度お聞きいたします。この子をタイトルホルダーまでのし上げてくれるのですか？」

「……それは」

「出来るもん!!」

あいちゃんが声を上げた。半泣きになりながら必死に言い放つ。

「あいちゃん……」

「とにかく! 私はこの子を連れて帰ります」

「いやだ! お母さんのだら!!」

「親に向かつてだらとはなんやいね!」

口論が始まってしまった。

「すみません。だらってなんですか?」

「バカとかアホって意味ですね」

oh……じゃあ銀子とかにバカって言いまくってたのか。満面の笑みで。コワ

イ……

「まあまあまあ。落ち着いて。あいちゃんは明日、研修会という女流棋士の育成機関の入会試験を受けます。その結果を見てからでも良いのでは?」

落ち着きたまえ。なんとか落ち着け。一応言っておくがここは公共の場だ。

「そんなものがあるのですか?」

「ええ、まあ女流棋士への登竜門と考えてくれれば良いです。他にもなる方法はありません」

すがそこで一定以上の成績を残す事ができれば女流棋士となる事ができるのです」
「試験はどういう方法で？」

「プロ棋士やプロ棋士の卵達と駒落ち。いわゆるハンデを付けて三戦戦うんです。その中でのまあ何というか腕前を判断して入会許可などを出すんです」

「なるほど。ならばそこで全勝すれば入会を親として認めます」

「は？全勝!!？」

「先生の言った通りの能力があるならハンデ付きで勝てるはずですよ。良いですね？」

「おい！お前」

「黙っていて」「はい」

お父さん、あえなく撃沈。

「わかりました。そうしましょう」

八一は覚悟を決めた上でそう言う。

「私、負けないもん!!」

あいちちゃんがそう言うのとさらに続けた。なまりが凄くて訳し方がイマイチなところもあるが要するに師匠と勉強して絶対に全勝すると言ったのだ。なんというか凄い覚悟だ。

前にも言ったがトップ棋士の弟子になったて、いくら才能があつたって確実にタイト

ルを取れるわけが無いし、スペシャル強い状態で研修会や奨励会を突破出来るわけない。例えかの有名な名人の弟子になっても確実に全てストレートで勝っていけるなんていう確約は無い。

だからこそこの子の覚悟は並大抵のものじゃ無い。憧れの人の元で大好きなものを学ぶための覚悟は凄まじいものがあるのだ。

この子はおそらく天衣のライバルとなりまた仲間となる。だからこそなんとしても棋士となってほしいのだ。

第八局 入会試験 前半

今日は我が弟弟子。九頭竜八一の一番弟子であるあいちゃんの研修会入会試験当日である。この日に受けるのは決まっていたのでこの日だけは死ぬ気で予定を入れない様にした。

朝っぱらから八一の家へ赴き、3人で将棋会館へ向かう。

「兄弟子。本当について来てもらってよかったですか？」

「良いって言うてるだろ？俺だつてこの子の強さを直接見たいんだよ」

「は、はあ。でもこの時期に1日フリーの日を作るつて中々問題な気がするんですけど……特に兄弟子は」

「ん〜。まあいいんだよ」

「そうですか……」

そんな話しを聞いていたあいちゃんが尋ねてくる。

「おじさんそんなに忙しいんですか？」

「ん？そうだなあ……」

もうほぼタイトル挑戦者決定戦に出れるから相手の先生の研

究と、玉座戦の本線トーナメントも始まつてからそつちの注目株の研究。あとは今度順位戦で戦う月光会長の研究。盤王戦のトーナメントももうすぐ始まるし、竜王戦もそうだよなあ。こんなもんかな？」

「うわあ。おじさんそんなにお仕事あるんですか!?!?」

「まあこんなもんだよ。さあ、もう少しで将棋会館だ。さつさと行こうか」

「はい!!」

元氣いっぱいに飛び跳ねるあいちゃんとは裏腹に八一は少し元氣が無さそうだ。竜王戦というところに反応したのだろう。

俺自身は今年、どちらかというところと永世位のかかった玉座戦や名人戦に向けての順位戦に力を入れたいたので残留するという形を取るだろう。まあどのみち八一はA級に名を連ねるトップの先生方か、その先生にすら勝った強豪。即ちかなりの実力者と対峙する事が確定している。気が滅入るのも納得だ。

○○●○○

「おはようございます。どうぞこちらへ」

俺は八一の代わりにあいちゃんのご両親を研修会が行われる教室まで連れて行く。

これだけ試験試験って言っているが研修会への入会はテキストに研修会の例会に混

じり「行ける！」と思つたら入会OKみたいな感じなのだ。

大人の女性から高校生、中学生。そしてあいちゃん、濡ちゃん、綾乃ちゃんの3人のみが小学生だった。

研修会幹事は久留野義経七段。若手の頃に数回戦つたけど勝率は俺の方が良かった。まあ負けることもよくあったが。最近はタイトル戦や順位戦でも当たらないので久しぶりに対局したい1人である。

大盤を使い簡単な戦法の解説などをして対局がスタートする。

あいちゃんは綾乃ちゃんと平手で第一戦目を始める。ここにいる子たちはこの先、棋士となり勝つか負けるかの狭間を生きる事になる子たちなのだ。小学生であろうと雰囲気ガラリと変わりそれはとても異様な光景である。

「ふむふむ…… あいちゃん勝ちそうですね」

「え？」 「そうなんですか？」

「ご両親は驚いた様に聞いてくる。」

「ええ。兄弟子の言う通りです」

しつかり小さな穴を攻めていき手番を取ればこつちのもの。ノータイムで攻め続け最後には……

「負けました」

綾乃ちゃんを詰ませた。第一局目はあいちちゃんの勝利だ。

「気迫の勝利だな」「そうですね」

俺たちがそんなことを話しているとあいちちゃんのお母さんが「気迫？」と聞いて来た。

回答は俺がしておく。

「そうですね。気迫です」

「高々ボードゲームでしょ？それに気迫なんて……」

「…………… 確かに将棋というのは9×9の盤面で行われるボードゲームです。しか

し、その盤面には信じられないほどの駆け引きがあり、それは心身が死ぬほど影響してくるのですよ。自分ではよく分かりませんが僕が初めてタイトルを取った時、周りは自分の殺気で腰を抜かした人がいたらしいです」

これはガチである。俺ってそんな怖いのか？

「そうですね」

そんな中、2人の感想戦を見ていた久留野七段が興味深そうに「ほお」と言っと思わぬ事を言ってきた。「次は私がやりましょう」と。

なんとプロ棋士直々にテストをつけると言ってきたのだ。中々なものである。

「あの方は？」

打ち付けた手は強手。流石の読みだ。

「やるなあー!」「流石や!」

周りの観衆は口々に喜びを露わにし、お父さんは狼狽る。

「ど、どうしたのですか?」

「落ち着いてください。あいちゃんはプロ棋士相手に全力でやりあう姿勢を見せつけて来たんですよ。プロ棋士相手の真剣勝負で全く怯まない。素晴らしい精神力があります」

「そんな一面が……あの子に」

両親共に意外そうにあいちゃんを見守る。そんな時だった、久留野七段が口を開いたのは。

「んんく……一ノ瀬玉座。貴方の横に置いてある私のバッグ。取って頂いても良いですか?」

「はいはいこれですね……っ!久留野先生……貴方」

バッグを持った瞬間わかった。中身はアレだ。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

そう言つて受け取ると中から例のブツを取り出す。久留野七段の七つ道具が一つ。

空気清浄機だ。

その様子を見ていたギャラリーは慌て始める。プロが本気で負かしに行っているのだ。とんでもない事である。

「そんな物に効果があるのですか？」

「…………… そうですね。そう言われると気休め程度にしか思えません。その気休めが大切です。将棋というのは極限の集中で数十手先まで読む世界。少しでも気になるものがあるとそれが出来ません。久留野七段の場合はそれが空気というものなのです」

「たかが将棋を指すためにそこまで？」

「確かにたかがかかも知れません。だけれども我々はそれに命を掛けています。命を掛けた戦いで勝てるならなんだってするでしょう？だからです。だから勝つためにはなんだってするんです」

八一は力強く説明するが全く持つてその通りである。我々は将棋で生きている。だからこそ負けたくない。負ける訳にはいかないのだ。

そんな事言ってる間に「… 詰みました」「え？」

「勝負はついたのでですか？」

「ええ。長い手ですが久留野七段が確実に詰んでいます。あとはあいちゃんがそこに気づくだけだ」

あいちちゃんの読みがあればほぼ確実に詰みを突いてくる。

「ん！」っと詰みへの一手を打った。それを見た瞬間、久留野七段は自分の負けを認めた。

「負けました」

「ありがとうございます！」

あいちちゃんは慌てて頭を下げる。プロ棋士に勝てた時の喜びは凄いものである。

「この子の実力は凄い」

2人であいちちゃんを褒めちぎっている。このまま勢いで入れちゃおうぜ☆的なノリにしたがお母さんによつて止められた。試験は続けられる様だ。そして最後に登場したのは……

史上最強の”女性”棋士にして無敗の女流二冠。女性初の奨励会有段者。

「銀子………」 「あ、姉弟子!?!?」

殺意に満ち溢れたその人物の名は……… 空銀子、奨励会二段、だった。

第九局 入会試験 後半

目の前に現れたのは最強の”女性”棋士、空銀子だった。

「銀子……」「あ……ね……弟子……」

「な、浪速の白雪姫」

「ご存知でしたか」

「は、はい。女流棋士について調べている時に拝見しました。しかし、何故女流棋士でしかもタイトルホルダーの先生が試験官を？」

「銀子は女流棋士ではありません。奨励会二段という地位にあるのです」

「奨励会？研修会とは違うのですか？」

「ええ。奨励会というのはプロ棋士の養成機関です。そこにいる以上、銀子は女流棋士にはなれないのです」

「しかし、2つも女流タイトルを持っておられるのでは？」

「女流タイトルには2つ、女性であればアマチュア、プロなど関係なく誰でも出場することの出来るタイトルがあるのです。銀子はそれを2つともストレートで獲得したのです」

「そうなんですか……」

一般の人の多くがプロ棋士と女流棋士。奨励会と研修会の違いを知らない人が多い。「そもそも研修会というのは奨励会の予備校みたいなものです。その証拠に研修会A2級で奨励会最下位の6級に転入する事ができます。また、奨励会に入会すると女流棋士としての地位は休止状態になるのです」

「なっ!? それって……」

「その通り。奨励会の“底辺”でさえ女流棋士より強い。そもそも、女性で奨励会有段者となったのも銀子が初めてです」

奨励会二段の銀子がいかに強いかわかるよね？

「そんな方に…… あいは…… 勝てるのでしょうか？」

「平手ならともかく駒落ちの戦い…… あいちゃんにも勝機はあります」

まあ八一がスラスラと説明してくれたので良いのだがプロ棋士というのは4段になるとなれる。3段までが奨励会。その3段の中からたった2人がプロ棋士となる事ができる。正確には半年に2人なので年4人。プロ棋士が東京大学に入るより難しいと言われる所以はそこだ。

そうして始まった銀子vsあいちゃん。おぼつかないあいちゃんがまだ挨拶している中、銀子は速攻で着手。相当ガチの様だ。初手からあいちゃんも全力。意地と意地の

ぶつかり合いとでも言えそうだ。

「(う)(う)(う)(う)(う)(う)……ん！」

あいちゃんも着手。その一手一手は確実に元々あったハンデを大きい物にしていく物だった。差は少しづつ、だけれども確実に開いていった。

しかし銀子は“奨励会員”であってプロ棋士では無い。

「(う)ー」パチ・パチン!! 「っ！」

あいちゃんが指した瞬間、銀子も指す。一見、ただノータイムで指しているだけだがあいちゃんにとって身体的に辛いものとなる。その結果はすぐに現れる。

「はあ、はあ、はあ………っ！」

「何故?!? 何故あいは将棋を指しているだけなのにあんな辛そうな！」

「過呼吸症候群です」

「まさか? 将棋を指しているだけなのに?」

「だけなの입니다。将棋は指す瞬間、息を吐きます。その息を吐くのと同時に相手が駒を打ちつける。すると本来、息を吐くタイミングで息を吸ってしまい過呼吸が起きてしまいうのです」

その過呼吸症候群は確実にあいちゃんを蝕んで行く。

「っ！」パチン!

悪手！悪手！最悪手！……………、悪手の連発である。

「全取……………か。中々クるものやるな」

「……………姉弟子」

近くにいた久留野七段も「友達無くす手だな」とぼやいた。

それに対して八一は「元々いませんよ」と返す。

周りも全取についてどうなのか？という事が早やがれる。第1格下のしかも研修会入会試験において盤外戦術が有りなのかという事だ。

しかしそれは仕方が無い。棋士にとつて求められる物。棋士とは当然勝利もあるが負けるのにおいて無様でグチャグチャな棋譜を残したく無い生き物だ。敗北を認めてどれだけ綺麗な棋譜を残せるかを考えようとする。しかし、奨励会員は違う。

勝つ事だけが正義であり、勝ちのみが全てだ。故に盤外戦術でも精神攻撃でもなんでも使えるものは使つて勝つ。そんな世界なのだ。だからこそ言おう。あいちゃんは将棋をやっているが銀子は「勝負」をしているのだ。

「っ！」パチン！

「パチ

「くっ……………っ！」バチン!!!

「……………」

銀子の手が止まった。あいちゃんの手つきが変わった。銀子の様だ。まるで銀子対銀子を見ているみたいに。その手つきはどんどん似ていく。否、あいちゃんが進化している。勝ちたい一心で、将棋をやりたい一心で。

周りも気づき始めた。あいちゃんが強くなっていることを。この瞬間、一手一手で強くなっている。

「行けるかも知らない……」

誰かがそう呟いた。空想と思うかもしれないが実際、縮まってきている。

「頑張れ……頑張れ……」

あいちゃんのお父さんは手を握って声を掠らせながら「頑張れ」と声を紡ぐ。その声には純粋に我が子を応援する強い強い気持ちが入められている。あいちゃんのお母さんは無言だがその目には確かに我が子を応援する優しい母の目が見て取れる。

研修会の行われている部屋が熱く、もっと熱くなっていく。その先に見たものは……

「ま…… まいり…… ました」

「ありがとうございます」

この戦いは銀子の勝利だった。連続王手を防ぎきれなかった。歩を打って耐え忍んだがそれにも限界という物があった。

八一は銀子に問う。

「なんであんな嬲り殺す様なやり方をしたんですか!」

駒全取。相手の駒を全部取って玉だけにする。言っている事は至ってシンプルだが鬼の所業であり、やられた側にはかなり心にくる物がある。

すると銀子は震えた声で掠れる声で言った。

詰み…… だった。

「もつと……早く……詰ませるはずだった」

その言葉で八一に衝撃が走る。もつと早く詰ませるはずだった。それ即ち“最速で詰ませれなかった”という事だ。あの銀子がである。

「次は最速で詰ませる」

力強くそう言うがもう次は

「決まったようですね」

あいちゃんのお母さんの凜とした冷たく凍る様な声が部屋に響く。

「っー」

あいちゃんの小刻みに震え、大粒の涙をポタポタと落とす。

「あい」「あいちゃん」

俺と八一の視線は何も言わなくともあいちゃんに通じている。

もつと将棋……指したいよな（よね）？

「あい、先生にご挨拶なさい」

「………待ってください」

八一がそう言う。

「一度でも負けたら辞めると言う約束でしたが？」

「はい。しかしそれはそちらの都合ですよね？」

「は？」

「あいさんの将棋を見てこちらから弟子にしたいと思いました。ですのでこちらからあいさんをスカウトさせて頂きます！」

八一はそのまま膝をつき、頭を地面に擦りながら言う。

「俺が……責任持つてあいさんをタイトルが取れるほどの棋士にします！だから……だからあいさんに将棋を続けさせてあげてください！」

あいちゃんのお母さんも思わず息を呑みあいちゃんは驚きでコマを落とす。八一は周りの目を気にせずに続ける。

「確かに俺は16歳で、中卒で、社会経験なんて無いですけど、将棋では最強です！」

最強……その通りだ。八一は竜王でありアマ、女流、プロ、すべての参加する大会のその頂点に君臨する人間。最強である。

「この通りです！」

頭を地面に打ち付けるように土下座する。あいちゃんも「わ、私も！」

「おとうさん！おかあさん！お願いです！将棋を続けさせてください！」

「し……師弟土下座や」

周りからそんな声がある。しかし……それは間違いだ。一門土下座の間違いだ。

「兄……弟子」「おじさん」

「隆さん、亜希奈さん。この通りです。私からもお願い致します。あいちゃんに……あいさんに将棋を続けさせてあげてください。こんな生意気な、馬鹿な弟弟子ですが将棋は強い。こいつなら導ける。天災が保証いたします。ですので……どうか……どうにかお願い致します！」

俺は八一の横で頭を地面に押し付けた。生まれて21年。土下座したのは弟子入りをお願いした時以来無い。この子にはそれほど才能を感じるし、この子は間違いなくこの先の将棋界を変えてくれる。だからこそこの子は八一の元で学ばせてあげたい。この才能をこのままにして欲しく無いのだ。

「「お願いします」」

次に口を開いたのは隆さんだった。

「もうやめなさい」

「あなた？」

「先生方。顔を上げてください」

隆さんは俺達の前に正座して、頭を地面に押し付けた。

「「こちらこそよろしくお願いします」」

あいちゃんは思わず赤く腫れた目で真っ直ぐ父をみる。

「先生ならあいを任せても大丈夫だと思いました。女流棋士になれなくとも、何があるうとも、先生との経験は娘の人生において大きな意味をなすでしょう。だからこそ、こんな娘で良ければ弟子にもらってやってください」

「相土下座や……」

「土下座が増えた……」

誰や相土下座なんで上手いの考えたやつ。

「あい。女流棋士になれなくても良い。将棋を通して、人生の“名人”になりなさい」

「はい!!!」

「ええ話やなあ」「うう……」

浪花節の好きな中高年棋士が泣き出す。しかし、これで終わりでは無い。ラスボスがいるからだ。

「九頭竜先生……ご兄弟と年収を教えてくださいませんか？」

「は、はい。」

「お前！先生に失礼だろ！」

「貴方は黙ってなさい!!!」

「はい」

お父さんエ……」

「えつと……弟と兄が1人ずつ……年収はこれくらい……… 竜王戦の賞金も入るので……… これくらいかと？」

指で見せるが相変わらず竜王戦の優勝賞金はおぞましい額だ。俺は一期とって1千万近く……… しかし竜王は優勝すれば4千万入る。

「なるほど……… それであれば」

ゴクリ。皆、唾を飲む。

「あいが中学生までにタイトルを取れなければ九頭竜先生には婿養子としてあいと結婚して頂きます」

「は？」「は？」「HA？」

誰か洋風なやつおったな。ってそこじや無い。八一に対して叩きつけられた条件はまあ凄まじいものだった。しかしど正論で八一の反論は返され、久留野七段も母親の援護に回った。これにより八一は詰んだ。

そして八一は何か覚悟を決めて言った。

「あいさんを……僕にください!!」

第十局 完璧な将棋

通天閣からほど近い天王寺動物園。まあまあ有名な観光スポットだ。俺は本日ここで取ったばかりのロリ弟子と待ち合わせていた。

「こんなところ来て何するのよ。まさかとは思うけど動物園に行こうなんて言わないわよね」

「なんだ？動物園に行きたいなら言ってくれば良いのに」

「はあ？行くわけないでしょ？本当にどこに行くのよ！」

「安心しろ。将棋指しに来ただけだ」

「それにこんな所で将棋指せるわけ？『どうぶつしょうぎ』でもやるの？」

「んな訳あるかこつち来い」

そう言つて動物園とは逆方向に向かい薄暗いアーケードの入り口で足を止める。『ジャンジャン横丁』正式名では無いが何故かこの名前で呼ばれている。

天衣はそれを見て思わず

「なに？この汚らしいアーケードは？」と一喝。

天衣のお付きの晶さんは若干引いている。そりや結構暗いし、なんかヤバイ雰囲気あ

るし入りたく無いわな。

「まあそうなるわな。新世界って呼ばれててな、大阪で一番ディープでアングラな場所とを考えてくれれば問題ない」

「ふうん」

あんまり興味無さそうに答える天衣。本当にどうでも良さそうだ。

「昔、通天閣の地下には西日本最大の将棋道場があった。そこでアマチュア強豪たちが毎日争っていた。その名残がこの地にまだ残っているんだよ。つと、ここで良いかな？」

そのアーケードの中を少し進みとある店の前で止まる。『双玉クラブ』と書かれた看板の店だ。

ガラス張りの窓から中で行われている将棋の様子が見れる。

「どうだ？やれそうか？」

その将棋の様子を見て天衣は呆れたように言う。

「ふん！もちろんよ。こんなレベルと一緒にしないで！」

「オーケー。なら席料払うからお金あるか？」

「ブラックカードならあるけど？」

初めて見たわ。ブラックカードを持つてる小学生とか。というか使える訳無かろう。

「あー晶さん？小銭とかありますか？あとレシート」

「お金なら糸目をつけるなど当主に言われている。遠慮なく言ってくれ」

「なら千円札を5枚お願いします」

「わかった。しかしレシートはなにに？」

「こうするんです」

お札をクルクルと巻きそれをレシートとテープを使って固定。さらにタバコの空箱にそれを入れる。んで、それを天衣に渡す。

「ほい」

「なによ、これ。なにに使うの？」

「これで『真剣』をやるんだ」

「真剣？」

「そ。簡単に言えば賭け将棋だ。レートは一局千円。一回負けたらこれを一本渡す。この空箱満帆になったら晴れて研修会試験に参加してOKだ。分かったな？」

「いやー懐かしいなあ。昔は年上相手にボコりまくって金稼ぎしてたわ。その金で妹や弟と食う飯は美味かった。」

「わかったわ。今日で終わりにしてやるわ」

「頼もしいな。箱を見せたら合図だ。近くから2人で将棋やるフリして見てるから好きにやって来い」

席料を払ったのち天衣はスタスタと奥の方に入っていく。俺と晶さんはそれを追って奥まで向かう。俺は晶さんと天衣の座った横の席に座る。天衣はタバコの箱を見せる。「平手で良いかしら?」と言うと「座んな……」と返される。勝負成立だ。ちなみに天衣の向かいにいるのはなんとというか……その……男?女?どっち?的な人だ。なんか凄いい↑語彙力の崩壊。

「ああ!ミスってまったわ〜」

△七八歩!角頭歩戦法である。

「!??!」

天衣はその意図、なぜそこに打ったのか。その全てが天衣には分からなかった。だからこそ凄まじい混乱を起こした。

「ほう……角頭歩か」

「なんだそれは!というか先生!なぜお嬢様はあんなに狼狽えている!」

「角頭歩戦法って言いましてね。あの角という駒は前には前進できない。即ち角の前にある歩が唯一の防壁。それを自分から取ってしまった。”通常”ではあり得ない戦法です。だからこそ天衣は狼狽えているのでしょ」

「でも！それならお嬢様の方が優勢になるのでは無いか？防御壁を自分から壊したなら！」

「まあまあ落ち着いて。角頭歩戦法の面白いところはコレカラですから」

天衣は相手の角を取って角交換が行われた。

「え？なん……で？」

天衣の手が止まった。その時既に、天衣は劣勢に立たされていた。

「どうやら……気付いたようだな」

「何にだ！先生！何故お嬢様の手は止まっている！優勢の筈だろう！あの変態はお嬢様に何をしたのだ!!」

「ハメ手ですよ」

「反則なのか！ならあの変態を始末しに……」

晶さんは腰を浮かせながらなにかを懐から取り出そうとする。所謂、『道具』だろうか？心臓に悪い。

「ストップストップ！別に反則では無いです！」

「なら何故ハメ手なんて言うんだ！」

「なんつーかその罨にかかった自分を戒めるためというか……そうな感じですよ。ちな

みにプロには絶対に通用しません。したらプロは名乗れない」

そして夜叉神天衣は「プロ」では無かった。



そのまま5連敗を喫し、一勝も出来ずに天衣は散った。そして道場を出ると地面を蹴って悔しがる。

「なんで！入り口から見た時は大した事無かったのに！」

「A. それ客寄せだもん」

「は？」

「だから”わざと”道に近い所に弱い人を置くの」

「なんでよ！レベル低いつて思われるじゃ無い」

「はあ……… 将棋で一番楽しい時はなんだ？」

「そりゃ勝った時でしょ」

「うーん…… 及第点。本当に楽しいのは”大差”で勝った時だ。それはプロでもアマでも変わらない。ただ”一部”を除いて」

「?」

「まあ良い。とにかくだ！そーゆー事をする為に店としては弱い奴に集まって欲しい訳だ」

「……………」

「だからこそ書いてあつたら？級位者半額って」

「……………」

「これで売り上げがめっちゃくちや変わるって言うしな」

「まあ真剣師がはびこる新世界ではそれが一番だからな。店も真剣師もwin-winなんだよ」

「なら…………… 私はカモだったってわけね？この…………… 私が…………… こんなところで!!!」

天衣は死ぬほど悔しがった。自分のプライドがそれを許さなかったんだろう。

「天衣。お前の将棋は綺麗で強い」

「は？なに言つて……………」

「王道の指し方だ。だからこそ強い。だがその分、盤外戦術や定跡を外れた手。まあその他諸々には弱い」

「……………」

「まあつまるところだ！お前が弱いのは将棋じゃ無い。心だ！」

「ハハ……………」

「そう。ぶつちやけハメ手なんてプロでは使わないし打ってきたら対応できる程度にしておけば良い。それよりも盤外戦術なんでもいくらでもある。プロ棋士でもやる奴はいらぬ。そういうのにどれだけ対応できるかだ。完璧な将棋が出来る様にしろ」

「完璧な将棋……………」

「そ！それが出来ればもうお前を負かす”敵”は居ない」

何か雷でも受けたような衝撃を受けた。予想外のことを言われたって顔だな。よし。切りがいいから今日はここまでにしてどっか行こ（結局棋士室行つて誰も相手してくれなくて悲しくなる）。

「それじゃあ今日はこれまで。俺はこの後用事があるから天衣もちやっちゃと帰れよ。晶さん、今日はありがとうございました。またよろしくお願いします」

「ああ、こちらこそ引き続きお嬢様をよろしく頼む」

アーケードを出た俺はふらふらあつと歩き出す。

第十一局 師匠と弟子

「まだパンサー来てないなあ」

あれから数日後。俺は天衣と共に例の道場を訪れた。

「どうするの？ 貴方と指す？」

「いや、俺とはいつでも指せるだろう。だれか強そうなのと指して来い」

「わかったわ」

俺たちは本日も例の将棋道場に来て指している。理由はパンサーへの再挑戦の為だ。

「ねえおじさま？ 私と指さないかしら？」

「……座んな」

将棋世界を読んでいる人に話しかけてすぐさま天衣とおっさんの対局がスタートする。

「負けても泣くなよ………つと」おっさんの初手は4六歩。

「っ!!？」

「ほらただで小遣いやるんだ。取れるなら取ってみろ」

「ほう、バックマンか。懐かしいね」

「バックマン？ゲームでは無いのか？」

「将棋の戦法です。それを取った瞬間大乱戦が始まるので研究した奴が有利になります。経験上、長い間将棋を指してきたと思われのおっさんの優勢でしょう」

「なるほど…… お嬢様に勝機はあるのか？」

「わかりません。でも天衣になら」

結果として天衣は歩を取り大乱戦へ。一歩間違えれば劣勢へと真つ逆さまだ。しかし天衣は受けの将棋を行い、逆に罠に嵌るような手をバンバンと指す。その一手に完全に飲み込まれたおっさんは完全に狼狽る。

「これで——どう！」

天衣は相手を完全に読み切った。

「チツ…… ここまでだな」

そう言っておっさんは駒を投じた。

「嬢ちゃん、強えな」

「ありがとう、知ってるわ」

こうして一回目の対局を乗り切った……と同時に例のパンサーがやってきた。しかし前回とは違う。なんとピンクパンサーになっていた！

豹柄ピンクパンサーという凄まじく派手な衣装は俺でも動揺しそうだ。ピンクパンサーは「今日は競輪で儲けてなあ。いくらでも相手したるで」と言つて座つた。

「わ、私が相手よー！」

このなんかヤバいのに挑むのは流石に勇氣ある。

「だが……あれでは将棋どころでは無いでは無いか！」

「まあ……なんだ……修業です。そう言うのにも慣れないと」

戦いは再び角頭歩戦法。前回の反省を生かし天衣は角交換を拒否しする。しかし、パンサーは当然その対策も立てている。

「ケツ！猪口才な！力でこんかい！」

角交換を拒否されたパンサーは一人で角を前進させ左桂も飛んで有利な状況を作る。

角交換を拒否して角道を閉じてしまった天衣にとつて左桂の活用もままならず左腕を縛りつけられたような戦いを見せる。しかし、いくら不利になつても天衣は諦めない。彼女の『受け』が光り出した。

「……………」

「やるやないか、小娘」

序盤で優勢を築きながら攻め切られたパンサーは素直に天衣を称賛する。

「《新世界の豹柄》と呼ばれたこのワシの攻めをここまで完璧に受け切るなんてなあ!!」

おぼさんだった!??

その真実が発覚したのも束の間。その事実で動揺した天衣は直後、悪手を指して自滅してしまった。

○●○

「あれはまあ仕方が無いな」

「そんなこと言ったって」

「プロでも盤外戦術はある。如何にして相手を動揺させるかも大切だ。例えばそう、俺がy……………やはりこの話しはやめておこうそれよりもだ！まあバックマン

に勝ち切った事や今回の受け。確実に進化している。この調子で頑張れよ」ナデナテ

「ちよつと！撫でないでよ」

「すまなかつたな」ナデナテ

「わかつてないでしょ！」「うん」

「即答!? まあ良いわ。晶、拳銃」

「は、お嬢様」

「ストップ。流星に拳銃はあかん。というか所持自体あかん。やめたから。やらないから」

「最初からそうしなさいよ。ていうかこんなに私に構ってていいの？」
 「何故に？」

「棋帝戦の予選に玉座戦。あんた、そろそろ本腰入れなきゃいけないんじゃないの？」
 「……………」 気にすんな。お前は黙って自分を磨け。確かに複数冠を取る事とか永世位の事も死ぬほど大切だ」

「なら……………」俺は来年の今、お前が『女王様』になっている事が目標だ。だからそんなこと気にするな。師匠だつて使うものだ。使えるものは全て使つて駆け上がれ。そして掴み取れ」

天衣は俺の言葉を聞いてフラフラとしている。そんなにショックキングだったか？
 「さあてと。俺は帰る！」



帰ると言いつつ俺はそのまま師匠の家に向かった。バイクでしか入れないような細い道沿いに師匠の家はある。

「師匠！こんばんは〜！」

「？悠斗か！さつさと上がらんかい」

「お邪魔します」

そのまま師匠の部屋に通された。

「どうしたんや？急に帰ってきて」

「いや、弟子を取ったのに何も言っていないからどうしたのかと思ひまして。師匠にも一応、口頭での報告もしましたし、月光会長からも言ってるはずと思つたのですが？」

「……確かに言おうと思つたが今はやめといた」

「何故？」

「弟子を取つてからすぐはかなりてんやわんやするんや無いかと思つてな。八一もやし」

「なるほど。それであんな家で駄々捏ねてたんですね」

「何故知つとる！」

「桂香さんに聞きました」

「桂香ああ!!何やつとるねん!!!」

「まあまあ誰にも言つてませんからwそれよりも師匠。」圧倒的な才能に出会つた時つてどうすれば良いですか？」

「っ!……せやな。不安なんやろ？」

「はい」

薄々思つていたが俺は天衣を育てきれから心配だ。才能は八一の方が上。八一を育て上げた師匠なら何か知つてるかも知れないと思つたのだ。

「お前は大丈夫や。育てれる」

「何故言い切れるのですか？」

「ワシは最初、お前はプロになれてもトップにはいけないと思った。八一と比べて最初の実力差はあつたやろ？」

「はい」

八一の方が格段に上。どう考えても同じ時から始める。要するにおんなじ位置からスタートラインに立てばF1とそこらの軽自動車だ。

「でもお前は凄まじく伸びた。いつの間にかトップ棋士や。あの名人や月光さんと並んで天災なんて呼ばれてる。それを実現させたのは実力だけやない。努力や。負けん気や。その力があるならお前はいける。自信を持って、一ノ瀬悠斗！」

ガンッと打たれたような衝撃だ。確かに俺は努力した。けどそのやり方はあの子に会うか分からない。だけど、それでもやる。そう思えた気がする。本当に師匠に、清滝鋼介には頭が上がらない。

第十二局 天衣無縫

さてさてあれから2週間の月日が流れた。

俺は順調に予選を勝ち上がり挑戦者決定戦が見えてきた！一方で天衣はパンサーにポッコポコにされては挑みの繰り返し。心の強さも凄いらしい。

今日も今日とて行けるかなあ……と不安がっていたらそれを他所に「今日こそ勝つから見」と自信満々だった。自信だけなら誰でも持てるが今日の自信はなんだろう……少し違った。

「またやるんか？嬢ちゃんもようくるなあ。先手譲ってやつてもええんやで？」

パンサーはいきなり挑発するがそれに全く動じず振り駒の結果の後手になった。パンサーはいつも通りの角頭歩戦法。天衣は「自分の角で相手の角を取った」。

「フア!?？」

俺ばかりでない。パンサー含め対局を見ていた多くの人とその指し方に衝撃を受けた。

「お、おい！先生！何があったのだ!?？」

「お宅のお嬢さんは一手パスしたんですよ」

大雑把にその真実を伝える。普通なら本当に損する手だ。しかし……

「なんでや！なんでこんな無茶苦茶な将棋が成り立つんや！ありえん！だけど……」

混沌を極めたこの対局は「もう無理や！負けた！もう指せる手があらへん！」というパンサーの敗北で幕を閉じた。

「よし……これで整ったな」

俺はボソツと呟いた。

○○●○

それから数日後。俺は研修会へとやってきていた。

「それでは夜叉神天衣さん。研修会入会試験でよろしいですね？」

幹事の久留野七段に確認を取られる、

「はい」

「師匠は……一ノ瀬悠斗玉座ですか？」

「はい。何か？」

「い、いえ。玉座がお弟子に取るなんてよっぽどなのかと思ひまして」

思わず敬語を使われるが個人的にはもつとラフにして欲しい。確かに級としては格

上だ。だが歳として、人生としては向こうが上なのだ。

「まあそれは見て頂ければ」

そう言うと話しは区切れ、久留野七段は事務作業をして研修会は始まった。と、同時に天衣の紹介がある。

「兵庫県神戸市在住の夜叉神天衣さんです。師匠は一ノ瀬悠斗玉座です」

ザワツ！周りが一気に騒がしくなる。天災の弟子。そのフレーズだけでどれだけ有望な人が分かるのだ。自分達にとてつもないライバルが現れた。誰もがそれを理解したのだ。

あいちちゃんは一際目を見張っていた。一度、街の道場でエンカウントしたのだ。その時にすこくしばかり天衣があいちちゃんを挑発した。後から俺が丁重に謝ったがそれでもあいちちゃんは天衣に対してバチバチだろう。

「まずは平手でお願ひします」

天衣は平手で同じぐらいの歳の子と指し始める。俺の横には晶さんがいる。緊張でなんか凄い顔してる。形容し難いが凄い顔だ。ちなみに天衣は角頭歩戦法。パンサーのあの手を吸収していたらしい。全く恐ろしい。結論として言えば天衣は一瞬にして相手をボロボロにし、倒してしまった。一回も手に気づかず、天衣の手を理解できずに倒れた。

その様子を見ていた久留野七段は「はあ」とため息をついてこちらに向かってきた。

「君たち兄弟はなんでこんなとんでもない子を連れてくるの？」

「そんな事言われましても……………この子、月光会長の推薦で預かってますしお寿司」

「月光会長の!?？」

「はい」

「なるほど強いわけだ」

→流石は月光聖市九段。関東、関西関係なく通じる伝説の大棋士だけある。

「それじゃの次は駒落ちの戦い、見せてもらおうか。清滝桂香くん！」

次はvs桂香さんだ。桂香さんは香を2枚、箱にしまう。それと同時に天衣が物凄く

くくくしい失礼な発言をする。「落とすのは私じゃないの?」

と。

普段はめっちゃ温厚で良い性格してる桂香さんが髪を逆立てた。ちなみに対局だが『マツサージ』と呼ばれる手を指す。敵の攻め駒を取って駒得し、そこから受けを攻めに転ずる指し方。賢陣を無理に攻めず攻撃能力を消失させた上で確実に優位な手で指す。叩くのではなく揉むような感じだからそう呼ばれる。

その様子に思わず久留野七段は目を剥く。

「老獪な……研修会にも入っていない子がどこでこんな手を……………」

街の道場で仕込みました☆なんて言った日にはとんでもないことになるので固く、固く封印する。

結局そのまま天衣優位の展開は変わらず「まいりました」という桂香さんの声で終了した。如何に……天衣が如何に強いか思い知らされる。

「んんん……最後は、雛鶴あいさん！手合いは振り駒で！」

振り駒の結果、先手はあいちゃんだ。

「お願いします！」「お願いします」

あいちゃんは当然、初手で飛車先を突く。対して天衣は三四歩。角道を開けた。あいちゃんは即座に自分の角道を開ける。どんな戦法でも受けて立つと言う意思だ。

「横歩取りですかね？」

久留野七段が聞いてくる。「いや……これは」そう言葉を濁した瞬間天衣が指したのは「一手損角換わり!!?」「渋っ！」思わず近くにいたJS研とやらの一角。滞ちゃんが声を上げる。一手損角換わりはプロフェッショナルしか指さない珍しい手。アマチュアではまず見ない。

関東、関西合わせても使える人は少ない。例を挙げるなら月光聖市会長に九頭竜八一

(弟子)。「そして……」「玉座はどう見ますか?」

「ん〜そうですね……」

俺、一ノ瀬悠斗は得意戦法と言う訳では無いのだが……初めて玉座に挑んだ時。即ち最初に名人に挑んだ時に選んだ戦法だ。個人的に八一の相手するとき一緒に学んで使えるようになったが使った事ほとんど無いし意表を突けるんじゃないか理論の元にやったら上手くいったのだ。

あまり使わないから会長や八一ほどは使えない。だけど俺の中でタイトル獲得の一つの象徴だから特別な思い入れはある。天衣が何故この手を使ったかは知らないが大切な大切な戦いにこれを選んでくれたのはとても嬉しい。

「難しいですね」

「天災で難しいってどういう事ですか!!」 滯ちゃんがかなりびっくりしている。

「じゃあ滯ちゃん。将棋は先手と後手のどっちが有利かな?」

「えつと…… 先手です」

「その通り。じゃあ何で先手の方が有利なんだい?」

「ええつと……」

暫く悩んでから滯ちゃんが答えに辿り着いた。

「一手……得してるから?」

「正解。つまりだ、一手損角換わりっていうのはただでさえ一手損してる後手から角交換する。即ち2手損する戦法だ」

「大損じゃないですか!」

「普通ならね。でも見てみな」

「……………」

「ここが一手損角換わりの原点。ノーマル角換わりは先手良しの結論が出るけど、一手損して全く別の将棋を作り出した。そして先手は後手に比べ飛車先の歩が一つ早い。即ち、先手に攻めを強制させているんだ」

こうなると先手には有効な攻め手が無い。故に、一手損角換わりは居飛車戦法における受けの究極とも取れる。それ故にしているいい損としたらダメな損が生まれた。そこから古い手にも『して良い損』を探し出した。文字通り将棋の世界を広げた。

「しっかし……………」 天佑さんの力をしっかり引き継いでんなあ、一手損角換わりの腰掛け銀とは……………」

「あれ?角換わりの腰掛け銀は先手必勝じゃ無いんですか?」

「一手損角換わりの場合はまだ結論が出てないんだよ。相腰掛け銀の4八飛型。現時点は後手優勢だね」

「そうなんですか？」

「うん」

そうしてまた少し進む「こう………　　こう………　　こう………　　こう………」

あいちゃんが少しずつ体を揺らして極限まで読む。これこそがあいちゃんの真骨頂だ。

「(こう!!!) 4 五歩」

当然、天衣は同步。歩をとって受けにまわる。

「始まったか」

激しく、強く、そして熱い戦いは皆を惹きつける。研修会にいる全ての人がその戦いを見入る。決断の7一角。そこからの飛車引き。

玉をうすくしての攻めの受け。天衣に『詰める』がかかればほつといて逆にあいちゃんのを攻める。凄まじい勝負度胸。苦しくなるのはあいちゃんの方だった「く、どうして……」

大きく読みを外したあいちゃんは「こう………　　こう………　　こう………　　こう………」

う………　　こう………　　こう………　　こう(こう(こう(こう(こう(「さらに深い読みに入

る。それでも強い一手を打ち込む。届くか届かないかギリギリの戦いはその場にいた

誰もを惹き込む。

八十九手目。

無防備玉。ついに天衣の玉を守る

駒は一枚たりともなくなつた。それでも無傷で美しく天衣の玉は踊り続けた。堂々と。

天衣無縫に。そして——ついに

「ああ……」

戦いは終焉が訪れた。

「…………… 負けました」

「あいちゃん、惜しかったね。最終盤に詰みがあつたんだよ？ あいちゃんが詰みを逃すなんて珍しいな」

「えっ？？」

「ここでこうしていれば」

天衣が実際に駒を動かして再現する。それを見てあいちゃんは大粒の涙をこぼす。

「そっか…………… そっか……………」

何度も、何度もその手を動かして直す。

「悔しい……悔しいよお……届かないって……途中で諦めちゃった……」

途中で心折れちゃってた……私は……私に負けちゃってたんだ」

「もつと強くなりたいよお……もつと強い人と戦って……もつと強くなりたい」

嗚咽しながら声にする。それに誰も声をかけなかった。誰もがそれを感じて強くなってきたからなら。負けたく無い……あいちゃんに生まれた気持ちだった。

「私は、あなたを認めない。ここにいる私より弱い奴を認めない。例え先輩でも……」

誰もがその声に黙り込む。

「でも……敵としてなら見てあげても良いわ」

そつぽを向きながら小さな声で言う。その瞬間あいちゃんは身を乗り出して言う「ねえねえ！天衣ちゃん！感想戦しよ！ね！」

「わかったわよ！わかったから！」

第十三局 捌きの巨匠

とある日の10時頃。俺はバイクに跨っていた。自宅のアパートのある西九条から上船津橋と湊橋を渡つて中之島を越え京阪本線の横を通つて京橋へ。目的地は京橋にあるのだ。

京橋にあるとある商店街のいつかく、『ゴキゲンの湯』と書かれた看板が掲げられた銭湯に入る。

「こんにちは」

「あ、こ、こ、こんにちわ……」

「お、飛鳥ちゃんこんにちは。早速だけど生石玉将は上かな？」

「う、うん」

「そうか。ありがとう！」

階段を登るとそこには洒落た空間に向かい合つたソファ。その間にある机には将棋盤。さらに少し高くなつた台の上にはグランドピアノが置かれている。

一見して何かお洒落な喫茶店にも……見えなくないが実際は将棋道場。それもただの道場では無い。振り飛車党の集まる道場である。そんな道場を仕切るのは純粋な

振り飛車党として唯一のタイトルホルダーにしてA級棋士。捌きの巨匠（マエストロ）こと生石充玉将だ。

「おう、どうした？こんな急に来て。順位戦への挑発にでも来たか？」

なおお互いA級棋士であることから普段はバッチバチのライバル関係にある。

「まさか。今日は少しお願いがありました」

「お願い？」

「はい。この子の事なんです」コト

スマホの画面には晶さんに送る為に撮った（建前）天衣の寝顔写真が写っている。ちなみに中々良い値で取引出来たよ。ヘッヘッヘッ。

「この子が？見た感じちっこいな。小学生か？」

「はい」

「この子が？」

「俺の弟子で研修会員です。ちなみにめちやくちや強いです。俺のところに来たのは会長長の推薦です」

「待て待て待て！少し情報が多すぎないか？えつとなんだ。まずお前が認めるほど強くてしかもお前の弟子。で、しかも月光聖市会長の推薦つきか。んで聞いた限りそんな才能の塊みたいなのをなんで俺に提示する？」

「この子に振り飛車を仕込んで欲しいのです」

「振り飛車を？」

「はい。ぶつちやけ強すぎてもう少しで駒落ちでの戦いが始まります。そうなれば強い攻撃力を持つ振り飛車を武器として持てた方が良いでしょう。ですが俺なんか半端に物を教えるよりやはり本職に教えてもらった方が良いでしょう」

「なるほどなあ。お前の言いたい事は分かった。まあ振り飛車も衰退し気味だ。今後、振り飛車を普及させていく為にもやるべきだな。よし、やってやろう」

「ありがとうございます」

「ただし！ただでは出来ない」

「…………… なんですか？金ですか？」

「な訳あるか」

「ならあれですか？危険物取扱者資格がいるのでも？あ、陸上特殊無線技士ですか？それとも発破解体ですか？」

「違………… うな。方向性は同じだが。ちなみに発破解体で何する気だ？ん？銭湯の解体か？ふざけんなよ？」

「まあまあまあ。で？なにをやれば？」

「要は雑用だ雑用。風呂の掃除とかそういうのをやってもらおう。期間は3週間だ。」

ちやつちやと仕上げるから今度から連れてこい！」

「あざっす！」

「あ、給料は無しな」

「ア、ハイ」

「それとだ……この前の挑戦者決定戦の棋譜見せる。名人が振り飛車できたやつだ」

「あくあれですか？ 正直納得行っていないんですけどね」

「んな事どうでも良い。さっさと出せ」

「はい」

言い忘れていたが俺は名人との棋帝挑戦者決定戦でなんとか名人を破り、見事挑戦者になった。タイトル100期は少なくとも俺の王座戦以降に持ち越しとなった。

○●○

カッポーン！

「ふにああああああ♡」

銭湯中に女湯からあまくとろける様な声が響き渡る。

「あいく久しぶりの大きなお風呂はどうだく？」

「はいししよー！最高です〜!!」

我弟弟子の八一は壁の向こうにいるあいちゃんと話す。清滝一門以外誰もいないからこそ許される行為だ。我々は今、師匠の家の近所にある銭湯に來ている。

「いや〜久しぶりに入ったなあ」

「そうですね！」

そのあと少しグダグダと話したら壁の向こうの花園から声がする。桂香さんの☆☆☆が大きいとか。銀子の***がツルツルだとか。そんな事を聞きながらあく昔は桂香さんとかとも入れて良かったなあ。と昔を思い出していた。

なお、つい最近謎にベロンベロンに酔っていた万智（ウイスキーボンボンでも食ったんじゃないか？）に風呂に突撃されて大変だった思い出がある。↑なおあまりにも過激だったので後書きとして没になりました。

あ、ナニも見てないからね？

「そういえば兄弟子！こんなところで風呂入ってて良いんですか？今年はなんか日程ぐちゃぐちゃですぐに棋帝戦が始まるんじゃない？」

「いいんだよ。というかお前こそ大丈夫かあ？今日の対局」

「うっ!.....でも良いところも」

「完璧譜でか?」

「.....」チーン

「はあ。まあ良いさ。再来週にはまたあるんだろ?」

「はい。それでですね。振り飛車を教わろうと.....」

「オマエガ.....フリヒシヤ?だと?」

「はい」ベキ!!!

「グフウ」

「ハアハアハア。なんて事言い出すんだ。一手損角換わりなんて戦法までマスターしておきながら、お前が!!お前が振り飛車なんてらしくない」

「.....」チーン

ただの屍の様だ。

○○●○

なんとか生きてました☆

「ハアハア、危なかった.....」

「ん」

コーヒー牛乳を買ってみんなに渡す。

「兄弟子、ありがとう」「兄弟子、ありがとうございます」「おじさんありがとうございます!!」「悠斗君、ありがとう」

「で?なんで振り飛車なんて?」

「えっと……山刀伐さんに対して何か有効打があればと……ほら兄弟子だって17歳の時の玉座戦。最後の一押しは一手損角換わりなんていう使った事すらない手でしたよね?」

「そうだ。まあその時と同じ要領で行ってみてもいいんじゃないかな?衝撃はあると思う」

「わかりました。よし!行ってみます!!」

翌日。俺は天衣を連れて、八一はあいちゃんを連れてゴキゲンの湯までやってきた。

第十四局 振り飛車

後日改めて京橋にやってきていた。今度は天衣と晶さんを連れて行くために車です。ちなみになにとは言いませんがスポーツタイプの車です。

「こんなところになにしに来たのよ！」

「まあまあ」

「おい先生。前もそうだったがなんで先生の目指すところは、そのなんだ。トンデモナイ所にあるんだ？」

こんなところや、トンデモナイ所と表せる様にゴキゲンの湯の周りにはソー○ラン○的なね。もうこれ以上言わないけどそういうのがある。だからこそ純粹無垢を脱出された方々には恐怖でしか無い。

「普通に棋士の先生のところに行くだけです。この通りに至極普通のお店を構えている」

「にしても先生。こんな所に構える必要なく無いか？薄暗いし、その、なんだ。こんな所」

「なんででしょうか？俺にも分からないですけど割と棋士ってコミュ障だったり引籠り

の人が多いいからでしょうかね？って着きましたよ」

数日ぶりにやって来たのは『ゴキゲンの湯』。

「ゴキゲンの湯？」

「そう。至極普通の銭湯だろ？」

「こんなところに棋士なんているの？」

「いる。この銭湯はバリバリのA級棋士。タイトルホルダーの先生がやつてる銭湯だ」

「ふうん。少し安心したわ。とんでもない奴を紹介されるかと思つたから。さつさと行くわよ」

「へいへい。あ、ちなみに八一とあいちゃんも待つてるよ？」

「ハア？なんであいつとまたやんなきやなんなのよ！」

「別に良いだろう？それに振り飛車党トップの先生に教えてもらえるんだぞ？それにお前はこれから駒落ちの戦いが始まる。なら振り飛車は覚えた方が良い」

「あんたは？」

「へ？」

「あんたはA級棋士。しかもタイトルホルダー。それもあの名人からタイトルを奪つたとんでもない棋士。しかも複数数冠をかけて棋帝に挑んでる。そんな貴方は居飛車だけで良いの？」

「俺は……… まあ良いさ………」

「へ？なに？」

「？」

「いや、最後になんか言わなかった？」

「いや、言っていないが？」

「そう」

「まあ良いや。行くぞ。晶さんも道場の人に稽古つけてもらってくださいな。彼らはA級棋士に教わった強豪ですから」

「そうかそうか！なら私も全力で挑ませてもらおう」

「ちなみに駒の動き覚えましたか？」

「ふ、当然だろ☆」

「じゃあ飛車と角。自分から見て左側にあるのは？」

「えつと……… 飛車？」

「……… 基礎からやってください。天衣、行くぞー」

「ええ、了解」

「え？え？間違ってたか？え？」

「玉将ー連れて来ましたよー」

「おお、来たか。んでその嬢ちゃんかい。強いと言うのは。なんでも噂に聞く八一の奴の弟子と同等だとか？」

「そーですね。まあ一局やってあげてください」

「わーっつた」

○○●○

「おい一ノ瀬」

「なんですか？」

「なに食わせたならこんな強いのが生まれるんだ？」

「俺に言われても」

「強すぎだろ」

「おっしやる通りで」

その時、後ろからガヤガヤと聞き慣れた声が聞こえた。

「噂をすればなんとやら……八一にあいちゃん。おはー」

「あ！おじさんおはようございませす!!」

「兄弟子、お疲れ様です」

「ん。あ、俺早速雑用やってくるんでよろしく」

○○●○

振り飛車党が飛車を切るといふ大胆不敵な戦法。これこそが捌きの巨匠という二つ名の由縁。これこそが『捌き』あの月光会長ですら手が出ないという。

俺は…… だから俺は。

「生石先生!!」

「ん?なんだ?」

「俺に振り飛車を教えてください!!」

一瞬の沈黙の末あいが叫んだ。

「師匠!!振り飛車党になっちゃうんですか!!?」

「違う違う!」

「不利飛車って言っていつもけちよんけちよんに言ってた振り飛車を指すんですか!!」

「?」

あー自殺発言☆

「うわあ」

天衣は引いている。まるでそこらへんのゴミでも見るか如くの目だ。あ、でもロリ大好きな八一なら耐えられる説ある。

まあなんだかんだあつて天衣と同じような理由で振り飛車を教わることになった八一達。あいちゃんの質問から思わぬものが出てきた。

「結局振り飛車と居飛車どっちが指せるのが良いんですか？」

「それは居飛車でしょ？（振り飛車だろ？）」

被つて雰囲気悪くしたのち八一が咳払いをして

「どっちかじゃなくてどっちも指せるのが最強なんだ」

「どっちも？・・・けどそんな」「できる！」

「少なくともできる人がこの世界の双玉の片翼を担つてるから」

「でも竜王の師匠が最強なんじゃ・・・」

「俺なんか遠く及ばないさ。俺だけじゃ無い。現代を生きるたつた一人の棋士を除いてだれも敵わない。その一人も努力して対等に盤上で話せるようになったんだ」

「それは・・・だれ？」

「名人」

史上3人目の中学生プロ棋士としてこの世界にあらわれ、史上初の7冠達成。永世六冠。誰もが認める存在。

「でも敵う人がいるって・・・」

「その人は別格。ぶっちゃけ俺は一度も勝つたことが無い」

「だれ？」

「兄弟子」

「おじさん!?」

公式戦で居飛車しか使わない。でも初載冠で名人を倒し、その後盤王戦で敗れるも棋帝の挑戦者決定戦は倒し。互いに全く譲らない強さを誇る。故に天災と呼ばれ神と同等に扱われる。名人の勝率が少し低くなったのは一ノ瀬がいたから。名人がいたから一ノ瀬の勝率が少し下がった。と呼ばれるぐらい2人は2人の戦いで勝率が決まる。

「あの2人は格別。でもそんな2人も血が滲むような努力を積み重ねてあの位置にいる。だからこそ俺もやってやるって思ってる。俺は、オールラウンダーになる!!!」

周りはポカンとし、あいは「師匠かっこいい!」と言ひ、天衣ちゃんは呆れている。「まあお前の兄貴にこの子に教えるよう頼まれてるし一緒に面倒見てやらあ。そのかわり、八一には一ノ瀬と同じく無賃バイトしてもらうからな?」

「わ、わかりました!!」



「ふう。終わった……………」

浴槽磨きはかなり腰にくるものがある。辛い辛い。終わったら次は…:

「おい……つちで指導つけてくれ!」

振り飛車党の人たちに指導だ。

「あ、……はこう指されたら」「は!」

「んでこつちはここが。あとそこも」

「ほら、そこ開けたら!」「ぐ」

3人一気に相手するのは面倒いです☆ちなみにこの道場の人たちは振り飛車党であり俺には殺意マックスでやってくる。怖い。

一方、3人は振り飛車党総裁の指導のもの頑張つて取り組んでるようです。「うゝ」とか「あゝ」とか苦しみの声を捻り出しながら頑張っていました。

○○●○○

その後、我々はお風呂を頂く事に。俺と八一は2人で入る。なんかつい最近と似た構図だなあ。

「あの……兄弟子?」

「どーした?」

「名人と研究会をしているって本当ですか?」

「……………誰に聞いた?」

「歩夢に」

関東所属の歩夢君ならまあ知つてもおかしく無い。

「ああ、やっている。月一と行きたいがまあ無茶なので暇を見つけてはやってる。俺が

関東の棋士に対しても異様に顔が広いのはそこがある」

俺が八王子の名人宅に行くか、名人が俺のアパートにやって来てぶつ通しでひたすら将棋を指す。これがとても楽しいのだ。

「そう……ですか」

「ん？なんだよ。嫉妬でもしたのか？」

「いえ……別に」

「……………名人はお前の事をよく知ってる」

「え？」

「あの人は奨励会時代のお前の棋譜を含めて全部研究していた。まるで自分の棋譜のようにならぬ一つ一つを俺に語ってくれる。めちゃくちゃニコニコして、面白いぐらいの笑顔でな」

「え？」

「お前に余計な緊張を与えてしまいかも知れないから言いたく無かったが言う。お前は神様に見てもらえてる。お前のことを神様はずっと前から見ていた。だから頑張れや。今苦しくても見てくれる人は見てくれる。だから答えられる様に今、全力を尽くせ」

「……………はい」

「わかったなら良い。じゃあ俺は先に出る」

努力した人は努力しただけ報われる。俺はこれが当たり前の事だと思ってる。でも、まさかこの後桂香さんがあんなに頑張つてその先に苦しみも辛さも色んなものがあつたなんて知らなかつた。

果たしてこれを教えた事が吉と出るか凶と出るか……今度の山刀伐先生との対局に期待だなあ。そんな事を考えながら脱衣所を出るとあいちゃんが異様なほどソワソワしながら立っていた。

「お、あいちゃんもう出ていたのか？」

「あ、おじさん……………」

「どうかしたのかい？おじさんで良ければなんでも相談に乗るぞ？」

「あ……………実は……………」

「実は？」

「桂香さん。降級点がついちゃったんです」

第十五局 将棋星人

「降級点がついちゃったんです」

「っ！」

降級点。棋士を目指す誰もが味わうであろう悔しい結論。10局さして2勝8敗以下の成績を取ると付く降級点。かく言う俺も付いた。駒落ちで振り飛車を使わなかったが故だが。

それ故に、その悔しさ故に俺は天衣に振り飛車を擦り込ませたかった。

「おじさん？」

「あ、ごめんね。少し考え込んでしまった」

「降級点をですか？」

「うん。桂香さん相当悔しがってるだろうね」

「おじさんも付いた事があるんですか？」

「もちろん。俺だけじゃ無いさ、八一だって付いた事がある。みんな一度は通ってるさ」

「師匠も……」

「そう」

でも桂香さんに取っては厳しい現実なんだ。” 25歳の桂香さんに取っては特
に……



「ごめんね。急に呼び出しちゃって」

「いいよ。別に。それでどうしたの？桂香さん」

「私ね。今日の研修会で降級点をとっちゃったの」

「うん」

銀子ちゃんは一瞬息が詰まった。同時に何か心の奥底で締め付けられた様だった。

「私はもう覚悟はしていたの。”年齢制限”の」

「うん」

「だから教えて欲しいの」

「うん」

「銀子ちゃん。いや空先生。私に将棋を教えてください。1ヶ月だけで良いです。将棋を教えてください。先生に尽くしますから」

「桂香さん。頭上げてよ！そんな事しなくても教えるから」

唐突に土下座した桂香さんに銀子は驚き慌てて頭を上げる様に言う。

桂香さんは必死だった。

○●○

今日は天衣の都合上、ゴキゲンの湯には行かない。というかまず玉将が奨励会員（多分銀子）と研究会らしいので無理。

研究会かあ…………… スケジュール的には行ける☆

「もしもし…………… そうです」

「……………」

「じゃあお願いしま〜す」ピツ

よし、予定作り完了。うまくいけば被るし完璧☆そうと決まれば新幹線のチケットを…………… 気が早いか。

とは言えまずは桂香さんだ。降級点がついた以上、今度の研修会で降級点を消すか、付いたという悔しさに打ち勝つかの2通りだ。まずは前者を目指すと思う。でも後者でも「頑張る。諦めない」という心が大切。棋士とは、特に対局は心が折れたら負けだ。諦めたらそこで試合終了なのだ。

○●○

「まず、正直桂香さんは弱くなってる」

「っ！」

「でもそれは理由が見えてる」

「それは…なに？」

「棋士の研究を真似しちやダメ。あの将棋星人と私たち人間を一緒にしちやダメ」

「なに言ってるの？」

「あいつらは何をしなくても分かるの。感覚で。だから私たちには到底理解出来ない手でも完璧に指しきる。八一もそうだけど特に兄弟子。天災の名前は伊達じゃ無い。山城桜花の供御飯さんもエターナルクイーンの釈迦堂さんにもそれは無い。私にも無いし、月宮坂はまず論外」

「……………」

正直言つてゾツとした。数々のビツクネーム女流棋士を出してはそれに全て否定した。

エターナルクイーン 女流名跡 釈迦堂里奈

鬮り殺しの万智 山城桜花 供御飯万智

攻める大天使 女流玉将 月見夜坂燎

それがそうだとしたら私なんて扱える訳ない。

なにより女流トップの名前を羅列して全員が使えないと言いつつ。女性最強と謳われる目の前の銀子ちゃんですら。

「でも…… あいつは見えてるのかも知れない」

あいつ…… 祭神雷。才能だけなら銀子ちゃんを凌ぐとの噂がある。

「それと……」

もう一人名前を言おうとして言い渋った。

「あいちゃん…… ね？」

「……」

銀子ちゃんは無言だった。無言の肯定だった。あの子も圧倒的な才能を持つ。

「だからあんな奴らの研究した手を使っても完璧に使いこなせなければただの悪手。むしろ体に毒なの」

「じゃあどうすれば？」

「勝つためには研究はしなきゃいけない」

「え？でも」

「他人の研究はダメ。自分でやった物だけ。それと詰将棋も有効。長い物はある限り出てこないから短い手を繰り返してやるの。とにかく自分の頭で考えるの」

「自分の頭で……」

「将棋星人は何を見なくとも指せる。要するに感覚で指してるからその分こっちの作戦にもハマリやすい」

スラスラと話していく銀子ちゃんに一つの疑問を抱いた。

「ちよつと……いいかしら？」

「どうしたの？」

「………銀子ちゃんと八一君、悠斗君はそれぞれお父さんに同じように育てられた。悠斗君がかなり早かったとしても八一君とは2週間しか変わらない。なのに、なのになんでこんなに差がついたの？」

「……八一は史上5番目の速度でプロへの階段を登った。現行三段リーグでは兄弟子に続いて2人目。そして史上最年少で最高位タイトルの竜王を取った」

「八一の才能は少なく見積もっても五本指に入る。将棋の星の王子様。それが私の弟弟子。九頭竜八一」

「兄弟子は……史上4人目。現行三段リーグで初めてプロになり当時史上最年少の17歳でタイトルを取った。順位戦A級、竜王戦1組まで全てストレートで上がって行った。名人と唯一互角に戦う。間違いなく将棋界のトップ。神様と並んで天災の異名を持つ者。それが私達の兄弟子。一ノ瀬悠斗」

「2人の肩書きと経歴に吹き飛ばされそうになる。そしてその2人に共通しているのが才能。それは私たちの目の前に立ちはだかる最大の壁。」

「私は女子では一番強いかもしれない。だけれども男子を含めれば1000番にも届かない」

謙遜でも何でもない事実だ。自分に才能が無いという絶望を知りそれでもなお戦おうとする。何でそんなに強いのかと問うた。

「将棋星人の住む星は人間にとつて毒。行けば誰でも死んでしまう。私でも。でもあいつらは才能、努力その全てでその毒に打ち勝つたの。だから生きていける」

窓の外の星空を眺めて銀子ちゃんは続けた。

「でも私は行きたい。その世界に。毒でも良いから私は行きたい……」

「なんで？」

一瞬、口を瞑つたがすぐに振り絞るように、またはつきりとした口調で言つた。

「悔しいから」

私は一瞬思つた。本当は大好きな八一君と指したいからなんじゃ無いか？憧れの悠斗君と盤を挟みたいんじゃないか？って。でもそんな戯言は一瞬で消え去つた。この子の目が物語っていたから。



そんな会話は全く知らない将棋星人一ノ瀬悠斗は棋帝戦で先勝を飾った。圧倒的な強さで。タイトルという将棋星人の住む星の頂点で。

第十六局 ゴキゲン

「…… て事があつたんだ」

「この前の万智の所業について弟子に愚痴りながら将棋を指していた。

「ふうん。死ねば？」

「相変わらず辛辣極まりないなあ」

「いや。ひとつだけ聞きたいんだけどあんたって供御飯万智と付き合ってるの？」

「ばーか付き合ってるねえよ」

「連盟の二階にある道場。ちなみにお付きの晶さんは小学生と将棋に打ち込んでいた。

「晶さん、続けてくれてるんだな」

「最近私より熱心よ」

聞くところによれば「早く道場にいきましよう！」とか「ウォーズで負け越してます！最強の戦法教えてください！」などと云っているらしい。表面上憎まれ口だがとても嬉しそうだった。

「まあ俺は徹夜すれば良いとして八一もバタバタしてるし歓迎会とか師匠への挨拶はまた今度だ」

実は天衣をまだ正式に一門の皆んなに正式な紹介はしていない。そのうち挨拶と思つて早く一ヶ月経とうとしていた。

「別に良いわよ」

「よくねーよ」

「私は本気よ。逆になんでそんなに一門でベタベタしようとするのか理解できないわ」

続けて

「ただでさえ数の少ない関西所属は予選で当たる事が多い。そんなにストイックに切り替えて戦えないでしょ?」

「まあな。ただ関西の棋士は友達とライバルは別つて感覚だから」

「それが出来てないから困つてる奴が多いでしょ?」

「うっ! 否定出来ない」

「全くしつかりしなさいよね? それでもあんたはタイトルホルダーなんだから」

「へいへい。お前、振り飛車修行のほうは順調そうだな。玉将からきいたぞ?」

「ご心配無く。他にもしつかり道場で鍛えてますから」

「手のかからない弟子だな。本当に」

「あら? 手かからない方が良いんじゃない? 私は別に将棋さえ有ればいいから」

「ふうん」

昔つから孤高で将棋を指してきたこの子にとって将棋とは唯一の父と母との思い出。故にこの子にとつてそれは切つても切れない大切なものだ。だが孤高故に寂しく暗い。今もそうだ。どこか悲しみを感じる。

一ノ瀬門下として俺の下に入ってくればある程度の子とは関わる。これで変わつてくれることを期待しているのだがなあ。

「良いのよ。私には将棋とどこか抜けた師匠がいれば…。」

「なんか言つたか？」

「うっさい！」

「ええ。辛辣…。」

○●○

それから数日後。賢王戦段位別トーナメントにて八一は再び山刀伐八段と対局になった。

賢王戦はタイトル戦では無いものの生放送が行われたり段位別のトーナメントが行われると言う特徴がある。あとは…優勝者が電王戦と呼ばれる最強の将棋ソフトとの戦いに挑む。

「……………」

桂香さんは固まり、銀子も声を上げられなくなっている。結論から言えば八一の大大大逆転勝利。序盤から名人と山刀伐八段の圧倒的な研究に苦戦を強いられる。が、3連続限定合駒とかいう奇跡に奇跡を足してそれを奇跡で掛けたような奇跡が起きた。

「いやはや…面白将棋だったなあ。じゃあ俺は行くから」

俺は棋士室を後にして部屋には2人が残された。ちなみに俺はすぐに玉将のところに向かった。だってさっさと話し合いたいもん。今日の八一の棋譜について。

「な、何があったの？」

兄弟子が出て数分後。やっと口を開いたのは桂香さんだった。

「八一が勝った…」

「あの状況から？嘘でしょ？数百手や数万手じゃないのよ？」

そう。大きな壁があるとして八一は顕微鏡ですら見えないだろうその壁の小さな小さな穴を

「うん。八一は数兆手を読んだ」

限定3連合駒。奇跡中の奇跡。歴史に名を残す対局だった。

「嘘でしょ？あの数十分で？そこまで？」

その現実には、大逆転に驚いたのでは無い。恐怖したのだ。自分が数千千年数万年かけて超えることの出来ない圧倒的な壁のその向こう

「……だから言ったでしょ？あいつらは将棋星人なの」

この時、桂香さんは初めて悟った。『確かに将棋星人』は存在すると。



「最新式のミサイルをフルスイングして敵を撲殺した感じ」

八一初の振り飛車に対して俺と玉将の出した結論だ。

確かに数兆手を読み切りその先の勝利を掴んだのは凄い。駄菓子菓子、それは名人と山刀伐八段の研究にかすかな穴があつてそこを崩したただけだ。つまりそこに気づけていなければ八一は負けていたのだ。

まあこんな評価する一方、それを読み切ったのは凄い。また苦手意識のある山刀伐八段への勝利は大きいだろう。という評価も俺と玉将はつけた。

八一のアンチが蔓延る2chも今日だけは八一祭が開催され称賛の嵐が巻き起こつ

ている。

八一的には嬉しそうだ。よかったね☆

そんな時だった。ガラガラつと部屋のドアが開き飛鳥ちゃんが入室してきた。

「あ、あの！ 銭湯…………… 閉めたから」

「ん。飛鳥、ご苦労様」

「あの……………」

「なんだ？」

「わ…………… わ…………… 私も…………… 私も…………… ここで……………」

ビクツと体を震わせ、しかしハツキリとした声で言い放った。

「九頭竜竜王に将棋…………… 教えてもらおう!!」

一瞬、間を置いて玉将は眉間にシワを寄せた。

「はあ…………… 言葉で言ってもわからないらしいな。あいちゃん!」

あいちゃんを呼んだ。理由は明白。飛鳥ちゃんの心を折るためだけだ。

「悪いが飛鳥の相手をしてやってくれ」

それは玉将としての願い。飛鳥ちゃんに将棋辛い想いをさせないをさせない為の最後の一手だった。

陣形は中飛車対中飛車。道場に入入りする振り飛車党のファンがこつそり教えていたようだ。気持ちは分からなくも無い。

玉将はかなりご立腹だったがそれと裏腹に勝利を収めたのは飛鳥ちゃんだった。

『いつか指導員の免許を取ってお手伝いしたい』という飛鳥ちゃんの願い。でも玉将はそれを否定した。"いつか研修会に入りたがる"って。玉将はそれまで育てるようだ。いつかうちの天衣とも戦ってほしいものだ。

そんな中あいちちゃんが八一に話した言葉が聞こえた。「生石先生と飛鳥ちゃんはどうなるんでしょうか？」と。

八一は笑って答えた。「ゴキゲンが結んだ仲だぞ？ハッピーエンドに決まってるさ」と。

いつか親子の笑顔があふれる銭湯になってほしいものだ。

第十七局 らしい将棋

26歳。それは将棋界において最も深く、そして最も重い意味を持つ年齢だ。

将棋界には『年齢制限』と呼ばれるルールが存在し、26歳で退会。即ち25歳までにプロにならなければさようならという訳だ。

「お父さん、それじゃあ行つてきます」

悠斗や八一。銀子の師匠の娘さんであり3人の“妹”弟子である清滝桂香は今、まさに年齢制限という断頭台にやってきたのだ。そして降級点が付いている……即ちとてつもなくギリギリな状況下に置かれている。

「ああ」

「昼ごはんとかは冷蔵庫に入ってるから温めて食べてね」

「ああ」

そうして向かうは関西将棋会館。その中の研修会が行われている部屋だ。

「……………」

「…………… ねえ」

「っ！なんだ天衣かよ。びびらせるな」

「はあ？びびるも何もあんたがここに居るのがおかしいんじゃないの？ガチガチのプロ棋士。しかもA級タイトルホルダー。あんたが居る方がおかしいでしょ？」

「確かにな」

「ハア。何やってんのよ。あのババアの様子でも見に来たのかしら？」

「肯定だ。まあお前の様子を見るって側面もある。時間だからさっさと行ってこい」

「はいはい」

研修会の行われる部屋に入ると幹事の久留野七段に「遅いですよ」と注意される。

すると天衣は「すみません師匠ゴシが落ちていたので片付けていました」と言った。あく辛辣辛辣。

「今日の組み合わせを発表します！……一局目清滝桂香さんと夜叉神天衣さん。二局目清滝桂香さんと雛鶴あいさん………」

「っ！」

影からこそつと覗いていたがその時点でその場を離脱した。耐えれない。否、耐えれない。妹弟子と自分の弟子の対局と妹弟子と弟の弟子の対局を連続なんてプロでも見れない。そこまでキツイ。思わず吐きそうになった。



思わず部屋を飛び出した俺は一階のロビーまでやってきた。そこには妹^銀弟子^子がいた。

「あ、銀子」

「あ、兄弟子？なんでこんな所に？」

「桂香さんが心配だね。よりにもよってうちの弟子と八一の弟子が相手ときた」

「む？桂香さんが負けるとでも？」

「そんなこと言っていない。俺がしてるのは心の心配。いくら心が強くてもいつも接してる子と、接してる子の弟子だ。難しい。お互いにね」

「そう……」

「銀子が見てあげたんだろ？桂香さんを」

「うん」

「どうだった？」

「どうだったって？」

「最近……桂香さんらしくらぬ将棋を指してるから」

「っ！やっぱり気付いてたの？」

「もちろん」

「……確かに桂香さんは凄く迷っていた。終わりのない迷宮を彷徨ってた。でも見つけたと思う。桂香さんは見つけたと思う……」

「そうか」

「うん」

「なら桂香さんらしい将棋を観れることを祈ってる」

「うん」

「……………」

そんなこと口ずさんで置いてなんだが率直な感想として天衣が研修会でこんなふう
に追い詰められているは初めてみた。

桂香さんの挑発にのりキレ、力任せに叩き、そして一突き刃で殺られる。天衣の完
全なる敗北だ。これは…………桂香さんの研究という刃がものを言ったな。

「ふう…………」ポンポン

半分ぐらい哀れむような目で天衣を見る。

「撫でるな！あとそんな目をしないで！」

すっごい悔しそう。しかしそんなこと言ってられない。俺と天衣は桂香さんの第二
試合を見る。相手は…………

「よろしくお願いします」

あいちちゃんだ。戦法は相振り飛車。桂香さんは石田流三間飛車。自分の秘策として

考えてきた振り飛車を打ち込まれていきなり出鼻を挫かれる。しかしそれに驚きもせずあいちゃんはゴキゲン中飛車。しかも「穴熊!?!」振り飛車穴熊^なで迎え撃った。

攻めの棋風をもつあいちゃんが穴熊を、しかも慣れない振り飛車を使つて勝てるかは微妙。案の定、あいちゃんが穴熊を完成させる前に美濃囲いを完成させて桂香さんは攻撃を開始した。

そして桂香さんは最強の罫を発動する。振り飛車の、あいちゃんの力の根源。即ち飛車を殺してしまう。直後、顔を顰めるようにしてあいちゃんは苦しそうにした。

でもあいちゃんは投了しようとしなかった。八一^{師匠}が山刀伐八段に挑んだ時の様に。馬を切り、飛車を切り。守りを剥がして桂香さんの美濃囲いを崩壊させていく。これは俺も何回も受けてきた。受けて、倒され倒して苦しんできたから。その名は

捌き
!!!!

感覚破壊。まさしく魔法^{マジック}。それほどに見事な指し回し。目の前にいた天衣と同一年の子に俺は初めて恐れ慄いた。俺が天災なら彼女は…なんなんだ？

その後はお互い、意地と意地のぶつかり合い。力で力をねじ伏せ押し返し。その先にひとつの結論を見た。

「負けました」

この日、桂香さんは降級点を消し去ることは出来なかった。しかしその将棋は俺にも指すことは出来ないだろう。八一にも玉将にも会長にも、そして名人神にも指せないだろう。何故ならそれほどまでに桂香さんらしい将棋だったのだから。

清滝一門にはいろんな人がいる。

1人は天災と呼ばれ先輩後輩関係なく恐れられる悲しく。そして圧倒的に強い。その名は一ノ瀬悠斗。将棋好きだ。

1人は九頭竜八一。史上最年少でタイトルを取った弟弟子。数々の苦難に苦しみ乗り越えようと奮闘している。将棋好きだ。

1人は浪速の白雪姫こと空銀子。強く、強く、ただ強く。この魔境魔法を目指している1人の子。将棋好きだ。

そして1人は清滝桂香。何があっても諦めず大好きな将棋に取り組み女流棋士将に向

かつてひた走る一人の女性。将棋好きだ。

何が言いたいのか？それは………みんな将棋が大好きで大好きで特別な存在だつて事だよ。

〈感想戦〉

そんな研修会から1週間後。ゴキゲンの湯は貸し切りだった。二階では師匠、桂香さん、銀子に八一が盤を準備しており一階ではあいちゃんと生石玉将がボイラーを動かして風呂を沸かす。臨戦態勢だった。

「ねえ！本当にこんなやるの？」

「ダメだったか？」

「馬鹿じゃ無いの？あんなだけ言ったのに」

「知らんがな。ひとまずお前が中心人物だ頑張れ」グツ

「サムズアップなんかしてるんじゃ無いわよ！」

何故天衣が中心人物かって？理由は簡単。本日開催されるのは『夜叉神天衣ちゃん入門記念将棋大会』なのだ。天衣のお祖父さんに相談したところ大喜びでPS4やらなんやら相当良い品まで用意してくれた。まじで感謝感謝。

急ごしらえで準備したが全員棋士や女流棋士、仲の良い研修会や奨励会の子まで来てくれた。中には（嬉し？）涙を流して誘いを受けてくれた子もいた。悠斗嬉しいよ？會長や男鹿さんまで降臨しておりなかなか力オスである。

ちなみに會長は玉将のところまで行きお説教。「いい加減理事になれ」だそうだ。俺もそのうち言われそうだしなんとか対策しないと。

天衣お嬢様はご機嫌斜めだが関西は行事に全員参加的な風習があつたので仕方がない。ちなみにその後、天衣はJ S研の仲間にドナドナされていきました。助けてくれる晶さんも将棋やつてるから仕方がない。

まあ例の如く俺の元には万智最恐がいる訳ですが。

「なんだ？」

「桂香さんがなんか吹っ切れた感じするぞす。ひよつとしてなんかあつたぞすか？」

「さあな。だけど努力は無駄じゃ無いし、武器となると言うことがわかつたんじゃないか？今までの努力を認めて突き進む。それを見つけたんじゃないか？」

「そんなんぞすな…… 76歩」

「いきなりかよ……」

2人仲良く将棋の時間の様だ。

やっぱりここにいる人間。みんな将棋が大好きなんだよ。

第十八局 TOKYO

「それじゃあみんな気をつけて。あと頑張れよ！」

「はい！兄弟子の対局楽しみにしてます！」

「おう！八一、頼むぞ！」

「ふん！なんで来てるのよゴミが？」

「そう言うなよ。本当はついて行きたかったがタイトル戦だから仕方がないだろ？ほら頑張れよ」アタマポンポン

「だくかくらく撫でるな!!」

「まあ善処はするよ（笑）」

天衣で遊び

「おじさんも頑張ってください!!!」

「お！あいちゃんありがとうね」

あいちゃんに元気をもらう。なんですか？これ最高ですか？

「晶さん」

「なんだ？どうした先生」

「恐らく天衣の実力が有ればいい勝負が出来るはず。心配せずに見てあげてください」

「任せろ！先生もタイトル期待しているぞ」

「もちろん」

晶さんにも激励をもらい……………

「……………」

「桂香さん？」

「……………」

「おーい！桂香さん！！」

「…………… はっ！」

「桂香さん落ち着いて。頑張つてよ？」

「もちろん。頑張るわ」

ガチガチに緊張している桂香さんをなだめる。

「じゃあそろそろ新幹線だ。気をつけて行ってこい！」

「……………」

俺は天衣を八一に預ける。奴らは東京で開催されるマイナビオープンに参加するのだ。これに勝つて勝つて勝ちまくればその先に女王。即ち銀子が待っているのだ。

「それじゃあ兄弟子も気をつけて！」

「おう！」

俺はタイトル戦が淡路島のホテルであるのでついて行くことは出来ない。

「さ・て・と！」

俺は一人寂しくバイクに跨り西九条の自宅に戻る。



隣に座る桂香さんやあいを見ると緊張しまくっている。桂香さんはひたすら棋譜をぶつぶつ呟き、あいは物凄いスピードで詰将棋を解いている。天衣ちゃんは落ち着いておりお付きの晶さんは天衣ちゃんの写真を撮るのに必死だ。

俺たちが向かうのは東京。マイナビオープンの大大会だ。これを勝ち抜ければ一斉予選。最後には姉弟子が保持する女王戦につながる。

そして明日には篠窪棋帝 v s 兄弟子の棋帝戦第三局の解説もある。しかしそれはどうでも良い。いやどうでも良くないのだがそれより弟子たちの大会だ。もうす

ぐ………この子達をかまう暇はなくなるからだ。



会場入りをすると直ぐに俺の存在はバレる。「竜王だ!」「本当だ!何故竜王がここに?!?」「竜王にお花を!」などと会場はプチ騒ぎに。最高位タイトルを改めて感じさせられる。

一斉予選が始まればもうみんな勝負師。邪魔はできないので弟子のことについて御飯万智山城桜花(観戦記者 鶴さん)のインタビュに答える。が、捏造記事を書かれかねないのでツツコミを適度に入れつつ答えていく。やっぱり小学生は最高だぜ☆
大会の様子を見ていて驚いた事や才能を感じさせるものがあった。

まずは天衣ちゃんもあいも女流棋士相手に4枚抜きという異常なまでの力を見せつけた。しかし変なのはあいが勝利にこだわった戦いを見せた事だ。普段よりずっと、ずっとそれにこだわっていたのだ。

桂香さんは東京についても念仏の様にひたすら棋譜を唱え続けていた。目にはクマがある。この大会にかける想いは人一倍大きいのだ。その理由は簡単。女流棋士としての仮免期間である女流3級をかつ飛ばしていきなり女流2級になれるからだ。誰もがその手っ取り早い道を目指している。もちろん桂香さんも例外では無いのだ。

偶然か必然か。六戦目の桂香さんの相手は先程天衣ちゃんの相手をした女流棋士の

先生だった。その戦いはもつれにもたれた。100手をどうの昔に超えた戦い。やや桂香さんが押され気味だった。齒を食いしばって駒を叩き続ける桂香さん。それを将棋の神様が見ていたのか、それは分からないが思いもよらぬ出来事が起きた。

相手の女流棋士の先生が『龍』を『飛車』に戻してしまったのだ。本来、あつてはならない出来事は起きた。故にその瞬間、2人は何が起こったのかわかっていなかった。しかしすぐに「負けました」と言う。桂香さんは慌てて「ありがとうございます」と頭を下げた。

相手の先生からすれば「2度もアマに負けれない」というプレッシャーがあつたのだろう。

「天衣ちゃん。君のお陰かもね？」

隣に立つ黒髪に黒い服を纏う『あい』とは全く違うもう1人の『天衣』ちゃんに言った。

「ふん！そんなの知らないわよ。ただ、あれに運があつただけよ」

そう吐き捨てる。中々素直になれないのはこの子らしいと言うか何というか。

そんな訳で我が清滝一門からは3人の棋士が一斉予選に出る。中でも桂香さんは最後の一枠であり本当に熱い戦いを見せてくれた。天衣ちゃんお付きの晶さんは周りが引くぐらい涙をダラダラ垂らして「よかった！よかったよ」と言っている。道場に

よくいらつしやるみたいだし桂香さんはよく見るみたいだからなにかと心配していたのだろう。



ところ変わつて一斉予選出場者のインタビューだ。もちろん桂香さんもいる。

「夜叉神天衣さん！史上最年少での一斉予選出場についてなにか！」

「特にありません」

「最初は誰にその喜びを伝えました？」

「師匠です。面倒ですが一番に伝えろと言われていたので」

中々ドギツイ発言だが逆にどよめきが起きる。ここまで生意気なのは逆に実力のあ
る証拠として捉えられるからだ。

続いてあいに戻ってきた。

「師匠にはどう教えてもらっていますか？」

「それは…… いっぱいおしえてもらっています！」

「どっでっ」

「師匠のお家です！」

ん？ちよつと風向きが？

「えっと。どのくらいの頻度で？」

「毎日です！」

「毎日?!? 師匠さんの家の近くに住んでるんですか?」

「いえ。師匠の家で内弟子としてです！」

「つ!!!」

一斉に記者たちが響めきだす。

俺はそれ以上の失言が無いよう全力であいの口を物理的に塞ぎにいく。しかし時すでに遅し。

「竜王! どう言う事でしょうか!」「J Sと同棲ですか?!?」「うらやま... 不純ですよ!」「ロリコンというのは本当ですか?!?」

やっばい! 騒ぎになった。あと、約一名やばいのがいたな! 怒らないから挙手しなさい。明日の朝まで素晴らしさについて一緒に語ろう(ナニについては言っていない)

「竜王! どうなんですか!」

プロ棋士全力の受けでなんとか記者の質問責めを乗り切った。そのままホテルに直行し、兄弟子に連絡を入れて明日の準備をする。あく明日初めてのニコ生なのに! 前日に終わった... 超終わった。

第十九局 大盤解説

今日、八一は東京は千駄ヶ谷にある関東将棋会館にやって来た。理由は簡単。棋帝戦のニコ生解説のお仕事のためだ。

「皆さんおはようございます！本日は棋帝戦第三局の様子を終局までお届けいたします！解説は九頭竜八一竜王。聞き手は私、鹿路庭珠代が務めさせて頂きます」

「よろしくお願いします！」

「さて、まずは対局者についての紹介です。まずは防衛します現棋帝の篠窪太志先生です。前年度棋帝戦で初載冠をされ関東若手の中で頭ひとつ飛び抜けました。顔もイケメン、将棋もイケメン。その全てから王太子と呼ばれており今乗っている人です。ここまで一ノ瀬玉座に2連敗をきつし今日負けるとストレートでの失冠となってしまう」

本当にその通りだ。将棋だけでなく慶應義塾大学を主席卒業、おまけにイケメン。なんで世の中こんなに不平等なのだろう。

「さて続いて挑戦者の紹介ですが………いますか？」

「皆さんご存知のはずですし要らないと思いますが……せつかく弟弟子である九頭竜

竜王がいらっしゃるので紹介しましょう！」

本当に兄弟子はやばい。名人もそうだがあまりの強さに紹介をすつ飛ばす事が出来るのだ。今回は弟子という事でやるが普段ならやらない。恐ろしい…

「え〜挑戦者は皆さんもご存知兄弟子じゃなかった。一ノ瀬悠斗玉座です。当時最年少17歳で名人から玉座のタイトルを奪取。順位戦、竜王戦共にストレートでA級1組まで上がりました。その圧倒的な強さと嵐が通った後の様な盤からついたあだ名は『天災』。なお本人は不本意の様です」

「え？そんなんですか？」

「はい。玉座自体は普段はとても優しく面白いです。将棋を指している時は別人の様に殺気を放つんです。だからその部分ばかり取り上げられて恐れられていますね。よほどの事が無い限り基本的なファンサービスはしてくれそうですね。あ、アニメとかの話しも大歓迎って言ってましたよ？」

「なるほど！そんなに気さくな方なんです？今度話しかけてみます！」

「ええ。皆さんも会館とかで見かけたら話しかけてあげてください！と将棋が始まりますね？」

「ええ」

「さて！それでは始めましたね」

「はい。この2人の戦いはこの棋帝戦で初めてでありとても楽しみですね」

その後は俺の読みやらなんやらでニコ生のコメント欄にはその手を読む力に称賛のコメントが溢れかえる。調子こいて色々と手を読んでいるが当たってくれているのでまあ良し。

その後は兄弟子が最善手を指しまくったので言う事なしなわけが無く崩壊への鐘が鳴った。

「しー失礼しますー！」

「フア!??!」

突如としてニコ生のスタッフさんによつて投下されるあい。

「小学四年生。雛鶴あいですー！」

うん。元氣いっぱいだよ。だけど出てこないで欲しかった。コメント欄はロリ登場イベントにヒヤツハーという感じになり荒れに荒れている。

しかし将棋の話題を出してなんとか!なんとか流れを戻すんだ!

「ちちよー♡」

あゝ死んだ。

『うお~~~~天使!』『天使降臨』『うお!!!』などなど規制確定のものも含めてとんでもない数のコメントが表示される。

「え？竜王。この子は……」

「えつと、その。なんと言えば良いんですかね」

「しやうはちちよーのおよめたんだよ！」

『!?!?!?!?』などなど唾然とするコメントが溢れ返った。これは……終わる。しかしニコ生の職員さん方は待つてくれない。

次は天衣ちゃんの投入である。

「ちよつと！押さないですよ！」

前言撤回。無理矢理ぶち込まれる。

「あ、天衣ちゃん？」

「あなた誰よ！」

俺の発言と鹿路馬さんの発言が被る。

「夜叉神天衣よ。ちなみに残念ながら画面に写ってるバカの弟子よ」

「画面に写ってるって篠窪先生？」

「なんで関西から来てるのに関東の奴に習うなよ」

「なら……まさか一ノ瀬先生!?？」

「そうよ。残念ながらね」

『夫人きたー！』『まさかの兄弟でロリコン!?』などというコメが流れる。ふつつつ、

兄弟子もこの苦しみを!!

「なっ! 誰が夫人よ! あいつはロリコンじゃ無いし! 第一、あいつには彼女(みたいな奴)がいるじゃない!」

「ファツ?! え? 天衣ちゃん? 兄弟子に彼女つて?」

「は? 知らないの? あいつ供御飯万智とめちやくちや仲良いじゃない」

「え、ええ。衝撃的な発言があつた訳ですが玉座が寄つていきますね」

「すぐく衝撃的な発言が飛び出したがなんとか路線を戻す! 頼む! 戻つてくれ!

「え?」

「そうね。これから最短でいけるわね」

「それ…… 本当なの? 行つてみなさいよ!」

「ふん! ▲4六歩以下△3四飛▲7一角成△同玉▲3四飛△5六角▲6七角△7九金

鹿路庭さんはそれでも後手優勢というが天衣ちゃんはそれを叩き潰す。

「▲7九同玉から△6七角成▲3七飛でぴつたりうかるわよ? お分かり?」

「っ!」

何やらとんでない殺気が飛び交いコメ欄はその読みを称賛するコメで溢れかえる。

みんな将棋に戻つた! よし! いける!! たしかに兄弟子の手も気になるけどそれより今

はこつちが大事！大事なのだ！

「まあ良いわ。で、先生？あとあんた。どこまで本当なんですか？」

あくもう！戻った!!!

「えつと、そのくなんていうんですか？兄弟子については分からないんでネオアワジにいる記者の方、後で直接聞いてもらってください！この子達に關しては純粋に将棋を教えているに過ぎません。とても才能ある子ですし兄弟子のお墨付きです！」

ちよつとずるいけどこれでいける！鹿路庭さんも納得してる！はずだった。

「メールです。『九頭竜先生へ。関西で噂のようですが、先生はお弟子さん。一ノ瀬先生のお弟子さん。それに他のJSの子を引き連れてJS研なるものを開催されていると言います。それは本当ですか？』だそうです。先生……………」

あ、気持ち間が広がりました。これが心の壁ですね。ハイ。

「えつと、そのく別にやましい事は本当にありません！弟子の友達達も含めて教えてあげてるだけです！」

「そうですよ！師匠はみんなと一緒に一晩中将棋を教えてくれるだけです!!!」

終わった。絶望に打ちひしがれているともうすでに九頭竜祭りが開催されている。なんとか！なんとか戻さねば！と、そんなことを考えてる間に。

「九頭竜先生」

「……………」

「九頭竜先生？」

「流石ですね。さつさと最短で詰ませましたね」

「そうですね。あ、篠窪棋帝が投了されました。これで一ノ瀬玉座は棋帝を獲得。一ノ瀬二冠となります！」

篠窪棋帝は投了。コメ欄には初の複数冠を称えるコメントが山ほど流れている。

インタビュアーに淡々と答えている玉座とストリート失冠を喰らった篠窪先生の震える姿が見て取れる。俺はそれを見て震えが止まらなかった。

名人は第65期玉座戦トーナメントで負けた。つまり次に狙えるタイトルは竜王。そう、俺の持つタイトルだ。そしてそれを獲得すれば永世7冠、タイトル100期。その2つを同時に成し遂げることとなる。そのプレッシャーやらなんやらがかかる竜王戦。名人は挑戦者決定トーナメントに駒を進めていた。故に俺は震えが止まらない。

見かねた鹿路庭さんやあい、天衣ちゃん。みんなは声をかけなかった。否、声をかけなかったのだ。

「ちちよー？」

「ん？どうしたのかな？」

シャルちゃんは声をかけてきてくれた。

「げんきないの?」

「うん。ちよつとね」

「ならしやうがげんきだしてあげうー!」

「ありが………」

ほつぺたに柔らかいものが当たる。シャルちゃんの唇だ。

「えつとシャルちゃん?」

恥ずかしそうに頬を赤らめる。

ニコ生コメ欄には通報しましたが凄まじい量のる。

「えつと、そのすみませんでした!!!!」

土下座した。

この日、Twitterのトレンドは将棋界のことで盛り上がった。

『#二冠』『#リア充消し飛べ』『#一ノ瀬消し飛べ』『#通報しました』『コンピュータ越え』などなど多岐にわたる。終わった………



「一ノ瀬玉座!棋帝獲得おめでとうございます!」

「ありがとうございます」

「率直なご感想をいただいても？」

「まずはとても嬉しいです。しかしだからこそこれからも日々精進していかなければならないと考えています」

「玉座戦がもうすぐ始まります。最年少永世位を掛けた今玉座戦に向けて一言」

「例年と同じく、いやそれ以上に気を引き締めていきたいです」

「また（供御飯山城桜花とのお付き合い）おめでとうございます」

→ 記者の人が発した意味

また（本場にタイトル獲得）おめでとうございます。

→ 悠斗が受け取った意味

「ありがとうございます」

さてさて。これから生まれる誤解はなんとなく分かるよね？

第二十局 天神研

棋帝戦から一夜明けた。初の複数冠と言う事でかなりの量の取材やらなんやらが来ていたが全部後回しにして俺は新幹線に乗り込んで一路東京を目指す。

恐らく天衣達とはどこかですれ違っているだろう。直接おめでどうと言ってあげれないのが残念極まりない。しかしそうまでして東京に行くのには理由がある。理由は研究会をする為だ。

その名も天神研。研究会名は関東の棋士達が研究会を行う俺ともう1人の異名から名前を取ったらしい。

1人は名人。神の異名を持つ伝説。もう1人は俺。天災の異名を持つ棋士だ。今回は俺が名人宅に行き将棋を指す事になっているのである。



「お久しぶりです。あ、これ大阪土産です」

玄関のインターホンを押して出てきた何処にでもいそうなおっさんに声をかける。たしかに何処にでもいそうだが将棋界のレジエントだ。

「わざわざ済まないね。さあ入ってくれるかい？」

「もちろん。お邪魔します」

そうして通された部屋で盤を挟んで座る。今日の議題というかやる事はある棋士への対策。その人物の名は神鍋歩夢六段。八一のライバル棋士だ。俺も名人もまだ一度も当たった事の無い未知の人だ。(野良試合はやった事あるが)

ちなみに丁度今、八一と歩夢君は歩夢君の師匠。永遠の女王エタナルクイーンこと釈迦堂里奈女流名跡の家で研究会をやっているらしい。もちろん対名人研究だ。

名人は竜王挑戦者決定戦に駒を進めている。歩夢君と名人。勝った方が挑戦者。そりゃ八一からしてみれば名人より歩夢君の方が防衛には有利になる。だからこそやってくるんだ。



女流名跡のお店に姉弟子と共に入り女流名跡と軽く会話を済ませた後二階に上がる。そこには歩夢が待ち構えておりすぐに脳内将棋が始まる。

ものの数時間がつんでもなく濃密に感じた。終わってみれば2人ともグツタリだ。
「しかし、強いな。歩夢は」

「我が宿敵ドラゲキンも中々であるな！」

「でも相手は神様だ。抜かりなく行こう」

「ああ。もちろんだ。我は神を倒して貴様の前に現れる！覚悟するが良い！」

マジック。全ての人が全力で考えて捻り出せないほどの大逆転。名人や弟子はそれを見せてきた。

さらに兄弟子には『方程式』と呼ばれる力がある。一見意味の分からない様な手でも後から見れば最有力な手という事だ。まさしく方程式の様にそれ一つがつながって解となる。圧倒的スピードで圧倒的深読みをして圧倒的力で潰される。

強すぎるのだ。揃いも揃って。

全力でやらなくちゃ。



1 回目の対局を終えて感想戦が終わったあたりで名人が質問してきた。

「そんな事より君もこんなところで研究会していて良いのかい？」

「まあ大丈夫ですよ」

名人にこんな心配される理由は分かっている。もう玉座戦がすぐそこまで迫っている。というかもう来週には第一局を迎える。そして俺が相手取る挑戦者の名前は山刀伐尽八段。

先日、八一が3連合駒で大大逆転勝利を収めた相手だ。生石玉将はそんな山刀伐八段の事を『名人の劣化版』と一喝する。それがどうなのかは置いておいてだ。名人と研究していると言う事は名人と似た傾向があるのは真実。俺としてもギリギリに研究でき

るのはメリツトがある。

「君を見ているとタイトル戦の前とは思えないからね。5年前に戦った玉座戦の時の緊張は何処へ行ったんだい？」

5年前。初めてタイトルを取った時の相手は目の前の人だ。その時は初めて憧れの名人に挑んだ事。そして初のタイトルだったのでだいぶガチガチになっていた。

「さあ。僕にも分かりません。そんなことよりここはこうした方が。」

「たしかに。でもそれは5二金替えて5二飛にすれば対応できるのでは？」

「いえ。その手にした場合はこういう手もありますから」

ポンポンと手を変えていく。それを2人で批評し合う。これを永遠と繰り返せば既に日が傾いている。

大阪を朝の6時に出て10時ごろに名人宅に到着そこから18時過ぎまでひたすら将棋を指していれば頭は壊れる。当然、棋士であってもそれは例外では無い。確かにタイトル戦などはそうなる事もあるがこちらはもう何局指したかわからないレベル指した。

やつてる事を分かりやすく言うと言ったところのダブルヘッダーのさらに強化版だ。そりや疲れる。

名人としてもこんなに時間が取れるのは滅多に無い。なぜなら取材やらなんやらで

てんてこ舞いの日々だからだ。それ故にだいぶ気合が入っているのだろう。



目の前にいる彼に私は一種の仲間意識を持っていたのかもしれない。棋士においてそういった仲間意識は気まずさを生むだけのよく無い物だ。

しかし彼だけは別なのだ。彼と将棋をやる時はどれだけやっても飽き足らないのだ。過去には彼との対局の後、彼と感想戦をやり過ぎて連盟から泣かれた事もある。

そんな彼が私から奪取した玉座の永世位まであと一步に迫っていた。不思議な感覚である。5年前まだ彼が高校生だった時、私は彼に玉座を取られた。史上初の高校生タイトルホルダーに世間一般がおぞましいほど沸いたのが記憶に残っている。でも私は世間以上に彼に注目した。

当たり前だ。その記録の瞬間を私は目の前で見ていたのだから。一番近いところで、一番分かるところで見ていたのだから。熱い……その気持ちだけが対局後に残っていた。だからこそ彼を研究会に誘い、もうはじめての研究会から5年はたった。

彼の将棋は年々洗練されていきより強力なものになっていった。どんどん強くなる。まさに全ての棋士を抜き去る様に。やはり熱い……彼と将棋をやるのは面白い。また一つ真理に近づくから。



結局徹夜将棋になりその翌日眠い目を擦りながら朝9時ごろの新幹線に乗り込む。わざわざグリーン車を取った。だって眠いもん。

「……………なんでいんの？」

爆睡して新大阪駅にいつの間にか着いた。新幹線改札口の外によく知った顔があった。その名も夜叉神天衣。いつもの様に黒い服を着て、黒く綺麗な髪をなびかせて立っていた。

「別に良いでしょ？良いから来なさい！」

そう言われるのでついて行くと駅構内のカフェに着いた。中に入ると一つの席に連れて行かれそこには晶さんもいた。

「あ、晶さん。どうも」

「おお！先生！最初聞いた時は驚いたぞ！大阪にいるかと思ったらまさか東京にいたなんて」

「いやくすみませんね。玉座戦に向けてちよつと研究会をやっていたので」

「東京でか？」

「はい」

そう言っていると天衣の機嫌が割と悪くなる。

「この私がせっかくタイトル獲得のお祝いをしてあげようと思ったのに東京に行ってい

たなんて信じられない！」

「いや、すまん」

え？何？？そんな事してくれようとしたの？マジで？？大阪残つてればよかった。

「で？」

「で？」

「誰と研究会なんてやってたの？あんたみたいな奴相手にしてくれる棋士がいるとは思えないけど？」

「あゝ名人」

「名人？？は？あんた名人とやってたの？」

その瞬間目を見開いて天衣は言う。

「うん。玉座戦の相手は山刀伐尽八段だしな」

「ふくん。なら仕方がないわね」

なんか納得してくれた。

「まあそんな事は良い。ひとまずだ！天衣、チャレンジ突破おめでとう！」

「ふ、ふん！最初つから言っていれば良いのよ。師匠せんせいもタイトル獲得おめでとう」

「……………」

「なんか言ったらどうなのよ！」

「……………」 ナデナデナデナデ

「撫でるな！」

「はっ！」

「恥ずかしいながらも祝福してくれる我が愛弟子が余りにも可愛過ぎたのが悪い。俺は何も悪くない！」

「さて来週は一斉予選だ。頑張れよ？」

「勿論よ。あんたの目標でもあるんでしょ？」

「ん？」

「来年には女王様になってるのが」

「そうだな」

来週には天衣は一斉予選に。そして俺は玉座戦に。それぞれ進む。

第二十一局 玉座戦第一局

あれから更に2週間の月日が流れた。明日はマイナビ予選だ。ここを突破すれば一回戦に駒を進める事が出来る。

天衣。あいちゃん。そして桂香さん。皆、それぞれ強敵と戦っている。それ故に強くなる。それは俺も例外では無い。今日、この場においてもだ……

「おはようございます」

ピリツと張り詰めた空気が漂う対局室。ここで本日行われるのは玉座戦の第一局。挑戦者は山刀伐八段。防衛に挑戦するのは俺。一ノ瀬悠斗二冠。山刀伐八段が番勝負を制せば自身初のタイトル獲得となり現玉座の俺が制せば自身連続5期の玉座となり史上最年少での永世位『名誉玉座』の資格を得ることとなる。

それ故に今回の玉座戦はかなり盛り上がり上がっており大変な事になっている。

対戦相手である山刀伐八段は既に着席済み。あとは俺のみだった。今日は玉座戦第一局。陣屋での対局だ。

「時間になりました」

「お願いします」

俺の先手番だ。

▲7六歩 △3四歩 ……

初手はまあ普通に角道開けてく。

▲2六歩 △8四歩 ▲2五歩 △8五歩 ▲7八金 △3二金 ▲2四歩 △同歩…

戦法は横歩取り。

「ふふふ♪たのしみだったよ？君との対局。君とのハジメテを共有できるのは嬉しいなあ」

「っ！……」

ある意味身震いする様な発言がブツブツと呟かれる中、俺は指し続けた。

▲同 飛 △8六歩 ▲同 歩 △同 飛 ▲3四飛 △3三角 ▲3六飛 △8四飛 ▲2六飛 △2二銀…

そこから数手数と進んでいく。山刀伐八段はひねり飛車。そこで俺は『どー囲おう』というところで昼食休憩☆

昼食は山刀伐八段は何食べてるか知らんけど俺はカレー。カレーなのだ。タイトル

戦なので飯代は連盟が出してくれるがカレーだ。カレーが食べたかったのだ。出来ればあいちゃんのが…… まあ大阪帰ったらご馳走になろうそうしよう。

食べ終わったら対局再開だ。

「ふふふ。悠斗君は右の銀を使つて飛車とか角とかを押さえてゆっくりした戦いにしたんだね？ だけどごめんね僕はコンパクトにまとまった早い戦いにしたいんだ♪」

「……………」

実際、その通りだ。俺は相手の飛車角を抑えていきたい。相手との戦い方が根本から違う為、手が広がり無限大になる。遅い時間の乱闘戦が見えて来ている……

中々、攻防が始まらないのだ…… 今無理して攻めるのは勿体ない。今は我慢して矢倉を組み、そこから攻める。4手もの我慢がいるがそれだけメリットもデカい。

その後も互いに譲らない展開が続き先手消費時間3時間40分。後手の消費時間3時間44分。全く譲らない中、夕食休憩を迎えた。

夕食後、後手からの対局再開で放たれた一手は△5五歩。これにより俺の作った囲いの力が下がりこの戦いにおいてはかなり攻めづらいものとなった。その後は後手の指した垂れ歩を咎めに行く。俺の残り時間が1時間となってもまだ

俺が山刀伐八段が△5四飛を指す。後から聞いた話しだがこの時点ではこの指しが

1番人気であり妥当手だと捉えられていたらしい。が、それは数手で消し飛ばされ俺が少々有利な状況となった。

なんだかんだでもう12時間も対局が続く大熱戦となっている。12時間経つてやっと歩以外の駒が駒台に置かれるということんでもない事態が発生しているほどの熱戦なのだ。

山刀伐八段は形成が悪く動くところがない。下手に動けばそれが大悪手となつてしまふ可能性があるるので簡単には進めないのだ。お陰様であのゾワツとする独り言も無く中々楽である。

しかし……我慢比べはもう限界だ!!
とうとう俺から激しい手順を指し始め、乱戦に突入。

最終盤に俺が角取りにかまわず端歩を▲9四歩と取り込んで決めに行き、山刀伐八段も角の王手で合駒請求をし、△9二歩と辛抱する必死の防戦。

攻める俺に、飛車を捨てて粘る山刀伐八段。八段はその後も攻めに使いたいはずの銀を守りに使う。全力を尽くして守りにしている。

「やはり君は強い。やっててゾクゾクするよ♡」

やめて！怖いから！違う意味で怖いから！俺の色々はまだあげないから！いつぞや万智に盛大なフラグをぶち込んだ気もするが今はいい！やめて！ひとまずやめて！

でも将棋の方は………面白い!!!思わずニヤついてしまう！それほどまでに熱くて面白い！

守りに回した銀。ここまで絶対に使わないつもりで残した銀。それを使ってまで作ったその守りを全力で潰しに行くために銀を俺ははかまわず竜で取っていくう！決まってるんだろう！この攻めは

△8二銀 以下▲同 龍 △同 玉 ▲9一銀 △同 玉 ▲9三歩 △8二玉▲
 9二歩成 △同 玉 ▲9四歩 △8二玉 ▲9三歩成 △7一玉 ▲9一飛 5一
 金 ▲5四香 △5七桂成▲6二角成 △同 玉 ▲5三銀

以上QED^{勝利}だ。

「まいりました」

「ありがとうございます」

玉座戦第一局は12時間を超える熱戦の末に俺の勝利で完結した。



対局後はもう深夜夜遅くだったこともあり会見もほどほどに用意された部屋に入る。流石に風呂には入ったがそれ以上に疲れが溜まっており箱根の名湯を楽しむ間もなく風呂から上がり布団に倒れ込む。スマホをつけてTwitterを見ると自身の名前と写真が載りニュースになっていた。

#二冠があつたので検索すると今日の対局について色々書かれていた。止めることなくスクロールしていると疲れがほぼ頂点に到達しかけていた。そんな時だった。自室のドアが叩かれる。思い当たる節は1つしか無いのでいつものテンションで出る。

「なんや?」

そこに立っていたのは……

「お疲れです♡」

そう万智だ。

「お前は元気そうだな」

「悠斗サンが勝ったからどす♪」

「そりやありがとうな。で?わざわざ陣屋を取ったのか?というかよく取れたな」

「そこは意地どす。相当高いプランになったどすが……」

「でしょーね。でもどうせ……」

「後から悠斗サンに経費で出してもらおうどす」

「デスヨネー。もう慣れたから良いよ」

そう。この男、実は万智に甘々であり自身のタイトル戦の時は大体会場と同じとこに泊まるのだ。そして夜な夜な悠斗の部屋にやってきて戯れる。そしてその泊まる為の代金は悠斗が出すという感じだ。実に甘々である。

「まあまあ。肩揉んであげるどす」

部屋に押し込まれ座らせられる。ガシツと肩を掴まれ、揉み始める。程よく強いその力は最高である。棋士は前屈みになることが多いのでかなり肩が凝りやすい。なのでこれは相当ありがたい。

ぶつちやけタイトル戦の後とかは疲れ過ぎているので寝るかこのタイミングが一番の至福である。

まあその為にこちとら数万余分に出してるんだから。対価としてどうなのか？……最高じゃねえか。だが東京帝国ホテルで対局があった時は流石に泣いた。とんでもない額飛んでったから……

「はい！終わりどす。じゃあお休みどす」

「ちよつと待て。何ちやつかり俺の布団にダイブしとるんだ。自室で寝ろ。ここは俺の部屋だ」

「ぶーぶー。どかないどすからね〜」

本当に退きませんでした。誰か… タスケテ。

第二十二局

「……………」

眠い。現在朝4時。絶賛オール中だ。あれから万智が本当に俺の部屋で寝やがったのだ。その為俺は部屋の柱にもたれ掛かりひたすら棋譜を唱え続ける事で理性を保ち現在を迎える。

「ん……………んん」

時折万智の口から発せられるこの吐息が俺の理性を的確に破壊していく。なんだろう。理性という俺の囲いを万智にじっくり崩されている感じだ。

「……………」

5時半。もうそろそろ朝食も近いのでいい加減叩き起こさなければならぬ。体を揺さぶろうと思いつくがここで更にとあることに気づく。浴衣がはだけているのだ。仕方が無いので万智のスマホで3分後にタイマーをセットして朝風呂に行く事にする。

フラフラとした足取りのまま風呂に行くがここで大問題。山刀伐^{両刀使}八段^いがいるのだ。

ここは辞めるべきだ。うん。そうしよう。仕方が無いので散歩に行く事に多分そろそろ万智も起きた頃だろう。



部屋に戻ると万智がいつもの感じになっていた。

「おはようどす」

「ああ。おはよう。あとくつつくな」

「ん〜。別にいつもの事じゃ無いどすか〜」

「やるな。暑くるしい（あと色々当たるから）」

「ん〜」

「やめろ〜！」

そんなこんなで数時間。朝食を取りスーツを着る。荷物を纏め取材の為にスーツ姿の万智と合流する。

向かうは箱根湯本の駅。そこから小田急電鉄とJRを乗り継ぎ東京へ。東京で弟子や弟、妹達と合流する。万智は先に現地入りしている為一旦別れた。

東京駅の新幹線改札前にいるのだが暑い。死ぬほど暑い……………そんな感じで項垂れていると見知った顔が改札から出てきた。

「あ！兄弟子！！」

「おじさん！！」

「兄弟子……………」

「……………」

「▲7六歩 △8四歩 ▲6八銀 △3四歩 ▲6六歩 △6二銀 ▲5六歩 △5四歩
▲4八銀 △4二銀▲5八金右 △3二金 ▲6七金 △4一玉 ▲7八金 △
5二金 ▲6九玉 △3三銀 ▲5七銀右 △4四歩……………」

うくんなんか酷い☆テンションMAXの弟と姪。落ち着き過ぎてる弟子と暑すぎて死にそうな妹とひたすら棋譜を唱える廃人と化した妹。タイトル戦で第一局制して波に乗ってる時に何この地獄絵図☆

「勝利おめでとうございますー!」「いざいますー!」

「師匠、おめでとう」

「お、おお」

そんな祝福もほどほどに、会場であるビルに入る。前のチャレンジより人がかなり多いらしい。そしてまず目に飛び込んできたのは個人スポンサーの数。

雛鶴あい…………一九九

夜叉神天衣…………二〇一

「桁が違う!?」

八一と俺で思わずそう突っ込んでしまうほど個人スポンサーの数が多いのだ。ロリ

コンの力は偉大なり。

八一と銀子は共に解説。天衣やあいちゃん、桂香さんは戦いに身を置く。故に俺は一人暇人の極み翁となる。

やって万智の所へと向かう。

「うーす」

「結局来るんどすな」

「なんや。来たら悪いか？こちとら暇で仕方がないんだよ」

「そんどすか。別に悪くないどす」

「しつかし……2人とも凄いな」

天衣もあいちゃんも超攻めて攻めて。勝ちに行くための将棋をしている。あいちゃんもそうだが受け将棋の強い天衣ではかなり珍しい戦い方だ。

「確かに2人ともここまで女流プロ2人切った出すからな。天衣ちゃんは……悠斗サンのお弟子さんでしたなあ。あの子、どうどすか？」

「才能はピカイチ。祭神雷を超えるかもな。それと気が強い。まあこつちも将棋を指す上で中々大切なものだ。この予選。あいつなら勝ち上がると思ってる」

祭神雷。女流棋帝才能なら銀子さえも上回ると言われている。ただ勝ちたいという欲だけを持ち勝つためなら仲間さえも、自分の全てさえも犠牲にするある意味究極の工

ゴイストだ。一瞬俺にやって方が目隠し空中で完膚なきまでにボコボコにしてやった。ただ女流トップでさえ才能であれば彼女に全員劣るのは分かる。だからこそ実力なら銀子。才能なら祭神。そう言われている。

「ほう。大した自信どすな」

それに勝てると言っているのだ。そう言われても仕方がない。

「それほどまでに俺が才能を認めてるって事だ。なんとなくわかるだろう？」

「そうどすな。それと……棋譜について」

「ダウト。お前、自分で書けるだろ？」

「ぶーぶー」

「帰りになんか奢ってやるから」

「わかったどす」

☆なお、悠斗はこの後懐が痛ましいことになりました。



あいちゃん祭神を下した。途中の金のタダ捨てからの流れに気づいているあの子も確実に読んでいる。普通の間には読めない盤の道筋が。恐ろしい事だ。あの子は間違いなく祭神雷を超える才能を秘めている。

そして天衣。鹿路庭さんをフルボッコにした。感想戦でもボコボコに言ったらしい。俺は鹿路庭さんの努力を知っている。彼女からすればそれを実力で全否定されたような結果になった。それは辛い事だ。それ以外の何者でもない。しかし彼女は天衣と当たって碎けた事で何かしら吹っ切れた様だ。彼女が彼女なりに答えを見つけた。それも喜ばしい事だ。

もちろん天衣が下したという事実と、あの子が次のステージに。女王様の元へとまた一歩近づいたのは本当に嬉しい。天佑さんとの約束にまた一歩近づいたからだ。あの子は一人で突き進みすぎている気もする。もう少し……頼ってくれても良いんだが。

そして桂香さんも苦しみながら次のステージに進んだ。めげず、あきらめず、挫けず。桂香さんはひたすら夢を求め続けた。そうしていつの間にかここに來ていた。あと一勝。それで彼女は夢を叶えられる。だけどそこには永遠なる女王最強の壁が立ちはだかった。それでも桂香さんは前に進もうと前を向いた。嬉しい事だ。



あいちゃんの番となりあいちゃんが段に上がる。そして八一へのサプライズ。1人立ちするとの事だ。別に八一の家を出て行くわけではない。八一は竜王戦に向けて何もかまうことが出来なくなる。相手はあの名人かもしれないのだ。あいちゃんはそれ

を理解していたようだ。

それに八一は思わず涙を流していた。天衣は普通に引き、普通に終わった。元々あの子はかなり一人立ちしているからな。

会見が終わった後、天衣は俺のところへ来た。

「ちゃんと進んだわよ」

「うん。また、約束に近づいたな一回戦も期待している」

「ええ。期待しててよね？」

「……………」

「ねえ、師匠せんせい。私から一ついいかしら？」

ぶっきらぼうに天衣が話しかけてきた。

「なんだ？」

「私は少し遅れてしまったけど…………集中して取り組んでよ？私はもう十分強いわ。一人でやれる。だから自分のことに少し集中したらどうかしら？」

「ふっ…………何言ってるんだよ。そんなもん、とうの昔から分かってる。でも安心しろ。

俺はお前を女王様にするって決めてるから」

「ふん！なら失冠したら承知しないわよ」

「もちろん」

「それと……」

「それと？」

「！」

「気が早いな。まだ半年以上もあるじゃないか。確かにそれは集中したいけどそれでもだ。確かにお前は十分強い。でもまだまだだ。だからこそ俺はお前を見ている。それを忘れるなよ」

この時まだ8月。天衣は一斉予選を通過した。悠斗が自分に集中できるようになる事を願って。彼女は半年先のことを見越してそれを言っていた。半年と少し。将棋界は大きな大きなイベントを迎える。神様と争う戦い。神様になる為に……しかし心優しい弟子を貰ったもんだ。

第二十三局 一ノ瀬、人間やめるってよ

あれから数週間。竜王戦挑戦者決定戦第三局。

初めに結論から言おうと。歩夢君は強かった。誰も予想だに……いや、俺以外誰も考えてすらいなかった地下鉄飛車を見せた。その刃は確実に名人を追い詰めても後少しで詰み。八一^{竜王}への挑戦権手に入れることが出来た。が、しかし歩夢君は負けた。

▲▼▲▼▲

「銀……か」

「えっ!? なんぞ?」

「後ろの詰めろが消えたんだよ。まあなんとなく知った手だな」

「っ!」

隣で『これくらい当たり前』という顔で兄弟子は言う。しかしそれは当たり前ではない。一見銀をタダで捨てるだけの損手。しかしその一手だけでなんと詰みが無くなってしまった。引き分けになってしまった。

ほぼ100%歩夢が勝っていたはずの対局。それをたった一枚の銀だけで消し去っ

てしまった。名人による魔法^{マジック}。誰もが自分の目を疑った。そして俺はひとつの気持ち
が心に現れた。

「つ……」

こんな神様が俺の相手なのか？と。

これだけでこの将棋界にはひとつの激震となった。しかし誰も予想だにもしていな
かった。兄弟子というもう一人の天災がすでに神様となっていたことを……

▲▽▲▽▲

それからさらに数週間後。俺は玉座戦第三局に挑んだ。

「よろしくお願いします」

振り駒の結果は俺の後ろ。

山刀伐八段はかなりハイペースで指してくる。▲7六歩 △8四歩 ▲6八銀 △

3四歩 ▲7七銀 △6二銀 ▲2六歩 △4二銀 ▲2五歩 △3三銀 ▲4八銀

△3二金 ……

戦型は矢倉。

序盤から互いに全く譲らない展開が続く。互いに進まない中そのまま昼食休憩に
入ってしまった。

▲▽▲▽▲

「一步も譲りませぬね」

「そうだね」

今日、兄弟子が勝てば三連勝でのストレート防衛。山刀伐八段は後がない。今日勝たなければストレートでの敗退となる。

昼食休憩は1時間。その間も多くの棋士はどんな展開になるかを予想し続けた。A級序列二位で現在名人戦に向けて順位戦一位街道を突っ走っている兄弟子とA級序列四位のオールラウンダー。その戦いは多くの棋士や将棋ファンを釘付けにしている。

戦いが動いたのは昼食休憩後の午後が始まって少し経った頃山刀伐八段が6六角と指して攻めに入る。

3三金と金を上げて守るのがごく普通の手だ。

「3三金ですよね?」

「ああ」「もちろん」

プロ、女流、奨励会員問わず皆その手を選んだ。AIもその手を読んだ。しかしだ。

「何で兄弟子は指さないんだろう?」

何故かこの局面で長考に入る。高々3三金というプロなら誰でも一瞬で思い付くような一手を指すだけなのだ。別にAIしか思い付かないようなものでもない。しかし

兄弟子は一向に指さなかった。30分という時間が経つてようやく手が動いた。

その手はゆつくりと駒台に乗せられた。

「駒台?!? なんの駒を取る気だ?」

「嘘だろ? 3三金じゃないのか!」

「そんな!」

そして駒台から取り上げて震えながら指された一手は3一銀。

「3一銀?!?」

「そんな…… 3三金じゃない! 兄弟子がそんなアマチュアみたいな一手を……」

誰もが驚愕した。30分もの長考の末に誰もが選択肢から早々に除外していた3一銀という手を指したことに。そして驚愕したのはそれだけが理由じゃない。

「兄弟子の…… 手が震えている?!?」

「手が震えて…… いる」

それは名人が道筋を見つけた時にしか起きない様子。名人曰く「震えるほどの決断」だそう。なら…… もし今、画面の向こうでそれが本当に起きていたら兄弟子は1つの道筋を見つけたという事だ。

そこから先は誰もが予想できなかった。兄弟子の独壇場というべきだろうか。兄弟

子が盤面を支配していた。山刀伐八段が攻めようにも兄弟子が指した意味のわからない手。3一銀が邪魔をして攻めれない。即ち、あの意味のわからない手はこうなることを全て理解した上で指した手だったのだ。

これはたしかに強い手だ。しかしこれをプロ棋士は指さない。そこまで脳が追いついていないのだ。なぜならこの手を指すにはその先が完全に読み切れていなければならぬから。

そしてその手は△3一銀 ▲7九玉 △4六歩▲3四歩 △8六歩 ▲同歩 △8七歩 ▲9六歩 △7五歩 ▲8七金 △7六歩 ▲8八玉 △7五桂

..... ▲同金 △6七成桂 ▲6五銀 △同角 ▲同金 △7七成桂 ▲同桂 △7六銀 ▲6一角 △9七銀

完全に読み切られた山刀伐八段。長考に長考を重ねたがたった一回の王手もできず敗れた。たった30分で32手もの手数を読み切り全てを理解したうえでノータイムで全てを指す。それ故に彼のこの力を皆はこう呼ぶ。

「天災の読み^{方程式}」と。



「あ、ああ……」

「……………」

対局が終わった対局室は凄まじく重い空気が立ち込めていた。僕の目の前に座る悠斗君に対して僕は一度も王手すらかけられなかった。彼へのその圧倒的な差に。そして強さに。僕は、いやこの部屋は支配されていた。

「3一銀はなんで指していたんだい?」

「それは3一銀が最善手だと考えたからです」

「そうだね。でも、さっき聞いた通りAIでは3三金が最善手だったらしいよ? 関東も関西もそれが最善手って出したらしいよ?」

「…………… それは何手先まで読んだ結果ですか?」

「え?」

するとそばにいた記録係の馴染みの奨励会員の子が言った。

「棋士の皆さんは分かりませんがAIは30手です」

「なるほど。それなら3一銀は最善では無いですよ?」

「どういう事だい?」

「だって僕は32手読みましたから」

「なっ!?」

「確かに30手読めば3三金は最善手ですけどその先でなんか行き詰まったんですね。だから他の受け方を考えたら3一銀の方がその先で良い感じに攻めることが出来ると思っただんでそっちにしました。まあ読めるなら自分の限界まで読んだほうが良いですよ」

「じゃあ君はあのたった30分で全てを読み切ったのかい？」

「たった？個人的には時間かかりすぎじゃ無いかと思いましたが……次回はもっと早く読めるようにしないとやばいですね」

「……………」



終わってみれば俺たちが『意味のわからない手』や『アマチュアが思いつきそうな手』と評した一手は相手に一手の王手すら許さない最強の守りとなった。

それはプロ、女流、奨励会員の将棋脳を持ってして誰も思い付かなかった読み。誰もが気が狂ったと考えた一手は最最最強の一手だったのだ。

AIですら30手まで読ませて出てこなかった手。32手読んで急に最有力として現れたらしい。もはや最年少永世位獲得記録なんてどうでも良い。AIすらをも超える最強の棋士がいて、その人物との差に全ての棋士が絶望した。

名人の魔法。

マジック
方程式 兄弟子の読み。

この2つに全ての人が恐れ慄き、また絶望した。その重

く辛く、そして苦しすぎる空気が漂う関西将棋連盟棋士室。その重すぎる空気を破り、生石玉将はタバコを灰皿に押しつけて辛そうに発言した。

「こんな奴らに…… どう対抗すればいいんだ？こんな奴らに……… 勝てるやつはいるのか？」

その言葉を最後にまた部屋は重くなった。圧倒的な強者への絶望で。



万智はひとつの癖がある。それは何があろうと悠斗の対局は悠斗の相手から話しを聞く。理由は単純。悠斗には簡単に会えるからだ。

「八段。今日の対局を振り返ってどう思われますか？」

「そうだね……… に見えたかな」

「え？」

「だから、悠斗君が名人に見えたの」

「どういう事ですか？」

「そのまんまだよ。彼が3一銀の長考を終わらせて指した瞬間、指が震えていたでしょ？僕はそのとき、ハツとして顔を上げた。そしたら本当に名人に見えたよ。ひよつとして彼はもう僕達じゃ届かない何処かに行っちゃったのかもね。ほんとゾクゾクしちゃうよ♡」

こつちも二つの意味でゾクゾクするどす。こんなのに食べられる前に悠斗サンはこなたがいたかくどす♡……はっ！それはさておき

「それは一ノ瀬二冠が名人と同格と言いたいのですか？」

その質問を投げかけると一瞬迷ったようにして。でもこなたをしつかりと見て苦しうに。悔しそうに言った。

「いや違うよ。むしろ……それ以上かもしれない。それはあの3一銀が物語ってる。普通の棋士は30手は読む。だけどあれはその先を読まないと指さない手だ」

「それはそうですけど。たまたまじゃ無いんですか？」

「彼は本気で読んでるよ。そしてそれを常識として捉えている。彼は32手をいとも容易く読んでくる。30分はかかりすぎだと言つてのけたんだ」

「なるほど。じゃあ二冠は」

「うん。そういう意味で言えば彼は人間より優れていて、AIの手すら凌駕している。彼は…… AIすらも超えている。もう、人間じゃ無い」

この日、将棋界は揺れた。最年少永世位獲得記録についてでは無い。AIすら超えて読んできた一ノ瀬悠斗という圧倒的な存在に。中には名人を超えていると言う人もい

た。しかし多くの棋士はそれを認めようとはせずと言った。もはや、彼に唯一対抗できるのはこの時、名人^神しか居ないと。それほどまでに今日の玉座戦第三局は常識離れしたものだっただ。

第二十四局 ハワイ

「しっかし……よくやるよなあ」

俺は本屋で購入したとある場所の観光パンフレットと将棋世界をパラパラとめくりながら独り言を呟いた。そこには次のタイトル戦。すなわち竜王戦の第一局の舞台について特集が組まれていた。

新幹線のグリーン車に座り一路新大阪駅に向かってるのは他でもない俺、一ノ瀬悠斗だ。東京でのTV収録アングラ級順位戦を終えて帰宅途中だ。もちろん順位戦は勝てた。よかったよ。まじで。

俺がそして大阪に戻ると家に一度戻り荷物とパスポート、貴重品類にカメラやなんやらを取ってそのまま車に再度乗り込み関空へ。八一やあいちゃん。桂香さんに師匠。銀子と合流して飛行機に。

目指すは竜王戦第一局の行われる…… ハワイだ。



「で？なんでお前が横なわけ？また八一のバカの仕業か？」

飛行機に乗り込み手荷物を片付けて席に座り棋譜の書き込まれた紙の入っているクリアファイルに手をかけると横に来たのは万智。そのまま飛び立ったのでどうやらガチで俺の横の席らしい。

「ご名答です」

標準語を喋っているが俺の横は供御飯万智。もとい観戦記者の鵠である。今竜王戦のライターを務める様だ。と、言う事は俺はこいつの専属解説係の様だ。

こいつは観戦記者になると標準語を喋る様になる。別に京都弁でいいじゃん。可愛いし。

「で？ 態々俺の横の席を押さえてまで何を聞きたかったんだ？」

「ついに天災じゃ無く天神と呼ばれ始めている一ノ瀬二冠にお聞きしたかったです。が、まずは今竜王戦はどちらに軍配が上がると予想しますか？」

「…………… 正直言つてどちらが優勢とも言い難い。名人はタイトル戦の番勝負にはかなり慣れてる。すでに100回以上こなしているから。それに今回はマスコミが名人よりだ。世論も。だからこそそう言った面で言えば名人優位。しかし今回の竜王戦は記録係やらなんやらも関西多めで組まれている。それが八一にとつてリラックスして望めるものとなれば良い。だけれども初防衛が名人というのも中々厳しいものがある」
「なるほど。じゃあ初タイトル戦&初防衛の相手が名人だった二冠から見て初防衛名人

というのはどういうものですか？」

「正直言つてかなりプレッシャーだ。特に節目の俺は初挑戦の時が通算25期のかかった大一番だったしな。今回はよりにもよつて永世七冠とタイトル100期が同時に決まる名人にとつて恐らく1番大切なタイトル戦だ。それだけ世間からの注目も高ければプレッシャーもデカい。名人の国民榮譽賞用意までされてるつて話しだ」

そう。名人は永世名人、永世帝位、名誉玉座、永世盤王、永世玉将、永世棋帝の永世六冠なのだ。唯一永世竜王のみ獲得していない。今回、竜王を取ると通算7期となり史上初の永世七冠。そして前人未到のタイトル100期となるのだ。

ちなみに俺は自分で言うのもなんだが相当上にいると思つてる。でも、永世位は名誉玉座ただ一つ。一つ取るだけでも死ぬほど難しい。

「なるほど……重いですね」

「重いな」

ここまで色々なものの乗つかったタイトル戦はそうそう無い。いかにヘビーなものをかを思い知らされながら飛行機は進む。

「あれ？悠斗サンそれはなんですか？」

急に京都弁に戻る万智。俺の手元の棋譜を見ている。そこにはとある譜面が載つていた。

「ん？この前の天神研で出た譜面」

「何かおかしな所でも？」

「ほら、打ち歩詰めと連続王手の千日手が同時に起きてる。所謂、最後の審判が出たんだ」

「本当どすな」

「まあ、こんな譜面実際に出ないだろ（笑）」

「それもそうどすな（笑）」

そんな冗談まじりも交えつつ飛行機はさらに進む。



「あろはー」

思わずそう言ってしまう。日本は残暑が厳しすぎて死にかけているがハワイはとて
も過ごしやす。暑いがカラツとしているからだ。師匠はアロハシャツに短パン、サン
グラス。日本なら完全に変人だ。ちなみに桂香さんは壊れた末に銀子と共に師匠の
カードを奪いショツピングに走るらしい。どんまいw

八一も今日ばかりは浮かれているようだ。ちなみに万智は記者としての仕事で今、ま
さに空港から出てきた名人を取り囲む報道陣の中にいる。俺も初タイトル戦の時にあ
んな感じだったけどさらに凄いことになってる。

それはさておき

「しかし日差しが強いな」

「そうですね。あ、兄弟子はサングラスとかどうですか?」

「ん〜俺は良いかな?で、月光会長もサングラスするんですね」

俺の横にいる月光会長に話しかける。並びとしては

あいちちゃん 八一 俺 会長 男鹿さん

という感じだ。

「これでも少し光が差すので明るいのか暗いのかは分かるのですよ」

「そうですか」

そう話していると会長の向こう側から声が聞こえた。

「さあ。会長!周りは危険そうな目付きでこちらを見る輩が多いです!男鹿と手を繋い

てください!」

「そうですか。それでは」

会長ラブ勢の男鹿さんだ。ぶつちやけ脳内ピンクの変態である。そして会長の目が見えないのを良いことにアロハシャツやサングラスまでお揃いだ。いつかやらかしそ
うである。



さて、到着一日目は暇人の極み翁なのでハワイをぶらつく。ぶっちゃけ英語はそこそこ出来るので問題ない。それどころか俺の顔は海を超えていたらしくアニメフアンのごツトみたいな感じの扱いを受けた。結構な数の方からサインを求められるというね。これ本当にわからんわ。

途中でいつの間にか万智が来ており

「悠斗はんも来とおくれやすよー!」

唐突に純粋な京都弁で俺を誘ってくる。ただ、なんだ。方言ってグツとくるものあるよね。

ハワイは年がら年中温暖な気候にあり一年中泳げる。沖繩の海開きが1月1日みたいなもんだ。しかし、まあなんと云いますか。水着なんですよ。万智が。まあどことは言わないがそれがね天災も慄くほどの破壊兵器と化してる訳ですわ。俺、あんなの腕に押しつけられてたんだ。という恐怖が今更湧いてくる今日この頃。

「へいへい」

そんな最終破壊兵器を見ていると万智に呼び寄せられる。近づけば近付いたで凄い勢いで絡まれる。ぎゅうぎゅうと例の兵器を押し付けてくる。直視したら死ぬ。

「ん、悠斗はん、こつち向いとくれやつしや」

「わかった! わかったけどやだ! あとなんで急にそんな流暢な京都弁になったの!?!」

「悠斗はんがこつちの方がええって言うたさかいちやう？」

「あくそうですよ！地方の方言に萌えて何が悪い！！あと、お前！記者の仕事できたんだろ？！仕事は！」

「どうせ今日の前夜祭まで暇なんどすほらほら、こつち向かな遊べへんどすえ？」

「わかつた！見るから！見てあげるから離れて！ね？」

「いやどす☆」

「お願い！わかつたで本当に離れてくれん？」

思わず地元岐阜の岐阜弁を話してしまう。あと頭に手を置いたら少しおとなしくなった。

「そ、そこまで言うならしやあないどすなあ」／／／／

「おおきに。また、夜にでも来よまいか。それで良いか？」

「わかつた……」

「よし。じゃあいくぞ」

そのままお姫様抱っこしてみる。

「ひゃあ！悠斗はん、何やってるんどすか？！ちよつ！下ろしとおくれやす！」

「お姫様抱っこだけど？大人しゆうしてろ。これはこれにやったことの罰や。さあてアラモアナショッピングセンターにでも行きますか」

この後しばらくお姫様抱つこのままにしてやった。顔真つ赤になってたwだけれどもそれを桂香さんに見られてしまい激写され将棋関係者に晒されて2人揃って弄られたのはまた別の話である。

第二十五局 前夜祭

タイトル戦には前夜祭と呼ばれるイベントが存在する。

対局日の前日の夜に、タイトル戦の開催地のホテル・旅館で行われる前夜祭は、タイトルホルダーと挑戦者、ゲストの棋士らが多数出演し、全国から集まった将棋ファンや来賓、地元の関係者や報道関係者など、多ければ数百人が参加する盛大なイベントのことを指す。さて、全国各地に将棋ファンは多数いると思いますが、その中で実際にタイトル戦の前夜祭に参加したことがない、という方が大多数では無いだろうか？そもそも将棋のタイトル戦で前夜祭というイベントが行われていることをご存知ない方もいると思う。

そんな前夜祭が今宵、ハワイで開催されるのだ。物珍しさに地元の人やわざわざ海を渡ってハワイに来たちよつとリッチなファンなどかなり多くの人が集まっている。



「これより……」

そして遂に前夜祭が始まった。

俺は今年、これで7回目となる前夜祭。しかしどうやら連盟は俺に普通に楽しむ前夜

祭を用意してくれないらしい。

1〜3回目は棋帝戦。4〜6回目は玉座戦。即ちいずれも対局者として出たので前半はスピーチだのなんだので意外と忙しい。防衛側だしね。

そして今回はなんと……

「悠斗はん！フリートーク頑張りまひよね！」ダキツ……ギユ

「ハハハ、ソウダネ」

万智とのゲスト棋士トークショー☆連盟（会長）め……遂にやりやがったな。

というのも前夜祭にはゲスト棋士によるトークショーというものがある。タイトルホルダーやトッププロの先生。女流棋士の先生などいろいろな方が壇上に上がるうえ、会いたかったあの棋士に……的なことも出来るのでアマの方やファンの方には大変楽しみなイベントだ。

そのトークショーに今回、俺は呼ばれた。まあ「弟のタイトル戦だし」と二つ返事で受けてしまったのが運の尽き。後から相手見たらフツーにやられたわ。

おかげさまで『一ノ瀬×万智は連盟公式！？』とか『ラブラブ2人のコラボグッズは！？』とかそんな感じで盛り上がり一人歩きしている。万智のファン勢からは圧倒的な圧を感じつつ、今日も過ごしています、ハイ。

すでに舞台袖にいるわけだが、さらにその横では念仏のようにスピーチの練習をする

八一が控えていた。

「八一…… お前大丈夫か？」

「大丈夫な訳ないですよ！ 2人とも落ち着きすぎです！」

「そりやまあ伊達にタイトル戦7回でてますし〜」

「こなたも4回期は取ってるさかい」

「慣れつて凄いですね……」

「そういうことだ。まあお前もそのうち慣れるさ。そら！ 頑張つてこい！」

「は、はい！」

そういうと慌てた様子で壇上に進んでいく。司会者の方と中々頑張っているようだ。

ぶつちやけ八一のスピーチは緊張のあまりカミカミで中々酷いものだった。まあそ

のうち良くなるさ（ω、ω）



「さて！ 続いてはトークショーです！ 今回、最初のゲストは九頭竜八一竜王の兄弟子にしてつい先日玉座の防衛を果たし、史上3人目の名誉玉座の資格を手に入れた棋士にしてさらに最近『ラブラブカップル』として有名な天災こと一ノ瀬悠斗二冠です！」

「あゝ、どうも〜（こ）のやろ（う）」

軽いノリでステージに上がる我。わざわざ2人がけのソファをステージ中央に用意

するあたり用意周到でありますます連盟が全力でやりやがった感が溢れてある。内心、こんなことした会長を呪いたいわ。

「続いて！天災が唯一デレる女流タイトルを持つ強き女性！供御飯万智山城桜花です」
「こんばんは〜」

「今回はなんとこの2人のみです！さて、皆さんも聞きたいと思いますがまずはやはりアレですよね?!?お2人のご関係について！ラブラブカップルと言われていますが?」

2人のみって完全に狙ってるよね?!?読○新聞さんも絶対共闘してるよね?!?会長！笑ってんじゃねえよ！あ、銀子……ガチギレですな〜

「まだ夫婦じゃ無いですよ?それにまだ付き合ってますしね」

「え〜そうなんですか?!?」

「はい」「残念ながらそうなんです」

「でもまだってことはいつかはお付き合いされて結婚なさるんですね?!?」

「っ!」「当たり前じゃあらへんどすか。いつか結婚しますえ。な?悠斗はん?」

「ですよね?!?」

「いや……その〜」

「悠斗はん?」

「えーと」

「ゆ・う・と・は・ん？」ニッコリ

「はい。まあそのうちに……」ゲッソリ

「キヤア!!! やつぱり!」

もう狂犬乱舞のお祭り騒ぎだ。

「はい! ストップ! ストップ! ストップ!!! まずは対局者の事についてです!! 良いですね?」

ギロ

「は! はひ!! わかりました!!! それでは、まずは九頭竜竜王についてです!」

「竜王ですか」

「は、はい。竜王をよく知る兄弟子として普段の様子をお聞かせ願えば」

「そうですねえ。こういう場ではあまり相応しい発言では無いかもしれないですけど」

「言で言えば変態ですね」

「変態……ですか?」

「ピーーーーーーー (自主規制) だったり。ピーーーーーーー (自主規制) で

ピーーーーーーー (自主規制) な感じでピーーーー (自主規制) ですわ。まあそれを抜い

ても将棋は一流ですしね」

「は、はあ」

「さて！そろそろ話しも煮詰まったところで！改めて一ノ瀬二冠と供御飯山城桜花について聞いていきたいですね！早速ですが2人のご関係について聞いてても？」

「そr……「許嫁どす♡」……」オワツタ

俺が返そうとしたら万智がノータイムで指してきた。やばくね？辛くね？

「やっぱり!!? そうなんですね！じゃあ馴れ初めについて……」

「そーどすな。やっぱりお泊まりの時はピーーーーー（自主規制）がピーーーーー（自主規制）で（主規制）でお風呂でピーーーーー（自主規制）だったどす」

「キヤーーーーー！」

「そんなこと無いわ!!まだ付き合ってすらいませんからね!!?許嫁でも無いですよ！」

「ええ……クイーン山城桜花を取ったら…… どないするんどしたっけ?」

ニユーーーーとお稲荷さんの狐みたいに鼻を伸ばして笑う万智。あ、これは……

「二冠? どういうことでしょうか？」

「えーっと、そのくまた後日で！本日はありがとうございました!!」

俺はダツシユでステージを脱出した。

「あー二冠!!」「悠斗はん！」

こうして前夜祭は終わった。俺の人生も今、オワツタ。

第二十六局 兄弟子のおしごと!

「兄弟子イ…… 八一があ…… 八一があ」

大雨の中傘もささずに走ってきたのかぐつしよりと濡れた服。頬を伝っている大粒の涙。ぐしやぐしやになった銀子が俺の家に行って来た。

嗚咽と叫び声、そして大量の涙。悔しくて、辛くて、悲しくて。『たかが奨励会員に何が出来る』という言葉が辛かったらしい。八一は言つてはならない事を言つた。

「兄弟子イ…… 八一を…… 叱つてよ!!」

泣き叫ぶ銀子。昔から決まつてこうだ。銀子と八一は仲が良いのか悪いのか。来る日も来る日も喧嘩した。中には掴み合いになる喧嘩もあった。でもどんな激しい喧嘩も結局は俺が仲裁に入つて仲直り。手を繋いでいた。

そうやって仲裁に入る時、銀子が本当に求めているのは八一の反省でも発言が気に入らなかつた事に対する当て付けでも無い。ただ…… 八一と仲直りがしたいだけなのだ。

『叱つてよ』には『仲直りしたい』とか『なんとかして!』とか『助けて』という意味がある。これまで俺はそれを何千回と銀子の口から聞いて来た。1日に複数回聞くこと

もあるほどだ。

そうして謝って八一はすぐに将棋。銀子は『将棋と私、どっちが大事なの？』とでも言いたそうな表情をしていたが口が裂けても言えなかったのだろう。でも銀子は心の奥底ではただひたすらそう思っていた。

「だって仕方が無いよな。お前と歩めるのは八一あいつだけだから…。」

自分でも気づいてた。でも俺は止まるわけには行かなかった。プロという存在になる為。清滝一門初のタイトルホルダーになる為に。

あの2人が寂しそうにしていたことも俺は知っていた。5年前、2勝2敗で迎えた玉座戦第五局、銀子と八一を置いて俺が遠くに言ったのも理解してた。でも信じてやまなかったから置いていった。『絶対に追いついてくる』と信じてたから…。

今、八一も羽ばたき更に高く飛ぼうとしている。銀子は孤独なのだ。置いてかれた自分が悔しくて、置いていった俺たちが嫌で。そうやって色々な感情が混ざって、爆発して今泣いている。俺の胸に顔を埋めて泣いている。

今思えば互いがあるからと置いて来てしまったのかも知れない。俺は…。大切な妹を孤独にさせてしまったダメな兄かも知れない。だけど、ダメな奴だけだ。そんな奴だけど兄として弟と妹の辛い時に手を差し伸べるのが『兄弟子のお仕事』だから。

俺から出来る助言は一つだけしておいた。

「銀子…… あいつは今、すごい苦しんでる。でも羽ばたこうとしている。苦しんで苦しんでその先に更に上を目指してるんだ。だからこそ、今は考えさせてあげなさい。悩ませてあげなさい」

「?」

「桂香さんは努力を証明する為に、八一の為に今『釈迦堂里奈』という圧倒的な人に立ち向かつてる。それは桂香さんにしか出来ない方法だ。内弟子としてサポートする。それはあいちゃんにしかできない方法だ。でも2人とも、陰ながら八一を応援しているのは分かるよな?」

「うん」

「銀子には何が出来ると思う?」

「…… わからない」

「たった一言『頑張れ』って言ってあげなさい」

「え?」

「どんなに強い棋士でも盤の前に座れば1人で戦わなければならぬ。孤独になる。でもそんな時に『八一を応援してる人はいらぬ』と気づけるようにしてあげなさい。それは八一に大きな大きな力を与えるから」

「…… わかった」

銀子は落ち着きを取り戻した。しばらくして車で師匠宅に帰してあげた。



その足で向かったのは紛れもない弟の家だ。何も言わずに合鍵で入る。

「邪魔するぞ」

「あ……に弟子？」

「久しぶりだな。大分やつれてるじゃ無いか」

目の下にクマを作り、洗面すらしていないのだろうか。髪をボツサボサにした八一がそこにいた。

「……銀子なら大丈夫だ」

「っ！」

「気持ちは分かる」

「……」

「でも言っではいけない事もある。まして、タイトルの事で家族に当たるな」

「……兄弟子には分からないでしょうね！どれだけやっても追いつかないあの神に。

平然と勝って、永世位とって、複数冠になって、A級にもなってる……俺とは違います」

彼には彼なりの考えがあつて言ってる様だ。それを溜め込んで吐いたらしい。八一

なりの辛さがあつた……でも

「はあ。違う?何がだ」

「才能も!実力も!全てがちがいます!!」

「お前は馬鹿か?」

「え?」

「お前。俺の最年少記録何個奪つたよ」

「っ!」

「デビュー記録も。タイトル獲得記録も奪われた。最年少八段記録もな。しかも今やつたら俺が下座なんだぞ?ん?このままいけば最年少九段記録も永世位記録も全部奪われるわ。どうだ?お前に実力が無いと言えるか?」

「……」

「才能もだ。第一、才能は『努力し続ける力』だ。誰にでもある。お前が努力を俺より怠つて来たのか?怠つてねえだろ。自分を信じる竜王。誰がいつどこでお前の失冠を明言した?」

「……」

「決まっちゃいない未来を人に決められる筋合いは無い。勝手に未来を決めた奴ごとぶっ叩け。全てまとめてひっくり返せ!!お前なら出来るはずだ!」

「……………」

「答えろ竜王！お前は他人の描いた自分の未来を受け入れるだけの人間か？？それともそんな未来切り捨てて新しい未来を作る人間か？？答えろ！」

「俺は……未来を作る人間です」

「ならいい。これは見ておけ」

とあるページを開いたスマホを八一に渡す。そこには勝利会見を開く清滝桂香女流三級の姿が写っていた。

桂香さんから発せられた『努力は裏切らない』。全くその通りだ。桂香さんは夢を掴んだのだから……

「どうだった……」

「……………」

「お前には……銀子。師匠。桂香さん。俺はどっちでも良いとしてももう1人。大事な子がいるだろ？」

「っ！……あい……」

「行つてやれ。あの子はお前を待ってる」

その瞬間、八一は全てを忘れた様に走り去って行った。

福島駅の改札前であいちゃんと八一は抱き合っていた。一つ難題は解決した様だ。

「無茶言つて済まなかつたな」

「ふん。あの師弟は本当に世話が焼けるわね」

隣でそういうのは夜叉神天衣女流三級。先日の対局でC1に上がったのだ。師匠の家から八一の家に行く際に天衣に連絡してあいちゃんを半ば無理矢理動かしてもらつておいたのだ。天衣には頭が上がらない。

「そういえば私も言つてなかつたわね。ねえ師匠?私、C1になつたわよ」
「おめでとう」

「私が女流棋士になれば貴方は一生私の師匠になるけど良いかしら?」

「まあそれなりの成果を残すなら考えてやっても良いぞ」

「はあ?」

「冗談だ。いいだろう、頑張れよ。ちゃんと見ていてやるから」

「全く最初からそう言いなさいよね」

「ふっ」

まあ向こうも終わったみたいだし一件落着かな？最低限の仕事はできてよかったよ……まだ落着では無いか。迫っている竜王戦第四局の舞台は石川県は和倉温泉の名湯『雛つる』。ちょうど一年前にあの2人が出会った場所だ。

第二十七局 臥竜鳳凰

あの出来事から数日後。俺たちは大阪から金沢方面に出ている特急サンダーバードに乗っている。八一達は別号車なのでいないが代わりに万智が側にいる。ちなみに師匠達は少し離れている。ちなみに今回はもう万智の分まで2席俺が抑えた（要するに諦めた）。

『本日も〜』

「聴き慣れた車内放送が終わると遙々和倉までの旅が始まる。荷物が多いのでそれを片付ける作業を終え、席につき菓子を開ける。

「悠斗はん。悠斗はんはどっちが勝つ思てるんどすか？」

隣に座る万智が俺の菓子をつまみながらボヤク。本当に観戦記者として行くか疑いなくなるほどのリラックスしている。私服だし完全に金沢旅行にいく女子大生だ。その手元にはボイスレコーダーとスマホ。本当にこいつは観戦記者なのか？という疑問しか出てこない☆

「さあな。まあお互い最善の戦いを見せてくれるさ」

「せやな」

まあ……どんな戦いになるか分からんが少なくともどっちが勝つても歴史に残るような名局になる気がした。電車は和倉温泉に向けて湖西線をひた走る。



「なんじゃこりや……」

和倉温泉の駅に到着して一門揃って改札を抜けると

祝 女流棋士誕生 おかえり！ 雛鶴あいちちゃん 和倉温泉有志一同

と書かれた大きな幕で清滝一門お出迎え。対局の行われる『雛つる』までの街道には地元住民の人々が集まりなんか野球とかの優勝パレードみたいになっている。多分、あいちちゃんが地元のアイドル化している事が伺える。かなり盛大なお出迎えだ。

名人は勝手にどーぞ感満載でさっさと雛つるに送られたが俺たちは清滝一門（特に八一とあいちちゃん）は中々進めない。他の会場とは真逆だ。大量の人に握手を求められて、サインを求められてやつとの思いでついた雛つる。

正面玄関の前には

九 雛
頭 鶴
竜 家

披 露 宴

と書かれた看板が。うゝん……嫌な予感がするぞ☆

八一も同じことを感じ取ったのか冷や汗を浮かべ周りは冷やややかな目線を八一に向ける。これは4連敗とかそういうのを言ったものじゃなくて……そのーっね！そういう事を言っているのだ。そんな冷や汗を浮かべつつもさらに足を進めると

「おかえりなさいあい。立派になったわね」

「お母さんただいま！」

あいちゃんのお母さんである雛鶴亜希菜さんだ。恐らくこの旅館の女将さんだからこそ立っておられるのだろうが本当は娘を一番に見たかったのだろう。微笑ましそうにあいちゃんを見ている。見なかったたつた数ヶ月で娘さんがここまで成長しているのは親として本当に嬉しいのだろう。

「九頭竜先生も一ノ瀬先生もご無沙汰しております。あいより伺っておりますがお二人には本当にお世話になってる様で……あいを支えてくださり誠に有難うございます」
続いてこつちを見て深々と頭を下げる亜希菜さん。こちらが恐縮してしまうぐらいだ。

「いえ、別に俺はなにも。あいちゃんがとても良い子で頑張ってくれるのでね。ね、兄弟子？」

「はい。とても良い子ですし本当に将棋も頑張ってくれています。八一にとって最高のお弟子さんでしょう」

「そうですか。ありがとうございます。どうぞこちらに」

「おかしい……何かがおかしい。将棋に対してあそこまで厳しい態度をとっていた女将さんがここまで将棋に対して穏和なのか？この後、さらにそれを知る事になる……」

「さあ……あいは板場のお父さんのところに行つて成長した姿を見させてきなさい」
「うん！」

「元気いっぱいに駆け出していくあいちゃん。こういう所見るとまだ小学生なんだなあ。つて思う。」

「では、九頭竜先生。検分のほどよろしく願います。こちらへ」

「検分とはタイトル戦などで旅館などを使う際色々な事についての検査を行うのだ。例えば光の反射だったりとか盤の位置。たかがそれだけかと思うが半年ぐらい前にも言った通り死ぬほど大切である。極限状態で行う対局に棋士においてそれは集中力という大切な力を左右する大きな要因となりこれによって出せる力も変わる。故に見聞は大切であり対局において最も重要なものの一つである。」

「臥竜鳳凰の間でございます」

通された部屋は明日。竜王戦第四局が行われる大切な部屋だ。それ故に空気はピリツとしており入るだけで息が詰まる。そして部屋の名前に違和感を感じた。その違和感の正体は去年とこの部屋の名前が違うという事。そして普通なら『臥龍鳳凰の間』と書くところを何故かこの部屋は『臥竜鳳凰の間』と称されているのだ。

俺はそれを見て思わず女将さんに聞いてしまった。

「亜希菜さん？」

「はい」

「このお部屋の名前。去年と違いますか？それに本来『臥龍鳳凰』と書くはずですが。しかしこのお部屋は『臥竜鳳凰』になっていませんか？」

「流石は一ノ瀬先生。よくお気づきで。この部屋は確かに昨年の竜王戦でも対局が行われた部屋でございます。昨年から部屋に少し改造を施しましたので臥龍鳳凰と名前を変えさせて頂きました。また竜王戦の舞台という事ですので龍を竜としたのも竜王の名前から一文字頂いたのです。ですので記事にされる際はくれぐれも名前にお間違えの無い様に」

女将さんは万智の方を向いてそういうと万智はビクツとした。流石は女将さんだ。

迫力がまるで違う。

「なるほど」

女将さんのドヤ顔は続く。

「この部屋は天井や柱などありとあらゆる所にカメラが有り死角はございません！」

そういうのがカメラなんて全く見えない。他もそう言った感じだ。

「なお、カメラの反射が対局される先生方の邪魔とならぬ様、とても小さなレンズを採用いたしました。日除けもカーテンからブラインドに変更し、自由な光量を確保致します。盤のある畳も他の物より大きい特注品となっております！」

素晴らしいの一言しか出てこない。まっつっつっつたく文句の付けようが無い対局室がそこにあった。正直な事を言おう。A級順位戦や三段リーグ。果てはタイトル戦まで行われる将棋連盟の特別対局室並み…。否、それ以上の設備が施されていた。

「いくらかかったんだ…。この装備は」「凄すぎる」など驚嘆の言葉が飛び交う中、女将さんは自信を持ってこう言った。

「世界においてこの『臥竜鳳凰の間』以上に将棋を指すのに適した環境を持つ部屋は無いと存じます！」

それを否定する者はいなかった。それほどまでにこの部屋が完璧だったのだ。続いて駒の検分が行われた。対局者で無い俺が駒に触れることは無いが見ているだけで分

かる。とてつも無い駒だ。

「はあ……」

思わず見ているだけでため息が出てくる。一枚一枚か光り輝きまるで宝石の様な輝きを放っている。恐らく数百万はするであろうその駒は俺でも中々触れる事の出来ないような品だ。設備完璧。駒も完璧。盤も完璧。そして八一や名人が駒を指した時の音もとても細やかで良い音が鳴る。最高なのだ……

が……八一と俺はそれ故に一つ懸念を抱いていた。なんであそこまで将棋嫌いだったあの女将さんがここまで最強の対局室を爆誕させたかだ。そんな疑問がある中、女将さんは待つてくれなかった。

「さて、九頭竜先生も一ノ瀬先生も前夜祭でございませす！一ノ瀬先生はこの者にご案内をお任せしておりますのでどうぞ」

女中の人だろうか。その人にご案内頂いた。後ろで八一の驚きの声が出るが振り返ることは出来なかった……



女中の人について行くと途中で止まった。そこには一つの部屋があるらしく襖が開けられた。通された部屋は普通の部屋だったがそこには3人の男性と1人の女性が待っていた。知らない人だが……どこか見た事ある感じた。座る様に勧められたので

座ると1人の年配の男の人が口を開き衝撃の一言を放った。

「いつも八一がお世話になっております。私、八一の父でございます」

「!?」

なんとそこには九頭竜ファミリーがいたのだった…

第二十八局 第四局前夜祭

「八一の父でございます」

「八一の…… お父様ですか?」

たしかに言われてみればそうだ。どことなく八一の面影がある。

「はい」

「と、いうことは」

「母でございます」「八一の兄と……」「弟です」

本当に九頭竜ファミリー揃ってるじゃん。しかし兄弟はよく似ている。血のつながりというものをひしひしを感じた。と、自己紹介がまだだった。

「…… あ、申し遅れました。私、清滝剛介門下で九頭竜八一君の兄弟子として共に学ばせて頂いた一ノ瀬悠斗と申します。よろしくお願ひいたします」

「一ノ瀬先生のお話しはよくニュースや八一から伺っております。一ノ瀬先生には本当にお世話になってしていると八一が話すものですからいつかお礼をと。こうして急になつてしまったことお許しください」

深々と礼をする八一の親父さん。めちやくちや礼儀正しい方だ。どこで間違えたら

あのロリコンが生まれてくるか遺伝子の研究者に聞いてみたい。冗談抜きで、それぐらい礼儀正しい方なのだ。

「い、いえ。そんなことありませんよ。私は兄弟子として当然の事をしたまです。私こそ色々な場面で八一にお世話になっております。それに彼自身もとても良い子でしたから」

「そう言つて頂けると嬉しいです。それに一ノ瀬先生がそこまで言うのであれば安心致しました。あの小さかった八一とつて新たな門出の日であり、それに不安だったのが今の話しをお聞きして安心致しました」

「門出：．．ですか？」

門出つて別に八一はタイトル戦初めてじゃないし獲得もしてる。そこまでじゃない。それこそわざわざ門出と表現するのはあまり合わない気がするのだが。

「ええ。八一がまさか棋士として頑張りながらひな鶴であいさんと共に働いていくなんて聞いていませんでしたから。しかし女将さんの話を聞いて理解しました」

「は、はあ」

「私してもそんな弟を後押し出来ればと女将さんからお声がけ頂いたのを機にひな鶴で働くこととなったのです。ですので兄弟子であり八一を本当の弟の様にしてください。一ノ瀬先生にもご安心して頂けると思います。将棋の事は私達よりも一ノ瀬先生の方

が分かっていらつしやると思いますが、その方面では今後とも宜しく頼みます」

今度は八一のお兄さんが言う。どうやら八一のお兄さんはひな鶴で働いている様だ。俺の事を信用してくれるのは嬉しいが……なんかダメじゃん。でも話しの流れ的に「いいえ」と答える訳にはいかないしなあ。

「わ、わかりました」

ん〜と……返答もしたところでひとまず八一の家族の認識と話してくれた事を訳そう。

九頭竜家の話しを聞くともうひな鶴や九頭竜ファミリーの間では八一があいちゃん
と籍を入れて八一がひな鶴で働きながらプロ棋士としての活動も続けていくことが決
定事項となっている。

と、するならばあの『披露宴』とかいう看板にも納得がいく。実質的なお披露目会だ。
これは恐らく、裏で会長も動いているな。あの人も相変わらずやべえ。

で、九頭竜家には就職浪人で困ってた八一のお兄さんをひな鶴に迎えて、それを機に
八一とあいちゃんについて話してまるくすると。え？完璧か？まじで完璧か？あの女
将さんやばくね？もう手の出しようが無いよな。さて……困ったな。これは……無理
ゲーだな。

「あ、そろそろ時間ですし前夜祭の方に向かいましたよ。九頭竜さん方もご出席なさ

るんですよね?」

「もちろん。息子の門出ですから!」

「デスヨネー」

「あ、そうだ一ノ瀬先生。普段の八一について前夜祭の会場まで立ちながらお話し頂けませんか?」

「もちろん」



「…」

まじで披露宴じゃん。プログラムに『女流棋士資格申請書記入の儀』とか『記念品交換』とか『親族固めの杯』とかある時点でおかしい。後ついでに『関係者祝辞』つてのがあるんだけど地元政財界の偉い方が軒を連ねる中、トップを飾る人の名前は『プロ棋士 一ノ瀬悠斗二冠』と書かれている。え?何?!?聞いてないんだけど?!?

もつとおかしいのは八一が紋付袴を着ているのだ。紋付の袴は大体なんかのセレモニーか就位式とかあと冠婚葬祭とかでしか棋士でも着ない。八一がそれを着てる。いや、着させられたのだろう。ついでにあいちゃんがいるのもおかしい。普通は両対局者が中央に並ぶのだが真ん中にあいちゃんがいる。わかりやすく図説すると

名 あ 八 という感じだ。

人 い 一

ん や ち

並びとしてはおかしさMAXなのだ。おかしいだろ!!?と突っ込みたくなる気持ちは分かるがそれで行く気満々なのだ。

その後異変に気付いていた八一が家族を発見、急いで来て九頭竜ファミリーの言い争いが始まった。

簡単に言えば就職浪人や早期退職させられたやばかった九頭竜ファミリーを女将さんが八一の婿入りを条件に拾い上げた。要するに全ては女将さんが強かったのだ。そして会長がそれに乗った。そういう事らしい。あくあ。銀子の機嫌がますます悪くなってる。俺、この後あの銀子の横に座るの？

▲▽▲▽▲

首相からの祝電（しかもリアルタイム）とかいう恐ろしい事を平然とやってのけ、対局者紹介をして女流棋士資格申請書記入の儀というもう10年近く棋士をしてきてはじめて見た意味不明なプログラムに突入した。それを見ていた銀子の顔はどんどん黒

くなくて行く。

司会である鹿路庭珠代先生の完璧な司会のもとにそのプログラムは発動されなんか賞状とかが載って出てくるお盆的なあれに恐らく申請書が載って出てきた。次に会長が出てきてその後ろに男鹿さんが続いた。うやうやしくペンを会長に渡すと会長は

「九頭竜八一竜王。あなたは男性の師匠として、ここに居る雛鶴あいさんを弟子にする
と誓いますか？」

「は、はあ……」

「雛鶴あいさん。あなたはこと男性を師匠とし、病めるときも健やかな時も棋道を邁進
する事を誓いますか？」

「はい……」

「それでは……」

と、いかにもなセリフを吐いた。その返答を聞いて頷いた会長は頷き、さつき男鹿さんからもらったペンを2人の前ににとても丁寧に置いた。

『初めての師弟共同作業でございませう。盛大な拍手でお願いいたします！』

鹿路庭さんのアナウンスと共に大きな拍手が起きる。会長はそれを微笑ましそうに見ており、周りには大きな拍手を送る。俺は苦笑いをし、銀子は黒くなる。しばらくしてステージを見ていた俺に係の人が近づいてきた。

「一ノ瀬悠斗先生でいらつしやいますね？」

「はい」

「この後、一ノ瀬先生の祝辞となりますのでご移動お願いいたします」

「あ、はい。でも私は祝辞の内容など考えておりませんよ？そんな状態で出来るのですか？」

「大丈夫です。こちらをお読みください」

そう言つて渡された紙。

「こ、これは」



『続いてこの申請書記入というめでたき日にとある方より祝辞を頂きます。竜王の兄弟子に当たります一ノ瀬悠斗二冠でございます』

それと同時にステージに引つ張つり出される。あくちゃんとしたスーツでよかつた。と思うと同時にスポットライトが当てられた。もう逃げられない事が確定する。しやーないので覚悟を決めて渡された紙を読む。

「えく… 祝辞。おふたり、並びにご両親のご家族の皆様には心よりお祝い申し上げます。ただいまご紹介に預かりました師匠、九頭竜八一の兄弟子の一ノ瀬悠斗と申します。僭越ながら一門を代表してご挨拶させていただきます。思えば…。」

とまあ全力で祝福のメッセージを読まされた。簡単でないようを言う。「八一、あいちゃんおめでとう！末永く師弟として頑張つてね！お兄さん応援してるよ☆あ、そこらへんの馬鹿どもも下手したら殺るからな？」

「……………長くなりましたが、これを持ちまして私の挨拶とさせて頂きます。改めまして本日は本当におめでとうございます。これからも師弟として末永く棋道を邁進される事を心より願っております」

という感じだった。先に戻るときつきよりも銀子が不機嫌になつてる。やべーやらかしたかも知れない。先に戻るとより一層黒くなっている。

「銀子？」

「……………なに？馬鹿にいい」

うっわ……………めっちゃ怒つてる。馬鹿とか初めて言われたかもしれない……………ちよつとシヨック。

「すまない。俺もそのプログラム知らなくて言われるままやってしまった。今度、好きなどころ連れて行ってあげるから許してくれ。またスイーツ巡りしよう」

「……………堂島ロール」

「了解」

「3つ」

「へ？」

「堂島ロール3つ。それと…」

ちよつと表情が柔らかくなつた。よかつたあああ。でも俺の財布が軽くなつた（へ）。

（へ）

そうしてこの披露宴じみた前夜祭前半戦が終わった。幸いだつたのは名人が即座に状況を理解してずつと微笑ましそうに見てくれていた事だろう。あの人には本当に頭があがらないよ。その後は普通の前夜祭だつた。俺は名人とも飲んでた。八一は、良いやつだつたよ。

第二十九局 竜王戦1日目

チュンチュン！漫画でよく見るような朝、外から聞こえる雀の鳴き声で俺は目を覚ました。

起きると横には万智が浴衣姿で寝ていた。「うくん…悠斗はん♡」とか寝言言いながら寝てる。毎度思うがこれはアウトだと思う。てか俺つて多分棋士の中ではメデア露出の多い方のはず。そんな俺がメデアが集まる中、現役JDの女流棋士と堂々と旅館にお泊まり☆とか炎上待ったなしだろ!!?しかしバレなきや犯罪じや無いんです理論でどうにかなってる。

「万智！朝だ。起きろ！」

「は〜い」

万智を叩き起すと運ばれてきた朝食に舌鼓。ここで万智と別れる。万智は観戦記者というある意味外部の人として対局を見守るので俺と行動するのは不可能なのだ。



「失礼します。一ノ瀬悠斗です」

対局などでも使用する和服姿に身を包んだ俺は棋士や奨励会員などの詰める部屋に

入った。万智もここに入る予定だがまだ来ていなかった。

「おや二冠。昨日はお楽しみのようで」

会長はかすかに微笑みこちらにこそつと話してくる。

「別に楽しんでた訳じゃありません。こつちもたまつたもんじゃ無いですよ。あいつだから良いですけど」

「そうですか。やはり二冠は山城桜花にはお優しいですね。結婚される際は会長室で報告を待つてますからね？もちろん私もお祝い出しますから」

「はいはい。そんな時がくればその時お願いしますよ。今は竜王戦です」

「そうですね。二冠には今回中々あり得ない仕事をお任せしましたが大丈夫ですか？」

「もちろん。任せてください」

「それは頼もしい」

「それでは私は記者解説室に」

「はい。臨時役ですけどよろしくお願いします」

「会長も大盤解説よろしくお願いします」

俺が和服を着てきたのは今回、公的な連盟の仕事で会場に来ているからだ。その役は記者解説というものだ※実際には存在しません。

名の通り、俺の仕事は一般の記者やレポーターに向けた解説だ。今回の対局には溢れ

るほどの新聞社やTV局がやって来ている。しかし集まる報道陣は将棋に関してほぼ素人でありどういう局面が出てるか分からない為プロが解説するのだ。今回はその役に俺が当たる訳だ。

ちなみに俺としてはこの仕事ありがたいのだ。何故ならただでさえバラエティとかに出て俺がプロ棋士と言われてもイメージつかないとよく言われる。そのイメージ払拭には最高なのだ。



タイトル戦の対局室まであと数百メートルというところだ。静かだ。異様なほど静かなのだ。遅刻しそうで急いでいた。

「つとー」

急に角から足が突き出された。俺を止める様に。

「ちっ」

足の主は姉弟子だった。

「姉弟子！やめてくださいよ！転びやすいんですから」

少し沈黙ができた、

「あの…！」

「八一。遅刻する。早く行きなさい」

俺、勇気を振り絞れ！言え！言わないと！

「あ、姉弟子！対局の後、話す時間ください！」

「… 考えとく」

「ありがとうございます！」

心が少し軽くなった。再び歩こうとしたその瞬間、姉弟子に呼び止められた。

「どうしましたか？」

「… 頑張りなさいよ」

「… はい!!!」

俺は臥竜鳳凰の間に入った…

俺が角を曲がって姉弟子の視野から俺が消えるであろう瞬間姉弟子が何か言った。

「兄弟子… 私にしか出来ないこと。やったよ?」

俺には姉弟子がなんて言ったかよく聞こえなかった…



「皆さんどうもこんにちは。今回、記者解説を務めさせて頂きます一ノ瀬悠斗と申します。よろしくお願いします」

カメラを構えたマスコミの報道陣の前に俺が姿を表すと一斉にシャッターが切られてすぐ眩しい。

「早速ですが対局は相掛かりという戦法になりました…」

早速駒を動かしていく。聞き手はいない。俺一人で仕切るのだ。それ故に普段の大盤解説やニコ生・Abemaとはまた違った難しさがある。

でも… それ故にわかる。いつもの数百倍手が読めてしまう。普段、自分が対局するのと変わらないほど読めてしまうのだ。怖いくらいに…

戦型は相掛かり。お互い一手一手にかなりの時間を消費している。定跡変化はまだ見られない。どこで攻めるか迷っている。名人と相掛かりの研究をしている時もやはり名人は一手に時間をかけた。そしてその研究で指した一局こそ俺たちが最後の審判を出した局だ。

今、目の前で指している対局はそんな天神研の指しを擬えたような。静かで動きがな

くて、でも深い深い手が続いた…。まさかな。



1日目を終えて用意されている部屋に戻る。まだギリギリ名人についていけないがいつ離れるか分からない。テレビをつけると兄弟弟子が写っていた。どうやら現地解説のインタビュアーを受けているようだ。

「富士山テレビです。本日はよろしくお願いします」

「はい。よろしくお願いします」

「早速ですが情報によると今日の封じ手まで全く定跡を外れない前例に倣ったようなもので超スローペースだったという事で多くの将棋ファンも落胆の声を上げているという事ですが?」

「そうですね。たしかに現在まで全く定跡を外れない戦いが続いています。しかもとてもスローペースで。しかしそれはお互いがお互いを疑っているからです」

「疑って…。いる?」

「あくわかりやすく言えば今回採用された型は『相掛かり』と呼ばれるその昔から存在する伝統の戦法なのです。棋譜もざっと4000局分はあるでしょう」

「4000も!?」

「はい。彼らはそれに加えて凄まじい手を読んで読んで読み続けています。ゆうに一万通りを2人は超えています疑心暗鬼になるのも無理ありません。どこで定跡を外れて攻めてくるか。お互いにそれをずっと考えているのでしよう」

「二万も… そうですね。ありがとうございます」

レポーターの人は感嘆の声をあげていた。しかし流石は兄弟子。めっちゃしっかり見てる。

「テレビ毎朝です！ よろしくお願ひします」

「はい。よろしくお願ひします」

「名人の封じ手予想ですが一ノ瀬二冠はどのようにお考えですか？」

「… そうですね。この質問の様子を名人や竜王が見ておられる可能性があります。彼らは封じ手すらもあり得ないほどの思考を巡らせて考えています。第三者である私がこの場でその一手について予想し、万が一お二人にそれが届けばお二人の混乱を招きかねない。故にこの場では予想は控えさせて頂きます。せつかくのご質問にお応え出来ず申し訳ありません」

「そうですね、ありがとうございます」

レポーターは残念そうに引き下がった。兄弟子はどうやら一人の棋士としてこれに答えている。だからこそTVを見てる人では無く、対局者である俺や名人を一番に考え

てくれているのだろう。本当にありがたい。

続いて地元テレビの質問の様だ。

「一ノ瀬二冠は竜王の兄弟子に当たるといふ事ですが兄弟子として何か竜王にメッセー
ジを頂けないでしょうか？」

「そうですね……。「君は一人じゃ無い。それだけは忘れるな」とでも申ししておき
ましょう。一人の棋士としてはこの記者解説の役目は公平中立で行わなければなりま
せん。しかし一人の兄弟子としてはどうしても応援したくなるのですよ」

兄弟子はそう答えながら苦笑した。——一人じゃ無い。言葉にすればたった一

言だ。発言しようと思えば誰にだつて発言出来るほどのただの短文に過ぎない。けど
その短文は今まで受けてきた言葉で最大の重みがあった。

タイトルの就位式の時に会長が読み上げた言葉よりもだ。思えば入門から何度も兄
弟子に言われた言葉だった。兄弟子にずっとかけてもらった言葉だった。

努力しよう。俺の腕が引きちぎれようがどうなるうが勝敗が決するまで努力し続け
よう。考え続けよう。だつて——俺には……俺にはみんながいるんだから。

第三十局 最後の審判

「さて、本日も終局まで私、一ノ瀬悠斗が解説致します。よろしくお願いします」

午前9時になり対局が再開される。

副立会人の「えっ!!?」という声で察した。読み上げられた手は定跡を外した一手だった。

「：：定跡を外してきましたね」

そう言つて大盤に駒を指す。どういう状況か、説明していく中でかなり名人に意図がある事も理解できた。それをわかりやすく噛み砕いて説明していく。

始まるのは乱戦。駒が激しく動き合い強すぎる戦いが始まった。それは普通の人であれば恐らく感覚が狂い自分の将棋を見失つてしまうであろう将棋だ。

気づけば俺の目の前にいたライター達は見た事もない様なスピードでPCに文字を打ち込んだりメモを残していた。



一方、その頃万智と聖市は：

「……まで51手です」

万智が読み上げた棋譜を聞いて頷く月光。さらに

「そうですか。供御飯さん。ソフトの評価値は？」

評価値を聞いた。

「安定していません」

一手一手指すたびに評価値は荒ぶっている。評価値が行ったり来たりしているのだ。

「そうですか」

「あの… 現局面をご覧になってどう思われますか？こんな状態ではろくに棋譜中継のコメントすら書けないんです」

やはり分からない。読めていないのだ。プロでも読めないかもしれないほど高度なこの戦いは他を一切寄せ付けないと言ってもおかしくないのだ。

「そうですね…」

少し考えた先に月光は語り出した。

「将棋には二つの種類があります。一つは盤上真理です。勝ち負け関係なく将棋自体を正解に導こうとしている。彼の棋風はそれです。彼は勝ち負けなどを求めているのは無い。将棋自体の正解を導こうと今まで歩んできました。故に相手が悪手をつけば露骨に残念がる」

続けて月光はこう言った。

「一方、八一君の将棋は勝てば良いと言うものです。どんなに泥臭くてしつこくても粘って粘って相手のミスを待っている。そうして勝ちを掴むことに重きを置いている。そこから分かるのは2人の棋風は違いすぎるといふことです」

「名人は間違えませんか?」

「たしかに彼が間違えることは稀です。基本的には間違えませんが……しかし八一君も間違えが少ない。何故なら彼も天才だから。故に互いが最善手を指し続けたらどうなると思いますか?」

「最善を?」

「ええ。今、2人はその答えに近づいているのですよ」

「将棋は1人で出来ません。故にお互いが最善を続けるのは不可能に近い。しかしそれを成し遂げる為に彼は八一君をこの三局でここまで高めた。今、八一君は彼の放つ凄まじいエネルギーで変質し続けている筈です」

「……まるでご自分が体験された事のようにおっしゃいますが……」

「ええ。私も体感しましたから。とても生きている様な心地はしませんでしたけどね。でもね、供御飯さん。貴方が一番身近で体験している人を見ている筈ですよ?」

「1番近くで………っ! 天災天と神神の戦戦い」

思わず万智は息が詰まった。事実、恐らくそれを1番見てきたのも万智だというのは

あながち間違いでは無い。天神戦と呼ばれる2人の戦いをずっと見てきたからだ。一ノ瀬悠斗という存在をずっと見てきたからそれが事実と理解した。

「彼らの対局は全てが名局。戦ったタイトル戦は全て名局賞を輩出しています。彼らは互いにエネルギーを放ち合い、二度と帰れないところまで上がった。一ノ瀬二冠はそうしてもう見えない向こうへ行つた。今、そこを目指して新たな人を作るために彼は動いているでしょう。何故なら二冠はとうの昔に盤上真理と勝ちの両方を数次元上まで登られましたからね。また……彼はひとりぼっちなんですよ」

そう言つて月光はモニターに映る2人を見た。



予想外だった。互いが最善手をひたすら指している。でもまだ八一は名人に追いつききつていない。故に八一が数十分かけて読んだ次の一手を名人は一瞬で指し返すと言う現象が起きていた。凄まじい。ここまでの最善手の指し合いは俺も見た事がない。

それから数手先まで読んだ時だった。俺がそれを見つけてしまったのは絶対にある得ないとされた状況だ。こんなことがあつて良いのかと何度も読み続けた。しかしこのまま最善手を指し続けければ体現してしまう。ずっと昔、俺と名人が確定づけた結論に、『打ち歩詰めがなければ先手必勝』を体現してしまう。

そんな考えをよそに局面は進む。無情にも飛んでくる棋譜は最善を辿るだけの棋譜

だった。

「これは……引き分けですね」

さらに数手進んで思わず俺がポロツと漏らした言葉はこの旅館を伝説に導いた。



「これは……千日手じゃ無いか!? 名人が勝つんじや!」

千日手模様となり名人の勝ちが濃厚になっていく中、この様な発言が飛び交う。

「そうだ。準備しなきゃならないな」

無情にも記者のそんな声が飛んでくる検討の為の部屋。銀子の横のあいちゃんは「こうこうこう……」とひたすら読んでいる。

そんな時だった。もう一つのモニター。即ち一ノ瀬悠斗が映るモニターから「引き分け」という衝撃的な一言が飛び出した。

「引き分けだと!? どこをどうすれば……」

「あ! 引き分け……で……す」

あいちゃんはそう言う一心不乱に部屋を飛び出していった。それと同時に月光はつととした顔をしてワナワナと震え始めた。

「まさか……本当に? こんなことが……」

衝撃を受ける月光。引き分けと言う天災。それと同時に神は……「名人が対局中止

を求めています！」



ざわつく大盤解説、検討部屋。そして報道陣解説室。今、それを理解しきっているのは月光聖市、雛鶴あい、名人、九頭竜八一。そして一ノ瀬悠斗のたった5人。それ故に全ての説明を2人がする事となる。新たな伝説の……そこから先は奇妙なほど月光と一ノ瀬の声が揃ったらしい。

(月)「立会人より只今の状況をご説明致します」

(悠)「報道陣解説人より只今の状況をご説明致します」

(月)「盤面をご覧頂くとわかる通り竜王は名人が指した歩の王手を回避する為にこの歩を取って王手をかけなければならない。しかしそれは連続王手の千日手と言う反則になります」

(悠)「この局面では名人が歩を指して王手をかけた状況です。竜王がこの王手を回避するには今、名人によって指された歩を取るほかない。この状況を抜け出す方法はこれしかありません。が、それは連続王手の千日手という反則になるのです」

「なら！名人の？？」そう言った声がどちらでも湧き上がった。しかし2人は「少しお待ちください」

(月)(悠)「連続王手の千日手になってしまふ歩をとることが出来ない場合。名人は歩を指して竜王の玉を詰ましたことになる。これは打ち歩詰めというまた別の反則になります(なるのです)」

「「「あー」」」

「これは2つの王手が複雑に絡み合った状況でありどちらの勝ちとも言えず長年、詰将棋作家や棋士達を悩ませてきた問題だ。将棋は完璧では無いのです」

「何故解消しなかったのですか?」「何故、放置されたのですか?」

二つの部屋で同じような質問が飛び出す。

「本場に局面にこんなものが現れると思っていなかったからです」

当たり前だ。将棋は30手も指せば数億という分岐を持つもの。たった30手でだ。そんな将棋で公式戦に万が一にもこんな手が出ると思うわけが無い。

「これは将棋史に残る伝説となる。将棋が現在の形になり江戸初期に初代名人である大橋宗桂が誕生してから数百年。ルールが少しずつ形を変えながらも現在に確立された将棋。そんな将棋において唯一現代まで我々が答えを見つける事が出来なかったらこの問題の名は……」

最後の審判」

第三十一局 竜王 九頭竜八一

「最後の審判」

2人が言い放ったその言葉に大盤解説の部屋も記者達が詰めている部屋も、そしてAbemaで見ている画面の向こうの全ての人も固まった。日本の将棋界が一瞬の静寂に包まれた。

そして「す…： 凄い！凄すぎる!!」「神…： 様!」「2人は将棋のルールさえも超越したのか?!？」などなどもはや賞賛のコメントと興奮により聞こえる言葉も聞こえなかった。それは日本全国に波紋を及ぼしTwitterのトレンドも竜王戦関係で覆い尽くされ、Abemaもコメントで画面が埋まる。記者解説室も同じような騒ぎになり記者達が一齐に記事を書き始めた。

モニターの向こうにいる月光会長は唐突にこう言った。

「私個人の見解としては最後の審判では打ち歩詰めには当たらないとすべきだと考えます。が、現行のルールではそれは不可能。よって立会人として竜王戦実行委員会に指し直しを提案致します」

「と、言うことは…」「引き分けた!」「どうする!今回は国民栄誉賞も」「いやしか

し対局者の体調が」「そもそも旅館はどうなる!?？」と色々なところで混乱が生じそうになった。しかし女将さんである亜希菜さんがそれを止める一手を放つ。

「ご安心ください!対局が引き分けになったり終了したからと言つてすぐに追い出すような真似は致しません!対局者の方々をはじめとする将棋関係者の方々や大盤解説に来られた方、記者の方を含めた全ての方々に疲れが取れるまで極上のマッサージや温泉を満喫して頂きますのでご安心ください!」

静止のために放った一手は会場をより盛り上げてしまった。もはや深夜テンションのお祭り状態だ。止める事は出来ない。

「それでは対局者の方々も体裁が下るまで自室でお休みください」

一度解散状態のようになり会場がばらける。俺はすぐさま部屋を飛び出して八一に会いに行った。

▲▼▲▼▲▼

「ハア…ハア…:… 八一!!」

旅館の中を全力疾走で走り抜けた。そして目の前に現れたのは今にも崩れ落ちそうになっている袴姿の八一だった。

「兄…弟…子?」

その顔は不思議な顔をしていた。疲れ果てている様にも見えた。落ち着かない様子

に見えた。何か吹っ切れた様にも見えた。とりあえず色んな感情が混ざった様な顔をしていたのだ。

「大丈夫か？ 肩貸すから」

まずは崩れ落ちそうな八一の肩を持つ。八一の体重がほぼ全部俺にかかる。それほどまでに力が抜けてしまっているのだ。

「ありがとうございます……ごさいます……」

「凄かったぞ！ 凄かった。流石は竜王だ」

「でも……勝負はまだ……ついてません」

「ああ。でも大丈夫だ。凄い将棋だった。お前ならやれる。もしもなんて考えず精一杯指してこれば良い」

「はい」

「ほら、控室だ。ちやつちやと体休めろ！」



そのまま控室に八一ぶん投げて部屋を出る。

「はあ。さて……… 銀子。八一はもう部屋に入ったから出て来て良いぞ？」

「っ！」

体をビクツとさせてから銀子は恐る恐る顔を出した。

「気づいてたの?」

「気づいてないけども?俺はお前の兄ちゃんだぞ?」

「………… やっぱりお兄ちゃんも嫌い」ぶっすー

「そんな顔すんな。あとお兄ちゃんは銀子のこと大好きだぞ? ってそうじゃない。行きやあ良いじゃん。誰もいないぞ?」

「………… 今、顔合わせたら私が耐えれない」

「置いてかれたから?」

「っ!」コク

「そうか」

「兄弟子………… 私は………… どうすれば良いの?笑って『頑張れ』って言ってあげた。だけどその分八一が遠くへ行っちゃった………… どうすれば良いの?」

俺が和服なんて気にすることなく俺の胸に顔を埋めて涙を垂らす銀子。その辛さは尋常じゃ無いのだろう。

「いつか………… 追いつける。銀子なら追いつける」

「本当に?」

「だって努力してるじゃん。それに応援してくれる人もいるじゃん。努力の結晶が咲き誇れないなら。応援が意味を為さないなら。俺も多分プロにはなれなかった。桂香さ

んも無理だったかもしれない。八一もこうはならなかったかもしれない。みんな：努力と応援に支えられている。今、八一は努力と応援で羽ばたこつとしている。銀子も同じだよ」

「… わかった」

「あいつを踏み潰しても蹴り飛ばしても何しても良い。だけど応援はしてあげなさい。以上。お前なら後から追いつける。あいつが風のように見えなくて…でもすぐに通り過ぎてしまうなら銀子はその風を受け流し、感じ取れる草になりなさい」

「うん」

「課外授業は終わり。八一のところに行つて来なさい」

「うん！」

そう言つて部屋に飛び込んだ銀子…：…と同時に銀子の悲鳴が聞こえるのはまた別の話である。

▲▼▲▼▲▼

それから1、2時間が経ち竜王戦が持ち時間を1時間追加した上でリスタートとなった。

記者解説室は熱気に包まれている。今、画面の向こうで起きている奇跡を、それを伝える俺の言葉を一字一句逃さぬ様に全力でPCと睨めっこしている。

「戦法は指し直し前と同じく相掛かりですな」

先程より一層高く大きな音で駒が叩きつけられる。いつまでもどこまでも指すという意思が良く見て取れた。



その頃大盤解説室では異様な空気が漂っていた。熱気に包まれているのに月光聖市と清滝剛介以外全く喋らない静寂が広がっているのだ。とても千人を超える人が集まっているとは思えない空間である。

その中で月光は口を開いた。

「私が……最後の一冠を彼に奪われた日を思い出しますね」

会場が少しざわつきまた静寂に包まれた。これから語られる伝説を聞くためだ。その伝説は名人が七冠独占を達成したあの夜を指しているのだろう。

「あの日から彼は何も言わなくなつた。何を聞かれても笑つてはぐらかす様になつてしまつたのです。ところが数年前にとある人が現れた。唯一、彼と対等に語り合うことが出来た天災です。しかしその人もいつの間にか更なる青空に飛び立つた。彼は再び孤独に見舞われたのです。そんな彼に……また一人対等に語り合える相手が生まれたのです」

一息ついて彼はまた口を開けた。

「それが：私で無いのには嫉妬しますがね：」

そう笑うときさらに思い出した様に月光は清滝に話しかけた。

「そういえば清滝さんは私に竜王を預けようと思いましたね？」

「ええ。ノータイムで断られましたかね。いやね、八一を見た時思たんですわ。こりやあかん。すぐに恩返しされてまうつて。だから月光さんに押し付けようとしたんやけど流石は永世名人。こつちの目論見なんてバレてまってるんや」

会場から笑いが飛び出す。

「今でも：彼を私に預けようと思えますか？」

「：親御さんの前でこんなこと言うんのもおかしい感じが：」

そういうと八一の家族に軽く一礼して言い放った。

「八一は最高の息子や。誰にも渡さへん。おおきに八一：最高の恩返しや」



あつという間に時間を使い果たしたお互い。八一が読んだ手を超える一手を名人が放ち。そしてそれに追いつこうと最善の手を八一が放つ。すなわち：もはや強すぎて訳がわからない対局が始まっていた。

それを解説するのは一苦労だ。しかしそれでも喋り続ける。この先が見たいから：

八一が勝つ未来を。

名人が放つエネルギーが八一を確変させたと月光は言った。しかし今度は名人に加え八一もエネルギーを放ち始めた。それは日本全国へと飛んでいく。多くの将棋ファンを画面から目が離せない様な状況にし、ひたすらに『熱い』空間にしてしまっている。しかしそれだけがエネルギーでは無いのだ。

逆に対局者側にもエネルギーが届いている……と俺は思う。俺の様に勝利を純粹に願う者。息子の成長を感じる者。遠くに行つた弟を見て応援し、そこに近づこうとする者。A b e m a の解説そっちのけで叫ぶ騎士^{棋士}にして八一の最高のライバル。そして何より……じつとモニターを見つめる弟子。そう言った人々の応援というエネルギー

ギー。決して耳を通して伝わる訳がないがその力は何者にも変え難い見えない力に変わっているのは確かだと俺は思う。そんなエネルギーが通じたのかは知らないが八一は一つの境地にたどり着いた。

「負けました」

指し直し局を含めた総対局時間は29時間を超えた。3日間にも及ぶ超長期戦を制したのは……竜王 九頭竜八一だった。



怒号のように鳴り響く歓声と叫び。凄まじい勢い対局室にで雪崩れ込む記者達。もはや奇跡の奇跡を見ているような気分だ。その奇跡を伝えるために我先にと飛び込んでいったのだろう。

そんなインタビュールだったがすぐに切り上げられた。そして誰もいない記者解説室にある対局室のモニターに映ったのは……

「八一。お疲れ様だ」

「兄… 弟子？」

「そうだ。会長から頼まれて来た。この後打ち上げがある。ゆっくりで良いからこいよ。主役がいなくちゃ始まんないからな」

「はい」

「じゃ、あとはお願いな。あいちゃん♪」

「はい!!」

「え?…」

「あの… お水です」



そうして最終局までもつれ込んだ竜王戦は八一の三連敗からの四連勝という劇的な形で幕を下ろした。名人の永世七冠とタイトル100期はお預けとなりそのうちタイトル100期は年明けすぐにある名人の持つ盤王戦か玉将戦のどちらかに持ち越しとなったのだった。そしてこれだけポリユーミーだった一年が終わろうとしていた…

第三十二局 指し始め式

1月5日。この日は将棋連盟において大切な大切な日の一つに数えられる。その名も指し始め式だ。関東、関西の将棋会館にプロ、奨励会員、女流棋士や盤師などの棋界に深く関わりのある人が一同に集まるイベントだ。当然の如く、俺も出席している。

「息子^{弟子}、孫。そしてひ孫達。あけましておめでとう。今年もよろしゅうな」
「あのお爺さん誰ですか？」

会長でもタイトルホルダーでもA級棋士でもない高齢の棋士の挨拶にあいちゃんは戸惑う。

「そっか、あいはまだ会ったこと無かったね」

「そっか、あいはまだ会ったこと無かったね」

俺が同意すると八一は説明を始めた。

「あの人は蔵王達雄九段。俺の師匠の師匠のさらに兄弟子にあたる人でうちの一門の最長老だよ」

「ふえーなんか凄いですね」

「で、なんでそんな年寄りが挨拶してんのよ？」

今度はあいちゃんの横から天衣の声が聞こえてくる。

「まあ関西将棋連盟総裁って名誉職の人だし。A級経験もタイトル獲得もあるとりあえず凄い人だからかな？」

「ふーん」

興味なさそうに答える天衣。しかしこの人は凄い人だ。東西の棋士の中で最長老である。さつきも言ったが俺の師匠の師匠のさらに兄弟子だ。師匠の師匠が既に鬼籍に入っていることを考えると凄まじい。一度、順位戦で戦ったことがあるがフツーに強かった。

そんな挨拶も終わりやがて指し始め式になる。

「おう、悠斗。お前ここ座れ」

指さされたのは中央の上座。本来であれば蔵王先生が座るべき座布団だ。しかしながら体の衰えて指さないと判断したのだろう。自分から4階の宴会会場に先に移ると言われたのだ。

「いや、ここは最高位タイトル持ちの八一がいいでしょう」

「…それもそうやな。よし、八一。お前がここ座れ」

「え？俺ですか?!？」

「そうだ。さつきと座れ。蔵王達雄関西将棋連盟総裁のお言葉だぞ?」

「わかりました」

そして八一が座ったのを確認して俺も八一の隣に着座する。すると蔵王九段は師匠を従えて4階に降りて行った。なにやらしんみりした空気が漂う中始まった指し始め式だが：・ 指す相手いねー！

去年ならまだ恐る恐る若手が来たりとかしたけど本格的にこなくなってしまった：・ そんな時「悠斗さん！一緒に指しましょうよ！」1人やってきてくれた。

「お！創太か。いいよ！やろうか」

「ありがとうございます！」

梶創太奨励会二段。小学生プロ入りが期待される正真正銘の天才。最近我が家で鏡洲飛馬奨励会三段と共に3人で研究会を開いている。そんな時の人故に俺との対局が始まると周りには報道陣のカメラが寄ってたがる。

隣ではあいちゃんと八一がもめており、天衣は盤面を見て創太の指し回しに驚いている。まあな、自分と同じぐらいの子供がスーパーハイレベルな将棋をやっていれば驚くだろう。そんな時だった。

「天衣女流二級にあい女流二級。大注目のお二人で特集を組みたいのでお二人で盤にお座り頂いていいですか？」

「嫌よ」

ノータイムで天衣は答える。

「天衣。これも仕事だ」

少しきつめの声で天衣にそう声かける。

「はあ… わかりました、師匠」

渋々盤の前に座る天衣。あいちゃんもささっと座る。この時、すでに天衣は研修会のC級1組昇級していた事やマイナピ本戦でベスト8に入った事で女流二級。即ちモノホンの女流棋士になっていたのだ。あいちゃんとの差はたった1ヶ月。されど1ヶ月天衣の方が誕生日が遅い。記録を同時に達成していったとしても歴史に名を残すのは天衣なのだ。まるで俺の記録を次々打ち破る八一のように…

ちなみに盤の前に座る天衣はと言うと。記者の取材に対して定跡とも言える回答をしている。そんな天衣に対して記者は

「流石は神戸のシンデレラ。コメントも熟成されてますね〜」

「はあ!? その神戸のシンデレラって私の事? ふざけんじやないわよ!」

「いいなく天ちゃんそんな名前つけてもらえて!」

「良くないわよ! どの演歌歌手よ。その名前! まだうちの師匠の方があだ名マシじゃない!」

失礼な! 天災はもつと辛いんだぞ? 棋士室で話しかけられないし… ウツ頭が…

「あく記者さん。こう書いといてください。『将棋という魔法が私をシンデレラにしてくれたんです。この魔法が解ける前にガラスの靴を手に入れたと思います。』女王」というなのガラスの靴を』って（笑）」

「何馬鹿な事言つて笑つてんのよ！気持ち悪いポエムで記事の捏造してんじゃないわよ！絶対を書くんじゃないわよ、そんなの!!」

「天ちゃんいいなー！師匠からそんな言葉をもらえるなんて！」

「うらやましくなああい！」

しんみりしていた指し始め式はいつのまにか関西らしいワイワイガヤガヤとした雰囲気に戻っていた。



指し始め式が終わると4階に移り宴会だ。

「どうした剛介！聖市の分までのむんやろ！」

「ひえんひえい！ まらまらのみまウええええええええええ！」

師匠リバーズ。

「だらしのないなあ！せや！悠斗！付き合え!!」

「俺っすか!!？」

「悠斗も二十歳超えたやろ？飲めや！」と言いながらカッパカッパと酒を飲み干してい

く蔵王九段。おそロシア。

その様子を冷やかな目で見る天衣。うちの入門の最長老の醜態を見て呆れているのだろう。が、ダウンした師匠の介抱に晶さんを手伝わせるなど優しい一面もある。まじ天使。

俺は蔵王九段に付き合いつつ新年の挨拶もする。すると一人の男が近づいてきた。

「おう、新年おめでとう」

「あ、鏡洲さん」「あけおめでとう」

「お、悠斗も珍しく酒飲んでんのか。ほら、どーぞ」

酒もついでももらった。

「あざっすー！」

「ついでに例のデータは見つかったぞ？流石は天災だな。関東の棋士達にも動いてもらえたよ」

「まじすか…。まあ運ですよ。見つかったのもみんなに動いてもらえたからですね。鏡洲さん、ありがとうございます」「よかったですね。兄弟子！」

俺と八一が喜んでいると事情を知らない天衣とあいちゃんは不思議そうな顔をした。

「？なんのデータを手に入れたのよ」

「秘密だ」

「データ化して鵜ちゃんに渡しといたから」

「りよーかいです」

「そういえば鵜ちゃんは？いつもなら悠斗に引っ付いてるだろ？」

「あーあいつなら東京です？」

「東京？なんでですか？」

「ほら」

ラインの画面を見せる。そこには『皇居なうー』と恐れ多い感じのメッセージがあった。

「モノホンの貴族だから」

「なるほど…」「そういう事ですか」

「この子、可愛いけど俺からしたら何考えてるか分からないから怖いんだよな」

「本当ですよ」

「そうか？わかりやすいが…」

「それは兄弟子が特別なだけです！」

「そうだな。ぶつちやけもう付き合ってるな類似してるしな」

「付き合ってはいませんよ。上からの会長庄は凄いですけどね…」

そんな話をして盛り上がっている俺たち。紹介が遅れたが相手はは鏡洲飛馬奨励会

三段。29歳。勝ち越し延長というものにより奨励会に在籍している人。一般棋戦で奨励会員にして優勝経験があると言う変態。もといプロレベルの力があるはずなのだ。が、上がらない。その理由は…

「おっと、酒が切れたみたいだ。行ってくる」

まわりに気を使わずに出て遅れる。辛いものだ。本当に頑張ってる人が出世が遅れてしまうなんて皮肉な世界である。



1人でそんな風にしんみりしていると、とある人がやってきた。

「……………つぼ！」

「あ。やばい。八一！」

「え。まさか？」

「……………ぼ……………んぼ!!!」

☆以下自主規制☆

とまあ色々あつて新年を迎えました！さーて忙しくなるぞ☆

盤外編　メリークリスマス　ver. 天衣

クリスマス朝。ど平日の為街は夜までは静かな日常だ。しかしながら対局の無い俺にとつて暇な1日……。と思つたが昼ごろうちの弟子が何やらいい感じだと例の変態からLINEが飛んできたので行つてみる。呼び出されたのは神戸にある喫茶店。

「晶さん。それでどうしたんですか？」

「うむ。先生……。実は今日、お嬢様の授業参観なのだ」

「……ほう」

「しかもサンタ帽子を被つて合唱との事だ」

「……ほほう」

「見たくないか？」

「それは……。是非見たい」

力のかもつた返答をした。

「流石先生。先生ならそう言つてくれると信じていた。早速だが……。行こうではないか」

「もちろん……しかし保護者でも無い私が入れるのですか？」

それが1番問題だ。

「大丈夫。問題ない！緊急連絡先に先生の名前も載っている。それがあんなら十分だ！」

「っ！流石だ……流石は晶さん！全ての問題は解決したじゃないか！行くぞ！素晴らしき世界へ！」

「もちろんだ！」

2人は小学校に向けて力強い一步を踏み出した。



天衣の素晴らしさについて語り合いながら俺は車を走らせてやってきました。天衣ちゃんの学校！着くと晶さんが要らない心配をしてきた。

「先生！変装するべきではないか!?？」と、思っママスクとかカツラとか持ってきたのが……」

「いりません！」

「しかし……それでは天衣お嬢様にばれてしまうのでは？」

「晶さん……甘いですよ！」

「甘い……だと!?？」

「俺が来ているという事をあえて前面に押し出すことで天衣は恥ずかしがる筈！ そうすればどうでしょうか？ サンタ帽子に恥ずかしさで頬を赤く染める天衣の完成じゃないか！」

「くっ！ まさかその境地まで到達しているとは……流石は先生。私の予想を遥かに超える思考を持つておられる！ それで行こうじゃないか！」

「もちろん！ いざ体育館へ！」

体育館にはすでに保護者の方々が多少は集まっていたがそれでも空きはあるので前の方に座れた。思えば俺が小学校の頃は中々大変だったな。小5で奨励会に入った時も急に休み出すから学校に何があったか聴取のための面談があったし定跡覚えたりと色々大変だった。うん、凄い大変だった。

そんな思い出に花を咲かせていると隣で色々やってる晶さんが見えた。よくみるとGoProやら一眼レフやらなんやらを用意している……あ、この人本当にダメなタイプだ。

「それでは只今より四年生の発表をはじめます！ 四年生、登壇！」

そういうアナウンスと共に四年生の子達が一斉に登壇した。その中に天衣を見つけた。視線がこつちに近づいてくるのを確認して手をふる。俺に気づいた時の天衣の顔を俺は一生忘れることは出来ないと思う。可愛いの一言しか出てこなかった。

隣の晶さんは「くっ！こなくそ!!」と言ってなんとか耐えている。

「晶さん！大丈夫ですか!?!」

「ああ…… なんとかゴフツ…… お嬢様の勇姿を見届けるまでは死ねないのだ」

「っ！晶さん！手伝います。共に頑張らしましょう！」

「先生…… ありがとう。共に頑張ろう！」

「「おお！」」

こんな風に俺たちが意味わからんことで一致団結している一方、天衣は。



やりたくもない合唱のために登壇する。いつもの様に晶とお爺ちやまが来ていると
考えて私は2人を探す…… そして晶を見つけた。その横に目をやるとそこにはいる筈
のない人が1人手を振っていた。

「にやにやにやんであいちゆが!?!」

その人は紛う事なき私の師匠。たしかに今日は対局がなかった筈だけど…… だけど
なんで？あ、晶…… 後でぶちころしゆ。

でも…… 恥ずかしい！恥ずかしい！よりもよってこんなサンタ帽子被って合唱な
んて時に来られるなんて！

「天衣ちゃん…… どうかしたの？」

あまりに取り乱していたのか、隣の奴が声をかけてきた。平常心を保つために今だけはありがたいわ。

「にやにやんでもにやいわ!」

「なら良いけど...」

だめ! 全然平常心を保てない!! あゝもう! 合唱始まったじやない!!

▲▼▲▼▲▼

聴き入っているとすぐに合唱が終わってしまった。

「我が生涯に... 一変の悔い... なしゴフツ」ドサツ

「晶さん!」

晶さんは合唱が終わると同時に散ってしまった。

合唱が終わるとその日の学校は終わりだったらしくそのまま解散となった。天衣がめっっちゃ恥ずかしそうに頬を紅くしてこっちにすぐに近づいてきた。

「にやんでアンタがいるのよ!」

「にやんでだろうな。俺もびっくりだよ」

「晶! 犯人はあにやたね!」

そう言われると吐血してぶつ倒れていた晶さんは何事もなかった様に立ち上がり「はい、是非ともお嬢様の可愛さを先生にもご堪能頂きたく!」と言った。

「そんなことするにや!」

「まあまあお嬢様。落ち着きください。先生から感想を頂きましょうよ」

あ、話を逸らしやがった。

「: : : そうね。どうだったのよ」

「まあ: : : 中々良かったな。一生懸命やってたし、何よりクラスに意外と馴染めていたしな。俺なんて小学校後半は奨励会があつて中々酷かったからな」

「ふ、ふうん。それなら良いわ」

「ん。そら、帰るぞ。晶さん、乗つてきますか?」

「もちろん。お願いしよう。さあお嬢様も行きますよ」

「あ、待ちなさいよ!」

天衣の合唱が聞けて大満足の天災さんでした。皆さん、Merry Christmas
as!

盤外編　　メリークリスマス　　v e r . 万智

クリスマスとは元来、イエス・キリストの生誕を祝うキリスト教の祭りだ。そのためええとこのお嬢様（貴族）を大元にもつ万智の家はあんまり「メリークリスマス!!」とかやらないと思つてたが…

「悠斗はん。メリークリスマス!」

そんな事はなかった。積雪10センチとかいう長いこと大阪に住んできて初めてレベルの大雪が積もつた中、ふつーにスカートのサンタコスをした万智が玄関の前に入った。というかサンタコスとか初めて見たわ。

「… おはよう」

「もう悠斗はん!そこは『おはよう』ちゃうくて『メリークリスマス』つて言うて欲しおす!」

「あゝはいはい。メリクリメリクリ。じゃ、気をつけて帰れよ」

扉を閉めようとすると

「入れてくれな叫びますえ?」

「… どうぞ」

流石にそれは危ない。それはズルすぎる。そんなん断らんやろ。というかこいつは入れてもらう前提で来てる。証拠に防寒対策はゼロだ。



「で、なんでお前は俺の上に乗っちゃってるの?」

部屋に入れて俺のジャージ（最近は万智用）に着替えさせた万智。俺がコタツに入っ
たと思えば万智はその膝の上に乗っちゃっている。

「だめどすか?」

「いやだめな事は無いが…」

「なら別にええじゃあらへんどすか?」

あ、一生動かない気ですね、ハイ。

「全く…俺はお前の椅子じゃねえんだぞ?」

「なーんにも聞こえないどす。それより寒いどすなあ?」

「うん。寒いな」

「こーんな寒い部屋は耐えれまへん。もつとこなたを暖めて欲しおす」

「…仕方がないな。電気代もつたないけど風邪ひかれても嫌だから暖房強くしてく
るわ」

「…」 「ぶっすー」

その言葉を聞いた瞬間、絵に描いたような不満気な顔をして抗議の意を示してくる万智。これはこれで凄く可愛い。文句は言わせん。

「なんだその顔。なんか問題でもあったか？」

「悠斗はんのいけず。わかってるくせに……」

「ふふっ…… 仕方がないから暖めてあげよう」

そういうと同時に万智が俺にもたれかかる。万智の髪の毛のいい匂いが全力で俺の顔にぶつかっており中々辛い。

「ほーら♡しつかり暖めて欲しいぞすえ」

俺の腕を掴むと自身の体の前に俺の手を引っ張った。さっさと抱きしめろという事らしい。

「はあ………」ギョツ

「♡♡♡」

しつかりと抱きしめた瞬間、万智の体温がダイレクトに加わる。寒いとかいっときながらやはり温かい。細くしなやかな体をギョツと抱きしめると折れてしまいそうで心配になる…… 割と本当にそう思う。しかし…… これだめでしょ。まだ付き合っただけでいいない2人があすなろ抱きつて言うんだったか…… やばない？

「んっ今日は一日これでいてはる♡」

「あのく俺動けない」

「別に動かんでええどすえ。ず〜つとこなたを暖めとおくれやす」

「うそおん」

その後、万智は体制を変えながら俺の上に居続けた。俺の胸に顔を押し付けてみたり、頭でグリグリしてみたり頬擦りしてみたりと色々やってきた。

「ん〜♡」という悪魔的な声を上げながらずつと乗つかつてる万智はさながら理性クラッシュだろう。



本当にあれから半日動きませんでした☆足はいい加減痺れてきた。そして日も傾きリア充どもが蔓延る夜がやってきそうだった。そうなる前にケーキをさっさと回収したいしご飯も作らないといけないし。

「あのく万智さん?」

「なんどすか?」

「そろそろ夜ご飯の用意をしなければならんですが…」

「い〜や♡」

めちやくそ可愛く断られた。くつそ!めつちや可愛いなあ、おい!そうしてる間にも万智は猫みたい俺の膝の上でくるまって俺の胸に頬擦りしている。何この可愛い生

物。

「でもそろそろ本当にご飯作らないといけないんですわ」

「ん〜仕方があらへんどすなあ〜どいたるわ」

「ありがと」ギユツ

ん？ギユツ？

「ん〜万智さんや。後ろから抱きつかれたら料理出来んがな… 離れて欲しいです」

「いやどす☆」

「デスヨネー」

本当は危ないから離れて欲しいが…

「とりあえずパスタ… スープ。あとはローストビーフ辺りかな… 万智、お前どうせ

泊まってくつもりだろ」

「正解どす」

「まあそうだな。荷物が堂々と置いてあるからな！」（怒）



作った料理を2人仲良く食べる。風呂は… この極寒の中近所の銭湯行ってきました。突撃されるよりマシです。

「さてと… 布団はどうしたものか」

「こなたはここで寝る！」

そういうと俺の布団に飛び込む万智。離れる気は毛頭ないだろう。でも離さなければならぬ。俺の布団を！俺の温もり空間を侵される訳にはいかない！

「くっそ！さっさと出ろ！布団は用意してやるから」

布団を引つ剥がそうと必死になるが全く離れない。こいつの接着力まじでどうなってるの？

「いやーどーす!!そないに寝たいなら悠斗はんも入ればええどっしやる。ほらほら、半分あけたるよ♡」

そう言つて半分開けた布団からお稲荷さんの狐みたいににゅーって伸びた口で笑う万智。もうやけくそだ！

「あーやつてやろうじゃねえか！寝てやろうじゃねえか！」

そういうと俺は布団に入る。万智は予想外の切り返しに驚きつつやつぱり引っ付いてくる。

「ん〜やつぱり悠斗は暖かいぞ。むしろ一生このまま悠斗はんも布団に潜つとつたいぞす♡」

「あつそ」

やつぱい。さつき以上にダイレクトに万智のいい匂いが鼻腔を刺激する。なにこれ

? やっぱりシャンプルーなの!?? それとも万智自身がいい匂いなの? ひとまずやばい!

「ん〜なんどすか?」

「なんでもない。ほら! さつさと寝るぞ!」

「え〜そんな〜。せつかくのクリスマスどすよ?」

「そのクリスマスに一日中人の膝の上に乗ったのはどこのどいつだ!」

「こなたどす!」

「だよな! ならそんなこと言うな!」

「はーい。まあいいどす。今年はいええクリスマスやったさかいよろしおす。悠斗はん、

メリークリスマス♡」

「ああ、メリークリスマス」

サンタさんは空を歩む。皆さんも、メリークリスマス。

第三十三局 A I 将棋

指し始め式から数日後。俺は今年初めてとなる天衣とのレッスンの為、神戸を訪れていた。そして不意に俺はこう言った。

「そういえば！」

「何よ。急に大声出して」

「いや、お前に言い忘れていた事があったな」

「なによ？」

「そろそろ連れてってやる。もう資格はあるしな」

「どこに？」

「ん？決まってるだろ？棋士室に決まってるじゃん」

「へ？」



と、言ったものの都合の良い日が揃いも揃って無かったので八一にあいちゃんと一緒に連れて行く様にお願ひした。そして俺が凄まじく大事であり都合が悪くなっただけで、まった理由はこれだ。

「一ノ瀬二冠！おはようございます！本日の順位戦。対局相手は……！」

そう。A級順位戦だ。いつもの半分くらいの記者が俺に詰め寄る。適当にあしらいつつ将棋会館に入った。このタイミングはいつも記憶がほとんど無いほど集中しているのだ。いつもの半分くらいという理由は俺の対局が今日のA級順位戦メインディッシュじゃ無いからだ。

普通なら無敗で来ている現在トップの俺に集まるが今日は訳が違う。生石充玉将vs於鬼頭曜帝位。タイトルホルダー同士。さらに今度始まる玉将戦の対戦カードなのだ。つまり今回の順位戦は玉将戦の前哨戦。どちらにしても負けたく無い一戦である。

「ま、気にしてる場合じゃ無いけどな」

本来なら下座に座りたいところだがタイトルホルダーとして俺は上座に座る。盤を挟んで向かい側にいるのはA級棋士にして十七世永世名人の資格を持つ盲目の天才棋士。月光聖市九段。強敵。

「おはようございます」

記録係の子にそう言うとお上座についた。凜とした顔の向こう側にはありえない程の深い思考が巡っているのだろう。俺の呼吸一つ一つまで全てを理解して将棋を指しているのだと考えれる。

「時間になりました」

「「「よろしくお願いします」」」

一斉に戦いの火蓋が落とされた。

▲▽▲▽▲

対局が終わって見れば大熱戦。日付を跨ぐ前になんとか終わったが凄まじかった。終盤まで全く評価値の揺れない戦いだっただけならいい。なんとか競り勝ったが居飛車も考えものだ。新しいものを考えなければならぬと痛感させられる。そんな事を考えていた俺は俺は疲れもほどほどに棋士室に直行する。

「うーす」

みんな俺の登場に流石に目を丸くする。当たり前前だ。対局。しかもA級順位戦が終わったばかりの棋士が棋士室に顔を出すなどありえないのだ。

「生石玉将はやっぱ辛そうか？」

モニターにかぶりつく八一と鏡洲さんに聞く。

「そうですね。：。帝位の研究がここまで振り飛車に対応できるほど進んでいるとは思いませんでした」

「そうか。鏡洲さん的にはきついですよ」

「正直ね。生石先生のこんな姿は見たく無いよ」

鏡洲さんは根っからの振り飛車信者。生石玉将は神に等しいのだ。何故ここまで生

石玉将が苦しそうなのか。理由は終盤に大きな悪手を指したことにある。序盤に大きなリードを作り、中盤にそれを拡大した。

「なんでこんなミスをして…」

鏡洲さんがつぶやく。

「錯覚でしょう。そうとしか思えない」

「ですよね」

八一も俺の意見に同意する。

「やはり生石玉将が本局で出した新手の構想がぶつ飛び過ぎてる。生石玉将でも付いていけなかったというのものもあるだろうが…」

この負け方は既視感がある。色々などころで見えてきたからだ。それは

「AIに対する負け方だな。これは」

「ですな」

序盤にリード。中盤にリードを拡大。が、終盤でミスって逆転負け。よくあるAIに人間が負けるパターンだ。

何故この負け方を対人戦でしたか。それは生石玉将の対戦相手にある。対戦相手は於鬼頭曜帝位。現在一敗のみでA級2位だ。それほどの実力者だが過去に一度、名声も、強さも失った。果ては命さえも失いかけた。その理由は現役プロで初めてコンピュータ

「タに負けた」と言う事にある。当時は酷いバッシングの嵐だったと聞く。時代背景もあるし仕方ない事だがそれでも凄かったらしい。

そんな於鬼頭曜帝位はそんなどん底から、また舞い戻ったのだ。しかし、そこにいたのは昔の於鬼頭曜ではなかった。於鬼頭曜という形をしたコンピュータのようなものだった。コンピュータに負けたのち対人の研究を全て辞め、1人でずっと対AIの研究に励んでいた。故に棋風はそれに近くなり無慈悲なほど正確な終盤はそれを物語っている。

「投げれない。残念棒だな」

八一も鏡洲さんも無言で頷く。

残念棒。自分の手番で時間を消費しつつも結局指さずに投了する。その場合、消費時間は記入しなくてはならないが指し手は書くことが出来ない。故に指し手のところには『ー』と横棒が引かれるのだ。すぐに投了すれば引かれない。しかし、頓死やどこで間違えた分からない様な急な敗北ではそれすら余裕も与えてくれない。故にそれは棋譜としてその棋士に永遠の傷と屈辱を与えるのだ。

特に美意識の高い生石玉将なら尚更応えるだろう。この負け方の流れは恐らく長い事引きずる事になるだろうと俺は確信した。



八一は対局室に行き、鏡洲さんは余りの辛さに帰ってしまった。深夜0時をとうに回った棋士室には俺のみが取り残されていた。1人残った俺が見たのは対局室の映し出されたモニター。それに映される部屋の様子。そこにはモニター越しにでも分かるほどの重く苦しい空間が広がっていた。

無言で執り行われる感想戦。手を戻して違う手を生石玉将は叩きつける。が、無慈悲にもその全ての手を於鬼頭曜帝位は殺してしまう。普通、感想戦と言うのは対戦相手を尊重してわざと勝たせてあげるのが通例みたいなものだ。しかし、感情なんてほとんど捨ててきた於鬼頭先生にはそれは通じない。関係無いのだ。

結局、今回の対局の感想戦は対局者どころか記録係すら一言も喋らないで終了した。



「兄弟子」

「なんだ？」

目を跨いだばかりの寒空の下、連盟からの帰り道に八一が話しかけてきた。

「兄弟子はどう思いますか？」

「何がだ？」

「AIとかコンピュータとかです。それらを将棋に使うのはどう思いますか？」

「そうだな……俺はどちらかと言えば賛成派だ。俺の感性からすればAIの将棋は強

い。とても強い。そして何よりどんなルートを辿つても確実にその対局のゴールに導く手をくれる。うまく利用出来ればとても良いだろう」

「っ！」

「だが、AIに相談してまで勝ちたいかどうかだな。第一にAIの指し回しは理解するのに凄まじい棋力がある。何故なら人間とAIの感性は違いすぎるからだ。たしかにAIの指す将棋を完璧に指しこなす事は俺には可能だ」

「…」

「だけど気持ち悪すぎるんだよ。人間の感性を保つたままだと。だからこそ於鬼頭帝位はその部分を削ぎ落とした。それが唯一、あの不自然なAIの将棋を違和感なく指し回せる方法なんだ。さつきも俺はAI将棋を指せると言ったがそれが嫌でついにはそこには辿り着かなかった。そことはまた別の場所に俺は立っている。お前がどこを指すかはお前自身だから」

「そうですか」

AIと人間の感性が違いすぎる。これはごもつともな話だ。例えばAIによる将棋の評価値において飛車先の歩を切ることは損。さらにAIは角という駒にそこまでの評価をつけない。だからこそバンバン角を切ってくる。とてもじゃないが通常の間が指し回さないほどに。

「どうせ生石玉将の研究会にでも呼ばれたんだろ？この棋譜持つてけ」
「これは？」

「さつきちよつとだけ考えたやつ。もつと良い手はあつたかもしれないが即興だったからな。だいぶ役には立つと思う」

「ありがとうございます」



兄弟子と別れた後、俺は1人アパートの玄関前で棒立ちになつてしまつた。そして脳内をさつきのワンフリーズがぐるぐるとしていく。

「AIの指し回しを完璧に指しこなせるのか……そんな事」

そんな事は恐らく名人にも出来ない。俺は現状、AIの指し回しを1番うまく指せると思つてゐる。けどそれは真似事。兄弟子は人間の感性のまま完璧にAIの指し回しが出来ると言つた。その差は……歴然。

「兄弟子は……どこまで行くんですか？俺はどこに立てば良いんでしょうか？」

盤外編 新年のご挨拶

皆さんあけましておめでとうございます。遂に2021が始まりました！今回、挨拶を書かせてもらっているので悠斗達の出演は無し！…とりたいですが特別ゲストとして天衣ちゃんにきて頂きました。ドンドンパフパフ！

「ふん。なんで私だけ呼び出されたのよ」

「それは天ちゃん人気が高いからです」

「あつそ。やつぱりコンが多いのね。気持ち悪い。あと天ちゃん言うな」

「読者様にそれは毒舌すぎませんかね？」

「で？何やるのよ」

「実はTwitterのDMに質問がちらほらやって来ていたのとコメントに来ていたやつについて改めて答えて行こうかなーってね。ちなみにTwitter垢はこちら↓
<https://mobile.twitter.com/fykzwcjcpldgplm?lang=ja>

引き続き質問はいつでも募集しています！」

「あつそ。じゃあさっさとやるわよ」

「珍しくやる気だね」

「さつさと戻りたいだけよ」

「さいてすか。じゃあ一通目。中の人は居飛車は指さないんですか？です。そーですね。中の人は基本振り飛車。もつといえは四間飛車やゴキゲン中飛車。あとは藤井システムが固いですね。最近のエース戦法は藤井システムなんです。居飛車はたまに指しますがまだ対人戦で指せるようなものでは無いので練習中です。居飛車なら相掛かりや横歩取り。棒銀が多いですね」

「あんな、意外と居飛車も頑張ってるじゃ無い」

「うーん。それでもやっぱり振り飛車信者だからね。藤井猛先生とか神に等しいよ」

「そーなのね」

「じゃ、これについては以上です！次に2通目。中の人はどの先生のファンですか？」

「そうですね。憧れならやはり羽生先生や藤井猛先生とかですね。でも純粹に好きな将棋を指してくださるのは豊島先生ですね。ちなみに小ネタですが一ノ瀬悠斗の棋士番号は豊島先生と同じなんです、はい」

「ふーん。じゃあこの前の竜王戦とか豊島竜王と羽生九段が争ってたじゃ無い。どっちを応援していたの？」

「正直迷いに迷った。どっちが勝っても記念すべきものだからね。結局決まらないまま

終わってしまったよ」

「優柔不断ね。しっかりしなさいよ」

「へい。じゃあこの質問もこれでいいか。次！中の人は将棋部なんですか？」

「実は違います！将棋部にしようとしたんですけど行きたい学校に将棋部が無くてですね。まあ他の部活でエンジョイしてます」

「意外ね。ちなみにどう言う部活なの？」

「それは秘密で。中学校の部活は水泳部でした。これで許してください」

「ふーん。まあ大学行ったら将棋やるつもりなんですよ？どうせ」

「正解☆楽しみですね、はい。じゃあ次！中の人が会ってみたい棋士は？」

「そーですね。さっき上げた御三方は勿論のことやっぱり同じ東海出身の藤井聡太二冠や渡辺明名人。に特に会ってみたいですね。女流棋士だとやっぱり香川愛生女流三段とかですかね。美人だし、将棋強いし。ちなみに勿論、チャンネル登録はしてます☆」

「やっぱ、名人には会ってみたいわよね。一回は」

「そうだね。今あげた先生でもほんの一部ですし、他にも会ってみたい先生は沢山いらっしやるけどやっぱり名人である渡辺先生は外せません。じゃあ次！」

「次は駒で一番好きなのは？です。中の人は振り飛車党なのでやはり戦いの要である飛車ですかね。角はバンバン切っちゃうことあるんですけどねー」

「ふーん。私はなんとも言えないけどやっぱり角かしらね。1番動けるし」
「なるほどね。じゃ、次！」

「次は今後他の作品でs sは書きませんか？てすか」

「これは俺しか答えられないからなあ。そうですね。実は色々考えていて今は、鬼滅の刃について少し模索しているところです。まあ主軸は兄弟子のおしごと！で行くことには変わりありませんがね」

「鬼滅の刃。人気よね」

「ですね。個人的には鬼滅の刃はとても面白い作品だと思いますね。なんか一部の人の印象が強くてあんまり良いイメージが無かったりしますからそこが残念で仕方がないですね」

「まあ民度の問題はまちまちよね。作品自体はとても面白いのに」

「まあそればかりは仕方がない事ですから。ひとまず乞うご期待！と言うことにしておきます。話しがこれ以上脱線する前に次行きましょう！」

「次で最後です。さいごはコメ欄より。想像したら天衣ちゃんが可愛すぎて鼻血が……」

口調から猫耳天衣ちゃんも想像して……アツ（昇天）とのことですが天衣ちゃん？」

「きつつつつも。本当にキモいわ」ゴミを見る目

「えーっと、俺は分かるのでここは応援にお答えして秘儀。編集！」
神の力

「にやに厨二病ぼくなつてるによよ。つて！にやんで！！」

「我が辞書に不可能な文字無し」

「ふざけんじやにやいわよ！！殺す！ぜったいに！！」

「いやー可愛いわー」ナデナデ

「にやでるなー！！」

「いやー皆さん満足して頂けましたか？」

「ころしゆ。確実にころしゆ。これを見たやちゆら。覚悟しにやさいよ！絶対に許さ

にやいんだからー！」

「じゃ、そろそろ魔法を解きましょう。はい！」

「やつと戻った。ほんつとにふざけんじや無いわよ！」

「はーい。じゃあ本日はこれで最後です。改めて皆さま、新年あけましておめでとうございませう。今年度も皆様が健康でより良い一年が過ごせますように心よりお祈りしております。また、今年度も引き続き『兄弟子のおしごと！』をよろしく願います。

第三十四局 1人じゃない

「ん。今日はこれまでにしようか」

「は？早くないかしら？」

とある日、俺は天衣とのレッスンを早く終わらせた。

「この後、ちよつと天衣にもついてきて欲しいところがあるんでな」

「へー。くだらない所に連れて行ったら殺すわよ？」

「くだらなくは無いはずだ。そら、さっさと行くぞ。この為だけに車で来たんだから」
小学生にバイクは個人的に危ない。以上。



「さて、用事があるのはここだ」

「碁盤屋？なに？盤でも買ったの？」

「いや、盤は買ってない。とある物を作ってもらったんだよ」

「へー」

「興味なさそうだな」

「たかだか、駒か盤でしょ？」

「たかだか、か。お前は将棋の神様を信じるか？」

「なにそれ？そんなのがいる訳無いじゃない」

「さあ、それはどうかな？俺は少なくとも、いると思うよ」

「？」

「さて、じゃあ入ろうか」

「シューマイ先生ー！ご無沙汰してまーす。一ノ瀬悠斗ですよー！」

「おー！！悠斗じゃ無いか！まだ万智とはピーーしてないのか？！」

「して無いですよ！てか辞めてください！弟子の前で」

「ん？おー！！お前が悠斗の弟子か！なんだあ？師匠とピーーしたのか？いいなあ！二十

歳過ぎたばかりのバツキバキのピーーなんて！！」

「シューマイ先生！辞めて！弟子の前！」

「ねえ師匠？」

「なに？」

「さつきからシューマイって言うけどまさかこのベロンベロンに酔った変態が本因坊秀埋って言わないわよね？」

「いや、ガッツリ本因坊秀埋だ。本名は天辻埋。超優秀な盤の制作者にして囲碁の本因坊のタイトルを持つスーパーハイスペックな人なんだけど……普段からベロンベロ

ンに酔ってて卑猥な発言を連発するんだよ」
「……」

天衣は信じられないと言う顔をする。それもそのはず、この天辻埋と言う人は女性で初の女性囲碁タイトルホルダーなのだ。囲碁は将棋に比べてプロ入りの条件が厳しく無い為、女性棋士が少なくない。しかし男女問わず参加するタイトルを取るほどの活躍を見せているのはこの天辻埋さんぐらいだ。

ちなみに本因坊秀埋というのはタイトルが本因坊と言い慣例でその雅号を名乗っているのだ。本因坊と言えば将棋の名人に相当する凄いタイトルだ。そんな人が……ちなみにこの人、正月にピーーって将棋連盟で叫びまくって将棋界を永久出禁となったのだった。また一つ将棋界がクリーンになりました☆

「先生。さっそくですが例の物を出して頂きたいのですがよろしいでしょうか？」

「おー！勿論だ！中々良い風に出来上がったからな。自信作なんだが、まあ本人に確認してもらおうのがいちばんいいだろう！」

そう言つて天衣に渡された駒箱。

「駒ねえ」

「これが俺が出来る精一杯のプレゼントだ。おめでとう。よく女流棋士になってくれたな」

「プレゼントトって高い駒でもどうせ水無瀬とかでしょ？そんなのいくらでも……見……た……えっ？」

「誰の書体かわかるか？」

「お父……様？」

「そうだ。お前のお父さんの書体だ。よく分かったな」

「な……なんで?!?お爺ちやまは全部燃やしたって！」

「関東の大学出身なんだろ？だから俺ととある人のツテで探してもらったんだ。結局その人が見つけたんだけどね」

「誰なの?!?この棋譜を見つけたのは」

「鏡洲さん」

「あの年寄り奨励会員が？」

「うん。それだけじゃ無い。関西の支部の人や関東のプロ棋士の人なんかにも協力してもらった。みんな天衣の為に動いてくれたんだよ」

「なんで？なんでみんなが……」

「みんながまた天衣とお父さんが将棋を指して欲しいと思ったからだよ。みんなそう思ったからだよ」

「っ！」

「それと： 忘れないで欲しかったんだ。天衣は1人でなんでもやっちゃう凄いい子だ。弟子としてここまで優秀な子はそう居ない。だけど1人でなんでも抱え込まなくて良い。師匠の俺も居る。鏡洲さんみたいな奨励会員の人もいる。あいちゃんや八一だっている。みんな天衣の仲間だからしつかり頼れよ」

「はい！……はい！！」

「うんうん。将棋の神様は将棋を愛する全ての人の元に降りてくる。天衣の場合はその駒に降りてきてる。頑張ろう。その駒で。お父様が喜んでくれる様な将棋を指す為に」

「……はい！！」

盤屋を出て駐車場に歩き出してもポロポロと涙を流す天衣。表面上、ツンツンとしていて1人でいるような子だけどやっぱり心の中はとっとも優しいいい子だ。

そんな時だった。遠くから大きな声で『号外!!号外!!?』と聞こえてきた。

「将棋の奨励会で三段昇格者が出ました！」

「っ！」

「ねえ師匠。これって……」

どっちだ。最年少か。史上初か。



関西将棋連盟で行われる奨励会。プロを目指す全ての人が通る道。勝つことだけが正義とされる地獄みたいなものだ。

結論から言つて仕舞えばここで私は勝つことが出来た。今日、三段に昇格することが出来た。だけどそれは指運だった。追い詰められて神に祈つて指した一手が詰める逃げの詰めるだったのだ。普通はありえない。見えてこないものだ。だけどそれは起きた。将棋の神様が起こした奇跡となつて成り立ったのだ。

嬉しい……訳がない。勝つたのに。三段に昇段出来たのに。兄弟子の言つていた「勝つたのに勝つたと思えない」と言う意味がよく理解できた。

盤の前から動けなかった。「奨励会は勝利が全て」とよく言うが私にとつてはそれは半分嘘だ。精神的に傷つけられては立ち直りづらい。私は今、それにあつたのだ。

「……」

ただひたすらに盤を見つめて動くことが出来なかった。

次からは奨励会三段。三段リーグ。即ちプロへの最後の関門にして最も辛く厳しい門だ。あと一つ。されどあと一つ。それを越えればプロ棋士。大好きな八一や最も尊敬し、憧れている最強のお兄ちゃんが待つ世界なのだ。だから……神様。私にどうかあと半年、三段リーグを戦い抜く力をください。お願いです……

今季の奨励会は終結を迎えた。昇段したのは空銀子、そして櫛創太。新しいメンバー

を迎えた三段リーグが始まろうとしてた。

第三十五局 壁

『推挙状』

豪華絢爛なホテルの大広間に月光聖市会長の涼やかな声が朗々と響き渡る。

『貴殿は今期竜王決定戦で優勝されました。依つて茲に第三十期竜王に推挙致します』

現在盛大に執り行われているのは第三十期竜王戦優勝者の就位式だ。ちなみに竜王戦の優勝者には推挙状が送られる。名人戦は推戴状。玉座戦は允許状。玉将戦は贈位状。その他のタイトルは就位状が送られる。書かれている内容こそ似ているがよく見ると違いがあつて面白い。

続いて準優勝者である名人をはじめとして各組の優勝者の表彰が行われる。

「しかし、八一も大きくなりましたね」

「そうやな。気づいたらわしでも取つた事ないタイトルまで取つてまつた。もちろん悠斗もやがな」

「それでも竜王には敵いませんよ」

「竜王も各式高いタイトルやからな。でも名人には敵わへん。わしらにとつて、名人は絶対的なものや」

「：：
ですぬ」

適当に合わせたが師匠は本気でそう考えている。師匠の様にひと昔前というかなんというか年配の棋士は「命に変えても名人を取りたい」という思いがあった。何故なら名人は大橋宗桂に始まり最も伝統あり、格式がある物だからだ。俺は数日後、それが何たるものかを知った。



そんな竜王戦の就位式を終えた数日後。今度は大阪で清滝一門による所謂ファン感謝祭が行われた。簡単に言えば清滝一門を支援してくださる方々をお招きして交流しよう！という催し物だ。しかしファン感謝祭にしては馬鹿でかい会場とっていたホテルの大広間にはそれを埋め尽くすほどの人が来ていた。

理由をよく考えてみると意外と当然かも知れない。ちなみに理由とはまず①竜王と女王・女流玉座がいる。②史上最年少の女流棋士がいる（しかも女王戦の挑決までいっている）③一応タイトル二冠の俺氏（しかも永世位取ってから初のファン感）。④師匠は関西の中では意外と重鎮。⑤桂香さんは女流棋士となった事で最近話題。

以上のことが考えられる。あれ？普通に集まりそうな理由だわ。その後、師匠による挨拶が始まった。

振り返ってみれば祖父とともに将棋のHHK杯をTVで見たのを皮切りに将棋にの

めり込み、初めて会ったプロ棋士である師匠に憧れ、何度も会って弟子入りをお願いして弟子になり……。色々あったのを思い出した。

その次は各席を周って挨拶をする。師匠と八一はセット。俺は単体だ。

「おう！天災が来たぞ！」

「おー！よおやつとるやんか。A級1位おめでどう！」

「ありがとうございます！」

A級1位おめでどう。心に沁みている。実はこの時点でA級順位戦は残り一局。その時点で俺は今期全勝で1位をキープ。2位の於鬼頭曜帝位はA級序列3位で7勝1敗で2位。最終局は俺vs帝位なのでこの時点で俺はA級順位戦プレーオフ以上が確定。なおかつ2位の於鬼頭帝位が序列3位で俺より下なので順位戦自体では1位通過確定なのだ。

ちなみに最終局で勝てばそのまま名人戦挑戦者になることが確定。負けてもさつき言ったプレーオフに1位として出場確定なのだ。

そんなガヤガヤとした雰囲気^{クソメガネ}が伝播したのか八一達のほうでも「名人(クソ失礼)を殺せ！」的な事が始まりしまいにはさつきと名人になっちまえるな事が言われていた。そしてそれに対して八一は「まあ再来年には……」と言ってしまった。

それを聞いた師匠はテーブルを思いつき叩いてブチ切れる。

「C級風情がタイトル防衛したくらいででしゃばるな！わしはC級でやるくらいなら『引退』するわ！」

「っ！」

会場中に響き渡る大声で叫んだ『引退』という言葉にその会場にいた全ての人が息を呑んだ。師匠がA級だったのは今から5年前の事。しかもその時、師匠は名人に挑戦しているのだ。師匠として譲れないものがあるのだろう。

タイトル経験が無い師匠にとって棋士としてのプライドというか誇りというのは名人に挑戦したという事実だ。神と戦ったという真実だけが清滝剛介九段にとっての誇りでありそれを支えに今までプロとして生きてきたのは明白。

そこに八一というC級2組の人間が「名人に挑める」とも取れる言葉を吐く事はあつてはならない事だ。そもそもプロの世界。もつと言えば順位戦には個人的にそれぞれ越えられない大きな大きな壁が存在すると思っっている。

A級はたった10人のみしか在籍を許されず、このたった10人のみが名人戦挑戦者となる可能性を秘めている。故にこの世界は他の世界とは別世界であり、銀子が言う将棋星人の中でも決して息を吸う事ができないほどの空間だからだ。B級とは訳が違うのだ。

しかし、だとすればC級とB級の違いはなんなのか？単純に言えばタイトル戦などで

優遇を受けれるのはB級以上というものが3つある。これは非常にデカイのだ。その証拠に俺も、はじめて玉座を獲得したときはB級2組で1次トーナメントをパスできたのが大きいと今でも思っている。

それほどまでにそこには大きな壁がある。まして八一はC級2組。フリークラスを除けば一番下にいるのだ。師匠がブチギレるのも分かる。

しかし八一とて引き下がれない。何故なら八一は棋界最強皇のタイトルを持つ者だからだ。いや、タイトルを持つ。それ即ち最大で同時にたった7名しか出来ない存在だからだ。故にそのタイトルの格式、権威皇。それを守る為に俺たちタイトルホルダーはきちんとした態度を示さなければならない。それが例え、年長者であっても。師匠であってもそれは絶対なのだ。

「師匠…」

「もうええ。お開きや」

こうして一門の感謝祭はなんとも言えない雰囲気のまま終わってしまった。

▲▼▲▼▲

「あれ、大丈夫なの？」

「ん？師匠か？」

帰路に着いた俺はひとまず天衣を送る為神戸を目指していたわけだが。道中、天衣は

わりかし心配そうに訪ねてきた。

「そうよ。どう見ても八一とあんたの師匠の関係性が最悪まで落ちた感じがするけど？」

「そうだな。八一は超えてはならないものを超えてしまった。昔気質の師匠ならそれは絶対許さないはずだ」

「… やっぱりそんなに名人に拘るのね」

「だろうな。名人という名声は死してなお、一門という血を引き継いで弟子たちが悲願にして叶えにくほどのものだ。意義は大きい」

「師匠としてはどうなの？」

「そりゃ名人位って言えば俺からしてもとても意味ある大きなものだ。他のタイトルとは違う気はする。それに…」

「それに？」

「今回のこと。師匠は特に気にしていた問題だ。師匠は俺みたいなただのA級だった訳じゃ無い。名人に挑んだという過去を持っている。それがあの人にとつての誇りだった。でも老いは残酷だ」

「…」

天衣は黙って俺の話しの続きをまつ。ゆっくり重々しく俺は続きを話した。

「B級2組つてのは上に上がってもB級1組鬼の巢窟。下に行けばそれは陥落を意味するある意味最もキツイ級だと俺は思う。ここを落ちるのは師匠にとって事実上、死の宣告みたいなものだ」

「引退しちゃうのかしら？」

「…否定はできない。出来れば銀子が三段抜けるまでは絶対において欲しいけど師匠は昔気質だし分かんない。今は師匠の決心を見守るしか俺たち出来る方法は無い」

「そう…」

泣いても笑っても棋士を横並びに強い者順に並べる分かりやすい残酷さを持つ順位戦の最後はもう迫っている。

第三十六局 本音

あのファン感から2日後。B級2組の順位戦で師匠は関東の若手棋士に頓死を喰らった。あの師匠がだ。俺が入門した直後ぐらいの全盛期の師匠からすればありえない様な頓死だった。その様子をモニター越しに見ていた俺たちは凍りついた。

「あの師匠が…か」

「清滝先生が名人にA級やったのって5年前やろ？ありえへん…。」

そう。師匠が最後にA級にいたのはたった5年前なのだ。5年でこのように垂直落下する事など稀だ。しかしそんな稀な事が起きるほど師匠の老いは加速していた。それを最もわかりやすく、最も残酷に表したのがこの結果なのだ。

「…さて、こんなしみつたれた雰囲気は関西らしくない！さっさと帰って酒でも呑んで寝な！ほら、帰った！帰った！」

「お… おお」

棋士室から凄い勢いで棋士達を追い出す。こんなしみつたれた雰囲気引きずったらそれこそ師匠にも悪影響極まりない。



『もしもーし。桂香さん?』

順位戦が終わった後で俺は桂香さんに電話をかける。

『どうしたの?』

『師匠追っかけてミナミにでも行くからよろしく。多分銀子とか心配するだろうからそれだけお願い』

『了解♪』

そう言つて俺はミナミにやつてきて師匠を探す。と言つてももう10年以上の付き合いがある師匠。どこにいるかは大体予想がつく。

「今日は愚痴りたいだろうから… あそこだな」

師匠が負けた時によく来て愚痴をこぼしている行きつけのお店に行く。そのお店に入ると中には案の定、師匠はいた。

「隣良いですか?」

「ええy… 悠斗か」

半分諦めた様な顔をされた。

「お前には敵わんな。すぐワシを見つけ出す」

「もう10年以上、師匠の元にいましたからね。今日は俺が奢りますから話し聞かせてください」

そう言つて俺はカウンターに座る師匠の横の席に座る。

「そうか。弟子に奢られとる様じゃあワシも年取つたな」

「まだまだ50代じゃないですか」

「そうか(笑)……でももう50代か。なら……ワシは怖いんやな」

「何がですか？」

「お前たちに抜かれて置いてかれるのがや。もっと下の世代に置いてかれるが怖いや」

「そうですか」

「ワシはお前たちみたいに竜王や玉座に棋帝。そして女王とかタイトルを取つたということも無し。唯一ワシにあるのはA級つて言う空間にあつたことと、名人位に挑んだというものだけや」

「……」

「A級つて凄いとこやろ？他の級とはわけが違う」

「そうですね。正直、恐ろしかったです」

「そうか。そうやろうな。あそこは命がけやつた。あそこにある時は下から迫られる事なんて無くていつのまにか抜かされてまつた事実はとても辛いんや」

「……」

「ワシはそれでも若い者に教わる事ができない。強くなりたいたのに強くなろうとする事が出来ない。そんなことしたらワシの唯一の支えまで崩れてまうからや」

「俺はそうは思いませんよ？」

「なに？」

「師匠の夢ってなんですか？」

「ワシの夢か……名人になる事やった」

「『やった』って……何で諦めてるんですか。泥臭くこそその関西でしょ？」

「……」

「順位戦って残酷で、苦しいものですけどその戦いに挑む事が出来る限り名人を目指す事を許されている。例えばC級でも上がることを目指す事はできる。でもそれまで消え去ったらそれこそ夢を夢のまま終わらせてしまふ気がするんです」

「そうやな。言われてみればそうや。でもどうすればいい。ワシには上がる術が無い」

「……師匠。『A級は殺し合い。B級も殺し合い。C級も殺し合い。奨励会も殺し合い』です。師匠が本気で命を削って戦うならそれを馬鹿にする奴は居ない。それで過去が崩れる事はない。俺はそう思います」

「そうか……」

「さあ、そろそろ夜明けです。桂香さんも待つてますから帰りましょうか」

「せやな」



「と、言うわけで一門研をやるうと思う」

数日後、師匠が出した答えは一門研という手だった。勝ちたい。だがやはり頭は下げれないという師匠の出した苦肉の策だろう。

まあ一門のみんなは表面上は賛同した。当たり前だ。ここで拒否つて一門の雰囲気はぶち壊したくない。まああとはご想像の通り、師匠は気を良くして出かけた。

俺たちも桂香さんやあいちゃんを置いて3人で散歩という名目で外に出る。そして皆どつと疲れを吐き出したような感じになる。

「はあ。まあその手だわな」

「ですよ。でも…」

「師匠があんな遅れた手をやるなんて」

遅れた手というのは師匠が一門研をやるにあたって「俺もこういう手の研究やつてるんだ。そういうのシェアしよう」的なことを言うのに使ったものだ。しかし、師匠が我慢げに出したその手はとうの昔に烙印が押された手なのだ。

その手は水面下で一年以上前から研究されていたのだ。そして、アマ大会などでチラホラ見かけたが一ノ瀬^俺悠斗とA Iによって完全攻略されてアマからすら姿を消した。

そんな手を自慢げに語られては終わりだ。

「何でこんなことになっちゃったんだろう……昔はあんな強かったのに」

「時代の波だろうな」「ですよね」

銀子の発言に俺は理由を返答し、八一もそれに同意する。恐らくAIというものが無ければ師匠の上げた手は有力手にあと一年は躍り出ただろう。プロで少しの期間指されて、トップによって否の結論が押される。と言った感じだろう。

しかし今はAIがある。そんなもの一瞬で合否が出る。そんな確変についていけたもののみが生き残る事ができ、波に乗れずいつまでもダラダラと昔の方法で生きていては沈みゆくだけなのだ。今、俺や八一、もつと言えば銀子や若手棋士と師匠。もつと言えば今までのやり方を続ける年配の棋士との違いはそこに生まれてくるのだ。

「俺は一応やるつもりだが2人はどうする」

「俺もやります」

八一が一言。

「私もやる……けどこれで気分を良くした師匠が鏡洲さんあたりに声をかけないか心配」

「……っ！」

十二分にありえる。と思ったのは的中した。見事にやられて帰ってきたようだ。師

匠は恐らく思い出しただろう。『A級は殺し合い。B級も殺し合い。C級も殺し合い。そして奨励会も殺し合い』という事を。何か、これで師匠が見つけてくれれば良いのだが……今はそれを願うばかりだ。

第三十七局 望み

… side 剛介…

鏡洲君に言われて言い返せなかった。ワシの将棋に向かう姿勢はいつの間にか錆びて、綻びて、奨励会員である子に負けていた。プロとしてこれ以上にならないほど恥ずかしい事や。

今思い返せば悠斗が言つとつた事がどれだけ正しい事かわかる。『A級は殺し合い。B級も殺し合い。C級も殺し合い。奨励会も殺し合い』。まさしくその通りやった。殺し合いだからこそ。誰もが夢を掴みたいからこそ。真つ直ぐに全力で、将棋というものに取り組んでいた。

ワシはどうや？『名人挑戦者だった』という支え。もつと言え^{プライド}ば過去に縛られ、教えを乞おうともせず、将棋に向かう姿勢まで壊れていた。ワシの支え何てとうの昔に崩れてたんや。そう思った。やけどそれなら何故、ワシは将棋を続けられたのか？…理由は簡単やった。それ以上にワシには大切なものがある事に気づいた。

一つ目は名人になりたいという夢。鏡洲君がプロになりたいと願ひ、真つ直ぐ将棋に取り組むようにワシも名人になりたいという一心で昔は将棋を指していた。今でもそ

れは変わらへん。それこそがワシの力かもしれんと思つた。

もう一つは悠斗や八一、銀子に桂香。可愛い孫達や。どれだけ朽ちようとも、錆びようとも、棋力が落ちようとも可愛い弟子達が活躍するのを見なければならぬ。

じゃあそれをする為にはにはどうすればいいか…… 純粹に将棋に取り組みたい。熱い…… そんな思いが心の中で燃え出した。



「と、言うわけで悠斗…… いや一ノ瀬二冠。お願いです。ワシに将棋を教えてください」

唐突に家にやって来た師匠が凄い勢いで頭を下げた。

「鏡洲君や他の奨励会員。若手棋士の子も呼んで将棋を教えてもらうんや。その中に悠斗が居れば確実に力がつく。だからお願いします」

一応、現在は格上の俺だが…… それでも歳上。しかも師匠に頭を下げられる事になるとは思ひもなかった。今回は本気で将棋ガチが強くなりたいと思つているのだろう。だからこそ、俺はその真摯な思いに応えなければならぬ。

「師匠…… 勿論です。俺にできる事が有ればやります。でも俺だけじゃ回しきれないからもう一人A級棋士を紹介しますよ」

「本当か！ありがとうございます」

そうして始まった研究会。その名も清滝道場は直ぐに棋界で話題となった。「清滝がなんか始めた」と。「若手とか奨励会員に飯食わせて家に呼んでるらしい」とか「この前、鏡洲君に連れられて梅田の若者に混ざった」とか「悠斗二冠に連れられて日本橋のアニメシヨツプに居た」という情報が流れている。ちなみに最後のは事実だ。たしかに連れてった。

まあそんな事になれば八一もやって来た。

「兄弟子もやってるんですか!?!」

久しぶりに清滝家にやって来た八一は俺を見るなりそう言った。

「まあな。師匠、今度は本気だったし。実際、本気だ。もう一人A級も呼んだし割とガチでレベル高い研究会だぞ?」

「A級棋士って…生石先生ですか?まさか月光会長!?!」

「2人とも違う。それに真後ろにいるじゃないか」

「え?…」

「来ちやった♡」

八一が顔を後ろに向けるとそこには鼻がくつききそうなほど近くに顔を寄せている山刀伐八段の姿があつた。

「いやああああああああ!!!兄弟子!こんなの呼ばないでください!!馬鹿なんですか!!」

？」

「ああん？てめえ何言つてんだ！A級棋士だぞ！！？お前なんてチリだぞ！！？」

「わかつてますよ！でもこの人はダメでしょ！！？」

「まあまあ、悠斗君のおかげで八一君にも会えたし来てよかったよ♡」

「いや〜山刀伐八段。しかしすみませんでした。急な誘いになってしまったのに受けてくださってありがとうございます」

「いいよいいよ。悠斗君の頼みなら断る理由が無いし、清滝先生ぐらいの人もイロイロ見たいし♡」

「ア、ハイ……まあ上がりましょうか。八一も上がるだろ？」

「…… 勿論」

迷った末にそう結論を出した八一達を上階にあげるとそこは全員が将棋に熱中している空間があった。

「これは……」

「良い空間だろ？みんな将棋に打ち込んでる」

「そうですね」

「ししよー。私も将棋やってきて良いですか？」

「いいぞ」

八一の隣に居たあいちゃんは八一から許可を貰うと将棋を指しに行った。

暫く将棋を指して、それでも指して……腹が減っても将棋を指し。眠くなっても将棋を指し続けた数週間。人生の中で10本の指に入るぐらい永遠に将棋を指し続けた。

そして師匠は遂に……

「参りました」

「ありがとうございます」

順位戦で勝った。最終局まで残留の望みを繋いだのであった。

▲▼▲▼▲▼

「と、言う事があった」

俺の一番弟子である天衣の東京での対局の帰りに俺は一門感謝祭後の色々を説明した。あれ以来天衣には会っていないかったのだ。

「ふーん。あんたの師匠も中々大変なのね」

「まあB級2組とC級1組じゃあ違いが大きいからな」

「まあ良いわ。それより私は対策立てなきゃいけないから」

「まあ良いわ」で締めんなよ……でもたしかに対策……天衣は万智に対する対策を立てなくてはならないのだ。理由は昨日、天衣の女王戦トーナメントがあった。そこで天衣は僚を下し、挑戦者決定戦に駒を進めた。そこで勝てば晴れて女王への挑戦者となる。

が、それも一筋縄では行かない。次に当たるのは供御飯万智山城桜花。段位に直すと女流四段に値する。女流初段（マイナビベスト4に入ったので昇段した）の天衣からすればとても強い。実力からしてもかなり拮抗しているのかも知れない。しかし才能で見れば天衣が圧倒している。

「あの女なら振り穴かしら？」

「まあ得意戦法は振り飛車穴熊だけどオールラウンダーだからな」

「そうね。しかもあの女の場合、弱点っていう弱点が無いのよね」

「そうだなあ。まあ対策はしっかり取っとけ。あいつは強いぞ？」

「… 仮にもあんたがわざわざ手元に置いて研究会もやるぐらいだからそこその強さがなくちゃ困るわ。しかもあんたの教えが入ってるんでしょ？ どうせ」

「当たり前だ。だが… どっちが強いか見るのは楽しみだ。しかし、万智は山城桜花戦の後だからノッてる可能性もあるし、逆に弱ってる可能性もある。前者を考慮しておくべきだな」

「そうね。しかも今回あいつが勝つとクイーン獲得でしょ？ ノッてる可能性は高いわね」

そんな風に対策を立てていると新幹線の車内ニュースに目を引く内容が流れる…：
それも2つ。

一つ目は『歌手やプロレス解説者としても活躍されたプロ棋士の蔵王達雄九段が今季の順位戦最終局を持って引退する事を発表。なお、蔵王九段の最後の相手は先日、名人の永生七冠を阻止した九頭竜八一竜王とのこと。』と流れる。

ナニワの帝王^{ドン}の引退は流石に世間でも話題となる。そしてもう一つは…

『名人が今期の盤王戦で優勝し、防衛が決定。前人未到のタイトル100期を達成。今夜にも国民栄誉賞受賞か』

遂に名人がタイトル100期を達成したのである。恐らく、今記者会見中だろうがT w i t t e r にはトレンドとして上がり大きな反響を呼んでいる。

「さすがだな」

「そうね」

新幹線。しかも平日夕方で出張から帰る客で混んでいる「のぞみ」の中という事もあり静かに受け流しているが家の中であればこの奇跡に飛び回り興奮のあまり叫んでいるただろうと思う。が、家の外で流石にそれは出来ないので静かにしている。

全将棋ファンにとって待望の瞬間であったのは間違いない。これから順位戦最終局、果ては名人戦も近いという事で名人に対する注目度はマックスまで上がっている。銀子の奨励会三段昇段も合わせて棋界が盛り上がるのはいい事だ。余談だがその夜、国民栄誉賞が名人に授与されたがこれにも裏がある事を後から俺は知った。

第三十八局 順位戦

「桂香、それじゃあ行ってくるで」

「気をつけて」

B級2組順位戦最終局は一斉に行われる。今日、剛介の対局も大阪の将棋会館で行われる。

▲▽▲▽▲

それと同時に、俺は一門でただ一人棋士室に詰めた。

「失礼します」

朝9時前と言うのにすでに鏡洲さんを始めとする奨励会員や万智と言った観戦記者。B級2組以外のプロ棋士の多くが詰めていた。八一達が来れないのも無理は無い。今日負ければ師匠は引退するかもしれない。今日落ちれば師匠は辞めてしまうかも知れないのだ。そうなれば今日は最後の公式戦になる。それを見るのは中々キツイのだ。

「二冠、どうぞ」

モニター前の席を退いてくれた。こんな日ぐらい……一番見やすいところで見届けさせてくれるのだろう。

「ありがとう。っ！」

師匠が和服を着ているのだ。師匠も本気で来ているのだろう。そして対局の2分前に対局相手が入って来た。その男は次世代次の名人と呼ばれる神鍋歩夢君だ。俺がA級ストレートを達成した後、それにつづいたストレートでB級2組。さらに上にストリートがかかる神鍋君。今日まで順位戦全勝。とてもじゃ無いが神鍋君の方が強いと思う。そして午前9時。B級2組順位戦の最終局が一斉に開始する。棋風としてはとても良い。歩夢君の棋譜は攻め、守り、判断の三拍子が揃った現代将棋にとつて大切な物を持っている。一方、師匠は強く厚い守りをもつ受け将棋。すなわち攻めの歩夢君と受けの師匠となっている。…本来ならそうだろう。

しかし始まった将棋は若い物だった。ハイペースで進む序盤戦。清滝道場と呼ばれる様になった例の研究会で若手奨励会員と指して手に入れたものを存分に打ち込んだ。手に入れたそれはやがて歩夢君の形成不利を生み今まで師匠の指していた重厚な将棋と真逆の軽快な指し回しをしていた。本当に若いみたいだった。

だが老いとは残酷である。

金銀交換によって手に入れた金を歩夢君は角の前に置く。師匠はその瞬間に気づいた。角が詰んだことに。角のただ取り。本来、プロでそんな事が起きてはならない。だが…それは起きた。師匠本人も強く老いを感じたのだろう。それはやがて棋士室を

静まり返らせた。それほどまでの出来事に凍りついたのだ。評価値+1500というAIの評価値がそれを物語っていた。歩夢君がかなりの優勢であるという事をそれは示しているのだ。

それでも師匠は……諦めない。

一見すれば師匠の手駒は歩が4枚。対して歩夢には角がある。どう見ても師匠劣勢。歩夢君もそれはわかっている。だが……それで終わらないのが関西。いや、師匠の将棋。垂れ歩である。と金が製造される。それは『相入玉』や『持将棋』という引き分けを指すわけだ。

先手大優勢の歩夢君からすればそれだけは避けたい。それを避けるには師匠が垂らした歩を振り払う必要がある。故にそれだけで手間がかからぬのだ。しかし師匠はそれさえも狙ってなかった。師匠が目指したのは……

「「底歩……」」

連盟に響き渡る驚きの声。師匠はと金を作って引き分けを匂わせておいて一転、殺し合いをすると言ったのだ。お前を殺してやると言っているのだ。歩夢君はそれに大混乱。コンピュータで最新の研究をしているからこそそれは全く分からない。そして歩夢君は大緩手を指してしまった。

「チイツ!! なんとる醜態!!」

後から気づいた歩夢君はそれに大きな声をあげる。歩夢君は今後、A級の舞台まで上がってきていずれ、タイトル争いを繰り広げることになると思う。故にこの昇級は当然と言えば当然。だが、それに抗ってこそその将棋。と言わんばかりの将棋を師匠は見せた。いつの間にか来ていた八一や銀子も夢中でモニターにかぶりつく。総じて皆が思っているのは『熱い』の一言だ。

その気持ちは何も棋士達だけではなかった。連盟職員の人達が棋士室に飛び込んできた。

「日本全国からファンの人が来ている! 手の空いてる棋士の先生や奨励会員の人は手を貸してください!」

と叫んだ。日本全国、日帰りでは来れない様な離島からも大勢のお客さんが来たらしい。そんな人を返すわけにはいかないという考えの様だ。

「ここは俺が行きましょう」

「兄弟子!?」

「そんな、二冠... 師匠の対局を見なくていいんですか!?」

連盟職員の人でも流石に躊躇った。

「こんな熱い対局... 久しぶりだ。対局が終わったらすぐ抜けさせてもらうけどそれま

では俺がやる」

「っ！わかりました！」

俺は大盤解説に移る。俺の登場に会場は響めきが止まらない。

「まず、今の評価値を加えた評価を出します」

165手目。評価値+400。最前手は▲3四歩。だいぶ評価値は戻ってきたがまだまだ歩夢君優勢だ。

167手目、最前手はまだ▲3四歩。評価値は+350。まだ先手優勢。今、攻撃を仕掛ければ全然勝てるという事だ。

「何故仕掛けないんだ!?」「清滝の気迫なのか!?？」という疑問の声が飛ぶ。

「今、とてもいい質問が飛んできましたね。たしかに評価値上、+350であり神鍋六段の優勢は揺るぎません。しかし、それはあくまでAIが算出しただけです」

そう言ったところで歩夢君はまた一手を投じる。全く最前手では無い一手を。

「ど、どういう事だ!?？」

「確かに彼は今攻めれば勝てる。が、そこまで気は回らないでしょう。何故なら彼には角がある。角があるから駒得。実に常識的です。しかし、だからこそ彼は攻め入らないのです。角があるからという心理が働いて動けないのです」

「「「「「」」」」」」

「彼は強いです。将棋は強い。だが、まだまだ勇氣に揺れがある。何より清滝九段は経験豊富な方であり、なおかつ関西の人だ。泥臭く、粘り強く……そして何より負けず嫌い。氣迫は人一倍ですよ」

誰もがその言葉に息を呑んだ。運とはいえ、そんな事があるのかと。新進氣鋭の若手棋士が攻め入れない。そんな事があるのか？と誰もが目の前の風景を信じれなかった。でも、それでも目の前で熱い対局。それが事実として行われているのだ。誰もがそれに吸い込まれる。

そして

「評価値＋１！互角です！」

関西将棋会館は決着もついていないのに大騒ぎになる。沸騰し、溢れかえったお湯の様になり上がる。さらに評価値－600。ついにAIは後手有利を示した。さらに盛り上がりは頂点に近づく。沸騰してなお、登っていくのだ。これぞ順位戦。そんな言葉が似合う感じだった。

そしてここで関東の結果がでた。観戦記者として来ていた万智がPCを何度も確認して叫ぶ。

「神鍋昇級！清滝降級です!!」

「っ！」

これもまた順位戦。そんな言葉が似合うものだった。上り詰めていた熱は一気に抜け、嫌なほど冷たい空間がそこに残っていた。

画面の向こうの死闘は何の意味も表面上無くなった。しかし師匠はどうしてもこの対局に勝ちたかつたのだ。何故なら、弟子達が見ているから。師匠が俺の元に研究会を頼みに来た時、全てを聞いた。何故やりたいのかも、何を生きがいに将棋をやっていたかも、今何を思っているかもだ。だからこそ師匠は本当の意味で負けられなかった。

「熱いー」

日本全国全てのファンがそう感じた。2月末の深夜。どう考えても寒い。なのにこれほど熱く感じる。明後日自分の対局なのに俺はそんな事、どうでも良いぐらいだった。近くに立つ生石さんも同じ思いだろう。

画面越しに見える記録係の奨励会員の子ども涙さえ溜めている。この熱い対局を見て自分がプロでない事をさぞ悔しかったのだろう。プロになりたい。そう心から思ったのだろう。「たかが将棋。されど将棋」。9×9のボードゲームがこれほどまでに人の心を動かした事があっただろうか？例え降級が決まったとしても、あそこまで冷たくなつたとしてもここまで熱を帯び直すことのできるものがあつただろうか？今、目の前で起きている対局は奇跡なのだ。

百二十五手目に五段目に上がった歩夢君の玉はついに二百十五手目にしてたった一

段。されど一段下がった。「玉は下段に落とすべし」基本にして原点である感覚が生まれ、先手玉が詰み筋をたどり始めるその瞬間だった。



もう詰んでいるのに歩夢君は投げられなかった。「嫌だ」「怖い」。1年間積み上げてきたものが崩れ去るかもしれないという事だ。もう昇級は決まっているのに。と、滑稽に思うかもしれないがそうではない。もっと深いものがそこにあるのだ。だからそこ誰もそれを滑稽と思わなかった。

そしてついに二百四十六手目。師匠が指すと歩夢君は動かなくなった。一手詰みである。投了の瞬間、両者に声はなかった。

「生石先生！あとは頼みました！」

「任せとけ！」

俺は解説を生石先生に託して部屋を飛び出した。八一や銀子と合流して対局室に入る。桂香さんやあいちゃんも一緒だ。

「悠斗に八一……なんやみんなおるんか」

「はい」

「神鍋君が昇級でわしが降級やな？」

「……はい」

俺が重苦しく言う。俺はそれを感じた事がない。だが、だからこそそれがどれだけ重いものか盤を挟んだ相手から見た事がある。どれだけ苦しいものかを。師匠は歩夢君を祝福した。しかし神鍋歩夢七段は掠れた声でしか返事が出来なかつた。会見の為に部屋を出た時も死にそうな足つきだつた。それぐらい今日は辛いものだつたのだ。

「わしはC級に落ちたら引退するつもりやつた。名人挑戦者になつたという自分の支えが壊れてまいそうだな」

師匠の言葉に俺以外の皆が顔をこわばらせる。

「でもな……悠斗にはもう話したが他にもあつたんや。生きがいが。それは……お前達や。悠斗が頂点に君臨する日を見るのが、それを必死で追いかける八一や銀子を見るのが。可愛い孫達を見るのが楽しくて仕方がなかつた」

「だから、わしは辞めへん」

「お父さん……」「お爺ちゃんせんせー！」

桂香さんは言葉をつまらず。あいちゃん泣きながら師匠に抱きつく。

「こんな楽しいもん、わしは自分からやめれへん」

そういうと、師匠は俺と八一の方を向いた。

「八一、C級1組で当たれるな」

「B級2組以上じやなきや師弟戦は組まれせんよ」

「そうやったか？」

その返答を待っていた様に師匠は笑う。

「なら、悠斗がおるA級までまた戻って師弟戦や」

「……今度こそ、恩返しさせてもらいますよ？師匠！」

俺と八一の声は被った。八一は顔をくしゃくしゃにして言う。俺も不覚ながら少し涙を流してしまった。

「ぬかせ、2人まとめて返り討ちや！」

師匠は笑顔でそう言った。

第三十九局 A級順位戦最終局

将棋界で一番長い日と呼ばれる日が存在するのを皆さんはご存知だろうか？別に物理的に時間が伸びるわけでは無い。では何故そう言われるのか？簡単である。それだけ夜遅くまで対局が続くからだ。では何故そんな深夜まで続く対局が多いのか？それはその日に神への挑戦権を掛けた争いと、A級という狭き世界に残るための棋士にとつての命懸けの戦いが行われる為である。

そして今年もそんな日がやってきた…



朝8時前。東京千駄ヶ谷にある将棋会館には歴史に残る戦いを見ようという将棋ファン。そしてその戦いを記事にしようという記者が押し寄せていた。そんな中、俺は会館の正門に差し掛かる。

俺の姿が向こうから見えたのか、その瞬間に数多のカメラのシャッターが切られる。それと同時に挨拶が飛んでくる。

「一ノ瀬二冠おはようございますー！」

「おはようございますー！」

「本日の相手は於鬼頭帝位ですが！」

「相手が誰だろうと全力で指すまでです」

それだけ残して将棋会館に入る。館内は異様な雰囲気にも包まれている。普段の順位戦でもピリツとした空気に包まれているが今日はそれを遥かに超えている。その空気に最も似合う例えは十中八九『殺気』だろう。

そして対局開始の10分前、俺は特別対局室に入室する。既に2人、3人の棋士は入室済みだった。その中には同じく関西の月光聖市九段の姿も見受けられる。俺は上座に座り、対局相手を待つ。余談だが、現在俺が下座に座らなくてはならないのは名人と八一の2人だけである。

▲▽▲▽▲▽

対局開始4分前、ついに相手が入室した。相手も無言のまま入室し、下座に静かに座る。俺の合図で盤に駒を並べる。先手は俺。

「時間になりました。対局を開始してください」

記録係の子の声で一斉に盤に手が伸びる。A級将棋界で一番長い日順位戦最終局が始まった瞬間だった。

「……」パチンツッ!

勝負を告げるように力強く指した初手は▲7六歩。常識的な物だ。一方で於鬼頭帝位の初手は△8四歩これもまた至って常識的な一手である。

「……」

しかし俺はその次が指せなかった。否、指さなかった。



関西将棋会館の棋士室も今日は鮎詰め状態となり、様子を見守っている。そして、久しぶりに関西の人間が名人挑戦者となる事を信じていた。

「兄弟子は……何を考えているんですかね？こんな最序盤から」

八一はモニター向こうの悠斗を見てそう言った。そりやそうだ。自分の2手目から30分も長考するなんて奴、普通は居ない。

「まあいつもの事や。またなんかとんでも無い事考えてるんやろ」

「でも本当にとんでも無い事よくやるから冗談に聞こえないんですよねえ」

そんな様子で見守るとついに1時間の大長考となった。現代において序盤、それも3手目にここまで時間を消費する棋士は珍しい……というか居ない。やつと腕が動いたと思うとその手は飛車に伸びた。

「はあつ!?」「えつ!?」「嘘だろ!」

「兄弟子が飛車を振った!?」

関西将棋会館は衝撃に包まれる。それは関西将棋会館にとどまらず関東将棋会館……果ては日本全国に衝撃を及ぼした。

▲6八飛。兄弟子が3手目に指した一手だ。兄弟子はこの一手で「今日は振り飛車で行く」と宣言したのだった。

「……」

対戦相手である於鬼頭帝は見るからに動揺を見せる。そして対振り飛車の最強の防御である居飛車穴熊を組もうと動き始めた。しかし兄弟子は飛車を振ったと思うと▲6六歩△6二銀▲3八銀というふうに繋がり銀を上げてきた。なんと兄弟子は居玉という手を出して来たのだ。堂々と王将は構えており動く気配すらない。振り飛車の定跡というか常識である美濃囲いすら組まずに突き進み始めたのだ。

結果、誰がどう見ても兄弟子優勢の局面。兄弟子が今回採用した振り飛車は基本的に受け。相手が攻めてきたところにカウンター攻撃を仕掛けることで倒すことを目指すものだ。しかし兄弟子が使っているこの振り飛車は攻めの振り飛車だ。攻めが早くそして強い。何より恐ろしいのは対振り飛車の代名詞とも言える居飛車穴熊を採用した於鬼頭帝位がここまで苦戦を強いられておりすでに壊滅寸前というところにある。

大昔は振り飛車はかたい美濃囲いに囲って、あとはさばきがうまくできれば、仮に少々駒損があつても玉のかたさで勝てるという考え方だった。しかし、居飛車側の左美濃とか居飛車穴熊の登場でこの考え方は時代遅れになった。

兄弟子の構想は恐らく居飛車穴熊を組ませないという考え方のもと出来上がった

る。故に速攻の攻撃を求められている。その為に居玉で戦っているのだ。だからこそ
 たった一度も玉を動かす事なくただ攻めている。

△4 二玉 ▲4 六歩 △3 二玉 ▲3 六歩 △3 三角 ▲1 六歩 △8 五歩 ▲7 七角 △2 二玉

▲7 八銀 △5 四歩…

帝位の穴熊が組まれる前に兄弟子が攻め入る。穴熊は成立せず、途中で無理矢理にで
 も攻めを受けなければ無くなった。結果自陣は組みきれず崩壊。評価値もとつくの昔
 に兄弟子の方に振り切れほぼ敗勢を喫している状態となった。

…

▲3 三歩 △同 玉 ▲4 五角 △5 四歩 ▲6 六角 △2 二玉 ▲8 四角 △4 五歩 ▲6

三歩成 △投了

たった47手で帝位が敗北を喫したのだ。A級在位でタイトルホルダーがたった4
 7手で負けてしまったのだ。こんなこと普通起きない。しかし起きてしまったのだっ
 た。

「最後の歩成るがきつかったんですかね？」

「まあ一つの決め手やろ。挽回できん思ったんやろ」

検討をしているが今日、兄弟子が指したのは間違い無く振り飛車の革命。序盤の革命
 だ。対振り飛車の金字塔といっても過言では無かった居飛車穴熊がここまで攻略され
 るとなれば絶対的な対策が必要不可欠となる。恐らくこの手は今後、大きな大流行を見

せると思う。それぐらいの革命だった。

そしてこの手の恐ろしさというか兄弟子というか、この手を発見した人の発想はまさしく変態だ。居玉という玉を全く動かさない事を致し方が無いと考えるその方法は大きな革命だろう。

「熱い…… というより怖いですね」

「せやなあ」

▲▼▲▼▲▼

「……」パチンツ！

▲6 三步成を俺は指す。その一手を見て於鬼頭帝位は長考に入る。

「……」

しかし長考虚しく時間だけが過ぎていく。そしてついに。

「……」

無言で駒台に手をつき、頭を下げた。俺も顔を下げる。

たった47手で終わっただからだろうか？ 妙にザワザワと職員が忙しそうにしている。

「帝位。感想戦は……」

「……」 拒否

「分かりました」

俺は駒を片付けて始める。於鬼頭帝位は無言で退室した。隣では月光会長が関東のベテランと激しくぶつかっている。一番端の盤でやっていた俺からすればその間に熱さと冷たさがあり、そこに大きな壁があるようにすら感じた。

新手は大きな衝撃を棋界に及ぼし「革命」と呼ばれる様になった一方、その異常なまでの一ノ瀬の強さに恐怖さえ覚える棋士が現れた。故に俺の座った盤の前は静かで、そして冷たくなっていった。



予想外なほど早く終わった対局に各所が慌てふためく中、俺は会見に臨んだ。

『まずは名人戦挑戦者決定おめでとうございます』

「ありがとうございます」

皆、すっかり忘れていると思うが一応名人挑戦者よ？俺。

『どう言ったお気持ちでしょうか？』

「嬉しい反面、他の棋戦とは比べ物にならないぐらいの緊張を覚えています」

過去の挑戦者の先生も仰っていた事だがそれこそ永世位のかかったタイトル戦と同じレベルと聞く。

『今日は一ノ瀬二冠初の振り飛車という事でしたか？』

恐らく一番世間が注目しているところだろうから事細かに説明する。

「昔から振り飛車はネットなどで指してました。と、いか本当に小さい頃は振り飛車党でした」

そう発言すると会場はざわめく。

「AIで研究もしていました。この作戦がAI研究を盛んにやっていらつしやる帝位相手にどこまで通用するか見る側面もありました」

そう。予想外の手に手間取り大緩手を指して崩壊。つい先日、師匠が神鍋七段にやった事だ。それが実際起きてしまっている。予想外にどこまでついていけるかが今後、AIに求められる物だと思う。と、言っても今回は予想外に予想外を積み上げて相手にぶん投げたようなものだったから上手くいった。恐らく普通の振り飛車やただの新人なら上手くいかなかっただろう。

『なるほど。一ノ瀬二冠と言えば居飛車党のイメージでしたが』

「僕は自分で居飛車党って言った事はないですよ?」

『えっ?…?…。そ、そうですか』

本当に言った事ないもん。相手の勘違いである。その後は定型のようなインタビューが続いた。なんの面白みもなかった。

しかし棋界はエライ騒ぎになった。序盤の革命と言われ、振り飛車復活と叫ばれるよ

うになった。なお、純正振り飛車党からは「振り飛車を救った神」と言われると同時に「名人の二クツ眼鏡の舞」と罵倒された。名人に失礼だからやめなさい。

と、まあ順位戦は無事……終了した。年度早々、天神戦が名人を争って繰り広げられる……

第四十局 そうだ、京都行こう。

無事名人への挑戦権を獲得し、研究に時間を費やしながらもだらだらと過ごすに丁度良すぎる春先……なんて行くはずもなく今日は朝つばらから京都は嵐山の天龍寺にお出かけ……もといタイトル戦を見に行く。

大阪に長年住んでいて京都にも凄い回数行っているが天龍寺は未だにタイトル戦でしか来たことがない。京都に有名な神社やお寺が多すぎるのも問題である。(仕方がない)

まあそんなわけで山城桜花戦の第二局が開催される天龍寺にやって来た訳だが……凄い人混み☆天龍寺は人気の観光スポットでありただでさえ日本人や訪日外国人などの観光客が多いのに将棋ファンやら関係者諸々など凄い数の人が集まっているのだ。

そんなわけで変装もせずにその人混みに突っ込むと

「あー！ノ瀬二冠やー」「ほんまや！タイトル戦見に来たんやな！」「二冠！一緒に写真撮ってください！」「僕ともお願いします！」とまあエンドレスループになる訳だ。ひたすら対応をしているとあつという間に1時間……下手をすればそれを超えている。名人が「一緒に行かないかい？」って言つてらしたけど……これ下手に着いて来て頂いた

ら騒ぎどころじゃなくなつてたと思う。

やつと対応を終えてなんとか控室に入ることが出来た。

「し、失礼します。一ノ瀬で……す」チーン

「おや二冠。外での対応お疲れ様でした」

外での様子を見ていた月光会会長がそう言つて微笑む。

「ありがとうございます。ございます」

「フアンの皆さんも思わぬ収穫に喜んでゐる事でしょう」

「そうですね……」

収穫？

「つて男鹿さんはどこに？」

男鹿さんこと男鹿ささり女流初段（引退済）は現在、会長の秘書としていつも会長のそばにゐる。目の見えない会長に変わり全ての書類に目を通すことから裏番長なんて呼ばれたりもしている。そんな男鹿さんが会長の側にいないなんて明日は槍が降るんじゃないかレベルの大騒ぎだ。

「男鹿さんなら今日は記録係をしてもらつています」

「何故？」

さつきも言つたが男鹿さんが会長の元を離れるなど非常事態も良いところだ。

「彼女の出身地である京都ですしね。私より歓迎される訳です」

「なるほど。でも、男鹿さんですしかなり駄々こねたんじゃありませんか?」

それは安易に予想が出来る。顔面蒼白の男鹿さんが浮かんでくるぐらいだ。

「真顔で『捨てられるぐらいなら死にます』と言われました」

微笑みながら会長はそう言う。いや、微笑んでる場合じゃないでしょ……それに男

鹿さんは重い。重すぎる。想像を遥かに超える重さだった。

「私としてはあまり彼女を私に縛りたく無いのですがね……」

「別に会長が縛ってるわけじゃ……いや広い意味ではそうなのか?」

「まあとにかく二冠はとても良いタイミングでお越しになりましたね」

「良いタイミング?」

「はい。良ければ大盤解説お願いします。あ、勿論明日も」

「俺がですか?」

「はい。勿論、宿はお取りします。流石に山城桜花と同じ部屋には出来ませんがね」

微笑みながらなんかえげつない事を言い出す会長……怖い。でも多分来ちゃうん

ですよ。万智なら……とはとても言えなかった。

「ま、まあ。それはそれです。しかし……まあ頑張ってきます」

「はい。頑張ってください」



「と言うわけでここからは私、一ノ瀬悠斗が解説を担当いたします。よろしくお願います。あ、ありがとうございます」

ファンはかなり沸いた。今お礼をしたのは名人戦挑戦者となったのを喜ぶ声が聞こえて来たからだ。こうしていると喜びがひしひしと感じ取れる。

「と……言っても昼食を食べたあたりからかなり挑戦者優位な状況になってきましたね。あくあ、これは穴熊が破綻しかけている」

午前中と燎の指す将棋が明らかに変わっている。何かあったのかは気になるところだ。

「さて、大きな声では言えませんが小さな声だと聞こえないのでぶつちやけるとかなり挑戦者優位ですね。△5七桂成と指したのは穴熊崩壊へかなりの痛手かと考えますね」

そのあとはぶつちやけ△6七成桂▲同 金△7九角成▲同 銀となり穴熊は残念ながら崩壊。敵わないと見た万智は投了した。山城桜花戦は振り出しに戻ったのだった。



山城桜花戦の特色として対局後は感想戦より先に会見があると言う事だ。俺はそのインタビュアーを大人しく聞くことにした。

「まずは今局で勝利を収めた月夜見坂燎先生にお話しを聞いていきましよう。見事な快

勝でしたね?」

「そりやどーも」

「午後からの指し回しは午前とは比べ物にならないほど良いものでしたが……何かあつたんですか?」

「そうだな……強いて言えば八一男を連れ込んだことか?」

「……は?」

「だから八一を昼飯の時に連れ込んだんだよ。飯もクソ不味かつたからな」

「は……はあ」

予想の斜め上をいくとんでも発言に連盟職員は顔面蒼白。マスコミ関係者はざわつき始める。そんな中、部屋にいた八一に視線を送り『外に出ろ』と言う。その意思を汲み取ったのか八一はあいちゃんを連れて外に出た。あくよかつた。

「続いて供御飯万智山城桜花にインタビューを行います。本局は残念な結果でしたが?」

ひとまず連盟職員は話しをすり替える為に万智に話しかける。見事なすり替えだ。ナイス。

「序盤はまずまずどしたけど、中盤で破綻しやしたなあ」

その通り、中盤で破綻してそこから崩れ落ちていく将棋だった。

「得意の穴熊が活きない対局でしたが」

「ああいう指し回しをされたら、こなたはお手上げです。相手が上手かったと切替えるしかおざりませぬ」

「そうですか…。最後に応援してくださいるファンの皆さんに一言どうぞ」

「山城桜花のタイトルは京都から出したらアカンものやと思うておりやす。東京下町生まれの山城桜花なんて締めりませぬからなあ。そうなつたらタイトルの名前も浅草花月とかに変える必要がおざります。手間がかかってしゃあないわ」

会場は笑いで満たされる。どうやら万智に燎が入れたかったほどの精神的ダメージは入らなかつたようだ。だがこの会見中、2人は一度も目を合わせなかつた。



第二局が終わり明日、共に解説を行うあいちゃんと八一と共に新京極をぶらつく。

「しかし…。思ったより傷ついてませんでしたね。万智さん」

「っ!」

あいちゃんはビクツと体を震わす。多分八一にいろいろ言われたのだろう。

「いや、なんかあるな」

「え?」

…これは後日、天衣にも教えた話しになるし、多分あいちゃんも聞いた話しだ。タ

イトル戦というのは番勝負だ。それは即ち短いスパンで同じ相手と何回も指す事を意味している。特に山城桜花では後半2戦は2日連続で指すことになる。そんな中で対戦相手に精神的ダメージを与えるのはただ単に将棋に勝つより重要性があるかも知れない。どんな棋戦においてもこれは共通の考え方だ。

「この相手は嫌だ」「もうこいつとは指したく無い」……そう思わせるのが大切なのだ。この点に関して言えば俺の『天災』というご大層なあだ名はそれだけで相手に嫌な意識を持たせられるのだ。万智は本来の将棋と明らかに違うものを今日は指していた。何か……心に眠っているように感じた。

「まあなんかがあるだけで傷じゃ無いかもしれない」

「そうですねえ。あ、明日も兄弟子は大盤解説に立たれるんですね?」

「立つけど初手は八一とあいちゃんに任せるわ」

「えっ!? おじさん先生が立たなくていいんですか!?!?」

あいちゃんはかなりびびくりしてた。

「多分、あいちゃんと八一の師弟で立つた方がウケはいいだろう。後からゆっくり入るよ」

「わかりました。じゃあそれで行きましょう」

こうして打ち合わせもほどほどに新京極を歩いているとある話しが始まった。そ

れはとあるゲームを作った時の話だ。そのゲームの名は……『ロリコンGO』

第四十一話 トップ棋士のおしごと!

「そう言えばあんな事もあつたよな」

「あゝそんな事もありましたね」

「あれは完全に晶さんとお前の暴走だったよな」

「ひどいなあ。兄弟子が紹介したから悪いんじゃないですか」

「まあな」

と、俺たちはちよつと前に起きた事について話しを弾ませていた。そのある事というのは八一にとつて初めての将棋以外のお仕事であつた。



俺は八一と共に連盟にやつて来ていた。理由は会長からお呼び出しを喰らつた為だ。

「兄弟子。俺たち大丈夫ですよね!? 何もやらかしてないですよね!?」

「多分な。ほら着いたぞ」

目の前には会長室の扉。もう後には引けない。

「失礼します。一ノ瀬悠斗と九頭竜八一です」

「どうぞ」

会長室に入るとそこには会長と会長秘書の男鹿さんの姿があった。

「まあどうぞおかけください」

そう勧められて席に着く。

「実は竜王に二件、うち一件は二冠と2人での将棋以外のお仕事が来ております」

「っー」ガタツ！

隣で思わず八一が立ち上がった。八一にとって将棋以外の仕事は初めてに近いのだろう。

俺の場合は関係各所になんとか許可を頂いているのでガバガバだが本来、タイトルホルダーはそのタイトルの格式を守るために安易に仕事を引き受けて行動してはならないのだ。当然、八一もそれに当てはまり指導対局はおろかタイトルホルダーの為、他のタイトル戦の立会人すら許されないのだ。故に気分が上がるのも分かる。

「それではまずは竜王お一人に来ていたのは……」

「……」ゴクリ

「月刊『幼女の友』のインタビューです」

「なんでやねんツ！」「わはははは!!最高☆」

心の底から笑ってしまった。会長室なのに心の底から笑ったw

「どうされますか？」

「却下です! 当たり前でしょ!?!?」

「そうですか: : 残念です」

「なんでだよ八一。受ければ良いじゃねえかw」

「ふざけないでくださいよ! 本当にもう」

「はいはい。それで会長、もう一件は?」

「ゲーム監修のご依頼です。YMMと言う企業なのですが: :」

「超大手じゃ無いですか!」

「あくなるほど」

隣でキラキラとマトモそうな仕事に目を輝かせる八一だが: : 俺は知っている。なんとなく依頼主も見当がついた。何故なら俺はゲームマーでそこそこイベントに呼ばれる程度だ。当然、依頼が飛んできたYMMともツテがあるのだ。

「俺は良いですよ。八一はどうする?」

「もちろんやります!」

「じゃあお二人でよろしくお願いします」

「はい!」



そしてそれから数日後。俺たちは神戸にあるYMMの開発部にやって来ていた。

「ここですか…」

「そうだな。多分… お前も依頼主は知ってるぞ」

「えっ？」

「一ノ瀬先生に九頭竜先生。待っていたぞ！」

晶さん登場。知ってた…

「え？なんで天衣ちゃんのお付きである晶さんが？」

「YMMは夜叉神家の経営でしたね」

「その通りだ。流石は一ノ瀬先生。ゲーマーだな」

「まあこれくらいなら」

「それはそうと早速だが説明したいので来てくれ」

奥の部屋に通されて二つの企画書を持って晶さんがやってきた。

「さて、まずは先生方に言っておくぞ。今回は将棋以外の先生達の良い面をピックアップする」

「ほう」と、言うとなんですか？」

「一ノ瀬先生はやはりそのゲーマーとしてのセンス。そしてゲーマーとして今回制作するゲームをどう感じるかを見ていただきたい！もちろん開発段階から協力願いたい」

「もちろん」

「九頭竜先生はなんといつてもやはりロリを育てたりロリを愛でる事に対する圧倒的なポテンシャル!その力を貸して欲しい!」

「あんたもロリコン扱いかい!って、どうやってそれを使う気ですか?俺はロリコンじゃ無いけど!!」

「よくぞ聴いてくれた!今回の企画はこれだ!」

企画書の上半分を取って俺たち2人の前に拡げる。そこには『ロリコンGO』という未知の言葉が表紙に印刷された資料の束があった。

「…… えつと…… これは?」「なんですか?」

「む?分からないか?ゲームの企画書だ」

「それは分かります。内容をざ説明頂きたいです」

「一ノ瀬先生のご要望なら仕方がない。このゲームは街などでロリを見つけてはゲットしていくモノなのだ!現実世界にVRのロリを写し込み、そしてこのボールで捕まえるのだ!昔は車に詰め込むと言うエフェクトを使っていたが流石にダメだった」

「……」

「兄弟子。良いですよね?」

「ああ。いつせーの!」

「却下だ!!!」

「何故!?？」

全力で却下した。当たり前だ。こんな世に放つたらそれこそ終わる。Y M Mが終わる。それは何としても避けなければならぬ。絶対だ。

「当たり前でしょ!なんてもん作り上げてくれるんですか!!!」

「とても良い作品では無いか!」

「ダメですよ!そんなの作つたらY M M終わりますよ!」

「む。そうか…。良い作品だと思つたのだから…。まあしかし!もつと素晴らしい作品を用意している!実はこっちが本命だったりするぞ!」

「なんだ言つてくださいよ。先走つた俺たちが馬鹿だつたじゃないですか。なあ八一!」

「全くですよ!で、そのもう一つというのは!?？」

「これだ!」

『ロラライブ! (仮)』

「……」

「まあ別に『チャイルドマスター』でも良いんだがな。これはすごいんだぞ!まあ見てくれ!」

突っ込む暇も無く晶さんは力説し始めた。

「見てくれ!この画像を!」

PCをこちらに押し出してきた。そこには3Dで立体的に作られた画像…。もとい動画が流れている。みた感じはMMDとかそう言うソフトで作ったと思われる感じだ。だがめつちやリアルである。

「ほう」「へえ」

その出来栄えには思わず感嘆の声を出す。これをもつと他の事に使えばとても良い作品が仕上がると思うが…。残念である。

『うるしゃいわね!』『あつちいきなさい!このクジュ!!』…。見れば見るほど…。天衣に見えてくる?…。のは気のせいじゃない。

「この容姿といい、言葉遣いといいどこことなく天衣ちゃんに似てますね」

八一が先に突っ込んだ。やはり八一も感じていたようだ。

「そりやそうだ。お嬢様だからな」

「は?」「え?」

「お嬢様の小さい頃のホームビデオから映像を起こしたのだ」

「……」

目眩が…。しかし八一は。

「正直…。わからなくも無いです!!」

「わかってくれるのか!?? 九頭竜先生!!」

「勿論! 俺たちで至高のゲームを作りましょう!!」

「おう!」

こうして俺の同意も無いままゲーム制作が始まった。というか分かる時点で八一の奴も変態すぎんか?

泊まり込みで作業が始まった。八一曰く「将棋の研究はいつでも出来るが幼女の研究は幼女のうちにしか出来ない」らしい。ここまでのクソ発言は中々聞いたことがない。流石は弟である。

2 DAY

「お、そのゲームは!??」

「あ、一ノ瀬先生。そうですこれは...」

隣のブロックで例のロリゲームを作っている中俺は隣のブロックで某人気ゲームのスマホ進出版のプロトタイプを遊ぶ。ちなみに隣では

「おお! 晶さん! この仕草最高じゃないですか?」

「流石先生! よく分かっている! 早速3Dに起こそう!」

「はい!」

ひたすら天衣のホームビデオを眺めては良いシーンを抜粋して3Dに起こすという

ロリを極めた様な奴しか出来ない鬼の所業をやっていた。正直言おう：：キモい。

4 DAY

今日はどうやら天衣の3Dキャラクターに背負わせるランドセル選びらしい。YMの開発部には恐ろしい量のランドセルカタログが届いた。俺も駆り出されて3人でひたすらランドセルカタログを見てランドセルを選定するという18歳1名と20歳越え2人がやるべきでは無いランキング上位に入りそうなことをやってみたりした。

last DAY

「おはよー(ございませーす)」

最近八一と晶さんは徹夜でゲームを作っていたが俺は普通に帰っていた。朝早く開発部に向かうとそこには朝日に照らされながら「この世のロリに感謝」とか呟いている八一と晶さんの姿があった。完全に逝ってる様に感じた。

「ゲームは出来たか?」

「あ、兄弟子! 出来ましたよ! はい! 早速お願いします!」

「ん」

ゲームとしては中々のクオリティであり申し分ないものだったのだが：：まあ裏話を聞くと終わってると思う。

「それでは天衣お嬢様にリリースのご許可を頂きに行くぞ！」
「はい！」

あ、許可取ってないのね。絶対却下だと思っけど。

「はあ？何そのキモいゲーム。却下よ却下！八一もこんなクソキモいゲーム作るなんてやっぱりクズはクズね。さっさと帰って将棋の研究でもしたら？クズ竜竜王？」

「……………」チーン

ただの屍の様だ。

「まあここでストツプ掛かるとは思ってたけどだいぶ辛辣な言い方したな。まあ俺はYMMのゲームをひたすらただで遊べたから大満足♪」

「あつそ。それはよかったわ」

「まあ天衣のちっこい頃が見れてよかったわ。中々可愛かったのに」
「のにな？」

「なんでこんなドSになったんだろう？永遠の課題だよ」

「あんたもあんたで煩いわよ！駒の角を頭にぶつけるわよ!!?」

「やっぱりドSじゃん……」



「そんな事もありましたね〜」

「そうだなあ」

「そんな変態さんみたいなこと師匠がやってたんですか?」

あいちちゃんの攻撃が入る。

「やってたぞ?」

「… 師匠、お話しがあります。ホテルではしばらくお説教です…」

目の光が消えた。マジだ。断末魔の叫びと共に俺たちは会長のとったホテルに入
た。

第四十二局 4人と1人

近くの部屋から聞こえる八一の断末魔の叫びをBGMに将棋雑誌を読んでいる俺。断末魔の叫びもいつの間にか途切れ、一通りそれを読み終えて今から風呂に入ろうと準備していると部屋の扉がノックされる。八一と万智の可能性がファイファイファイティーな訳だが…

扉を開けるとそこには

「悠斗はん。ちよい散歩に付き合おうて」

万智がいた。

「散歩？」

「そうです。行きましょ？」

「はいはい」

万智に手を握られてはもはや逃げる事は出来ない。故に俺は部屋を出る。このセツトで今更スキャンダルもクソも無いがそれでもタイトル戦を控えた女流棋士とタイトルホルダー俺が外に出るのはバレるとまずいのでコソコソと出る。



なんとか脱出に成功した俺たちはホテルからぶらぶら歩いて新京極を抜ける。

「万智。お前、どこまで行く気だよ?」

「ふふ。え・え・と・こ・ろどす♪」

万智は狐みたいに口に鼻が伸びて笑う。こういう時はだいたい悪巧みしている時なのだが……これがまた可愛いんだよちくしょう!

「さあ!着いたで。ここで明日、タイトル戦をやりませえ。その下見に来たかつたんどす」

「へえ」

四条河原の川に川床として作られた特設ステージ。明日、朝からあの場所には盤が置かれ将棋が山城桜花戦第三局が行われるのだ。それに目を奪われていると万智は

「もうちよい歩きましよ?」

と言うのでもう少し歩く。少し歩いたその先にあつたのは……

「四条河原に等間隔に座るカップルどす」

確信犯の様にそこにはそれがあつた。

「おおお?ひよつとしてひよつとする?」

「ひよつとしてひよつとするどす」

万智は大きく頷いて俺の手を引いた。

と、言うわけで2人で座ってみる。

「ふふふ♪」と嬉しそうな笑顔を見せる万智。その顔はとても嬉しそうだつた。

「で、こんな所に俺を連れてきて隣に座り頬ずりをしている万智さんや」

「なんかあかんのどすか？んんん♡」

より一層頬擦りを強める万智。

「はいはい。良いよ」

「やったあ！あ！お茶要ります？！」

そう言つて水筒を万智は取り出す。そのお茶を俺は頂くわけだが……クソうまい。

「うまいな」

「京都宇治の抹茶を菅原道真公の産湯で淹れたお茶どすさかい。それにお茶はお湯で作るよりお水で作つた方が酸化せんでええんどすえ？」

「なるほど。おかわりもらつても良いか？」

「焼きおにぎりも食べとくれやす♪」

「ん」

ホテルかどつかで作つたと思われる万智手作りの焼きおにぎりを頂いた。どちらとも超がつくほど美味しい。正直、万智だからという補正があるかもしれないがそれを抜き

にしても絶対に美味しいと思う。

「美味しいなあ」

「ふふ♪良かったぞす……こなたは銀子ちゃんみたいな傲慢さも、あいちゃんみたいな独占欲もあらしまへん。ただそばに置いてくれればそれで満足な便利な女どす」

不意に顔を沈めて万智はこう言った。

「……俺に対しては傲慢でも、独占欲もあつて良いんじゃないか？ぶつちやけ俺は既にお前のものみたいなかんじだし」

「それやとええんやけどなあ……ところで悠斗はんはこなたが悠斗はんと会った時の事覚えてたり、竜王サンたちとこなたが会った時の事知ってますのん？」

「ああ。鮮明に覚えてるし、知ってる。裏で泣きべそかいてた奴が今こうして俺の横で俺に引つ付けているとは思わなかった」

「そうどすか？こなたはあの時から悠斗はんのことだーいすきどすさかい♡」

「ありがとよ……ところでお前と八一達の出会いつて確か小学生名人戦だよな？」

「そうどす」

「……2人も女子が残るなんて珍しいなあって思いながら見てたが……まあ4人揃つて棋士になるとは流石だと思うがな」

「……悠斗はん」

「なんだ？」

「それには間違いがあるんや」

「?・・・どこに間違いが？」

「3人と1人・・・いや4人と1人や。こなたはお燎の下どす。ずっと・・・下なんどす」

「下・・・下だど？」

「こなたは奨励会を受けとりません」

「っ！」

月見夜坂燎元奨励会6級。燎は元々奨励会を受けていた。降級してやめてしまった
があいつはプロへの門を叩こうとした。一方で万智は・・・叩かなかつた。4人の中で
唯一・・・プロを目指さず女流棋士という存在で続けた。

「そればっかりじゃ無いどす。お燎は棋士としてだけ歩んでますが、こなたは観戦記者
ちゆう道を開けてあるんや。お燎みたいに将棋一本で生きていく覚悟整うてへんのだ
す」

確かに万智は棋士になる為に大学を出たり、観戦記者としても働いたり、他の道が
かなり残されている。高卒の、将棋以外何にも残ってきていない燎から比べれば・・・逃
げの姿勢があるかも知れない。

「将棋も穴熊ばっかりで・・・相手の攻めが切れるのをただひたすらに待つだけどす。」

全部：…それなんです。そないなさかい：…ええんでつしやるか？こなたには：…もう分かりません。大体、『山城桜花』なんて名前がタイトルとしてふざけとりますわ：…ただただぎようさんの将棋も知らん様な客の前で駒動かすだけですよ！そんなん：…タイトルちやいます！」

俺の胸の中に顔を埋めて淡々と：…寂しそうに：…悔しそうに心の内を解放した万智。その心の中には自分の弱さや辛さ。負の感情が溜まりに溜まっていた。

「そうか：…そうだったんだな」

俺の胸に顔を埋めている万智の頭をそつと撫でる。さらさらとした髪はとても心地よい。

「万智：…俺も逃げてきた：…」

「え？」

「俺だって『もしも将棋が上手いかなかったら：…』なんて考えてきた」

「悠斗はんが？」

「そうだ。だからこそ真剣に進学は迷った。結果工業高校にしたのも逃げだ。もしも上手いかなかった時にどつかで働ける様に逃げ道を用意しただけだ。本当なら進学校行ってそこで辞めたり中卒でも良いのにそうしたのはそう言う理由があるんだ」

「そう：…なんどすか？」

「そうだ。万智、俺の目を見て聞いてくれ」

「っ！」

じつと目を合わせると万智はかなり恥ずかしそうにする。

「『生きるために逃げるのはありありだ』」

「『生きるために逃げるのはありあり』どすか？」

「そうだ。誰だつて逃げたい時ぐらいあるし、それに逃げる事は何も恥ずかしい事じゃない。ただ、逃げてても逃げなくても大切な事がある」

「？」

「それは自分の選んだその先に後悔しない事。それと周りにそれを認めさせる事だ」

「っ！」

「俺は…常にそうしてきた。タイトル取った時も…その後も」

「…」

俺はプロになって良くメディアにも露出するタイプの棋士だった。ゲーマーとしてゲームの番組やコメンテーターとして色んな番組に出たり「プロとしてどうなのか？」と良く言われたが名人からタイトル取って黙らせた。その後もTVに出る為にタイトルは守り続けた。

「お前がどうやるのかはお前の決める事だ。ただ一つだけ。俺は…待ってる。明日

の夜、俺はここで待ってるからな」

「……はい。絶対に勝って……ここに来る」

目には再び闘志が燃え出した。桜の様に美しく……炎の様に輝く万智がそこにいた。約半年前に約束したあの約束を俺は待っている……

第四十三局 桜花爛漫祝福が如し

「あゝ……眠い」

とぼやいてしまうほど眠い。まあそれどころでは無いのだが……京都四条河原。その近くに用意された特設ステージで大盤解説は行われる。まずは下の席で集合したのだが……

「あいちゃん！来たよ！」「来たのです！」「きたおー！」

J S 研：もといあいちゃんの友達3人も来てくれた。しかし席がない……彼女らが来た時にはすでに席は埋まっていた。それほどまでに女流棋戦でのこのカードは人氣が高い。プロ棋戦にも負けないレベルなのだ。

「二冠！あれ、用意した方が良いですか？？」

連盟職員の場合にゴーサインで答える。

「あれ？」

「VIP席だ」

「へ？」

「3人のためのVIP席だ」

「いや！悪いですよ！第一VIP席はもつとこう…：政界の重鎮みたいな人が座る席じゃ」

「は？何言ってるんだ？VIP席ってのはベリーインポート^Iペト^Pて言う意味だ」

「それ、どう言う意味ですか？」

「とても大切な口リだ」

「はあ!!？」

「ですよね？」

席を持つてきた職員に尋ねる。

「はい。九頭竜竜王が棋戦会場を訪れる際は必ず複数人の幼女フレンズをお連れになるので特別席^{VIP}を用意するようにと、一ノ瀬二冠から相談を受けた会長が乗り気でそれを許可して全国の支部に正式な通達として届きました」

「はあ!!？まじですか!!？兄弟子イ！何やってんですか!!」

「ウ☆ケ☆るWWW」

「ふざけんじやないですよ！」

「もう手遅れだ。全国の支部に俺のお手紙付きで送っておいた。もう遅い」

「うせやん…」

朝一から八一は絶望を感じたが…：それでも対局は始まる。解説の初手はあいちゃ

んの挨拶からだ。

『みなさま！おはようございます！』

「ん？なんやあの小さい子は？」

急にマイクを持つて喋り出したJCに京都へ来ていた観光客や地元住民は興味津々である。

「知らんのか！あの子は雛鶴あい女流一級！立派な女流棋士の先生なんやぞ！」

「ひえー！ほんまかいな!?!」

その事実を聞いた人達は口々に驚きを露わにしている。

『本日聞き手は私、雛鶴あいが！解説は…えつと！師匠じゃ無くて…』

テンパるあいちゃんを見かねた八一は颯爽と登場して自己紹介をする。

『私、九頭竜八一が務めさせていただきます。なお、雛鶴あい女流一級と私、九頭竜八一は師弟関係にありまして棋界でも一番幼い師弟関係だと思えます。至らぬところあると思いますがよろしくお願いします』

周りからは拍手が巻き起こる。

『そして！今日は私たち2人の他にもとあるスペシャルゲストにお越し頂きました！登場していただきましょう！一ノ瀬悠斗二冠です！』

ステージ脇からひよこつと顔を出すと歓声上がる。俺ってそんなに有名人か？と

思うぐらいに。まあワイドショーとか出てくるからそれなりにお茶の間には映るのだろう。

『どうも』

『こちらの一ノ瀬悠斗二冠は現在2つのタイトルを保持し、さらについて先日！名人戦への挑戦権を手に入れたばかりのまさしく関西……いや日本将棋界の先頭を走っています。そして私の兄弟子にあたり清滝剛介九段の一番弟子になります』

『そんなわけで……まあ一門での大盤解説となつていますので何卒宜しくお願いします。さて、まずは振り駒ですが……見えませんか』

『ですね』「あい、見えるか？」

目のとても良いあいちゃんに俺たちは頼る。あいちゃんは目を凝らして結果を見た。

「供御飯先生の先手です！」

『どうやら山城桜花の先手のようですね』

万智の妹弟子である綾乃ちゃんはそれを聞いてホツとする。将棋は先手が有利なのだ。

『さて、得意戦術的に言えば山城桜花は振り飛車。挑戦者は居飛車党な訳ですが……竜王や雛鶴女流一級はどんな戦法と予想しますか？』

『そうですね……私はやっぱり山城桜花の振り飛車穴熊に期待です！』

『いや、立会人は月光九段で解説は俺ですし、兄弟子も得意ですからやっぱり一手損角換わりがきてくれればなあ。なんて思ったりしますよ（笑）』

『私が困っちゃいますよお！』

あいちちゃんはそう言う。まあ一手損角換わりなんてスペシャリストしか指さないから多分出てこないだろう。でもそれを間に受けちゃうあいちちゃんがまた可愛いのだ。

『さて・・・早速ですが荒れてきましたね・・・』

『そうですね。まさかの山城桜花が飛車先の歩をつきました』

『どちらかと言うと振り飛車党よりの山城桜花が居飛車を指すわけですから・・・』

『相手の意表を突く作戦でしょうか？』

あいちちゃんは不安そうにそう言う。これは・・・昨日の答えらしい。『逃げない。』そう言う返事を俺は盤を通して受けた。

『恐らくそうでしょう』

これだけでかなりの衝撃を生むが・・・止まらなかつた。

十手目△4二飛。居飛車党の燎が飛車を振ったのだ。

『飛車を・・・振った？』『嘘でしょ!!?』『い、居飛車党の月夜見坂先生が飛車を振りました！こんなのよそーがいです！』

八一やあいちちゃんも驚きの声をあげる。角道は止まつてる。燎・・・すなわち居飛車

党から最も遠いノーマル四間飛車を燎はぶち込んできたのだ。しかしこれでは終わらなかつた。△8二玉と進めると次の一手……燎は香を一步前進させたのだ。それはつまり穴熊……振り飛車穴熊を指すと宣言したのだ。相手のエース戦法をここでぶつ込んでくる。あの女は……想像以上に恐ろしい。それだけがわかつた。

対して万智は銀冠を作る。左美濃を作りそこから進化させたのだ。左美濃の場合はよつて高美濃囲いや万智の作った銀冠に進化させる事ができるもの。万智は玉頭の戦いになると踏んでこうしたのだ。上手くいけば優位。悪く行けば不利。それを極める中盤は否が応でも重要になるのだ。

しかし……中盤とは将棋において最も難しいのだ。研究の出来る序盤……答えの決まっている終盤。まあマジックを除けばだが。しかし中盤には明確な答えは存在しない。答えの無いその状況で有限の時間を使い、自分の思い描く理想形を如何にして表現するか。そして相手のそれを如何にして捻じ伏せられるか。それが中盤に必要な力。すなわち中盤とは——強者のみが勝つ世界。



少し手数が進んだ。永遠続く殴り合い。見た目では一直線の戦い。しかし実際は膨大な量の読み合い。相手のやりたい手を潰し合う指し。即ち……中盤の出口には互いに時間は無くなっていた。

出口に燎は角を切つて飛車を突つ込む。ついに先手の防衛陣を突破して竜に成った瞬間だった。それを見た万智は最後の長考……。そして考えうる限り最強の手を放つた。鬨り殺しの万智が……。穴熊を崩壊させにかかったのだ。

後手七十六手目5七飛成！

先手七十七手目6一金！

もはやどちらに倒れてもおかしくない最終盤。万智は貴重な持ち駒を放出し、燎は大駒を切つてまで攻めた。凄まじい読み合い。どちらに倒れるかまだ分からない……。ただ熱い。

不意に熱さを掻き消す様な川の近く特有の強い風が吹いた。そして……。それはとても無いものを消し去った……

『ん？…：駒が飛ん…：だ？』『えっ?!?!』『嘘?!?!』

ステージ上で3人は思考が一瞬停止した。この最終盤に駒が吹き飛ぶ。それは決してあつてはならない。自然とは言えかなりの事をしてくれた。互いに1分将棋。今更スピアの駒を並べて……。なんて出来ない。手番を持つている方が優位になってしまうからだ。どうする…：。どうすると慌てふためく会場。そんな中に力強く…：。また凜と

した声で燎が混乱を切り裂いた。

「6九銀」

それは指し手の宣言。一応将棋というのは声で宣言してでの着手も認められている。つまり燎は『脳内将棋でやるぞ。出来んだろ?』と挑戦状を叩きつけたのだ。

早指し派の燎に対して万智は長考派。1分将棋、まして脳内将棋でタイトル戦を戦うなど圧倒的に不利。だからこそ「立会人を呼べ」といえば良い。それはタイトル保持者として、対局者として当然持ち合わせた権利だからだ。しかし万智はそうしなかった。

「8八金」

受けて立つ。そう言ったのだ。

超超超難解な最終盤。それを目隠して戦うのは凄まじい気がある。1人は雄叫びの様に荒々しく…。強く盤に駒を打ち付ける様に符号を読み上げ、もう1人はまるで和歌でも読んでいるが如く独特の抑揚でまさしく静かに凜と駒を打つ様にして符号を述べる。ただの将棋じゃない…。圧倒的な精度。圧倒的な不条理は時に名局を生む。

「名局賞だ…。」どこかでそんな声が聞こえた。女流棋戦? 公開対局? 知ったこっちゃ無い。圧倒的な…。歴史に残る対局こそその名を冠するに相応しい。これ以上にそれに相応しい対局があるなら教えてほしい。熱い。駒を空中に指すたびにそんな感想が湧いてきた。

囲いを飛び出し空中を舞う万智の玉。それを鬼の様な猛攻で攻める燎。しかし万智はそれを全てノータイムで受けきる。そして万智の起死回生の一手。

百十一手目▲6三角。詰める逃げの詰めるだ。完璧な穴熊崩し。たった一点を見つめる万智の視界。9一にある追い詰めるべき玉。それは自分を育ててくれた穴熊という戦法を切る事であり……才能の限界……自分の限界と諦めていた自分への訣別。それを表している。そしてついに……

「7三桂」

万智は言葉で駒を指した。それを聞いた燎は姿勢を正し、喉を潤わせて言った。
「負けました」

▲▽▲▽▲

夜10時過ぎ。人もまばらな京都府京都市四条河原。俺はここでとある人との待ち合わせをした。

「悠斗はん。お待たせした。遅なつてすみまへん」

「別に待つてないから安心しろ」

「……悠斗は「歩くぞ」……はい」

2人絶妙な隙間を開けて川岸を歩く。駒が飛んだ時と同じ様に少し強い風が吹く。とある桜の下で俺は止まる。万智もそれに合わせ歩みを止める。

「万智」

「はい」

「まずは防衛おめでとう。ついにクイーンだな」

そう。万智は通算5期の間、山城桜花を手にした。それは即ち永世位クイーンの称号を名乗る資格を得る事になるのだ。

「ふふ♪おおきに。やけど、こなたが欲しいのんはそないな言葉じゃ無おす」

「分かつてる…。ほら、早く来い」

「はい…」

まだ冷たい風が吹く中俺は万智を抱き寄せる。

「一度しか言わないぞ？」

「はい…」

「好きだ」

「同歩どす」

「ん…」

お互いの唇は近づく。その先を言うのは野暮だろう…。これで一ノ瀬の恋愛が終わる…。訳がない。虎視眈々とそれを狙う1人や2人…。居てもおかしくないのだ。

まあそれはひとまず置いておこう。とりあえず2人は結ばれた。この事実だけで今

はまとめよう。不意に吹いた風は今度は駒でなく桜の花びらを散らす。桜花爛漫。見事に咲いた花びらはまさしく彼らを祝福する様だった。

第四十四局 名人戦第一局

俺たちが現在いるのは山形県は天童市にあるとある旅館だ。数々の名勝負が繰り広げられてきた伝説の会場に俺は今立っている。ここで行われるのは圧倒的な伝統と格式で最高峰に位置するタイトル。『名人』の位を争って行われる名人戦だ。

『将棋の神様に愛された者だけが出る』とはよく言ったものだ。A級順位戦というプロ棋士ですら息が詰まる様な空間で戦い、そしてその空間で優勝してなおかつ時の名人神様に勝たなければなる事は出来ない。まさしくそのフレーズが正しいと言えるのだろう。



前日に検分と前夜祭を終えて対局当日の朝。この日の為に新しく仕立てた和服に身を包み、俺は午前9時45分頃に対局を行う部屋に入室する。大体タイトル戦は対局開始15分前に入室すると決めているのだ。挑戦者の俺は下座に着き、雰囲気ガン無視のデジタル時計と扇子。そして万智に淹れてもらつたお茶の入った水筒を置いて名人を待つ。

名人は10分前に入室して来た。上座に着くと名人も名人で支度を始める。支度を

終えて互いがしつかりと向かい合うとピリピリとタイトル戦前独特の張り詰めた空気が対局室を包み込む。立会人の月光会長はよく味わった事がある雰囲気なのか割と落ち着いているがこちらは落ち着かない。名人の合図で駒を並べ、振り駒を行う。そして遂に午前10時になり：：遂に名人戦第一局が始まった。

振り駒の結果、先手は名人。名人が初手に▲7六歩と指す。対して俺は2手目にいきなり飛車を3筋に飛ばして△3二飛とする。三間飛車の陣形を取った。

対名人戦での振り飛車の使用は初めてだ。流石の名人でも少しくらいは驚くと思っただがむしろニッコニコだ。そう言えば俺の振り飛車を受けてみたいって言ってたところだ。ここで思い出した。

ニコニコとしているがその手は慌てずゆっくりと確実に駒を組んでくる。名人には途中▲2四歩といきなりの決戦をする順もあったが：：名人はそれを見送って無難に駒組みを進めた。なので俺も駒組みを進めた。22手まで進んで俺は振り飛車党における安定と信頼の美濃囲いを組んだ。

続いて名人は：：▲8六歩△5二金▲8七玉と手順を踏んで左美濃に構えた。それを見た俺は△4四歩と空いていた角道を止めた。ここで止めるかは迷ったが結果的に悪くは無かったと感じた。その後は互いに考えを巡らせ最終的に俺が10分を消費したのちお昼休憩となった。

正直言って左美濃が流行したのはずいぶん昔のことで、俺がプロになったときはもうあまり指されていなかった。名人は恐らく指し慣れてはいるが俺がほとんど見た事のない陣形を組んだ名人がどのような構想を見せるのかが今後の焦点となってくると俺は感じていた。

▲▽▲▽▲▽

昼食は名人、俺共にカレーを注文した。何故かタイトル戦の時に食べたくなるカレーである。うまい。

と、言うわけでそんなクソ美味しいカレーを食してあつという間に午後の対局となった。

午後からは暫く駒を動かしていた。すると過去見た局面が現れた。確か20年近く前にあった局面だ。名人世代と呼ばれる世代の1人が出した局面のはず：：

そんな事も思い出しつつ指しているといつの間にか時間は経っており俺が封じ手を行う。俺が1、2分考えて出した手は△4四銀。紙に書いて封じて立会人に手渡す。

夕食やらなんやらを頂いてその日はさっさと寝た。1日制タイトルでは無いのでタイトル戦の将棋を指した後に万智とかが居ないのは違和感の塊だがこれは名人戦なのだからと自分に言い聞かせておいた。

▲▽▲▽▲▽※ここからは八一視点

翌日の10時に封じ手が遂に開封された。兄弟子の放った一手は△4四銀。所謂ノーガード戦法だ。

「中々ですな」

「流石やな」

俺と師匠はそう言つて領いた。何が流石かと言うと今の局面ならこの先▲6四歩△6二金引▲7五歩△8三銀▲7四歩△同銀▲7五歩△8三銀で名人は拠点をもつ作れる。でも攻めがない、というのが兄弟子の主張なのだろう。ここでいきなり▲6五金のような手も考えられるけれども……何かあつてもおかしくない局面だと言う事だ。

その後は▲6七銀引に角を逃げずに△7二飛と回つたことや、詰めろをかけるなど兄弟子は想像し難い……。まるで名人の様な指し回しをやつてのけた。

控え室は兄弟子有利と言う声上がる中、一気に決めに行くと思われた兄弟子が一転して金を自陣に指して守りを固めたりと難解すぎて誰も理解が及ばなくなってきた。もはやAIを使つてもどっちが優勢なのか見えてこない状況なのだ。先手優勢なのか後手優勢なのか……。それとも千日手なのか

そして最終盤、1分将棋の1分を極限まで使つて兄弟子が切り出した一手は銀を捨てる△6六銀。一見して銀のただ捨て。しかし、それは控え室にいた全ての人を戦慄させるのに十分すぎる一手だった。

「うお！なんちゅー手や！」

「これは…… 鬼や」

「全く思いつかなかった…… こんなのアリか」

兄弟子が指したその一手に棋士や記者は恐れ慄く。兄弟子が△6六銀と指した後、▲6六同歩は後手玉が詰めるになっておらず、△8九金と詰めるをかけて後手の勝ちと見られた。だけれども▲6一飛が詰める逃れの詰めるになるなど、先手にも返し技が考えられる。どこまでも難解な終盤戦が続いている。もはや2人にしかその局地は理解に到達できていない……

結局のところ△8八角成▲同飛△7九角成と迫れば先手玉は寄り。しかし角を渡すと後手玉に▲7一角からの詰みが生じる。従って△8八金と取るしか無いが…… ▲同飛△8九金▲7八金で千日手が避けられない状況になった。

「マジックだ……」

「流石やなあ……」

控え室はとてつもない騒ぎになる。名人を彷彿とさせる誰もが全く思いつかなかつたそれ。兄弟子はたった1分でこの超難解な最終盤を終わらせる千日手をもぎ取ってきた。誰もが思いつかなかつたものを…… そしてもう一つ恐ろしいのは兄弟子はこの超難解な終盤を戦ったあとにもう一局指すと決断したのだ。そして名人もそれを呑ん

だ。

そんな芸当をすれば精神的にくるものがある。特に今局みたいな難解な終盤を指した後はそれだけで恐ろしい疲労になる。さらにこの対局は名人戦。それだけでも大きなプレッシャーとなるはずなのに……

対局を見に来たお客さんはもう一局見る事が出来る事に喜ぶが対局者はどちらかと言うとさつきも言ったが疲れて意気消沈になる……と思つたが今日の組み合わせは名人と兄弟子。暇さえあればいつでも何処でも将棋指してゐる変態だ。多分大丈夫だろう。



当日指し直しとなり待ち時間は1時間で対局が再開された。先手番の兄弟子は今度は矢倉を構えた。一方の名人は角道を開けたまま駒を組み、桂馬を跳ねていつでも仕掛ける様な状態にして急戦を狙いに來た。

そして、兄弟子が自玉周りで戦鬪を回避する為に『無視できない一手』を放つ為、▲三五歩と指して歩を突き捨てて開戦した。兄弟子もかなり意欲的に攻めを見せたがあと一歩及ばなかった。名人が桂馬を跳ねた速さを活かして速い攻めを展開。兄弟子は攻めとそれを受ける事が中々両方でやる事が出来なかった……指し直し局の101手目。遂に……

兄弟子は「負けました」と言つて駒台に手を置いた。名人戦初戦は千日手を挟んで名

人の先勝となった。俺から見ている：：千日手局も指し直し局も兄弟子と名人にしか指せない名局だった。初戦から2人ともかなり飛ばしてきていると言うのが理解できる初戦だった。



「あゝ負くけくたゝゝゝ」

自室の布団に倒れ込みながら俺は言った。先勝出来なかったのは痛い。別に将棋自体は悪くない。まあ：：指し直しは先手番なのに完全に名人ペースというか作戦勝ちだったのだが：：そんな時もある。千日手に持つて行く事もできたし、俺の指した△6六銀は鬼手と表されるほどである。だからこそ悪くは無かったと思うのだがなあ：：

「悠斗はんらしくないなあ」

俺を膝枕してくれているのは皆さんわかっているだろうが万智だ。

「『らしくないなあ』って仕方がないだろ？別に悔しくはないけどな」

「ほんと、そう言う所悠斗はんなんです。タイトル戦やのに悔しがらへんなんて：：

対局終わった後の感想戦かてみっちり3時間ぶつ通してやってますし、まず負けた勝つたけどあるのにあそこまでニコニコして感想戦やるなんて狂気どすえ？」

「な〜にが『狂気どすえ？』だわ。彼女に『狂気どすえ？』とか言われたの人類史上初じゃない？俺はそんな狂気に染まった覚えは無い。まず感想戦は互いの意見を言い合える

貴重な場だ。あんなに面白いものない。それに今更それを悔しがつても意味はないだろ？次勝ちやええんだよ。それで振り出しだからな。別にタイトル取れなくても死ぬわけじゃないし」

「そんなん言うて〜。他のせんせ方に聞かれたら殺されますえ？悠斗はんの師匠やら」

「あく確かにな。まあその時はその時だ。あ、そういえばこれやる。明日朝の便で帰るぞ」

そう言うて別に取つておいた新幹線の切符を万智に渡す。基本的に俺は負けた時は朝早くの便で先に帰宅するのだ。理由としては敗者がいても気まずいだけだからだ。まあ俺と名人がセットの場合は帰りの新幹線でも真剣勝負の将棋やフツーにカードゲームとかやる事から「変態」とか「流星は天神」とかよく言われるけど（笑）それでも今日は早く帰る理由があるのだ。

「あれ？珍しいどすなあ。いつもなんやかんやで取つてくれるこなたの分の帰りの新幹線を最初から渡してくれるなんて。天変地異でも起きるんどすか？」

「散々だな……お前、この前山城桜花戦の優勝のお祝いしてなかったからな。せつかく東北来たし、仙台に牛タン食いに行くぞ」

「やったどす！悠斗はんだーいすき♡」

「それ本心だろうな!!？」

「何言うてるんどすか。本心に決まってるやないどすか」

と言いながら牛タン牛タン言ってる万智。まあ可愛い彼女には餌付けしろと言いますし（言わない）新幹線取っちゃったからね。仕方ないね。と、言うわけでいつの間にか敗北の痛みは消え去りただただ可愛い彼女と牛タンを食った悠斗であった。

〈名人戦〉

第一局 千日手の末、名人の勝利

第四十五局 女王戦第一局前夜祭

「晶さん、無茶言つて申し訳ない……」

「いや、先生の頼みだ。それに亡くなられたお二人も先生にお会いしたいと思つているはずだ。さあ、ついたぞ」

俺がやつて来たのは瀬戸内海の海風が当たる小高い丘。そこには関係者のみしか入ることの出来ない墓がある。その入り口で俺は晶さんに感謝を述べて敷地に入った。その敷地内に今日の目的地はあった。

「お二人ともお久しぶりです。一ノ瀬悠斗です。」

一息ついて最後にこう述べた。

「あの子の大舞台。お2人も見守つていてください」



「まさかここで天衣の初タイトルを争う事になるとは……」

タイトル戦第一局の舞台は大阪の通天閣。銀子の地元だ。朝早くに俺と天衣はそこについた。

「師匠こそまだここにいて良いの？」

「まあなんとかなるべ。地元東海での対局だし、久しぶりに名古屋飯とか栗きんとんとか食いたいなあ…」

名人戦第二局の検分は明日あるのだ。そう！要するに！タイトル戦前日に弟子のタイトル戦を見にきているわけだ。残念ながら対局の様子は見えないが…

今回の女王戦は1〜3局までは10日間で作るという前代未聞の日程だ。その局以降の対局は日程すら決まっていないほどだ。理由として王将戦で生石現九段が粘りまくった結果第七局の舞台となるはずだった旅館で第五局の指し直しの指し直しが行われる事となった。お陰で名人戦まで予定がぐちゃぐちゃになった。

それでも会長ができる限り女王戦と被らないようにしてくれただお陰で、今のところ明日の第一局以外は被らないように配慮してくださった。本当にあの人には頭が上がらない。

両対局者の写真撮影は通天閣の麓にある『王将碑』の前で行われた。タイトル戦の恒例行事であり何重ものカメラの砲列が10歳の挑戦者と15歳の女王に向けられる。

「こつちもお願ひしまーす!」「こつちも!」「もう少し違うポーズお願ひできますか!?!?もつとこう…カメラの向こうの読者を踏みつけるような…そう!そんな感じですよ!」

若干良くわからんコアなメディアも混ざっているが…そんな要求にも冷静に2人

は答えている。

2人の対局の事は連日TVで放送されており、この前出たワイドショーでもその話をたっぷりさせられた。2人ともうちの門下だしあんまり癪に障るような事喋りたくなかったんだけどなあ…。ワラワラと集まる見物客の中には「あの神戸のシンデレラはワシが育てたんや！あいつはやりよるでー！浪速の白雪姫も明日で命日や！」あの『双玉クラブ』でお世話になったパンサーが紫色の髪の毛と服にパワーアップしてやって来ていた。いや、強過ぎない？

「今局の立会人は…。」

立会人はナニワの帝王。先日引退されたばかりの蔵王達雄九段が引き受けてくれた。

「なあ一ノ瀬先生。立会人があんなおじいちゃんで大丈夫なのか？」

隣でカメラを構えていた晶さんが質問してくる。まあ棋界をあまり詳しく知らない人からすればそうなるわな。

「あの人は関西将棋界の大重鎮。あの人の働きかけ無しに通天閣での対局は不可能。絶対にいる存在です」

「そうなのか…。」

そんな蔵王九段だが…

「…」までできて酒も飲まずに検分やと!??そんな無いわ！おい、剛介！剛介！」

「はいはい、先生。どうされましたか？」

「酒飲みに行くぞ！」

「いやしかし……タイトル戦の検分に立会人が居ないのは……」

「そんなもん八一にやらせとけ！まだ未成年やし、ちようどええ！悠斗！お前もこんないー！」

「いや……弟子のタイトル戦ですし、明日から名人戦なんですけど……」

「後回しや！」

「うそお!!？」

「それじゃあ八一！あとは頼んだで！」

「ええ!!？」

そのまま引き摺り出されたのは良く無い思い出だろう……俺が心配しているのはあれだ。名人戦の方もそうだが……銀子と天衣という清滝一門最高の混ぜるな危険がタイトル戦でぶつかるとの事だ。後から聞いた話したが2人とも検分からかなり絶好調らしく揮毫も墨をたつぷりつけて殴り書きしたらしい。で、結果としてこんな感じのが出来たらしい。

←画像

てな感じだった。ちなみに『略奪』は天衣で『駆除』は銀子だ。中々近年のタイトル戦にしては殺意高めである。やはり混ぜるな危険は混ぜるな危険だ。ちなみに天衣のは10万円で晶さんが落札したらしい。タイトルホルダーとかの揮毫ですら数千円なのに。全く恐ろしい。そして「女王の揮毫が挑戦者より安いなんてありえん！」と言つて銀子の揮毫の値段も釣り上がり12万円ぐらいまで行つた。あほでしょ？みんな。

ちなみに師匠と蔵王九段はそれを止めるどころかビールで上機嫌になつて笑いながら見ていた。

「おう悠斗！」

「もつと飲まんか！」

「はい！頂きます！」

ここまで来るともう蔵王九段は止められない。名人戦という最強の錦の御旗や俺の師匠ですらだ。

「剛介！お前もやぞ！」

「はいはい先生。ところでそろそろお休みにならないと明日の対局に支障が出ますから……」

そんな師匠を蔵王九段は平手打ちしていくう！

「あほか！ビールなんて何杯飲んでも酔わんわ！それに… わしはもう引退したんや。体に気を使う事はあらへん。酔うこと以外に楽しみはあらへん。将棋だけや無しに、酒まで奪つてくれるな」

蔵王九段は寂しげに言う。

「先生… わかりました！この清滝剛介、先生が満足するまでお付き合ひ致します！八
一… さつさとこつちききて裸踊りするぞ！」

「何で俺?!？」

「すまん。俺はそろそろ出ないといけないから…。」

「あ…ずるい！」

「何がずるいや！一門の大行事やぞ！さつさと脱がんかい！それじゃあ、清滝… 行き
まーすー！」

アム〇みたいにいる師匠。

「安心しろ八一。晶さんが撮ってくれるぞ？」

「はあ？」

「安心しろ九頭竜先生。先生の勇姿は私がしっかり記録してやる！」

「いらねえよ畜生！」

ネクタイ外しながら八一は言った。

「九頭竜：．．．行きまーす!!」



「さてと」

会場を出る準備が整い、会場を出ようとしたその時に、会場のロビーにたった一人。可愛らしい女の子が立っていた。

「あれ?」

「何よ．．．そんな如何にも『予想外』みたいな顔して」

「いや、タイトル挑戦者だから中にいると思ってたし、むしろ来ないと確信してわざとひとりで出発しようとしたんだけど」

「別に師匠の出發ぐらい見送らせなさいよ。ほら、さっさと行きなさいよ!」

そう言つて蹴り飛ばされた。いや、スーツ蹴るのはやめよ? 流石に。

「じゃあ行つてくるわ」

「え、ちよつ!」

「?」

「わたしには何にも無いわけ?」

「．．．え?なに?なんか言つて欲しいの?」

「別に！あんだなんか居なくても私は出来るわ！」

「……冗談だ。頑張ってこいよ」アタマナデナデ

「くくくっ！」

「あれ？いつもみたいに反撃来ないな。もつと撫でとくか」ナデナデナデナデ

「調子に乗るなあ！」

頭をブンブンと振る天衣やっぱ良いよね。

「はいはい。じゃ、俺は行くから。相手は銀子だ。十二分に気をつけろよ。あいつは強い。ずっとあいつを見てきたからこそそれは確信してる」

「分かってるわ。ヘマはしない」

「それと天衣。よくここまで来た。本当の勝負はここからだ。全力で挑め。お前の強さを一番近くで見えてきたから分かる。お前も強い。絶対にやれるから」

俺は天衣をじっと見つめた。天衣は何故か顔を赤くしてそっぽを向いた。

「くくくっ！分かってるわよ。あんだが一番近くで見えてきたことぐらい。ばか……」

「？」

「なんでも無いわよ！」

天衣はまるでサッカーボールを蹴るが如く俺を蹴り飛ばした。

「俺何にも言っていない！」

「知らないわよ！ほら、さつさと行きなさい！負けたら承知しないわよ！2タテは許さないわ！」

「そんな無茶な…。」

第四十五局 女王戦第一局

..... side八一.....

朝から報道陣が数多集まる中、対局開始の丁度20分前に立会人である蔵王九段が入室した。和服を着た蔵王九段は昨日とは違い杖をつくことなく背筋まで伸びており「流石は名棋士」と言う感じだった。一方師匠は疲労と二日酔いで顔面蒼白。もう今日は使物にならないと確信した。兄弟子もするだろう。

続いて天衣ちゃんが入室した。黒紅色の振り袖に深紅の袴。熱い闘志に燃えた天衣ちゃんは見る人全てを魅了した。その美しさは記者がカメラのシャッターを切るのを一瞬忘れるほどだった。そして座布団を確認して盤の前に座る。その体は八寸盤と比較すると凄まじくアンバランスでありあの子がまだ小さな小学生であると言うのを思いつき出させる。

そして対局開始の丁度10分前。ついに姉弟子が姿を現した。姉弟子はタイトル戦でよく着ている紺の着物を着ていた。姉弟子の綺麗な髪は結われており、こちらもちからでとても綺麗だった。

振り駒の結果は歩が5枚で姉弟子の先手。振り駒を終えてから対局開始までの時間

はタイトル戦の中で最も静寂が広がる時間と言って過言では無い。それほどまでに会場はピリピリとする。そして記録係のタブレットを覗き込み時間を確認した蔵王九段は静寂を破った。

「ほな、初めてもらおかな」

女王戦第一局の火蓋がここに切つて落とされた。…と言つても午前中は特に何もやる事はない。その為今回観戦記者をやっているあいも書くことがない為、ひたすらJS研のみんなと話している。しかし、まあ盤の映つたモニターの方をチラチラと見て状況は気にしているようだ。ちなみに俺は我らがJS研と戯れていたと言ふことを記事にされかなり炎上した。『スマホより簡単に幼女を乗り換える男、それが九頭竜八一』と言ふとんでもない見出しをつけた記者もいたほどだ。なお、この見出しは後から兄弟子の耳にも入りTwitterで兄弟子が大絶賛していたのは別の話だ。

時間はそろそろお昼時。観戦記者のあいには食レポをする様に促した。

「あい、そろそろお昼時だし食レポついでお昼を食べてきな」

「えっ!?? 将棋の観戦記者なのにお昼とかもレポトするんですか!??」

「うん。それがタイトル戦の慣例だからね」

「でも…」

あいはかなり躊躇っており、動くのを躊躇した。

「あいの実家ってタイトル戦やったでしょ？あれってかなり準備いるって聞いてるけど…… そうやって準備してくれている関係者の人達にも感謝の意味を込めて言うか…… 将棋ファンにその旅館とかの良さを知ってもらうのも大切な観戦記者の仕事なんだ」

俺の言葉にJ S研の濡ちゃんや綾乃ちゃんが反応する。2人はその話しにかなり納得してくれたようだ。神奈川の『陣屋』や天童の『滝の湯』、新潟の『龍言』に山梨の『常磐ホテル』、そして愛知の『銀波荘』などなどそうやって古くから将棋のタイトル戦を行い、名局を生んできたところは数知れないのだ。

そうして皆で食事を取り午後になつてすぐ、俺たちは大盤解説の会場に行こうとした。控え室にいる晶さんも一緒に行こうと言う風に声をかけたのだが、一心不乱に盤を見つめて動かなかった。将棋の内容は把握していないだろう……。だが、天衣ちゃんをずっと見ていたあの人だからこそ一瞬たりともそれを見逃したくなかったのだろう。

そつとしておこう。そう思い、控え室を出ようとした時に晶さんが声をかけてきた。

「九頭竜先生、少し良いか？」

「どうしました？」

「記録係がやたらと袖を気にしているんだ」

「袖？」

モニターに映っているのは天衣ちゃんの右袖をやたらと気にしている記録係の姿。あれでは気になるだろうと言って不機嫌になる師匠。しかし…記録係が感じていた違和感は俺に伝わってきた。

「袖…右…あつ!!?」

継ぎ盤とモニターの盤を見て違和感、記録係の感じていた物に気づく。

「どうした、八一?」

「香が…無い!右の香が盤から落ちて駒台に乗ってるんですよ!!」

「「ええええええええ!!?」」

次の瞬間、モニターに控え室に残っていた全ての人が集まる。そして皆で確認するがやはり幻覚でも夢でも何でもない。香が落ちていた。それを指して仕舞えばその瞬間…負けになる。

▲▼▲▼▲… side天衣…

行ける———そう思っ指し進め午後になった。そうして駒台にある香を取って盤に指した。これは空銀子にとつても痛いはず。そう思っ空銀子の方を見た。しかし、あいつは一切表情を変えなかつた。

すると唐突に立会人が入ってきてこう宣言した。

「……迄やな。今の手を持って、女王の勝ちとなりました」

..... は？

「なん.....で？」

訳もわからず混乱する私に師匠の弟である八一の奴がやってきてこう言った。

「天衣ちゃん.....あの香は持ち駒じゃ無い。右の香が袖に引つ掛かつて駒台に落ちたものなんだ」

「は？.....嘘」

その瞬間に腰が抜けた。私はそれを理解出来たが、理解出来なかった。淡々とインタビューに答えている空銀子を前にして、私は全てを悟った。あの女はそれすらも全てわかっていた。だからこそあの女は私が香を指した瞬間に勝利を確信して余裕ぶっこいてた。私は全てにおいてあの女を上回ってなかった。自信はいつのまにか過信となり、幻想を作った。勝てると言う幻想を。

これをどう.....師匠に報告すれば良いの？これを.....どうやって.....お父様達に報告すれば.....良いの？全てが暗くなった。

▲▽▲▽ side 悠斗.....

午前12時頃。新大阪駅の新幹線改札で俺は鏡洲さんと待ち合わせていた。名古屋に行く為である。2人で新幹線に乗り込み一路名古屋を目指した。地元東海での対局という事もあり蒲郡と言う割りかし名古屋中心部から離れた場所であるのにかなり熱

烈な歓迎を受けた。流石は名古屋、我らが地元だ。

名人組と合流して早速検分に入る。と、言ってもぶつちやけそこまで求めていない俺と名人の検分など一瞬で終わる。

名人も俺もさっさと終わらせて前夜祭まで暇を作る。暇な時間は前夜祭の為に来ていたファンと合流したりなどまちまちだが……今日はそうはいかなかった。俺の弟子の初タイトル戦だからだ。今になって師匠の気持ちがよくわかった。俺のタイトル挑戦が決まった時、まだ獲得もしていないのに涙ポロポロ流しながら意味不明の言語を喋っていた。俺もとても嬉しい限りなのだが……と、言うわけで早速 *Abema* を覗いたのだが……そこには対局が終わったと言う結論だけが表示されていた。

「……………は？」

と、同時に職員の人々が飛び込んできた。なんと、袖に当たって香が駒台に落ちて、それを指してしまったと言う。あり得ない。万が一にもそんな事があるなど前代未聞だ。別に天衣がくとか銀子がくとかじゃ無い。どちらかと言うと心配なのは天衣の様子だ。そう考えるより先に手が動いた。八一に電話を掛ける。

『兄弟子!? ひよつとして……見ましたか?』

「見たぞ。あれはデマじゃ無いんだな?」

『はい。事実です。間違いない』

「天衣は？」

『表面上は平然を装っています。本当に強い子です。普通ならおかしくなっても仕方が無いのに』

「そうか…… 晶さんは？」

『晶さんは大丈夫ですが…… 天衣ちゃんに今は付き添っています』

「わかった。済まないがなんかあつたら連盟経由で俺に伝えてくれ。大阪に帰るまでは頼んだ」

『はい』

相当なダメージを天衣は受けただろう。どれほどのダメージなのか。それは全く見えないがこれは分かった。この対局、勝たねばならない。天衣がこれに責任を感じてはならない。なんとしても勝つて大阪に戻り、天衣と話さなくてはならなくなった。勝つ。絶対に。そう、硬く心に誓った。

第四十六局 名人戦第二局

朝8時40分。愛知県の銀波荘の一室。対局室には記録係の鏡洲さんと立会人の棋士が座って待っている。

「おはようございます」

そう言いながら入室して下座に着く。やはり他のタイトル戦とは比べ物にならないほどの緊張感が俺を襲う。名人獲得者の残した言葉だが「名人戦は永世位のかかったタイトル並みに緊張する」だそう。全くその通りだ。これを計11期。出場ならそれ以上この場に立っている名人はやはり只者では無い。

対局開始10分前に名人も上座に着席する。2局目は俺の先手で行われる。

「時刻になりました。挑戦者の先手で始めてください」

立会人がそう述べると俺と名人は戦いを始めた。

「よろしくお願いします」

▲2六歩△3四歩▲7六歩△8四歩▲2五歩△8五歩▲7八金△3二金▲2四歩△同歩▲同飛△8六歩▲同歩△同飛▲3四飛…15手目までで横歩取りという戦型になった。

非常に変化に富んだ戦法ではあるが……それ故に膨大な研究量と終盤まで正確に指し切る力がある。一手でも間違えれば負けに直結する難しい戦法でもあるのだ。だが……だからこそ面白い。名人も同じ思いだろう。これを……この戦法を終わらせたいのだろう。この対局で終わりはしないがそれに近づく一局にしようという事だろう。

▲▽▲▽▲…… side 鏡洲……

俺は今、伝説達を目の前にしている。1人は名人。つい1ヶ月ほど前に盤王戦でタイトル100期目を獲得した正真正銘の天才。神と呼ばれるのにこれほど相応しい人は居ないだろう。

そしてもう1人は一ノ瀬悠斗。奨励会時代から研究仲間として切磋琢磨。いや、そんなことを言うのも失礼かも知れない。しかし最も仲の良い仲間の1人だ。もうすぐ22歳の誕生日を迎える若き天災棋士。最年少での永世位獲得、二冠……こちらも数え切れないほどの伝説を創り上げてきた。そんな2人がまた、ぶつかる。

本来……2人の対局、特にタイトル戦は記録係を志願する者はいない。普通、トッププロの特にタイトル戦となれば記録係になればめちやくちやラッキーぐらいなのだ。当然、自分で手合いを選ぶ三段でも中々取ることは出来ない。しかしひとつだけ例外のカードがある。それが天神戦なのだ。何故、このカードだけは人気が無いのか？

理由は単純。2人の将棋が難解すぎるのだ。唐突に起きるマジック。AIも慄くほどの長手筋。AIを超えるほどの一手。もはや奨励会員だけで無くプロ棋士すらそれを理解するのは不可能。それを考えたところで自分の感覚が狂うだけ。故に半端な覚悟では自分を悪くするだけなのだ。

ひとつ事例を挙げるなら、初めてこの2人が対戦したタイトル戦。玉座戦では当時三段の中でも一位を走っていた人が記録係を担当した。そして担当した後、何故か連敗して失速。結局昇段を逃してしまったのだ。その人曰く「あの日、感覚が破壊された」と言っていた。それ程までに狂気じみたカードなのだ。

なら、何故俺はそのカードを取った？それは俺なりの覚悟だ。この対局が理解できなければ俺はその時、一步死に近づく。それぐらいの覚悟を持ってここに来た。

▲▽▲▽▲▽

いきなりの難局だ。▲2六飛△8八角成▲同 銀△4四角▲2一飛成△8八角成…

悠斗は名人から同銀からの飛車、銀両取を喰らったのだ。しかも飛車を逃して銀を取らせばそれは銀を取られるだけで無く角成。さらには飛車成が出来かけない危険な状況を生んでしまう。しかし…悠斗は▲2一飛車成を選んだ。当然続く一手は△8八角成。

指されたたく無いし、当然最も嫌な場面ではある。後から聞いた話してはあるがこの局面は元々研究が進んでおらずこの2人はタイトル戦で将棋を終わらせようとしているのだ。終わりに向けての研究をしているのだ。名人戦という舞台で…

そして悠斗はすぐに▲9五角と指し返す。飛車取りの動きだ。飛車を逃せば角成の方を守られる。先程悠斗がやられたのと同等の嫌な指し回しを悠斗は引つ張ってきたのだ。名人は一瞬考えて△8九馬と指し、悠斗はノータイムで▲8四角と応じる。29手目が過ぎたがこの時点で互いが思う1番強い手を指しあっている状態になっている。しかし、その状況下なのに評価値などで均衡なのだ。

そしてそこから数手進んで32手目。△8三步打。ここで悠斗に出された選択肢は角を切つて8二にある歩をと金にするか角を逃すか。結論として角を切る形を悠斗は取った。歩成るを作つて次の銀取りに向かう。この瞬間、名人が悠斗の角を取った事で評価値が一瞬―数百まで振れたものの結局のところまだ同格。落ち着いた手つきで悠斗は▲7一とを指して銀を取った。

それから2手進んで名人の持ち駒が歩2桂1銀1金1角1。対して悠斗は歩2桂2銀1飛1。互いに自陣はほぼから。どちらかに評価値が振れていても全然おかしくない状況なのに全く評価値が振れ無い。とても怖い状況になっている。

そこから程なくして悠斗が37手目を指して名人が38手目を封じ手にして初日が

終了した。

▲▽▲▲▽▲

あつという間に2日目。名人の封じた手が読み上げられた。封じ手は△3八歩打。俺みたいな振り飛車党からするとこの歩はかなり気持ち悪い。なんなのか後で悠斗に聞いたところ「横歩だとたまにある。ただこの場合は先手の狙いとして4一銀があるけれど次の1二角で4一銀の狙いを残しながら1一竜と香とりたいたいとこだけど、それをとると2八銀みたいな手が生じるんだ。多分それが3八歩の効果なんじゃないか？」と言っていた。まだ……理解できる範疇で盤上を駒が舞っている。

40手目に名人が△1二角打と指して悠斗の竜を取りに来た。しかし悠斗はノータイムで竜を▲2六龍と引いた。その瞬間名人は△6七角成と2枚目の馬を作る。馬2枚が自陣に攻めてきてきていると言う一見大劣勢と言って過言では無い状況。しかし、悠斗目線から言えば6筋の歩が消えたと言える。だからこそ悠斗の一手は攻めの▲6四歩。十数手進んでいく。その中で後手である名人は馬を切るなど思い切った行動に出た。評価値というか、普通に名人優位を示している。けどどどちらも守りが薄く一瞬で逆転が決まってしまう危険な状況にある。そんな中での▲7五桂打。逃げる場所を間違えれば名人に詰みが生じる危険な場面。名人はそれを読んで読んで読んで。掻い潜る。

63手目。悠斗は自陣にあるもう一枚の馬をどうにかする為に▲4八銀打つと指した。その瞬間名人には二つの選択肢を与えられた。1つは角を守る。もう一つは角を切る。名人の選択は△5九金打。角を守る選択肢を取った。その手を見た悠斗の顔が微かに笑ったのを俺は見逃さなかった。名人も気づかないほどの微かな小さな笑みだった。がたしかに笑った。

悠斗の笑顔はここに敗着があるという意味か面白いという意味が含まれている。この笑い方は前者だろう。前者と後者で少し笑い方が違うのは知っていた。この状況でそれを見せるのに俺は違和感しか感じなかった。この時は後手。つまり名人優位をAIは示していたからだ。

元々安定していなかった評価値。一瞬—2000を超えて名人優位を示したが…悠斗が笑って以降評価値はすぐに互角…そして悠斗優勢になった。詳しく読み込ませた結果そうならしい。悠斗の読みについていけないAIが存在しているのだ。やはり目の前に立っている悠斗は天災である俺は思う。

名人もそうだ。圧倒的に年上ながらその将棋について知っている。それは名人という人物がAIをもものもしない『名人』が『名人』という存在である上で最も必要な名人らしい将棋。それがこの将棋に出ている。評価値が安定しないからこそ彼らはそれほど高い次元を渡り歩いているのだ。

「熱い……」

自然とそう唱えてしまう。こうも熱い将棋はそう無い。『大勝負に名局無し』とはよく言う。タイトル戦という大勝負はただでさえ実力を出し切るのは難しい。しかしここにはそれを超える互いが恐ろしいほどの力を持つて戦う舞台があった。刃をギリギリで躲す様に。そうして戦い続けた末の97手。▲7二竜。

「負けました」

「ありがとうございます」

大熱戦。のちに万智ちゃん達の山城桜花戦と共に名局賞有力候補に上がったこの対局は悠斗の勝利で戦いを終えた。混戦になろうが自分を信じて粘り強く、諦めずに。そして力強く戦い抜く事でAIすら超える一ノ瀬悠斗という棋士の強さが盤上に現れた。流石は『天災』だ。そんな逆境を。AIと名人を超えていくという常識を超えていく事への勇氣。それは強者へ立ち向かう勇氣に似ていると悠斗は言っていた。まさしくそれを悠斗は伝えたかったのだろう。

銀子^強ちゃん^者へ立ち向かう。どんなに辛くても立ち向かう力を一つ教えてあげたのだと思う。

〈名人戰〉

第一局 名人勝利

第二局 挑戰者勝利

第四十七局 茨姫とシンデレラ

タイトル戦を終えた翌日、俺は最速で大阪に戻り家に荷物を置くとそのまま車に乗って神戸を目指した。師匠に勝利報告すらしていないのに勝手に体が動いていた。もちろん目的地はただ一つ。弟子の元だ。

法定速度なんてクソ喰らえでかつ飛ばして神戸まで行き夜叉神家に車を止めてお邪魔した。

「先生。ご無沙汰しております。名人戦はお疲れ様でした」

玄関で天衣のお爺さんに丁寧な挨拶を受けた。

「こちらこそご無沙汰しています。天衣ちゃんは……どう言った状況でしょうか？」

「……やはり表面上は明るいです。しかし……」

声を濁したがとても苦しそうな顔をした。心配の気持ちしが前面に滲み出ている様だった。

「受けた傷は大きいでしょう。しかも彼女にとつての初の大舞台。受け入れる事すら難しいものがあります。その点、あの子は本当に強いと感ずます……天衣と会ってもよろしいでしょうか？」

「もちろん。そうしてあげてください。こちらの部屋です」

そしていつぞや天衣と初めて会った部屋に通された。

「天衣、先生が来てくださったぞ」

「失礼するぞ」

「っ！」

部屋には天衣がいた。しかしその顔は初めて会った時の様な自信は何処かに消え失せてとても苦しそうな顔をしていた。

俺は天衣の前に座り込み声をかけた。

「天衣……まずはタイトル戦初戦お疲れ様」

「ええ。ありがとう。でもあんな無残な負け方してしまったの」

その言葉をかけるとさらに悲しそうにした。

「そうだな」

「私のどこを見込んで弟子にしたの？あんなバカみたいな事やるのに」

「……俺もある」

「はあ？」

「奨励会時代の話したがまだ奨励会で級位の時代に2歩を指して負けた事がある」

「あんたが？……天災と呼ばれるあんたが2歩を指して負けた？」

天衣は俺の昔話に衝撃を受けて目を丸くした。

「信じられないだろうが本当にやらかした。あの時は泣きたくなかったわ。その時勝てば昇級だったのに昇級を逃したからな。この世の終わりかと思った」

「ふうん。でも、私はタイトル戦でそれと同じ様な反則をした」

「……一つ言っておくがこの世にどうでも良い対局なんて一つもない。アマ大会だろうが研修会だろうが奨励会だろうが女流棋戦だろうが……もちろんプロ棋戦だろうがな。俺はそう思う。だって真剣に将棋を指さない奴なんているか？」

「っー」

「……まあ価値は違うかもしれない。だけど俺はそう感じてる。だから全ての人は負けを悔しがって次の対局ではこんなミスしない。そう思ってるんだ」

「……」

「これはだいくくぶ昔にとある奴に言った言葉だが……悔しがるのが良かったらまだ良い。次に向ける気持ちがあるから。悔し泣くのは良い。悔しがってるからな。1番ダメなのは無気力な事だ。負けても何も思わずただ何もしない。それが最もダメなんだ」

「……」

天衣は押し黙ったままだった。

「……悔しかったろ？」

頭を優しく撫でると天衣は静かに涙を流した。これ以上無いほどの悔し涙だ。

「当たり前よ……どんな顔してあんたと……お父様やお母様に会えば良いのか……分からない。わからなかった……」

「今は泣いとけ。いっぱい泣け。悔し涙は流した分だけ前に行ける」

「……はい…… 師匠」

久しぶりに見る涙。この子は多分、死ぬほど悔しくてたまらなかったのだろう。本当によく耐えた。俺だったら多分通天閣登って飛び降りてる。本当によく耐えた。この子は凄く強い子だと思う。

暫くして落ち着いた天衣に声をかける。

「天衣」

「……何かしら？」

そう声を上げてこちらを見る天衣。結構泣いたので瞼が腫れていた。

「お前に2つの刃をやる。一つは俺が教えられるが……もう一つは俺は教え無い。いや、教えれない」

「じゃあ誰が教えるのよ？」

「……… 花立 薊女流五段。 茨姫だ」

「それって」

「そう。銀子がタイトルを奪取した相手。即ち初代女王だ」



花立 薊女流五段。初代女王にして元女流玉座保持者。女流最高峰のタイトルを持つていた女流棋士。まさしく女流トップへの階段を登っていたその時……銀子に立って続けにその2つを奪われ無冠に転落した。

その棋風は無駄を全て限界まで削ぎ落としたまさに効率厨。感想戦は常に無し。将棋にプラスになる事しか行わず、プライベートでは外部との関係の一切を断つほどのストイックさ。故についたあだ名は『茨姫』。俺と天衣はそんな棋士の元を訪れた。

千里中央駅から少し行ったところの集合住宅にその人はいた。

「まあまあまあ！久しぶりじゃ無い！こんな可愛いお弟子さんまで連れて！あ、名人戦勝利おめでとう！」

「こちらこそお久しぶりです。忙しい中ありがとうございます」

「全くもー！そんな堅苦しい挨拶要らないわよ！第一、貴方は二冠よ！二冠！本当に大きくなったわねー！ほらほら、入った入った！」

そうして部屋に通された。昔は茨姫という言葉が似合う人だったが今ではかなり丸くなった……性格的にも体つきも。第一子を出産後、第二子を妊娠中に突如として棋

界に復帰。いきなりタイトル挑戦者となる活躍ぶりで棋界を盛り上げた。安定期とは言っていたが大きなお腹であり、対局中に生まれるのでは無いかと思ひ会長含めみんなビクビクだった。

部屋に入ると俺は花立さんの下の子を連れて追い出された。子供には懐かれているので公園に連れていくことにした。

..... side 天衣.....

「さて……悠斗君が出て言ったところで改めて、花立 薊女流五段です」

そいつは私の前に座って挨拶した。私もぶつきらぼうに挨拶を返す。

「一ノ瀬悠斗門下。夜叉神天衣女流二段よ」

「私の事はどこまで知ってるの？」

「銀子にぼろ負けしたっていうイメージかしらね。女王を取った時の棋譜はよかった。今の棋譜は見る価値も無いわ」

「……素直な感想をありがとう。そうね、その通りだね。昔の私の写真があるの。痛々しくて最近になってようやく見ることができるようになったんだけどね」

そう言つてこの女がが私に見せたのは初代女王の就位式の写真だった。

「っ！」

私は思わず絶句したわ。そこには女王になった時と空銀子に負けた後の姿があった。

その違いは歴然。負けた後の写真は空銀子と瓜二つ。写真は月日を重ねるごとに銀子に近づいていった。髪の毛の色を抜き。カラコンの色を変え、肌は不健康なほど白くなっている。最後にはセーラー服まで着て盤の前に座っていた。

「……………おぞましい」

そう言つて私は目を逸らす。この女はどこまでも空銀子に自身を近づけようとしたのだという事が分かる。

「あの子がプロと研究会をすれば私も頼み込んでやった。あの子が内弟子で24時間将棋の勉強をするなら私も全てを削つて勉強した。けれども遂に銀子ちゃんにはなれなかった。どんどんと壊れていく私がそこに居たわ」

「…」

私は声にならなかった。ただただ「そこまでしたのか」という事を思った。

「そんな私を止めたのは関西のプロ棋士。今の旦那よ。そうして私は妊娠して一度戦線を離れた。私は返つてきた時に『妊娠して強くなった』と言われる為に考えた。生活まで真似してダメなら何をすれば良いか」

「何を…したのよ」

初めて私はその話に興味を示した。

「全てまっさらにして考え直したの。私の経験上、長い間戦線を離れた後は頭の処理速

度とかは落ちる。だけれども第一感とかは変わらなかった。だから早指しなんかを意識したの」

「それは直感を頼りにしたということかしら？」

「そうよ。だけれどもあいちゃんみたいな終盤力が私には無かったわ」

「……なるほどね。でも私にはその勝ち方は似合わない。勉強にはなったけどそれは参考には出来ないわ」

私は真つ向からそれを否定した。が、その否定を女は肯定した。

「その通りかも知れないわ。私だって時間があればもつと他の方法を探したわ。それにあなたの将棋はそれに似合わない」

「偉そうに言うじゃない。じゃあ、何か他にあるのかしら？強くなれる方法が」

「あるわ……それは『愛』とか『憧れ』よ」

「は？」

「女の愛とか憧れっていうのは想像以上に重い物よ？その証拠に悠斗君に恋して憧れた万智ちゃんとは劇的な勝利で防衛した。それぐらい愛とか憧れで変わる物よ」

それに続いていたずらっぽく女は言った。

「貴方が銀子ちゃんより弱いのは愛とか憧れが無いからじゃ無いかしら？」

「あり得ないわ。あんな冷酷無慈悲な女が恋？憧れ？そんな物あるわけ無い！」

私は真つ向からそれを否定した。

「貴方は若いもの。これからよ。それにね。銀子ちゃんに取つて私は簡単に読める存在だつたと思う。だつて、同じ思考の読みの浅いバージョンを相手にしてるだけだから」

「っ！」

「だからこそ一度まつさらになつて考え直した自分だけの将棋に銀子ちゃんは苦戦したんだと思うわ」

「……」

「それにね。銀子ちゃんにとつて好きな人とか憧れの人の心の底を覗くのつて将棋のおんなじ考えのさら浅浅い物を読むのつてどつちが簡単だと思う？」

「……！」

「貴方と銀子ちゃんが違うのは心かも知れないわ」

「でも、あんな冷酷無慈悲な女が憧れなんてあるの？うちの師匠の師匠に入門したのも師匠や悠斗への復讐の為つて聞いてるけど？」

「確かにそうよ。復讐と私も聞いている。だけど同時に最も強いとして憧れたのは悠斗君だつたの。目の前に座る圧倒的な強さ。力強くて熱い。なのにどこか軽やかで……ただただカッコいい将棋だつた彼にあの子は心の底から憧れた。だからあんなに強いよ。彼の様にありたい……憧れや好きな人に会いに行く為強いよ」

「……」
「だから見つけて。貴方だけの恋と憧れを……」

第四十八局 師匠のおしごと！

俺は帝位戦挑戦者決定リーグで生石九段と対峙していた。特対で行われる対局を前に俺は先に対局室に入っていた。

対局開始10分前に生石九段も入ってくる。

「よお二冠。元氣そう…。では無いな」

「生石先生おはようございます。まあそう見えますよね」

この数日前、天衣が銀子に完全敗北を喫した。具体的に言えば大盤解説の始まる昼頃にはもうほぼ勝敗が決していたほどだ。苦しくて苦しくてキリが無かった。中々寝付けない日々が続いた。『俺が教えていた事は間違っていたのか？…：違ったのか？あの子を育て上げる事が出来る。あの子を女王にしてあげれる。そう思い、貫いてきた教えは間違っていたのか？』それを自問自答する日々が続いていた。

「あの子の将棋のように俺の将棋も残念ながら否定された。どうしても俺は飛車を振ることで進めなかったからだ。だからこそ俺はあの子の気持ち痛いほどわかる」

「そうですか…。」

「振ってこいよ。顔から出てるぞ？飛車を振るってな」

「……流石にわかつちやいますか」

「バレバレだ」

そして時間になる。生石先生は角道を開けて、そして飛車先の歩を突いた。居飛車明示……直接見るのは初めてだった。生石先生の居飛車を。

しかし俺は角道を閉ざしたあと、△8四歩▲3六歩△8五歩と飛車先の歩を突いて俺も居飛車明示をする。

「どうした？振り飛車じゃ無かったのか？」

「俺には俺のやり方があるんですよ……」

生石先生の使った戦法は棒銀。振り飛車と対極にある様な戦法だ。純正振り飛車党にして生石先生の信徒の一人でもある鏡洲さんは苦しそうな表情で記録係をしている。自分が最も使ってきた戦法の最も強い人間がそれを否定してしまつたら当然だ。

だけど俺は、それすら否定したくなる。生石先生には生石先生らしい将棋を指して欲しいと願っている。そして、天衣にはクソ下手くそな定跡なんかぶつ壊して自分らしく羽ばたく様に願っている。だからこそ俺はこの戦法に賭けた。

20手目はいきなり△4五歩を指した。目の前で生石先生はタバコを灰皿に力強く擦り付ける。

「お前……そうか。そういう事か。やってくれたな……見せてみる。お前の振り

飛車を」

そう言つて堂々と俺の奇襲を受ける構えを見せた。俺は生石先生のその言葉を聞いて△4二飛と指した。タブレットにその手を打ち込む鏡洲さんの手は微かに震えていた。一ノ瀬悠斗がタイトル挑戦を決める大切なリーグにぶつ込んできたのは『陽動振り飛車』だった。

陽動振り飛車とは最初、居飛車明示をチラつかせて突如として飛車を振る戦法。悠斗はこの手で4筋に飛車を振つて相手の意表を突いてきた。この戦法は過去にたまーに実践例があるがそこまでの量は無い。

言つてしまえば相手への衝撃度はデカイ。しかしそれを指しこなすには居飛車、振り飛車共にトップ並みの力を持つオールラウンダーである事が絶対。もつと言つて仕舞えば相手はあの生石充。安易とやらせてもらえるわけが無いのだ。しかし悠斗はそれでも飛車を振つたのだ。

そこからの悠斗の将棋は圧巻のものだった。悠斗が研究してきた陽動振り飛車は極めて棒銀という戦法に対して有効打であったという事。そして相手が振り飛車党だったからこそその力の發揮。その強くて自由な指し回しは一ノ瀬悠斗が天災である所以であり、それと同時に若くして名人の研究相手に抜擢される能力そのものだった。



「ちっ！やつぱり強えな。お前は……負けだ」

「ありがとうございませう」

大熱戦。生石充に眠っていた振り飛車党としての力はやはりとても高いものだった。一ノ瀬悠斗のカウンターからの攻めの攻めを捌いた。その捌きは見事なものであり、彼が振り飛車党総裁という最も振り飛車を理解した人間だからこそなした物であると俺は考えた。

「ものの見事に俺は負けたな。俺が1番知ってるはずの振り飛車。それも奇襲型の振り飛車に……」

「ええ」

「俺は……いつの間にか変わっていた」

「そうですか」

「AIという物を嫌っていたのにいつの間にかそのゴキゲン取りをする様になっ
た」

「……」

「飛車を振るだけで評価値は下がる。だが振らなければ評価値は自然と上がった。勝率も同じ様にな」

「そうですね。たしかにAIは飛車を振るだけで評価値を下げる。しかしそれと同じ様

に角を切るとそれだけで評価値を下げる。だけれども結局、じっくりとゆっくりと攻めをすれば評価値は戻ってくる。何故ならAIがその将棋を評価し直したから。AIと人間は違います」

「……何故そこまでAIと人は違う？」

「一つ言えるのは……感覚が違いすぎるって事ですかね？」

「……………」

無言で続きを頼まれた。

「個人的に思う事はAIがもし……人間と同じような感性を持つ事になれば人間の様な指し回しになるでしょう。反対に人間がAIの様に無機質で冷酷な心を持てればAIに近づくと 생각합니다。だが、現状前者は出来ないでしょう」

「何故だ？」

「向こうのほうが強いからです。AIという感覚でいる方が人間より強いからです」

「だから於鬼頭の奴はあんな風にしてるのか。じゃあ三段の時のお前はなんだ？」

「……単純にあの時は人の心を失わないと辛くて勝負できなかっただけです。だけど

要領は同じです」

「じゃあなんだ……お前なら出来ると言いたいのか？」

「はい。八一や於鬼頭二冠の様にAIに近づくとは不可能ですが……AIと同じ感性

を持ってAIとして勝負する事は出来ると思つてます」

「……なるほどなあ。まあ良い。俺はまた振り飛車に戻る。やっと目が覚めた。やはり俺は飛車振つてなんぼだ」

「さいですか」



「何よ、この無茶苦茶な将棋は……」

陽動振り飛車。奇襲戦法の一つであり決まれば強い。だが決まらなかつた時の反動も大きい。所謂ハイリスク・ハイリターンというやつかしら? そんな戦法。滅多に使わない。まして……タイトル挑戦が掛かる大きな戦いにそれを持ち込むなんて前代未聞……

「あのバカ師匠は何を考へてるの? 本当に意味がわからないわ……」

1人なのにそう言つてしまう。何度も何度も棋譜を見返す。見返すたびに意味がわからない。するとそこに新しい記事がやつてきた。私はそれを徐に見出す。そして記事にはこう書かれていた。

『陽動振り飛車は最初から作戦でした。決まれば優秀で名人戦にも出た事はありません。……が不発に終われば自分が苦しくなる。だからあまり指しはしません。だけれども、僕がこの戦法を使つたのは使いたかつたからだ。使えると思つたからだ。とある子

に俺は伝えたい。『自由であれ。自分らしくあれ』と言いたい。周りが何と言おうと自分のやりたい戦法でやるのが一番良い。自分らしい戦い方をするのが一番良いです。相手に惑わされてはいけませんから』と書かれていた。

「自分らしくあれ……」

私はそう言うの一つのノートを取り出した。そこには二つの戦法が纏められていた。一つは四間飛車から銀を上げる戦法。ついこの前のA級順位戦最終局で師匠が指した戦法。そしてもう一つは私が「銀子には使えない」として封印した角頭歩戦法だった。

そして私は盤上に角頭歩を指し始めた……クソ下手な定跡なんてもう指さない。あいつが教えてくれた。私は私らしい戦法を使う。

第四十九局 女王戦第三局

「ここで将棋指すの?…え?アホなの?」

俺は思わずそう口にした。現在いるのは兵庫県神戸市の…結婚式場。どうやら春の連休中にタイトル戦の為にホテルを押さえることが困難を極め、ここでやる事になったらしい。神戸は天衣の地元だからね。銀子の地元である大阪で対局をやった以上、神戸対局も絶対にいるのだ。

そしてそんな建前の元、男鹿さんが会長とお忍びでここに来たかっただけなのだろう。そんな事、簡単にわかってしまう。みんな勘づいていた様で「やはりあの人変態」という意見で一致したのは言うまでもない。

そして相変わらず険悪な表情を保ち続ける2人。そこには天地が割れそうなくらいの亀裂を感じる。検分も前夜祭もそれは変わらず相変わらずの険悪っぷりである。



毎度思うが前夜祭って凄く早く時がすぎる。と、言うわけでもう対局がスタートする。今日の記録係は柗創太奨励会三段。今日の対局を担当する理由は「プロに無い自由な将棋を見たい」だそうだ。あいつの場合、悪意なくそれを言っているのがまた悪いと

ころなのだ。

「定刻になりました。女王の先手番で対局を始めてください」

「お願いします」

挨拶をした後、静寂に包まれる対局室。その様子を俺は控え室で見ている。銀子は早速飛車先の歩を突いて居飛車明示。一方の天衣は……角頭歩戦法を使う。俺の言いたかった事はちゃんと伝わった様で安心した。周りは騒ぎ出す。天衣が封印してきた伝家の宝刀をここで抜いてきた訳だからだ。

それを見た銀子は即座に天衣の角頭歩の弱点である持久戦に持ち込む。交換した角を自陣に打ち込んで角頭歩の対策を行った。しかし天衣にとってそれも予想済み。天衣が出したのは俺が天衣にあげたもう一つの戦法。その名も『角交換向かい飛車』だ。元々、俺が天衣のお父さんに教えて頂いた戦法であり「いつか娘を弟子にしてくれたら、その時教えてあげてくれ」と言われた戦法でもある。そのフレーズは最近まで忘れていたがきつちり思い出した……天佑さんに殺されそう。

まあそんな事は後から考えれば良い。角頭歩はたしかに会場に衝撃を与えた。しかしそれを超える衝撃がまだ用意されていたのだ。



昼食休憩を終えると銀子が先に部屋に戻ってきた。その様子にこれでもかと言うぐ

らしいのシャッターを切るマスコミ。フアインダーと一緒に入っているのは天衣では無く、欄創太奨励会三段。銀子と共に三段昇段を決めた小学生プロの記録のかかる子なのだ。その2人を何としてもマスコミは写真に撮りたいらしい。結局マスコミが興味を示すのはそちらか。と云うどこか虚しい気持ちに陥った。

そんな感情を持つているとついに天衣が昼食休憩から帰ってきた。純白のドレスを身に纏って。

「シンデレラだ……」「綺麗……」「……」

近くからはそんな声が聞こえた。午前中に着ていた着物とは打って変わって純白のドレスを纏い、髪は濃い青色のリボンで纏められている。まさしく御伽噺から飛び出てきたシンデレラそのものだ。

俺はあまりの美しさに黙ってしまった。

午後からの将棋、最初の方は天衣の狙いは分からなかった。しかし指し進めていくにつれてその狙いがわかってきた。あいつは先手番を手に入れるつもり。即ち狙いは……千日手！銀子が苦しくなっているのが盤を見れば分かった。

優位な先手番を持って、天衣の弱点であるはずの持久戦に持ち込んだはずなのに一方的に時間を喰わされる銀子にとって嫌な展開。気づけば銀子の待ち時間は残り10分、5分……そして待ち時間を使い切り1分将棋に突入する。秒を追われて銀子が指す手

は考え抜いた上での最善手。天衣もそれに最善手で応じる。最善と最善の応酬。それはいつの間にか同じ手順を繰り返した。そして、その時を迎えた。その名も——千日手。

記録係の創太がそれを宣言してここに千日手が成立した。それと同時に凄まじい歓声が響き渡る。

銀子が先手番で千日手に逃げる。それは即ち絶対王者銀子が認めたのだ。あの状況において千日手を打開すれば自身が負けると。それを認めたからこそ千日手に逃げた。今まで女流公式戦において一つの負けどころか千日手、持将棋すら許さなかった銀子シンデレラ。灰被り姫はその純白に1つの灰色をつけたのだ。この瞬間、天衣と言うたつた10歳の少女は女流トップに躍り出たのだった。

現代将棋において後手番からの千日手で先手番を手に入れると言う戦法は良手だ。何故なら先手番を取れるから。あの子はそれを取った。それだけでも女流初の出来事だったのだ。

..... side 銀子.....

私は生まれて初めて棋戦で引き分けに終わった……あんなクソチビに。小童より年下のクソチビに引き分け。しかも先手番と言うものを捨ててだ。むしろくしゃした私は駒を鷲掴みにして片付けて直ぐに部屋を後にした。

「……………ちっ！」

心の底からむしゃくしゃする。そしてもう一つ…あのチビはなに？

「姉弟子！」「銀子！」

「兄弟子に八一…」

「お疲れ様です。大丈夫ですか？」

「肩かそうか？」

体力の少ない私の事を気遣って来てくれたのだろう。でもねお兄ちゃん。お兄ちゃん、私よりずっと背が高いから逆にきつい…ってそんなじゃない。私はお兄ちゃんに聞きたかった。

「兄弟子…」

「どうした？」

「あのチビ、どうやって育てたの？」

「何故それを聞くんだ？」

「あいつ…兄弟子が盤の前にいる時とそっくりだった」

「そうか」

「どうやったの？」

「あいつは俺と似てるだけだ。教え方はど素人だからな。俺たちの師匠と同じだ」

「本当に?」

「本当だ」

「そっか」

表面上納得したが心の底では納得しきれなかった。私は別に高いプライドも何も無い。むしろ女流棋戦なんて二の次にすら考えている。だけれども……さつきまでいたチビ。あれはただの女流じゃない。奨励会に入ら入れるレベルかも知れない。小童と比較にならないほど強い。そんな事がある? あいつはまだ10歳。兄弟子ですらまだ10歳では奨励会には入っていない。それなのに…… あいつは。

そう考えた時には寒気と吐き気がした。

…… side 天衣……

「お疲れ様です、お嬢様」

「晶…… 下がっていいわよ。それより師匠は?」

「銀子様の方に」

「そう……」

「お呼びしましょうか?」

「良いわ」

「失礼します」

「……」

晶が下がって部屋には私一人になった。別に頼む事もないし師匠に聞く事もないから問題は無い……。はず。でも、今の対局は初めての感覚だった。何か理解の仕方が今までと違った様な。そんな事はまあ良いわ。千日手を取れた事に実感が湧かない私はわざわざ持つてきていた駒を一つ手に取る。

師匠があの日プレゼントしてくれた駒だ。お父様の書体を態々見つけてきて作ってくれた駒。この駒一つにも沢山の想いが繋がっている事を私は知った。そして強くなるうとした。だから私は千日手を取れたのだと思う。だから……。次の将棋を始める。



1時間後、指し直しが始まる事になった。今まで誰一人としてなしえる事が出来なかった千日手^{奇跡}。全ての将棋ファンが一気にこの対局に注目した。そんな対局の指し直しがまもなく始まる……

第五十局 天災という名の少女達（少女達という名の天災）

「挑戦者先手で対局を開始してください」

その声が聞こえると互いにお辞儀をするだけで無言。天衣は初手、▲7六歩と角道を開けた。対して銀子は△8四歩と飛車先を突いて居飛車明示。そして天衣の3手目は▲6八飛。四間飛車で行くという事だ。銀子は角道を開ける。天衣は角道を止める。そして9手目▲3八銀。

天衣は所謂『藤井システム』を使ったのだ。これは悠斗がA級順位戦最終局で史上初めて使った戦法だ。しかし発案は藤井九段という過去、竜王を獲得した天才棋士であり、その先生の発案を少しガチャガチャやった結果がそれなのだ。故に名前は藤井システム。受けが強い天衣においてこの攻めの戦法はかなり強い。

しかし彼女はそれを完璧に使いこなす。一点の曇りなく踊り続けているのだ。

「……悠斗はん？」

「なんだ？」

万智が悠斗に唐突に話しかけた。いつの間にか悠斗の隣に居たらしい。

「これって……藤井システムどすなあ？」

「そうだな」

「天衣ちゃんって受けを得意としてるって聞いたったんどすけど？」

「そのはずなんだがな……」

本来、藤井システムというのは四間飛車というどちらかというとカウンターメインだった戦法の概念をぶっ壊して四間飛車での攻め型というものを作った戦法なのだ。悠斗は攻めでも受けでもこなすから良いとして天衣は受けの棋風。それをこの短期間でマスターするとは考えにくい。しかし……それでもタイトル戦の大舞台に引っ張ってくるという事をやってのけたのだ。

「完璧に仕上がってへん戦法をいきなりタイトル戦……しかも最高位の女王戦でどすか。ほんまに誰に似たんやかかわからへんどすなあ？」

若干面白そうに笑いながら悠斗にそう言う万智。

「誰に似たか？無論、名人だろう。あの人はタイトル戦でも自分の研究にしてしまう変態だからな」

悠斗はそう返す。しかし万智はちよつと違う回答に残念だった。万智が求めたというか想像したのは無論、悠斗に似ていると言うことだ。

悠斗も名人に似ている。普段の研究に加えてタイトル戦やその予選。公衆放送杯な

どの一般棋戦に至るまで自身の対局そのものすらを研究の場にしてしまっている。こんな事ができるのは悠斗と名人ぐらいだ。しかし、天衣はその師匠に似てしまっただけだ。

..... side 銀子.....

「..... ちっ！」

ちびは目の前で四間飛車を使った。それだけでは無い。あの『藤井システム』を採用したのだ。

「うちの師匠の戦法よ..... あの人に教えてもらったの」

チビは私にしか聞こえない様な声でそう言った。

「クソチビが..... それはあんたには使いこなせないわよ?」

だから私はそう言っただけだ。この戦法はあの名人ですらまだ対策法が明確に定まりきっていない戦法なのだ。それと同時に居玉という他の戦法には類を見ない守り方。しかしそれと同時に扱うのも相当な技量がある。こいつは受けの棋風って聞いた事がある..... というか兄弟子は言っただけだ。こいつにそれを使うのは早い。

「クソチビ..... あんたと兄弟子は違うのよ」

「それはどうかしら?」

こんな奴が憧れの兄弟子と同じ？そんなわけが無いと私は思っていた……しかしそれは少し違った。このチビの手つきに一切の迷いが無い。まるで勝利まで読み切っている様に早い。そして何より駒の指し方。扇子の扱い。目つきに至るまで兄弟子そっくり。否……違う。兄弟子だ。兄弟子なのだ。

瓜二つとか、似ているとかでは無い。全く一緒。目の前にいるのはチビじゃない。見間違い無く兄弟子だ。強い……ただひたすらに強い。その佇まいは悠然と目の前に座り相手を圧倒する兄弟子そのものだ。

「兄……弟子………ちィ！」

あのチビが兄弟子と同じ。でも、私もあいつの様に兄弟子になることはできる。だって……だってあの天災と呼ばれた兄弟子と最も長く一緒にいた一人だから。八一よりも長く一緒にいたんだから……もう女流とか奨励会とかじゃない。こっからは……本気。

………side悠斗………

「銀子の攻めのキレが変わった……」

悠斗の周りも無言で彼に同調する。

「強い」

明らかに強さが増した。いや、元々強いのだがそういうものでは無い。読みの速さ、

正確さが数段増した。それに釣られて天衣の読みの速さもどんどんと加速する。それはまるで互いが互いを高め合うの様にだ。

「どっちともまるで…… 悠斗だな」

普段は会場にすら顔を出さない生石先生がわざわざ神戸まで来て発した第一声の言葉だった。

「どういう事ですか？」

「惚けんなよ。自分でわかるだろ？ 攻め方が2人ともお前に似てきてる。とにかく早くて正確。それでいて無慈悲にならない。名局も良いところの良い戦いだ」

「俺に近いですか…… まあ近くなるんじゃないですかね？ 2人とも…… 俺がそばに居た子ですから」

「ふっ。本当に子煩悩で妹思いのバカ棋士だな」

「あんたに言われたく無いですよ。子煩悩のアホ棋士さん？」
「……………」

返答は帰ってこない。すぐにまた戦いに集中しだしたからだ。プロ棋士の対局と何ら変わらない。プロの棋戦で繰り返し広げられても全く恥にならない。そして何より見えて熱くなる将棋が2人によって繰り返し広げられている。

…………… side 天衣……………

優位な先手。未完成とは言え、強い戦法である藤井システム。それに……私には師匠という存在がある。だけど、目の前の女にはどうしても追いつき切れない。これが奨励会三段……心の底から恐ろしい。けれども、それを越えてこそその天災の弟子だと私は思う。だから私は……指す！

そして75手目▲4三銀成らず。私はついに、敵の陣地まで駒を進めた。この駒が入る事で私の状況は一気に良くなる。今まで中央での突破するかされるかの攻防が続く中での突破は一つの大きな意味を持つ。

ここから一気に方が付く。初めて本気で「行ける」と思った。初めて銀子相手にまともで良い将棋を指していると思った。空気が私の方に流れている。そう感じた。

……side銀子……

このままでは負けると私は思った。私にとっては女流棋戦なんていくらでも捨てる物だと思っている。それを捨てても越えなければならぬ物があるからだ。だけど私はそれを捨てる訳にはいかなかった。兄弟子との約束があるからだ。

私が奨励会に入ったその日、私は師匠や八一、桂香さんに内緒で兄弟子にアイスを買ってもらった。なんて事ない普通のアイスだった。けれども私はそれが嬉しくてたまらなかつた。「頑張った。これからも頑張ろうな！」と言われた。そしてもう一つ、アイスを渡される前に約束された。「どんな戦いでも手を抜くな。どんな相手でも本気で

挑め。それは相手は勿論、将棋の神様を侮辱する事だから……ちよつと難しいかな？」と笑われた。でもはつきりわかった。

私はプロになって八一の前に座るため。兄弟子の前に座るためにどんな勝負にも真剣に挑む様になった。ひとつも無駄にしない。

「だから……負けない」

△4 四歩指す。『たたきの歩』だ。金を作る狙い。チビは構わず攻める。これは師匠から学んだ事。歩一枚が持つ価値は計り知れない。と金を作ると一気に攻め入る。攻めが切れば私が劣勢。そうだからこそ一瞬たりとも隙は見せない。常に前へ。

「熱い」

……… side 天衣………

「っ！」

目の前にいるのは何？私が優勢なはず。絶対に優勢だ。それは盤面を見れば明らか。だけど、今のこいつには私に負ける要素がひとつもない。あり得ない。こんな事が……ある。あった。これこそ師匠だ。師匠だつてどれだけ劣勢でも諦めない。

だからこいつもそんなに強いのか？師匠を見てきたから？師匠のそれを見てきたから強いのか？

「………踊ってあげる」

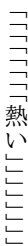
銀子にはどれだけ心が折れても不死鳥の様に舞い上がり一つの手にかける力がある。それはまるで師匠の様だ。でも私には師匠の様に悠然と佇み、目の前の敵を打ち砕く力はある。そう思う。あっちが悠斗になるならこっちも悠斗。天災には天災。何があってもこの攻めを受けきる。それだけ……

ただ不思議に思った。ただの叔母との戦いならこんな気持ちにはならない。じゃあなんでこんなにも熱くなるの？ 師匠みたいになれるの？ 銀子みたいにあいつに憧れるから？ それもある。だけどこの気持ちは少し違う。これは……



悠斗らしい決して諦めない最後の攻め。力強く、盤上で嵐が起きる様な攻め。それを防ぐ悠斗が持つ守り。まさしく矛盾の様に「全てを貫く攻め」と「絶対に守る盾」の戦い。

2人は天才にして天災が大事にしてきた姫達。だからこそ強い思いが互いを突き動かす。そんな戦いにこの言葉以外必要か？



会場に押し寄せた全ての人がそう言った。女流過去最高の戦い。プロのタイトル戦であつてもなんら遜色ない。トップの戦いにも匹敵する様な…… そんな戦いが繰り広げられた。そして

「負けました」

頭を下げたのは天衣だった。大盤解説の部屋では拍手が巻き起こった。前局のように将棋がつまらなかつた事ではない。この瞬間、負け無しでの初代永世女王が誕生した事ではない。ただひたすら純粹にこの熱い、熱い戦いを繰り広げた2人の少女への敬意と労いの意だけが込められていた。

第二局の大盤解説で言われた「つまらない将棋」とは誰も言わなかつた。「女流は最後に銀子が勝つゲーム」なんて誰も言えなかつた。どっちが勝つてもおかしくない戦いが続いたからだ。その攻防の末に生まれたこの戦いにそんなものを言うのは野暮でしかない。この戦いはまさしくそういう物だったのだ。

第五十一局 三段リーグとは...

『今日も新幹線を...』

突然だが俺は今新幹線に乗っている。のぞみ82号東京行きだ。別に東京に対局がある訳では無い。まあ天神研のための大移動な訳だが... 何故か天神研やりに行くつて言ったら万智にドン引きされた。いや、この前の名人戦第四局で名人にマジック決められて負けたからその研究しに行くだけじゃん。なんかおかしい？

まあそれはサブ目的なのだがな。メインは隣にいる銀子の付き添いだった。

銀子が東京に行く事は今まではそこまで無かった。理由としては単純に東京に行く用事は無かったからだ。では何故今回は東京へ行くのか？東京で行われる三段リーグに参加するためである。

これは俺の個人的な考えに過ぎないが... A級順位戦最終局が『将棋界で1番長い日』と呼ばれるなら三段リーグ開催日は『将棋界で1番残酷な日』だろうか？

プロでもなく奨励会が『1番残酷』なんて大袈裟と思うかもしれないが俺はそう思っている。25歳... 即ち年齢制限という確実にやって来る死神からなんとかして逃げなければならぬというプレッシャーとあと一歩でプロという逃げつない空間がそこ

には広がっている。全てを将棋に賭けてきた人が上がれたり……砕け散ったりするのだ。当然俺もそれを通ってきた訳で三段リーグ最終局では目の前で退会というのを見せつけられた。三段リーグ1期抜けをしているがそれでもその記憶は強烈に残っている。

そんな残酷で無慈悲な半年間のリーグに今から妹が挑むのだ。兄としては嬉しいよ
うな悲しいような……

しかも本当なら俺で無くて八一の付き添いのはずがあいつはまたもやロリ達にご執
心の様で本当に○にやがれロリコン。

「……………」
そんな事を考えつつ隣の銀子に目をやれば緊張で今にもぶっ倒れそうな表情をして
いる。

「… 銀子」

「っ！どうしたの？お兄ちゃん」

「頑張れよ」

「……………」
うん」

少し顔色が良くなった様な気がした。

……………
side 銀子……………

兄弟子と一緒に東京にやってきた翌日、私はついに東京の千駄ヶ谷にある将棋会館に入った。

例会を終えて特別対局室に入った。タイトル戦で何度か入った事があるから見覚えは良くあったけれど：：：雰囲気がい質すぎた。まるで地獄に自分から入る様な感覚だった。

兄弟子や生石先生が口を揃えて言った言葉。それは『三段リーグの特対にはもう入りたくは無』だった。A級順位戦の特対も、タイトル戦の特対も挑決の特対も経験した2人がそういうほどなのだ。

けれどもここを超えないと3人には会えない。兄弟子や八一もここを潜ってきたのだと自分に言い聞かせて、女子として初めてその聖域地域に入った。

私の最初の相手は坂梨澄人三段。何故か部屋に入った時に後ろ姿で分かった。会ったことが無いはずなのに。そしてその理由は坂梨三段本人が説明してくれた。

「座れよ：：：」

坂梨さんの前に立つと坂梨さんはそう言う。

「坂梨さん？」

「空銀子。：：：は生簀だ」

「：：：生：：：簀？」

「サメとイワシがいる。俺はサメだ」

「？」

「分からないか？サメ狩る人とイワシ狩られる人がいるんだよ。そしてそれは会員の中でそれぞれ不思議と一致する。『こいつは狩れる』と思われたら悲惨だ。相手は無我夢中で、どんな手を使ってもその局を勝ちに来るからな……」

「っ！」

「空銀子……お前はどっちだ？」

静かに坂梨さんはそう言った。

▲▼▲▼▲▼

「……………くっ！」

始まった対局は長い長い……そして理解できない様な難解な中盤を超えて終盤へ。

坂梨さん優勢だった。

「……………俺には今まで2回昇段のチャンスがあつた」

唐突に坂梨さんは言った。まるで辛すぎる過去を開封する様に。

「一つは前期。もう一つは数年前。俺は目の前で中学生棋士の誕生を見て散つた……」

「まさか……」

「九頭竜八一三段」

「っー！」

どうして私が坂梨さんの後ろ姿を知っていたか分かった。雑誌だ。雑誌は坂梨さん後ろ側から八一に向かつてシャッターが切られていた。だから分かったんだ。坂梨さんの後ろ姿が。

「あの時勝つていれば……俺が上がっていたのに」

「っー！」

「ああ、もう1つあった。俺が勝てば三段に上がったその対局。相手は一ノ瀬悠斗二段だった……俺の目の前で無敗の8連勝で三段になりやがった……まあ正直あの『災害』に当たったのは運の尽きだったと思ってるさ。初段昇段後無敗で四段までいった男。あの『名人』ですら……どんな名棋士でも成し遂げられなかった偉業をやったのけたのがあいつだ」

続けて坂梨さんはこう言った。

「九頭竜八一はサメだった。ただ一ノ瀬悠斗はサメでもイワシでも無い。ただの災害だった」

『災害』……三段リーグでの兄弟子の呼び名。14歳11ヶ月で三段リーグを史上初にして史上唯一、全勝で昇段していった天災は世間から見れば天才。だが三段リーグから見ればただひたすら無慈悲かつ冷酷に白星だけを積み重ねるただのヤバい人。それな

のだ。

ある時急に上がってきて災害の如く三段リーグで荒らし回り、そしてたった一期で去っていく。そう言われるのは無理も無い。私でもそう呼んでしまいたいから……

「でも……坂梨さん。兄弟子は『災害』なんかじゃありません」

私は次の一手を指した。

……… side 悠斗………

「どうしたんだい？ 時計なんか眺めて」

盤を挟んだ向かいに座る人が質問した。その人の名前は名人。今行われているのは名人戦第五局までの総振り返り。ちなみに俺は2勝3敗と現在負け越している。だが、名人との研究は本当のためになるし、最高の研究の一つだ。名人も「若い人の考えを知れる」と喜んでやってくれている。

「いや、銀子の三段リーグが始まったなあ……と」

俺は質問に答える。

「そういえば銀子さんも今回は東京まで来ているんだったね」

「はい。三段リーグ頑張ってくれていると思いますけどね」

「良ければ連れて来てくれれば良かったのに」

「いやいや、あの子もそれは流石に重いでしょうに」

「……………」パチンツッ!

「……………」パチンツッ! チラツッ…

「……………」パチンツッ!

「……………」パチンツッ! チラツッ…

「やっぱり気になるんだね」

チラチラと時計を見る俺に対して名人は優しく微笑んでいる。俺は少し恥ずかかった。

「お恥ずかしい…………… やっぱりちっちゃい頃から見えてきた妹ですから気になるものなんです」

「あの『災害』でも三段リーグは辛いものがあるのかな?」

「『災害』…………… ですか。あの時は勝つ事に必死でしたからね。勝てば史上初の全勝」

「相手は負ければ退会。勝てば…………… 勝ち越し延長のかかる大一番だったね」

「はい。そこで俺は少しの感情も出さずに、ただひたすら目の前の将棋を指しただけ。結果、冷酷なまでの惨殺をしてしまった。今でも後悔しています。その人と今でも親交はありますし、当時のしがらみなんて無いですけど…………… それでも忘れる事はできない。特に、まだ『災害』の名前は残ってますしね」

「そうかい…………… それに僕でも思う。あの日の君は異常だった。途中まで劣勢だったの

に……君が三段リーグにいたのはまだ2010年ぐらいじゃなかったかい？」

「はい」

「それであの棋譜は不気味すぎたよ……まるで今の……」

「……僕は勝たなきゃいけない時、あの時、人と同じ思考をしてはダメだと感じました。それがたまたま同じだっただけです。だけど……そのせいで僕は敵を作りすぎた。プ口的世界にも、アマの世界にも。そして奨励会にも……僕は銀子にそうなってほしくは無い……上がるのも当然ですけどそれ以上にそのことを祈っています」

「それは大丈夫だよ。君は君。銀子さんは銀子さん。きつと彼女なりの強い将棋を見してくれる。だから……棋譜でも見ないかい？」

名人は側にあつた自分のカバンから大量の棋譜を取り出した。

「それは……銀子の？」

「そう。僕なりに銀子さんの将棋は面白いと思うから、毎回貰っているんだよ」

「そうですか……それじゃやりましょうか」

2人で銀子の棋譜についても検討が始まり、結局徹夜コースになったのは言うまでも無い。

………side銀子………

「開幕2連勝でスタートなんて流石は白雪姫だね」

関東奨励会幹事の人にそう言われた。

「ありがとうございます」

開幕2戦はなんとか勝ちで飾ることができたけれど……正直今までの将棋で1番重かった。辛かった。ここを無敗で乗り切った人間が後にも先にも兄弟子ただ1人と言うのも頷ける。

「あの……もう帰って良いんですよね？」

「うん。大丈夫だよ？ひよつとして竜王か二冠と待ち合わせでもあったかい？それならいても大丈夫だと思うけど……」

「いえ、そう言うわけでは」

さつき兄弟子から『徹夜になるから先に帰ってくれ』と言うメツセージと『2連勝おめでとうー！』というメツセージが届いていたのを確認したから。

会館を出る寸前、他の対戦表を見て私は衝撃を受けた。

「坂梨さんが……連敗!?」

あれだけ強い人が連敗なんて……強さで言えばプロに近い。それこそ鏡洲お兄ちゃんに近いぐらいの強さがあるはずの人だ。そんな衝撃を受けつつタクシーに乗る。タクシーは会館を出発して交差点に差し掛かる。そこで私はとあるものを目にした。直立不動で今にも崩れそうな坂梨さんだった。大泣きしている。25歳の成人男性が。

兄弟子より年上の人が：：大泣きしているのだ。交差点で。

坂梨さんは2敗した。三段リーグの昇段平均は4敗以下。即ち5敗したら昇段が厳しいぐらいなのだ。即ち坂梨さんは今日、半分死んだのだ。これが三段リーグ。これが真の地獄。兄弟子が言っていた『将棋界で1番残酷な日』。私は今にも倒れそうになった。

「私はこんな地獄でやっていけるの？」

誰にも聞こえない声で私はそう呟いた。

第五十二局 名人戦第七局

『名人』とは江戸時代の初代大橋宗桂が最初に名乗った称号だ。それ以来、脈々と大橋家で受け継がれ、昭和の時代に実力制となった。それ以来タイトルを80期以上も手にした十五世名人や月光会長、タイトル100期をも手にした名人など時代時代の天才達が守り抜いてきたタイトルなのだ。そんなタイトルの第七局ともなれば注目度は桁違いになる。

そんなタイトルの第七局が今宵、この陣屋で行われる。そんな大舞台。当然の様に多くの記者が訪れる。それに……メディアに露出が多く、空銀子の兄弟子である俺。かつタイトル100期の国民栄誉賞受賞者である名人。その2人が揃えば普段は将棋なんて縁遠い俺出演のワイドショーなんかもやった来ている。

朝9時前。俺は5分前頃に私室を後にした。名人はきっかり3分前の入室が定跡となっている。だから5分前に出て対局室に到着する前に出会うことは無いと考えるのこどだ。

「おはようございます」

俺の入室と同時に数多のカメラのシャッターが切られる。普段は見ない様なワイド

ショーや将棋に関係のない会社の雑誌の記者までいる。多分俺が銀子の兄弟子という事と、名人のタイトル100期が原因だろう。

着席してもまだ切られるシャッター。名人の入室とともにさらにシャッター音は大きくなると思えた。しかし一瞬のシャッター音の後不自然なほど静まり返った。

俺の殺気と名人のオーラが混ざったのだ。今にも抜刀してぶった斬りそうなの殺気。そして、なんとも言いがたくとも圧倒的な存在感を示して不思議なオーラに包まれている名人。息すらし難いその状況がこの様子を産んだのだ。

第七局という事で再度振り駒が行われる。

「振り駒をさせて頂きます」と言つて担当の子が恐る恐るコマを持ち上げて振る。結果として先手は名人。駒が並べ直される。40枚の駒が互いに刃を向けようとしているのだ…

「9時になりました。名人の先手で始めてください」

「よろしく願います」

名人はしばらく目を閉じて息を整えると一手目。▲2六歩と指した。俺は扇子を開けて一度仰いでパチンツ！と勢いよく扇子を閉じる。そして△8四歩と指した。

..... side 鋼介・桂香.....

「相掛かりか.....」

鋼介はそう呟くと渋い顔をする。理由は名人対悠斗の対局において悠斗の成績はあまり良くないからだ。実に4戦やって悠斗の1勝2敗1千日手という結果になっている。

対局が始まってから1時間半ほど経った頃、名人の25手目▲1五歩で早くも戦いが始まった。

「始まったな……」

「名人がこんなに早く仕掛けるなんて……ねえお父さん。どうして?」

桂香は鋼介に聞く。するとすぐに返事が来た。

「名人は、早く戦いたくてたまらないんや。悠斗という存在と。何かが起きると思ってるんちゃうか? 名人はそれを楽しみに。それが楽しみで仕方がないんや……あんな笑顔の名人。あんな子供の様に笑う名人はそうそう見られへん。それが何よりの証拠や」

「……………」

モニターに映る名人の目は普段とはまた違った。キラキラと輝いていてそれでいて少年の様な目をしている。悠斗だからこそ。悠斗にしか出させることの出来ない目をさせていた。

今になって桂香は思う。自分ほとんどない一門の一員だと言う事に。兄弟子と姉弟子には竜王のタイトルホルダーに女流二冠。そして現在二冠にして今モニターの向

こうで。この陣屋で名人をかけて争っている一ノ瀬悠斗と言う存在がいる。『僕はプロになれたらそれで花丸です』。悠斗が桂香に言った本音の一つだ。

桂香が「奨励会入りおめでとう！タイトルホルダーになったらどうしよう!!？」と祝ったら悠斗はそう言ったのだ。欲がなく。ただひたすら純粹に将棋で生きていきたいと思ひ。将棋を愛していた。あの子はきつと学者になつても芸人になつても大成したと彼女は思っている。しかしその中で彼はプロ棋士になる事を選んだ。何故？彼が将棋が好きだから。

彼の向かいにいる人もそうだ。多分何になつても大成した。それぐらいの風格と才能が名人にはあつた筈だ。しかし彼もまたプロ棋士と言う世界に生きる事を決めたのだ。何故なら将棋が好きだから。この2人は似ている。でも似つかない。異様過ぎる2人が目の前に映つていた。

ひたすら考えていた桂香は気づかなかつたがあつという間に昼食となつていた。昼食なんてものは一瞬で過ぎ去る。昼食後は名人の一手から再会された。その手▲6六角。

この手に鋼介含めプロは渋い顔をした。

それもそのはず。この局面では、名人にとって飛車を取る狙いのある選択肢と駒を総交換して一気に激しい戦いに持ち込む可能性がある。「神経を使う局面」と控え室では

話されておりとても辛い場面と言うことは一目瞭然と言った感じだ。悠斗はこの局面で50分もの時間を消費した。

この場面での一手がこの先を左右する。誰もがそう考えていた。ただ一人、一ノ瀬悠斗を除いて。

それから時間は流れ、段々と封じ手が近づいていく中で名人は1時間以上の大長考に入っている。現状は後手の悠斗が1歩得をしており、先手は1筋の端を詰めている点が主張。先手の名人は手が広い局面でありまだまだこの先が読めない。それが控え室の主張。しかしながら対局者が対局者だけに互いに何を考えているのか分かるはずもなくどんな事が起きるかはわかったものじゃない。

そして封じ手時刻である午後6時前に名人が41手目▲8七銀と指した。直前の指し手だった為、数分の考慮で6時を迎えて悠斗は封じ手を書く事になった。悠斗はすぐに書いて戻ってきた。それもそのはず次の一手は皆ほぼ分かる。アマだろうがプロだろうが考えなくても飛車を逃す一手一択なのだ。故に早く終わったと言うわけだ。そして最後に名人が駒を片付けて1日目が終了した。

.....
side 悠斗.....

対局の1日目が終わって廊下を歩いていると師匠と桂香さん。そして会長の3人が

深刻そうな表情で話しをしていた。

「3人ともどうかされましたか？」

ただ事ではない雰囲気を感じてすぐに話しを聞く事にした。

「あ、悠斗君!」「悠斗・実はな」

慌てふためく2人を置いて会長は極めて冷静に話し始めた。

「実は銀子さんが奨励会で連敗し、そのまま行方不明になったのです」

「はあ……………」

表面上は落ち着きを装うがかなりまずい事態らしい。

「勿論、現在大ごとにならない程度に搜索を続けています。とは言ってもある程度見当

はついている。この後その方に電話を掛けようと」

「八一ですね？」

「はい」

「そうですか。よろしく願います」

「それと……貴方にお願いがあります」

「何でしょうか？」

「名人戦に勝ってください」

「これはまた……随分と無茶苦茶な要求を出しますね」

「そうですかね？今日の貴方を見て、貴方が負ける姿が浮かばない。それぐらい貴方は生き生きしていた」

「そうですか。まあそうかも知れませんが。負ける気はしていません」

「ではよろしくお願ひします」

「貸し5ですね」

そんな名人戦に勝てなんて要求、普通はしない。それに対しての貸しは計り知れないのだ。

「おや、折角無理言つて供御飯さんを京都の大学から呼び寄せたのに良いのですか？」

京都の某私立女子大に通っている万智を神奈川の陣屋に呼び寄せただと!!?しかも今日は夜まで講義があり、明日昼ごろ来ると言っていたのに今日のうちに!!?...仕方がない。

「貸し1です」

「流石は二冠。お話しがわかる様で」

「ええ。物聞きは良いもので」

「そうですか」

「それでは俺はこれで」

さあ、とんでもない要求されてしまった。勝ちに行くぞ。絶対に...

第五十三局名人戦第七局 2日目

「それでは封じ手を開封させていただきます」

副立会人がうやうやしく封に閉じた手を開封した。そしてそこに書かれた俺の一手を読み上げる。

「挑戦者の次の手は……はっ!?!」

「どうかされましたか?」

俺が副立会人に声をかける。

「い、いえ。失礼いたしました。次の手は……△8七同飛成です」

その瞬間、空気が凍りついた。8七同飛車成という手は誰もが最初に切り捨てると言っていたからだ。そりやそうだこの時点で飛車を切つてかかるなんて有り得るわけが無い。立会人も目を見開く。俺は静かに、そして微かに震えながら。そして大きな音を立てながら着手した。

「……………」

名人は笑っている。待つてましたという顔をしている。それはまるで「君ならこの問題を用意してくれた」という期待通りの結果を喜んでいようだった。俺もこれを名人

に出してみたかった。名人がどんな最善を考えてくるかを知りたかった。やつぱり面白い。

..... side 剛介・桂香.....

「.....」

控え室は騒然となる。誰一人として言葉にすることが出来ないような状態が成り立っている。誰もが一度は考えて早急に捨て、流石の悠斗でも無いと考えた手を悠斗はさも当然が如く指してきた。

それでも評価値は振れない。あくまで均衡を維持している。しかし画面の向こうでとんでもない一手が指されたことだけが現実だった。現局面で飛車を切るなんて発想普通の人はしない。だからこそ血迷った一手と言われる。しかし、それでも悠斗が指したのだ。何故ならそれに意味があるから。

しばらく均衡を保ち続けてきた評価値。しかし60手を過ぎたあたりから一気に後手優勢になる。

「有り得へん！何故何や!?」「おかしいだろ!」「何故なんだ!何故後手優勢になる!」飛車を切つてなお、ここまで圧倒的に強い。何故?それに全ての人は疑問を抱く。解説の先生は『同飛車大学』なんてネタを言っているが内心は一ノ瀬悠斗の脳内を本気で疑っているレベルなのだ。

「読んでいたのか……いや読み切っていたのか!? 昨日の封じ手を書くまでに。これを!?」

そう……この男の異常な所は昨日、封じ手を書きに行つて1分とたたずして帰つてきたのだ。皆、飛車を逃す手を書くだけだからと納得し切つていたが違った。即ち、この男はその短い短い時間であの大胆な飛車を切る手を思いつき、そしてその先までを読み切つていたので。これこそがこの男。これでこそ一ノ瀬悠斗なのだ。

「おやおや……昨日の時点でもう勝利を用意しておくなんて。流星は二冠。本物の天災ですね」

昨日、『勝つてください』なんて無茶なお願いをした月光聖市。しかし悠斗は昨日の時点でそれを確信的なものとして決めていた。だからこそ『貸し』と言つていたがあれを言つていた時点でもうそれは決まっていた事なのだ。

「二冠はズルいですね……」



会長は誰にも聞こえない声でそう言った。△8七同飛成を指した時点で2人の思考は最高潮に上り詰めていた。互いが最善と思う手を出し合い、そして相手がそれを上回る一手で抑えに行く。そうして刃と刃はぶつかり合う。

悠斗の怒涛の攻め。それを受ける名人。しかしそれを上回る悠斗。互いが恐らく限

界をとうに超えた将棋を指している。誰も追いつけない。否、誰にも追い付かせない。そんな将棋を指しているのだ。

「熱い」

誰かが言った。どっちが勝とうがこの際良い。一ノ瀬悠斗が放った神の一手。誰もが予想せず、そしてAIですら叩き出さない一手を人はこう言ったのだ。だからこそその『天神』。

「まさしく天神戦」

大盤解説者はこう言った。

「これだから『天神戦』なんだ。これを持って天神戦。これが無ければ天神戦にあらず。今、盤では神と神が将棋を指している。名人戦とはこうで有り、これだから名人戦だ。まさしく名人戦だ！夢がある。熱い！ひたすら熱い！」

『夢』

今までに実力制名人になった事のある人はたった15人。世襲制を含めてもたったの28人。名人が江戸時代から続いていることを考えれば驚異的な数字だ。棋士は何故名人を目指すのか？これがその理由だ。

たった28人の次。29人目になるため。時代を駆けて来た名棋士の横に並ぶため。だからこそ全ての棋士が名人という位を目指しているという事だと思う。

50を超えてなおそれを追い求める者。世代を超えて一門からそれを目指そうと思う者。永世名人を持つてなお、その位を目指す者。さまざまいる。しかし今日、その歴史に新たな1ページが加えられたのはいうまでも無い。

「負けました」

「ありがとうございます…。」

ここに第七十六期名人 一ノ瀬悠斗が誕生した。



「うおおおおお!!!悠斗~~~~!!!」

俺が疲れ果てて廊下をゼーゼー言いながら歩いていると向こうから1人のオッサンが駆けてきた。紛う事なき師匠だ。

「ようやくた!ようやくた!でかしたぞ悠斗!!!」

「師匠:・ぐはっ!」

「ようになった!ワシは嬉しい!この一門から名人がついに出たで!」

「師匠:・ありがとうございます」

ゴリゴリのタツクルかましてきたが仕方がない。それほどまでの悲願が今、達成されたのだから。それはそうと:・:

「師匠、お話しは後で聞きますから。会見に行かせてください:・:」

「ああ。せやな。よし、行ってこんかい!」



『一ノ瀬名人。名人奪取おめでとうございます』

「ありがとうございます」

『今のお気持ちをお聞かせ頂いても?』

「そうですね。ただ嬉しいのと、今まで色々な場面で助けてくださった師匠や弟、妹弟子。それにこの道に進むことを許してくれた家族など……あげたらキリが無いですがとにかく沢山の人に感謝したいです」

その後も質問が続き最後。万智の質問。とうかこういう質問をするように頼んでおいた。対価は一日中抱きしめろだそうだ。独占欲やばいね。うん。

『二冠にご質問します。今、最も戦ってみたい棋士は誰ですか?』

「…… そうですね。空銀子三段ですかね」

ざわざわとざわつく。

『やはり妹弟子だからでしょうか?』

「それも有りますけど、純粹に彼女の努力を見てきたからです。天神研で話していたんですよ『あの子なら上がってくる。あの子と将棋を指したい』って。2人で棋譜並べて、あーでも無いこーでも無いって言って上がってくる事を心の底から楽しみにしているからです」

『そうですか…… ありがとうございます』

「はい。それと、最後に彼女にメツセージだけ残させてください。僕は待っています。彼女が来ることを。そしてタイトル戦で待っています。だから早く……上がってきてください。そして……いつか盤を挟みましょう。最高の舞台で」

それは彼女への励ましと同時に宣戦布告だった。昔、銀子と指してボコボコにして。その「復讐に来た」と言つて病院を抜け出して来た銀子と指した将棋。その続きを今度……タイトル戦でやりたい。そう心から願つた。

……… side 銀子・八一………

連敗した後、八一と銀子は大阪を発つて遠くに来ていた。八一の実家に。そしてその実家でこのニュースを聞いていたのだ。

「凄いね……兄弟子。名人取っちゃったよ」

「はい。やつぱり兄弟子は遠くへ行っちゃいますね……」

「でも、ああやつて言つてくれた。多分八一にもおんなじ思いだと思う。だって私たちの兄弟子だもん」

「はい。俺たちも……早くいきましよう。A級に……」

「うん。だから、だから絶対に私はプロになる。こんなところで止まつてられない。だから……早く大阪に帰ろう。みんなが待つ、戦いの舞台に」

「はい」

第五十四局 天災と災害

「推戴状。一ノ瀬悠斗殿」

月光聖市会長が俺の前で声を発した。手元には推戴状と書かれた大きな和紙。斜め後ろには男鹿さんが控えている。

「貴殿は今季の名人決定戦に優勝されました。よってここに第七十六期名人に推戴致します」

推戴状とは名人の就位式で会長からもらう物だ。竜王戦の就位式なら推挙状、玉座戦なら允許状と名前がそれぞれ違うものもある。と言っても名人戦の推戴状も特殊な名前だ。

「おめでとうございます。よく勝ってくださいましたね……」

「貸しは無しにしておきますよ」

「それはありがたいです。さぞ清滝さんもお喜びになったでしょう？」

「ええ。大の大人が鼻水と涙をダラダラ垂らしながら走ってくるのはとても新鮮でした
(笑)」

「そうですか」

会長は一瞬笑うと再び俺にしか聞こえないような声で願いを言った。

「このタイトルが貴方にとつての3つ目の永世位獲得になることを心より願っていますよ」

「中々無茶言いますね……」

「我々としては貴方が最低でも25歳で永世二冠、26歳で永世三冠になることを見越して動いていますからね」

要するにこのまま、棋帝と名人を連続五期獲得しろやと言う無茶苦茶な指令をぶん投げてきているわけだ。

「まあ頑張ります」



その後は全体に向かって挨拶したのちに国や新聞などのお偉いさんに個々で挨拶したり、主催されたりしてだいぶ名人獲得の実感が湧いてきた。唐突に、月光会長がボソツと話してきた。

「実は名人の国民栄誉賞受賞が一ノ瀬名人のお陰で早まったということをご存知ですか？」

「なんですか？それ。初耳ですけど」

「そうですか。実は、名人の国民栄誉賞受賞は名人戦の後の予定だったんですよ」

本当は名人が名人防衛！つて言うタイミングで国民栄誉賞を考えていたらしいが：：相手が俺に決まって防衛の不確定要素が爆上がりした為にこうなったらしい。ちなみに何故、俺だとそんな不確定になるか。それはレートだ。

名人が大体20000ぴったり。八一が1900後半。俺は2051：：と言う感じらしい。

「しばらくは名人にも追加免状で発行する予定ですからよろしくお願いします」

要するにさっさと免状書きやがれくださいと言う事らしい。俺は17歳で玉座を獲得した時も俺は追加免状で書いたのだが：：だるすぎて関西一円を舞台とした鬼ごっここの末、銀子と万智のうるうる目で負けて大人しくホテルに缶詰になった経歴がある。

今度は追加じゃなくて名人として正式に書くから溜めるんじゃないやねぞと会長は言いたいようなのだった。



推載式も終わりに近づいた時。突然、俺はとある人から呼び出された。

「一ノ瀬名人」

「於鬼頭二冠？」

長い髪にメガネ。そしてなんとも言えない絶対零度にして強者の迫力を持つ男。間違いない：：：於鬼頭曜二冠である。

「少しいいか?」

「もちろん」

於鬼頭二冠に引き連れられてホテルの外まで来た。サシで話したい事があるらしい。

「それで於鬼頭二冠。何のようでしょうか?」

俺から切り出した。すると、於鬼頭二冠はゆっくりと無感情にその口を開いた。

「単刀直入に聞く。何故、お前は人間を極め続ける?」

「……人間を極める、とは?」

俺はすつとぼけた様に言った。

「お前ほどAIを使いこなす……いや近づける……AIに近い人間はいない。私でもお前の領域には近づけないほどお前はAIを使いこなせるはず。何故、そこまで人間らしい将棋にこだわる?先の名人戦も……もしもお前がAIの様に本気を出していれば……たとえ相手が名人だろうと4連勝も可能だった筈だ」

「二冠。将棋の話しにifは良くないですよ。だけど敢えて言うのであれば俺は俺から人間味を消したくないだけです」

「人間味?」

「奨励会三段リーグ最終戦の時ですね。そこが原点です」

『『災害』』

「ええ。あの日、俺の相手は勝てば残留。負ければ退会と言う相手でした。関東で最も仲が良かった奨励会員です。俺は劣勢だった」

「……」

「だけど終盤。誰も気づかないような小さな小さなミスがあつた。誰も気づかないが……俺は気づいていました」

「……」

「殺す気でやってましたからね、当時は。なんせこつちも掛かつてるモノがデカすぎるから……」

中学生プロ棋士という名誉と。史上初全勝による奨励会三段リーグ突破が掛かった大一番だった。

「でも、それは恐ろしい結果を招いた。今のあなたよりAIに近かったですよ。於鬼頭二冠」

「聞いている」

「恐ろしい無感情で。全く間違えず。ノータイムで。そして……人間が思い付かないようなあり得ない最善手で。劣勢から均衡。均衡から優勢。優勢から勝勢……まさしくAIだった」

「現在の最新AIにその棋譜を読み込ませても全く同じ棋譜を辿るらしいな……だから

こそ。だからこそお前はAIというものを取り入れればもっと高くなる。人間が到達しないところまで……」

「そこまで行けばもう人間じゃない。人間の形をしたAIだ。しかし奨励会三段でそれをやってしまった。まさしく俺にとつての禁忌を。だから俺はこう呼ばれているんですよ奨励会で！今も！……『災害』と！」

「……」

万智のつけてくれた天災というあだ名は災害の派生だ。あくまで源流は災害。それがいまだに尾を引いて生きているだけだ。だからといつても……万智には感謝している。何故ならそこに『災』の1文字が残ることで俺はいつも禁忌を思い出せる。もう2度と、あんなに相手も自分も苦しめたくない。そう思い出せるのだ。

「お前の思いは分かった。では……今度の電王戦は」

「ええ。ケジメでしょうね。俺にとつての。人間としての俺がAIに勝つのか。それともAIが人間としての俺に勝つのか。どちらにせよ、俺にとつて大きな意味だ」

「……幸運を祈っている。ただ一つ言っておく。AIは強いぞ」

「ありがとうございます。そんな事……百も承知ですよ」

電王戦。AIとプロ棋士がガチでぶつかり合う唯一無二の戦い。プロ棋士のプライドを全て賭けて戦う戦いなのだ。この戦いに名人の称号を持つ男が出る事になった。

一ノ瀬悠斗名人。彼もまた全てを賭けてその戦いに挑むのである。

第五十五局

朝6時。電王戦当日の朝だ。空は晴れている。こんな日の朝6時におれは万智の勧めとある神社を訪れた。その名も石清水八幡宮。戦いの神を祀っている八幡宮。その中でも有名な社のひとつだ。

「悠斗はん♪」

「万智か… 朝っぱらから追っかけとは良い度胸してるな」

鳥居を潜ったその先には1人の女性が待っていた。

「ふふふ♡ 今日… 電王戦どしたなあ？」

「ああ」

電王戦。棋士vs AIという異色の組み合わせによる戦い。棋士として、その戦いに挑むのは光栄であると同時に大きなプレッシャーのかかるものである。過去に戦った棋士の中には千日手になってしまい「つまらない将棋をしてしまった」と号泣した棋士がいるほどだ。

「なあ万智」

「なんどすか？」

「俺が負けるのと……無理して勝つのだったらどっちが良いと思う?」

「そうどすなあ……こなたはどないな考えであろうと悠斗はんの考えに賛成どす。

悠斗はんは悠斗はん。例えどないな結果を迎えたとしてもそら変わらへんどす」

「……………」

「どないな相手にも全力で戦うてる悠斗はんが一番かつこええどすさかい♡」

「万智、ありがとう。頑張るよ……………」



「「たつか?」」

別に値段が高い訳ではない。ビルの高さに驚いているだけだ。電王戦の舞台は『アベノハルカス』である。地上300メートルの高さを誇るビル。第一印象、高い。第二印象、高い。第三印象、高い。ひたすら高いビルである。このビルの一室で対局が行われると言うことでびっくりしているのだ。

一つ言うと俺はこのビルを初めて見た。八一や銀子も同様だ。ゆえにこんな新鮮な感想が出てくる。

「お兄ちゃん……高所恐怖症じゃなかったっけ?」

銀子が不安そうに訪ねてくる。

「それは……あつちだ」

俺が顔を向けるとそこには小鹿のように足を震わせている師匠の姿があった。

「お父さん、大丈夫?」

「お… おお!桂香、あ… あた… 当たり前やがな!わ… わしを誰やと思つとる!

時の名人の師匠やぞ!行くぞワレイ!… やっぱいやや〜!」

「あつ」

銀子も全てを理解しようだった。

「うちの師匠… 本当にやばいですよね」

関西将棋会館放尿事件に始まり、アロハシャツ事件。玉座就位式全裸事件。女王戦全裸事件。名人戦第七局大泣き事件… 上げたらキリが無い。

「ほんと、アレが師匠の師匠とか嫌だわ」

隣で天衣が言う。あれだけ「行かない」と豪語していたのに結局来ている。

「で、AI対策はしてあるんでしょうね!?!」

天衣は質問する。

「は?する訳ねーじゃん」

「「はっ?」」

「え、いや… は?」

「え、兄弟子。対策立ててないんですか?」

「うん」

「馬鹿じゃ無いの？」

天衣は言う。

「馬鹿じゃ無い」

「おじさん……それはダメじゃ無いですか？？」

あいちゃんも言う。

「お兄ちゃん……馬鹿なの？」

からの銀子のストライクショット。フルコンボだドン！を食らった。辛い……

「いや、だつてハメ技で殺すのはアレだし、どうせA Iの感性なんて人間が掴め無いようなもの掴むぐらいなら何もせずにも通り来た方が良いじゃん」

「そんなん言うてく。悠斗はん、わざわざ石清水八幡宮にお参りに行つとつたじゃあらへんどすか？」

万智が余計なことを言つて後ろから抱きついてくる。まあ良いんだけど。

「万智……」

「チッ！」

天衣が一気にご機嫌斜めに。怖い怖い……

「兄弟子めつちや神頼みしてるじゃ無いですか？？」

「一応な……まあ良い。さっさと上がるぞー！」

そしてエレベーターで上に上がる。とんでもない高さに登らされた。

▲▽▲▽▲

「……………よし。行くか」

新しく買ったばかりの和服に身を包み、自室を出る。手元には扇子と懐中時計。扇子には『百折不撓』の4文字。わざわざ万智と天衣が用意してくれたのだ。何度折れようとも倒れる事はなく進み続ける。俺はこの4文字にそんな意味があると考えている。

「おはようございます」

対局室には将棋盤に長机。そしてその机には会長に立会人の先生。記録係の人。上座には俺が。下座には人は居なかった。代わりにいたのは機械。電王手くんと言うらしい。まあそういう駒を指すための機械だ。ついにAIで指す手を考えて、電王手くんが指す。人の手を介す事なく将棋が指せる時代になったかと思うと恐ろしいような、テクノロジーの進化を喜ぶような……とにかく複雑な心境になる。

「時間になりました。一ノ瀬名人の先手で始めてください」

「よろしく願います」『ウイーン』

機械音が響き、電王手くんも頭を下げた。戦いの火蓋がここに落とされた。

「……………」パチンツッ！

「先手、二六歩」

飛車先の歩をついて俺の一手は始まった。



「ついに始まつちやいましたね…」

電王手くんによる二手目が指されると八一は言った。

「名人 vs AI…」

「名人が負けるような事があつたらあかへん。やけど…十二分に負かせるほどAIは強なつとる」

剛介の顔は少し弱気になっていた。一ノ瀬悠斗は剛介が最も強いと思う棋士の一人であり『名人』である。それ故に全棋士の頂点に君臨しているのが悠斗という考えである。しかし、それと同時に剛介はAIの強さを知ったばかりであった。前年度の順位戦最終盤。若手と研究していかにかに現代のAIが進化してきているか。負ける事がないと考えてきたAIという存在が台頭してきたかを知った。

だからこそ剛介は危惧しており、それが現実となることを半分子想していた。棋士の頂点『名人』のタイトルを保有する者がAIという機械に負けるといふ現実を。

そして序盤…悠斗がリードをしていた。

「悠斗優勢か」

剛介は少し希望を見出していた。しかしその横で八一達は戦々恐々していた。

「でも……ね」

「そうですね。ここからがAIの怖いところですから」

「うちの師匠がどこまで対応してくるかよね。正直言つて気持ち悪いぐらいこのAIは中盤から終盤にかけて強いわ」

「おじさん先生なら……きつと乗り越えてくれますよ！」

「だどいいけど……」

第五十六局 コツプ一杯の水

序盤は比較的早いペースで進んだ。もちろん、AIもデータをもとに即座に最善手を放ってくるからこそ早い。悠斗も比較的早いペースで将棋を指していく。

「早いー」

控え室にもそんな声上がる。それほど早いのだ。それでいてギリギリ悠斗が優勢。だけど中盤になって一気に悠斗の手が止まる。

「迷いの中盤」

誰かがこう言った。とある名棋士が言ったことだが「序盤は研究が進み早く進む。中盤は道路すらない山の中を自力でかき分けて進む感じ。終盤は綱渡りであり少しの間違えれば谷底に真つ逆さま」という感じだ。

当然最善手を指すために脳みそをフル回転で動かす。しかし悠斗の脳みそを持ってしても思い付かない様な一手をAIは放つ。中盤でジリジリと追いついてくるAI。だからこそ悠斗は考え続けている。

「右手…」

八一が唐突に言った。悠斗の右手がぐつと和服を掴んでいる。和服の掴んでいる部

分はぐちゃぐちゃにシワがよっており到底新品の和服にやる様な行為ではなかった。

「……」

『軽率な一手を指さないために手で服を掴め』

清滝一門ではこれが慣習であり、大切なものである。しかし異常なほどにその力が強い。シワはいつもよりよっており、手も白くなっている。

一ノ瀬の考えによつて一手一手最善手が指される。しかし相手は機械。無慈悲にノータイムで最善手を返してくる。大駒は飛び交い、駒台からは駒が溢れ返りそうになる場面もある程だった。

「これで……まだ評価値は揺れへんのか!?？」

剛介は言った。確かに異常だ。正確さには定評のあるAIとじっくりと思考を巡らせて指している悠斗とはいえ大駒がビュンビュンと飛び交う状況で評価値が揺れないのは異常としか言いようがない。

と思うとすぐに評価値が揺れ動き始めた。悠斗が優勢になったりAIが優勢になったり……最終的に少しAIに傾く形が強くなってきた。『名人ですらAIに勝つことが出来なかった』という将棋界にとつて最も大きくて最も重い謙が首にかけられた状態にあるのだ。

「……」
「兄弟子」

八一はハラハラモノだったのだろう。だけど横から落ち着いた声が聞こえてくる。

「九頭竜。落ち着け」

「坂梨さん?!?なんでこんな所に…」

「っ!」

そこに居たのは奨励会三段の坂梨澄人三段だった。

「たまたま用事があったただけだ」

「…落ち着けてどういう…」

「あいつは今、人間だ」

「兄弟子はそりや人間ですよ…」

「だけど脳内はAIに匹敵させることが出来る」

「そんな訳…」

「出来る」

また別の声が部屋に響いた。八一達はその声を聞いたことが無かったが坂梨や20代後半以上のプロ棋士や女流棋士は懐かしそうな声を上げる。特に…関東勢が。

「竹下さん?!?」「竹下君!久しぶりやな!今何やつとるん?」

何者か…

「八一、空。こいつは竹下って言うやつだ。奨励会三段の最終戦で…悠斗に敗れて退

会になった元奨だ」

「っ！」

この人が…… 2人は心の底からその気持ちが入み上げてきていた。竹下涼元奨励会三段。伝説の三段リーグ全勝を決めるその瞬間を…… 悠斗に奨励会最後の「負けました」を言ったその男が目の前に立っていたのである。

「初めましてだね、2人とも。まさかこんな形で竜王と浪速の白雪姫に会えるとは…… 竹下って言うんだ。今はソフト開発に携わってね。将棋のゲームなんかも作ってる」
「初めまして…… 空銀子です」「九頭竜八一です。それで…… 竹下さん。『出来る』って
どういう事ですか？」

「正直、弟や妹の君達に話すべきことでは無いかもしれないが…… 天災という名前の由来を……」

竹下は全てを語った。あの伝説の三段リーグ最終戦の裏を。天災と呼ばれる所以を…… 悠斗という棋士の裏の全てを。

「…… お兄ちゃんにそんな過去が……」 「……」

2人とも過去を知った…… そして悠斗の名前を知った。

「だから、兄弟子はまだ全ての力を出してはいない？」

「そうだ。名人と戦っている時ですらあいつは最後の切り札に等しいあの力を出してい

ない。そして……その理由を作ったのは紛れもなく俺だ。すまない」

「そんな。竹下さんの謝ることでは……でも兄弟子の謝ることも……」

「誰のせいでもないです。竹下さんもお兄ちゃんも全力でぶつかつたからこそその結果」

「ありがとう。でもあの日、俺が戦つた事が全ての始まりだ。あいつはケジメの為に戦っている。たけど、それでも俺は出来ればあいつに勝つて欲しい。人間の本気を、あいつの本気を……名人の意地を全力でぶつけて欲しいと願っている。勝手な願いですまない」

「……それは、誰も願いですよ竹下さん。でも、兄弟子は」「お兄ちゃんはあくまで貴方とのあの日を取り返そうとしている。もしも……この状況を変えられるとしたら……貴方の言葉だけです」

「言葉？」

「そうです」



見えない。どちらが優勢でどちらが劣勢なのか見えない。自分で分かる筈だ。でも見えない。何故見えない。分からない。その堂々巡りが頭の中を駆け巡る。こんなことは初めてだ。いつものように静かで真っ白な世界に

いる。だけど向かいには灰色に染まった何かがいる。

「…………… 化け物」

自然と口の中から湧き出た言葉はそんな言葉だった。俺が天災ならあつちは差し詰め地球の終わりとしても言おうか。そのレベルの物体が目の前にいたのだ。

「……………」

人間がAIを超える事は不可能。そんなものはとうの昔に実証している。それでもやるのは……超える希望を捨てきれない人がいるから。この戦いは俺にとつてはケジメをつける戦い。世間的には人間がAIに勝るといふ事を証明する戦い。無謀を無謀のまままで終わらせないための戦い。

「…………… わからない」パチンツッ！

また一手指すとそれに対して恐ろしいほど正確な一手が返ってくる。気がつけば手は袴の裾を掴んでいる。扇子は俺の握力で軋んでおり今にも折れそうなレベルだった。こんな所で止まって良いわけがないのに、超える力が全く見つからない。この真つ白な世界に一点。たった一点だけ真つ黒な世界がある。それを俺は……

「失礼します」

「つ!!」

普段、対局室に記者の人だつたりが入るので気にすることは無いがこの時ばかりは目

を見開いた。

「竹下………さん」

竹下涼元奨励会三段がそこにはいた。俺が、俺の心の鎖がそこにはいた。

「………」コク

ただ頷いただけだった。だけどあの人はこう言った。

「勝て」

絶対にそう言った。それが……あの人の願いなら。叶える……

「すみません。水をコップに一杯貰えますか？」

第五十七局

「コップ一杯の水をください」

記録係の子にそう言うときすぐに水を用意してくれた。コップに入った水。当然、機械にぶっかけるとかそんな恐ろしい事は考えていない。俺はその水を自分の頭の上からぶっかけた。

「行つたるで！ワレイ！！！！これまでえ!?!」

「4時間と1分です」

「残りはあ!?!」

「59分です」



控え室では衝撃と混乱、そして恐怖。その全てが渦巻いていた。コテコテの関西弁で残り持ち時間を聞いた瞬間に悠斗の目からハイライトが消え去った。

「っ!」

その瞬間、戻ってきた竹下の額に汗が浮かび顔がどんどんと青くなつて行く。そしてついによろけだしてしまった。

「竹下さん!?」

八一は驚いて竹下に近づく。八一に支えられながら竹下は言った。

「竜王……空さん。天衣ちゃん達も見ておきな。あれが……あれこそが君たちの兄弟子。現名人の本気だ」

「あれが……師匠の」

ハイライトが消えた目はひたすらに将棋盤を見つめておりピクリとも動かなかった。タイトル戦や準公式戦ですらその顔は見せた事が無い。鬼……獣。似合う言葉は無かったが兎も角モニターに映っていたのは間違いなく狂気だ。

「……兄弟子、生きてますよね?」

「流石に生きてるわよ。馬鹿なの?」

天衣は一蹴する。でもそうとも捉えられてしまうようなぐらい静かであり

……盤を見つめてピクリとも動かない。棋士は手を読む時によく体を前後に揺らしたりして考える。しかし今の悠斗はそれすら無い。完璧にピタリと止まったままなのだ。

今の悠斗は極限の集中状態にある上、呼吸は全く乱れていない。恐ろしいほどの状態にある。

のちに記録係を務めた奨励会員はこう話したと言う。『まるで機械と植物が盤を挟ん

で座っているようだった』と。

「あ、おじさん先生が顔を上げました!!」

58分ほど経ったのちようやく悠斗は顔を上げた。

▲▼▲▼▲▼

その時に悠斗はそつと口を開けて言った。

「あつた………」

それと同時に俺はそつと駒を盤に置く。それはたった少しの音すら出さずにまるでそこに駒など置かれていないとでも言うかのように指された。

▲▼▲▼▲▼

「そ……お……?」

「嘘だろ……?」

58分の時間を使って悠斗は誰もまつつまつつたく予想すらしていない手を指した。流石のAIでもその手を理解するまでに数秒を要した。たった数秒。されど数秒。悠斗はAIの予想を外してきたのだ。

ノータイムで悠斗は返す。また、予想外の手で。さらにAIは数秒後に最善手。またノータイムで悠斗は予想外の手。もはや将棋というゲームとして成り立っているのかすら怪しいゲームが始まった。

「おかしい。何故なんだ！」

八一は叫んだ。あれから数分しかたっていない。なのに……

無茶苦茶な手の極み。決して理解なんてできないだろう手。なのに……

何故、何故か悠斗は強くなり続けた。

段々とA Iは解析に時間を費やすようになった。しかし悠斗はノータイム。まるで読み切ったと言っている。待ち時間を1分残してその1分は決して消費していないのだ。

「あれが…… 極限世界か」

八一の隣で於鬼頭帝位が喋った。いつの間にか来ていたらしい。八一は少し驚いたがすぐに聞き返す。

「極限世界？」

「神の領域」

「っ！」

於鬼頭曰くA Iを超えたその先にそれがあるという意味らしい。八一には詳しい真実は分からないが…… よく分からないが。八一は自分が見ている世界はまだ低い位置…… では無いが本人はそう確信したと言う。

ついにA Iは解析に数分の時間を有するようになった。悠斗はノータイム。ついに

AIと人間が…… いや一ノ瀬悠斗が逆転したのだ。



読み切ったその後の世界は不思議と雑音にまみれていた。駒が語っているのだ。『俺を動かせばこんな手がある』と。到底信じ難いがあるのだ。だからそれを聞く。聞いて動かすのだ。例えばAIが何か最善手を出してもそれを蹴り返す。ただ無心に。

そうしていつの間にか時間が経つ。AIはついに考えるのをやめた。AIと連動しているAIが負けのモーションを取ったのだ。

「ありがとうございます」

人類…… いや一ノ瀬悠斗という生物がAIを超えたのだ。その瞬間、数多のメディアが対局室に流れ込む。世間一般から見ればAIという存在に人間が勝ったのだ。記者は興奮するに決まっている。普段はないようなメディアもいるのだ。

その怒号に俺は目を覚まされた。そして…… 自然に涙が流れ出た。いつぶりか分からない涙が流れ出た。

「ただいまのお気持ちは？」

「ただ…… ただひたすらに…… ただひたすらに悔しいです」

「…… 悔しい？」

普段から将棋について書く観戦記者の人達以外。即ち普通は将棋についてなんて書

かない記者の人たちは「何言ってんだこいつ」みたいな表情を浮かべた。

「たしかに将棋には勝ちました。けど…… 1人の人間として、棋士としては敗北しました。それ故に無念…… 不甲斐ないです」

先程までしわくちやになるほどに握りしめられてシワがよってしまった袴に涙が溢れる。

「……………」

その様子を見て報道陣を黙ってしまふ。

「すみませんが…… 後日改めて会見させて頂きたい…… 今日はいままでにして頂きたいです」

そう言つて悠斗は会見を切り上げてしまった。

▲▼▲▼▲▼

八一達はただひたすら呆然としていた。

「あれが…… 師匠の本気」

1番最初に口を開いたのは天衣だった。天衣は見た事もないほどの強さを見た後には何も声が出ない事が分かった。それほどまでに衝撃的すぎるものだったのだ。

『アレガ、ワタシノシショウ』というまるで事実をみていないかのような事実。到底、追いつかない世界。天衣はレーティングを頭によぎらせた。天衣のレーティングは17

00より少し高いぐらい。隣に立つ九頭竜八一「竜王」で3400。名人でもそれくらい。A級棋士で3300程度と言われる。しかし、天衣の見立てでは悠斗のそれは今日の時点でそれを遥かに超越している。

周りの全ての棋士も奨励会員も……観戦記者ですらもそれを強く理解した。『アイツハ、ベツジケン。ニンゲンジャナイ……テンサイダ』



大雨の降る中、悠斗は会見をを飛び出した。

「新大阪まで」

1人、家にも帰らずに大阪を出るために。プロ棋士がいない世界に逃げる為に。

大雨の降る中、悠斗を乗せたタクシーは阪神高速に乗る。雨は激しく打ちつけて凄まじい音を鳴らす。そんな時に携帯に着信が入る。会長だ。

「はい」

『一ノ瀬名人。ご無事で何よりです』

「一言目からおかしくないですか？」

『あなたが対局会場から泣きながら帰るなんて事、普通じゃ無い。それは私にも分かりません。道頓堀かどこかに身を投げてないから心配しただけですよ』

「冗談じゃ無いですよ……これから新幹線に乗ります。行き先はお伝えしません。貴

方に言くと、万智か天衣か。それとも銀子、八一、師匠あたりに連絡が行きそうですか
らね」

『流石は、私を分かっている』

「次の対局である棋帝戦第三局にはちゃんと現れますから安心してください」

そう。実は悠斗は絶賛タイトル戦中だ。2連勝していて次勝てば防衛というところ
にある。その中での行方不明になるのだ。

『それは心配していません。貴方を信頼していますから』

「それでは私はこれで」

『お気をつけて…… それと私は、私と清滝さん達。それに供御飯さんに月見夜坂さん。
名人…… 他にもいっぱい。貴方にはついていく人がいますからね?』

「っ!ありがとうございます」

雨の中をタクシーは駆け抜けた。

第五十八局

新幹線に乗ったものの……顔を真っ赤にして俯いている万智の姿が目に入る。

「ううう……」

「はあ。こっちが泣きたいのになんでこんなことになってんだよ」

心が病んでんのはこっちなのにどっちが辛そうか分かったもんじゃ無い。

「ほら、名古屋着くぞ」

名古屋到着の少し前。清洲会議で有名な清洲城を新幹線は通り過ぎる。アナウンスがかかり名古屋到着を知らせる。

「ううう……」

「あーもう。しゃーないな」

腕を引つ張つて無理やり下ろす。降りそびれると次は静岡県をノンストップで横浜なのだ。絶対に降りなければ死ぬ。

と、言うわけで天下に名高かき鯨鉾（鉄道唱歌より）がある名古屋に到着した。名古屋から在来線に乗り換えて数十分。

『多治見く多治見です。ご乗車ありがとうございます』

多治見市に到着した。岐阜県でもそこそな規模を誇り、東濃地方に置いて最大規模の町だ。と、言っても京都や大阪。名古屋から比べればカスみたいなものだ。都市規模としては大阪<>>>多治見だろう。まあそんな事はどうでも良いのだ。

「お、兄ちゃんお帰り」

「お、我が弟よ。ただいま」

俺から眼鏡を外してそのままほんの少しばかり小さくしたのがマイブラザー。弟である。

「で、背負ってるのが噂の？」

そう、このバカ。俺が精神1番疲弊してるのにいつの間にかこいつがメンタルブレイクしていたのである。

「万智。供御飯万智だ。知ってると思うが女流棋士で『山城桜花』のタイトルホルダー。俺の彼女」

「リア充死ねー。俺も棋士になろっかなあ…」

弟は18歳で俺と4つ離れている。退会が25歳と考えれば現実的では無いが…アマ竜王とかになって竜王戦6組に殴り込み、そこで6組優勝したのち、プロ編入試験を受けてプロ棋士に勝ち、10年以内にフリークラスを脱出できれば晴れてC級2組のプロ棋士の完成。フリークラスはプロ棋士だけど10年で引退になってしまうからね。

ね、簡単でしょ？（そんな訳ない）

「やめとけ。お前は無理だ」

「現実見させんなよ。にいちやーん、可愛い子紹介してよ。鹿路庭さんとか月見夜坂さんとか空さんとかも知り合いなんでしょ!!?」

「あーやめとけ。全てにおいてクセの塊だから。それよりさっさと家までお願い。いい加減、俺も帰りたい」

「うーい」

「ううう……」

「万智？車乗るからな」

「…… わかったぞす」

▲▼▲▼▲▼

車で数十分。名古屋のベッドタウンとしての機能を持つ多治見の町外れ。住宅街から少し離れたところに悠斗の実家はある。

「ただいまー」

懐かしい玄関に万智を引きずって向かった。万智はほぼ直立不動のため引きずってくしか無いのだ。

「悠斗、お帰りなさい。正月以来かしら？」

「ああ、母さんただいま」

「それでそちらが噂の？」

「供御飯万智です。よろしくお願い致します」

こいついつ髪整えて顔直したんだ？しかも言葉も標準語で完璧だし。さっきの新幹線の中や俺の家での残念美人はどこかへご出張らしい。

「父さんたちは？」

「じいちゃんもばあちゃんも父さんも陶器作りに行ってるわ」

陶器を代々作っている家系。昼間は窯のある場所に行っているのだ。

「そう。なら先に自室行くわ」

「そうすると良いわ」

自室。その言葉に悠斗の母親は顔を強張らせる。悠斗にとって自室とは聖域なのだ。彼にとつて命に等しい将棋というものに出会った場所であり……全ての将棋を見直す彼にとつて神聖な場所なのだ。

「万智、お前も来い」

「わかりました」

入れるのは家族と……それに等しい人。要するに八一や銀子。師匠に桂香さん。万智……名人が入りたいと言っても俺は入れないだろう。それほどの場所なのだ。当

然、許可を出した万智も入るのは初めてなのだ。

「ここが俺の部屋だ。気をつけろよ」

「はい」

母さんがいなくなってラフになる万智だった。

「これが… 悠斗はんの部屋」

部屋に入った万智は己の目を疑ったそこには一ノ瀬悠斗の将棋の全てが置かれていたのだ。

タイトル獲得時の就位状及びトロフィー。一般棋戦優勝時のトロフィーも綺麗に並べられている。しかしそれはトップ棋士の家に行けば見れるだろう光景。だからこそそれは普遍的な景色だった。

しかしながらそれを遥かに超える景色が目の前に広がっていたのだ。

「なんどすか… このファイルの量は」

圧倒的なファイルの量。全てに棋士の名前が書かれている。

「ここには俺が集められるだけの全ての棋士の棋譜がある。まあ過去2年分は俺の家に置いてあるがそれ以外は全てここに集められている」

悠斗から衝撃的な言葉が飛び出す。万智はすぐにあたりを見渡す。たしかに全て棋譜だった。実力制第4代名人や歴代永世名人の棋譜はもちろん。ずっと昔にタイトル

を取る事なく引退したような棋士。女流棋士に至るまで全ての棋譜がそこにあった。

「全て頭に入れた」

「え？」

「全ての棋譜を頭に入れた。AIを使って解析もした」

「……」

正直、万智は絶句した。悠斗の恐ろしさを改めて見たような気がしたのだ。

「実戦も飽きるほど積んだ。AIには勝てなかった……」

とんでもない数のトップ棋士の対局における実戦。過去全ての棋譜を理解する。それでも悠斗はある一種のリミッターを解除してやつと勝つ事ができる程だったのだ。正直言つてリミッターを解除すれば勝つことのできる悠斗も異常だが……全人類が。現在、もし悠斗がいなければ間違いなくレートNo.1の名人と九頭竜八一ですらリミッターを解除させなかった。それを解除させたAIの異常性である。

「俺は弱いな……」

AIに勝つてなお弱い。弱い訳がない。間違いなく歴史上最高の棋士である。それを持つてさらに弱いとは悠斗が目指す先はなんなのか。万智は気になった。

「悠斗はんが…… 悠斗はんが目指してるのんはどこなんですか？」

「俺が目指しているところねえ…… 無いな」

「ない!!?」

「うん。将棋が好きで将棋で生きてるんだ。そうやって生きてきた末が今だからな」

「…」

「そうだな。なんか目標を決めても良いかも知れないな」

悠斗は迷った末に言った。

「自力でAIに勝つ。そして」

「八冠独占を実現する」

第五十九局 ユメ

「八冠独占を実現する」

「ふふっ……」

突拍子も無い発言に万智は笑いを必死に抑えていた。まあ腹を抱えて笑いかけていたが……

「なんやねん。お前笑いやがって……」

「いや。悠斗はんにはほんまに笑わしてもらうた♪いっつも現実思考やのに急に凄じいことに言うなあ」

「うっせ」

「その真意はなんや?」

「…… 約束したからな。名人と」

「?」



名人戦が終わったその夜。悠斗は名人と将棋を指していた。3分切負けと言うルールで10局ほど指して周りから変態呼ばわりされた後で2人は話しに花を咲かせてい

た。

「名人。俺はここから俺は何を目標にしようか迷ってんすよ」

話しの最中に2人揃って珍しく酒を飲む。2人とも基本的に酒は飲めるものの強くは無い。特に悠斗は将棋を指した後などの興奮状態では死ぬほど弱く「ほ〇酔い」一杯で酔える程のコスパの良さを誇っている。

その勢いのままに名人に迷いをぶつけてみる。言ってしまうえば一つの目標であり清滝一門の悲願であった『名人奪取』を成し遂げたわけだ。齡20歳にして永世称号の一角を持ち、名人を含む3つのタイトルを持ち、たとえ向上心に溢れかえった者でも一度は立ち止まりたくなる様なポイントに悠斗はあった。

「夢を追いかけたい。だけどこれ以上の夢が何かあるのか?という疑問もあります。俺はどうすりや良いんでしょうか?」

名人の返答は一つだった。

「僕伝説を超えれば良いんだよ」

「……七冠ですか?」

「違う違う……八冠だよ」

あつけらかんと。☒特に迷う事もなく名人はそう告げた。その瞬間、悠斗は大きな夢を見た。誰も見た事がない壮大すぎる夢。だけどこれ以上ない夢。今後、誰も達成な

んて出来ない夢。

「名人を……超えろですか。無茶苦茶言いますね」

誰もが無茶苦茶と思う大きな事だ。

「いや、無茶ではないと思うよ。誰もそれを否定する権利は存在しないからね。僕は、七冠時代に誰もなし得なかった、なし得ることなど出来ないと言われていた七冠を成し遂げた。違うかい？」

「…… たしかにその通りです」

悠斗はそれを否定できなかった。だって実際に目の前に座る名人は「七冠」を成し遂げていたから。

「―― 八一君の将棋はね。泥臭くて、でも強くて。そして誰も想像出来なかった事をやるから面白い。だから僕はもう一度、彼が竜王のうちに竜王に挑みたい。だから、竜王は僕から奪うと良い」

挑戦状だった。名人は励ますためにこの言葉を送った訳では無かった。「私を倒して、八冠を手にしろ」という名の挑戦状であり、励ましであり、そして神の言葉だった。



「そんな事が……」

「面白いんだよ。あの人と言う事は」

「……」

「あの人は俺を大きくしてくれた」

「……」

「あの人の将棋も、姿も。その全てが夢で、憧れで、そして目指すべき姿だった。だから面白んだよ。あの人を追いかけていると」

「……」

「その夢としていた人に『超えることを夢にしてくれ』なんて言われたら…… 叶えたくなるに決まってる。あの人を超えるために、あの人を倒して超えるために。もう何も厭わない」

「なら」

「——熱い」

「悠斗はん……」

「こんなところで立ち止まってるべきじゃ無かったな」

「……」

「さあて…… 帰るか」

「え？」

「え、いや。帰るだろ」

「はあ……」

最後の最後まで悠斗はんらしおすね……ほんまに」

「悪いか？」

「いや、全然」

「ならよし」

親に帰る旨を伝えて、帰路に着く。結局、1日弱ヒキニートしていたらしい。

閑話 おいでよ。棋士室の森

関西将棋会館の3階に存在する棋士室。ロッカーと長机にテレビ。そして無数の将棋盤が置かれたプロ棋士、女流棋士、奨励会員などの関係者のみが立ち入ることを許されている部屋だ。

悠斗は今日もその部屋に入り浸る
 _____ 予定だった。

「うおおおおお!!」

「一ノ瀬名人!逃しませんからね!」

大阪は梅田付近を舞台にした将棋連盟悠斗捕獲部隊(男鹿さんや会長など...) vs 一ノ瀬悠斗の壮絶な鬼ごっこが行われていた。

根本の理由となったのは電王戦後の悠斗&万智イチャイチャ逃亡事件(某タイトルホルダー命名)が発端である。あの事件の後、悠斗と万智は新大阪で新幹線を降りた訳だが、改札を出るなり八一達一門に怒られ、泣かれた後に男鹿さん(鬼の形相)に拘束されてホテルで1週間ほど拘束されるといふ事案を発令された事が始まりである。

なぜ拘束に至ったか?それは免状が関係している。免状とは将棋連盟が発行するアマチュアの段位認定証だ。それには名人と竜王、そして連盟会長の直筆の名前が入る訳

だが… 悠斗はそれを名人任命直後から電王戦の用意などを言い訳にサボりまくったのだ。

『盤王』として名人の追加記名がある中でそれなりの日数サボれば山のように免状は貯まる訳だ。悠斗は拘束が嫌すぎて缶詰1日目に脱走を図った訳だ。

神戸という事で悠斗は天衣のところに向かうも「私の気持ちも知らずにあの女とイチャイチャした奴がなんの様？ あんたなんてさつさと捕まりなさいよ！」と言われて蹴飛ばされた。でも、ちゃんと休憩はさせてくれるあたり天衣はやはり可愛いby悠斗



「ゼーゼーゼー」

「あれ、悠斗はん？ 男鹿はんやら会長はんに追われとったんじゃあらへんどすか？」

「本当だ兄弟子じゃ無いですか?!? 追われてたんじゃ無いですか?!?」

「あ？ こいつがなんで追われてんだ？」

「実はカクカクシカジカで…」

「んだよ。それはクズだな。さすがクズの兄弟子だな」

「罵倒すんなや… 監禁は俺でも嫌なんだよ」

いつもの3人組は悠斗を全力で罵倒したのだった。

「お前がさっさと処理すれば良いだけだろ？」

「そうですよ。さっさと捕まってきたください」

「ちゅうか敵の本丸に乗り込んでくるってドMなんどすか？悠斗はんは」

「ドMじゃ無えよ。万智にそんな罵倒されるのは久しぶりで内心びっくりしとるわ」

「で？なんでここに？」

「ここだったらお前らしいからな。家の前には職員が張り込んでるからな。帰れない。で、Uber Oatsなんて頼もうなら配達員に連盟職員が来て引き摺り出されるからな。昼間はここで時間潰す。灯台下暗しだ。で、連盟職員には見られない様にごそつと来たからセーフ」

「なんか・・・兄弟子もお疲れ様です」

「で、ちなみに何枚溜まってるんだ？」

「男鹿さん曰く数百枚・・・らしい」

「それ、ヤバくねえか？」

「うん。まあ何とかなる。将棋指すぞ。最近将棋成分足りてねえんだわ。それもあつて

逃げ出してきた」

「あ？？足りてない？」

「あ！順位戦がないからですか？！？」

「なるほど〜」

万智や八一、燎は悠人の発言にとても納得した様だった。名人とは全ての棋士の憧れだ。だがそれと同時に将棋狂には年間10局もの公式戦が消える事を意味しているのである。単純に順位戦が全て無くなるからである。よつて無限に将棋の指せる棋士室は悠斗にとつて天国に等しかったのだ。

「さあやろうやろう!!」

「…… そやけど、悠斗はん。やっぱし大人しゆう免状書きに行つたほうがええやないですか？ そうしたら逃げへんでいっぱい将棋指せますえ？」

「そ、そうだな！ よし悠斗！ さつさと書いてこい！ 名人とかこのクズ竜王、”会長”にも迷惑かかるからな！」

「え、嫌だよ。書きにいきたくない」

「兄弟子！ 行つてきてくださいよ！ おれもこまつてるんですよ!!？」

「んだよ。さつきから…… 急にオドオドしましてよく。大丈夫だよ。男鹿さん達は多分今頃、西九条のあたりうろついている筈だから。俺は逃げの名人だからな（笑）」

「「ヒイヒイヒイ」」

「さすがは”名人”ですね？」

「…………… お…………… 男鹿サン…………… デアリマシヨウカ？」

「そうですよ。男鹿です。名人、こちらを向いてお話頂いても?」

「アハハハハ……生憎、首が180度マガリマセン……」

「大丈夫ですよ。男鹿なら回せます」ガシッ!

悠斗の頭を掴むと男鹿さんはまるでレモン汁を絞り出すあの料理器具でレモンをひねるかの如く悠斗の頭を捻ろうとしてきた。

「ちよいちよいちよい!!!負けました!!!負けましたから!死んじやう!!その周り方は流石に名人でも無理!!人間として無理!!」

「大丈夫ですよ。男鹿なら出来ます」

「出来ないから!男鹿さんでも無理だから!!」

「なら大人しくホテルで缶詰にされてください」

「されるから!されるから!!やめて男鹿さん!!」

「なら来てください。あ、山城桜花」

「なんですか?」

「貴方も……連盟のお仕事がつぷり溜まっていますから今日は拘束です」

「ふえ?」

「貴方も一ノ瀬名人とお出かけしている間に取材や雑誌の記事書き。連盟のグッズなど……予定丸潰れです。ちゃんとご自宅には確認取りましたから。バカップル

仲良く缶詰にされてください」

「イヤアアアアアアア」

こうして2人ドナドナされた。

「……将棋指しましょうか。月夜見坂さん」

「ああ。指すか」

なお2人同室にしたためイチャコラし出して結局作業は進まず、この後悠斗が解放されたのは棋帝戦の1週間前だったとか何とか。断っておくがあくまで”健全”である。そう”健全”である。大事なことなので2回言いました。

第六十局 前夜

結局夜中まで悶えていた結果、最終の電車が出てしまい大阪どころか名古屋まですら出れなくなった一ノ瀬御一行は結局翌朝の始発で多治見を発った。

悠斗は大阪に着くなり八一に泣きつかれ、銀子に泣きつかれ、そして天衣に罵倒され、あいちゃんに怒られてた。その後、男鹿さん&会長&師匠に叱られた。フルコンボだドン☆で、そのあと悠斗が蔵王先生と飲んで事の顛末を話すと大笑いされた。



間髪入れる間もなく悠斗は大阪を発って棋帝戦第一局の会場に向かった。

「着いたー」

やって来たのは北海道札幌市である。今回の対局は北海道は札幌の旅館で行うのだ。ちなみに第二局は沖繩である。ついでに玉座戦第一局は九州である。タイトルホルダーってあれよね。なんだかんだ言つてアホみたいに行き行くよね。

名人が七冠を持っていた頃はどんなに少なくとも年間20回以上は何処かに対局しに行っていたという計算だ。ヤバくね？

ちなみに今回の相手は生石九段。最近はAIの研究を取り入れてメキメキと力を付

け直しているタイプの人だ。つい先日、月光会長とのA級順位戦第一局で快勝を収めるなど順調な出だった。なお名人も順位戦第一局を制してそのまま解説役として北海道に飛んできている。

「悠斗くん。先日はあんなこと結婚について言っちゃったけどごめんね。八冠がんばってね☆」

というありがたい……？というか半分脅しというか……とにかくそういうお言葉は悠斗は頂いた。堀を二重にしてさらに鉄格子を付けて逃げられないようにするとは流石名人である。

「ahaha…ガンバリマス」



「それでは検分を行いますので皆様、こちらにどうぞ」

検分の時に今日、初めて生石九段に悠斗は会った。悠斗自身、タイトル戦で生石九段と当たるのは初めてだった。準タイトル戦と言っても過言では無いと思われるA級順位戦、そしてその最終局でも当たった事はあるがそれとは格が違う。雰囲気も違って違うのだ。

「生石九段。お疲れ様です」

軽く挨拶をする。タイトルホルダーは俺であっても、歳は向こうが上。タイトルホルダーとしての威厳も大事だが年長者に敬意を払うのもまた大切である。若いタイトル

ホルダーの難局である。

「二ノ瀬 名人”から”九段”なんて呼ばれるなんてな。俺も落ちたもんだな」
ケラケラと笑いながら生石九段は悠斗に向かってそう言う。ある意味で自身を貶しているようなものだった。

悠斗は相手に対しての呼び名に規則性を持っている。それはプロや女流の誰もが知っていた。それはタイトルホルダーはそのタイトルの名で。名人だけは名人。そして――無冠は問答無用で段位による敬称なのだ。例え相手がタイトル陥落したばかりだろうかそれは例外では無いのだ。



悠斗は前夜祭なども終えて旅館の自室に入る。

「お疲れ様どす〜」

「やっぱりお前がいる違和感が無くなってるのは異常だと思っただが…」

「ええ傾向どすなあ☆」

「クソみたいな傾向の間違いだろ」

「ふふふ♪そんなんあらへんどすえ〜。そ・れ・と！まずはこつちからどす！」

そう言つて万智は眼鏡をかけた姿を悠斗に見せる。眼鏡をかけたと言う事は記者モードという事だ。そもそも万智が悠斗の部屋に押し掛ける免罪符は「インタビュ〜」

なのだ。万智曰く、インタビュアーの後にそのままグダグダしているだけだそうだ。

「で、何を聞きたいんや?」

「今日の前夜祭の話についてです」

「……『振り飛車の受難』の事か?」

「はい」

「あれには意図もクソも無いぞ。俺は振り飛車で全て指す。それを宣言しただけだ」

「何故そんな事を?」

「あの人はAIを嫌っている。だけどAIの研究にも乗り出した。この相反する2つが結びついた時、どうなると思う?」

「AIの機嫌を取るような将棋を指すことは無い?」

「そう言う事!正直、ディープラーニングを使用して研究成果を上げてきてるやつがいる中で対抗するのは難しい。それに対抗できるのは二つのパターンがあると俺は思っている」

「二つ?」

「一つはそれを超える」

「超える……」

「レート6000ぐらいじゃないか?」

「6000?!!?」

「そんなの可能なんですか?」

「知らん。4000までは持っていったぞ?」

「……」

万智は絶句した。たしかに、電王戦での悠斗のレートは4000に匹敵すると言われた。だからこそその発言だろう。しかしそこからさらに2000上となればもはやお話にならないレベルなのだ。

「…… もう一つは?」

「もう一つはAIに理解出来ない戦法を編み出す」

「へ?」

「AIは機械。なら機械が理解出来ないようにすれば良い。至って単純なお話だ。AI vs AIをすればスペックがいい方が勝つ。何故なら同じような考え方でより深く読めるから。なら思考回路が違えばどうだ?その理論は通じない。AIがシヨートすればそれを頼りに考えて研究している棋士を感覚戦に追い込める。あとは力量だ」

「……」

「ただし、この戦略には難点がある。それはAIが理解出来ないかつ、その場で穴が発見されないという事。それが必要だ」

「竜王は？竜王はどうなんですか？！」

一ノ瀬悠斗に続いて棋界で2番目に強いと評される九頭竜八一。

「たしかに強い。だけどあれはA Iに聴いている。それをうまく自分のものにしていく。感覚的な将棋の場面でも思考できている。だから強い。だけどあくまでそれはA Iの近くに立っているだけだからだ。いつか、A Iに飲み込まれる」

「じゃあ悠斗はんは？」

「俺は—— A Iに聞くことはあるが飲み込まれないようにしてる」

だからこそ一ノ瀬悠斗は感覚的な将棋も好んでいるのだ。

その言葉を残して万智はつまみ出された。

▲▼▲▼▲▼

翌日の対局開始15分前。悠斗は対局室に足を踏み入れる。立会人などに挨拶をして、上座にゆつくりと座りその時を待っていた。

「おはようさん」

5分前に挑戦者である生石充が対局室に足を踏み入れた。空気は一気に緊張感で膨張し、ピリついていた。

振り駒の結果、俺が先手番を取り対局は開始される。

「よろしくお願いします」「ん。お願いします」

そう言うと、悠斗はゆつくりと飛車先の歩を突いた。

第六十一局 棋帝戦第一局

対局が始まって14手目。遂に生石九段が飛車を振った。思わずその瞬間に悠斗や記録係はめを見開く。なんと”新型”の四間飛車である。

「つー……ほう」

思わずそう感嘆の声漏れるほどだった。それは「美濃囲いを完成させ無い」と言う物だったのだ。振り飛車の王道といえば美濃囲いである。そこから高美濃囲いや銀冠などに発展させることができる振り飛車を使ったことがある人なら誰しもが一回はやるであろう手筋なのだ。

しかしながら生石九段はそれを未完成の状態にしたのだ。7二に玉を起き、一段下に銀。左隣に金を置いた状況。しかし美濃囲いの完成形にする為に重要な一つの駒と言える左の金は振った飛車の下に据えられたままなのだ。

理由に気付いて悠斗は感嘆の声を上げたのだ。彼自身、小さい頃からよくやられ、よくやってきた対美濃囲いのお決まり戦法の一つと言っても良い物。5五角と3六桂という攻撃だ。玉を逃げれる所が少なく初心者の頃は誰もがやられた道。しかし、この新型であれば玉の逃げるスペースが確保されておりこの急な攻撃にも対応していけると

いう物だった。

「…… お前に言われた通りな、自分に合う研究をしてみた。AIのご機嫌取りなんかし
無いで、なんと言われようと俺の物をぶつけに来た。ゴキゲンだろ？」

「…… なるほど。生石先生、それが貴方の答えでしたか」

「嫌いじゃないです」

悠斗はそう言うとう居飛車穴熊の明示をする。振り飛車の相手にとって最も重厚な存在。硬く思い戦法であり、駒一枚一枚を剥がしていくのに大きな労力を割く戦法である。この勝負は持久戦に持ち込まれる…… という想定だった。

▲▼▲▼▲

しかし、生石九段の新型四間飛車は強かった。初期のあの駒組は後に大きな力を発揮したのだ。

△9一飛車を使ったのだ。

「地下鉄飛車……！」

一番下の段を移動し、まるで地下鉄のように動くことからこの名がつけられた戦法である。

「そうか…… そういう事だったのか………」

「どうだ？」

「とんでもない戦法引つ張り出してきましたね」

生石九段はニヤリと笑い悠斗は目を輝かせる。悠斗は確信した。実力制第四代名人賞を次に獲得するのはこれだという確信に至った。

居飛車穴熊に対してこの地下鉄飛車と新型美農囲いの守りを使うことによつて相手角の睨みを躲しつつ、自身は穴熊の中にある相手玉を飛車、香車、角、桂馬の4枚で叩くことが出来るのだ。どれだけ頑張ろうとも、恐らく悠斗の玉は穴熊から引つ張り出されてしまう。

そう……この戦法は急戦と穴熊という振り飛車にとつて厄介な物を一度に片付けてしまった戦法なのだ。特に、振り飛車党にとつて課題の一環であった居飛車穴熊という高く、硬い壁を打ち破る戦法としての力は強いだろう。



「……」

「………まいました」

深夜9時ごろ、一ノ瀬悠斗棋帝は負けて第一局を落とした。

「生石九段。凄いつすね……」

「いや、お前のおかげだ。変にご機嫌取りなんかせず最初つからこんな戦法思いつけば良かったよ」

「いや、この戦法は優秀だ…… 例えばここをこうしていれば」

「いや、それなら」

新型戦法の研究会が感想戦として開催される。その時間は軽く3時間をオーバーしており、連盟職員が声をかけても「あと10分」「あと5分」とまるで男子中学生の様な様子方をされ、名人が呼びに行っても一緒に研究会を始めてしまう始末だった。



「でっ！あの戦法はどないな物やったんどすか!?!」

「近い近い」

会見やらなんやらを終えて部屋に戻った訳だが……いきなり万智が悠斗を質問攻めにした。

「あれはな」

「ほうほう」

「なるほどぞす」

「だから言ったろ？あの人はAIに頼りすぎ無いんだ。だからあの人の将棋はあの人のアジがあつて面白い」

「理解したぞす」

「なら良し」



悠斗は万智の対応も終えて風呂に入り（もちろん万智が乱入）布団に入る。

「で、お前がいる理由を簡潔に答えよ」

「悠斗はんとイチャイチャしたかったさかいですか」

「……」 ナデナデ

「……♡」

「……」 チュツ

「!??!?!?!?!?!?!?!?!♡♡」

「満足か?」

「もう一声」

「なら建前を聞かせろ。それだけじゃああんな真剣な顔で布団に潜り込んでないはずだ」

悠斗は先程、万智の顔が一瞬強張ったのを見逃さなかった。

「銀子ちゃんの事です。もうすぐ…… 決着の季節どすさかい」

「っ!」

無限地獄よりさらに深い地獄の三段リーグ。その地獄に垂らされた糸を登ることができるのはたった数名。プロになった全ての者。そこに到達した全ての者が味わう苦

痛。勝っても地獄、負ければ死。この異常な世界の一節があともう少しで終わろうとしている。

悠斗は恐ろしいほどの焦燥感と吐き気と、不安を感じながら万智の体に顔を沈めた。戦いの秋はもうすぐそこにある。

第六十二局 0か1もしくは100

「負けました」

悠斗のその一言でついに棋帝戦は終結した。

悠斗は棋帝戦は2勝3敗4分で負けた。生石新棋帝の創り出した新しい振り飛車である耀龍四間飛車という大きな壁を壊しきれなかったのが敗因である。常勝であり天災である一ノ瀬悠斗史上、初の失冠。しかも一年での失冠という事でかなりネットなども荒れた。

さらに勝敗のついた5戦にプラスして4戦の引き分けが入っているというちよつと何言ってるかわからない状況が発生しているのだ。内訳としては3回千日手で一回持将棋。こうも長引いたタイトル戦は中々無い。

▲▽▲▽し

「……………くそっ！」

会見などを終えて悠斗は自室への通路を歩いていった。悠斗にとってタイトル失冠は初めての事である。それは誰であろうとタイトルを冠した事のある者なら遅かれ早かれ経験するものだ。あのタイトル100期の名人ですらそれは経験している。

しかし：： それとどう向き合うべきなのか。それを悠斗は知らないのだ。21歳の青年であり、タイトル7期も獲得した彼にとつてそれはあまりにも大きな崖であった。周りにそれを聞くことも出来ないのだ。何故ならその経験をした人が周りにいないからだ。



「はあ……」

早々に露天風呂にドボンし、ヤケ酒と言わんばかりに日本酒を飲み始める。

「…… はあ」

どれだけ酒を飲んでも、湯船に沈んでも出てくるのはため息ばかりなのだ。

「おや名人。お一人なんですかね？」

「つ…… !会長でしたか」

そこには将棋連盟会長。月光聖市がいた。相変わらず師匠と同年には見えない50代の姿に悠斗は自身の目が悪くなった様感じた。

「はい」

「会長こそ、お一人なんですか？」

「はい。男鹿さんが『心配だ』と言つて付いてこようとしたのですが…… 流石に宥めました」

流石男鹿さん。強さが違う。by悠斗&中の人

「しかし：：。会長がいらつしやるなんて珍しいですね」

「いえ、たまには名人と：：。いえ悠斗君とお話ししたかったのですよ」

「俺とですか？」

「はい。正直言つて無理していますね？」

「ナ：：。ナンノコトヤラ」

「悠斗君。顔に出ていますよ？」

「はい。無理してます」

「やはりですか。初めての経験ですしそれは仕方ないことです」

「はい。しかし：：。みんなにこれで迷惑かけてしまったらと思うと：：。」

「そうですね：：。」

会長も考え込んでしまった。"タイミング"が悪いのだ。この失冠は。八一は最年少複数冠に向けた大一番を。師匠はB-2に向けて走っている。悠斗は名人になったばかりであり対面的なこと。天衣も来季の女王戦。そして「師匠と戦うために」と言つて女流玉座戦に向けて爆進中。

そして何より銀子である。三段リーグの真つ只中。悠斗が傷ついた姿を見せれば嫌な思いをさせてしまうと悠斗は考えているのだ。

「はあ…… だから師匠って凄い」

「清滝さんですか？」

「はい。八一が三段リーグにいた時。師匠がB級1組に落ちたんですよ。でも眉ひとつ動かさずに耐え抜いて見せたんですよ」

「ほう。流石は清滝さんですね」

「俺にそれができるかどうか……」

「私は弟子を取っていませんから…… 分からないところがあるのは確かです。ですがね…… 今回のタイトル戦を悔やむ事はありません」

「？」

「私が最後の一冠を名人に取られた時、将棋界の一部は私を責め立てました。雰囲気でなんとなく分かってしまっんです」

「……」

それは悠斗も耳にしたことがあるものだった。名人全盛期の玉将戦。七冠独占を阻止する為に将棋界の一部は「名人倒すべし」の風潮があったと言う。そしてその最後の砦が悠斗の目の前に座る月光聖市だったのだ。

しかし最後の「一冠を聖市は名人に取られた。間違いなく当時最強と最強の一戦。しかし結果論で攻め立てられたのは事実。」

「私はそんな事気にしてませんでした。結果論で物事を言うのは大事です。1か0か。その差は大きい」

「…」

凜とした表情で会長は喋り始めた。

「しかし、その過程で私は100を得た。だから私はあのタイトル戦を後悔していません」

「…」

「貴方は耀龍四間飛車という誰も見た事のない壁に初めて当たった」

一息ついて会長は続けた。

「悠斗君。私はその壁に正面から挑み5番勝負のタイトル戦で9戦をやるという前代未聞の将棋をした君が凄いと思つていますよ。確かに私は君の無失冠での永世棋帝獲得を期待していません。ただそれ以上に私は君の将棋が人間味溢れる強くて面白い将棋だったと思います。私はそんな将棋をした、君の過程が好きだった」

「過程ですか？」

「ええ。回を重ねるごとにキレの増す耀龍四間飛車への対策。見事なまでのカウンターもあつた。かつて名人しか使えなかつたマジックも君は自身のものにして今回のタイ

トル戦でも炸裂させて見せた。もう……ある程度対策の目安は立っているのでしょうか？」

「まあ少しずつですけど……」

「なら凄い。我々はまだまだまだお先真つ暗なほどの対策です。マジックも使えません。悠斗君。君は我々に比べて100は進んでいる。貴方はその過程に100を見出したんです。だから私は君が羨ましい」

何故か別の事を含んだような言い方にも聞こえたが、会長が悠斗に言った事は間違いなく本心だった。

「……」

「玉座戦も頑張ってください。名人」

「会長……ありがとうございます」

「いえいえ。それでは私は」

そういうと会長は露天風呂を後にした。

「結果ゼロでも過程で100入れれば儲けもん……か。会長は違うわ……」
悠斗はそんな事をぼやいていたとかなんとか。



「我々は彼に期待を寄せ過ぎているのかもしれないね」

会長は言葉にしてそれを言った。

「そうかも知れません。しかし、彼ほど将棋の全てをひっくり返すような天才は今後現れないかも知れません。だから私含めて皆さん、名人に期待してしまうのでは？」

男鹿さんもそれに同調した。

一ノ瀬悠斗名人（玉座）。名人の全盛期を彷彿とさせるその強さ。誰にでも明るく接するその態度や Y o u T u b e を棋界で初めてやる前衛的な考え。メディア受けもよし。彼に期待しないほうがおかしい。

しかし会長だけもつと高いものを期待していた。それは十六世永世名人を超える史上最年少での永世名人獲得。そして永世“八冠十一冠”だった。

つまり現在存在する永世七冠に加え、叡王戦で己が他が絶望する程の圧倒的な成績を取め永世位を作らせて、それを取る。そして名誉公共放送杯という数十年。ラジオ時代から始まって名人ただ一人しか取っていない称号を取る。それが会長が求めるものだった。何故そこまで彼に求めるか？単純だった。

「あの日：：私が辿り着かなかったその極地をさらに貫いたその先に彼は居ます。私は彼が羨ましい。私は彼に：：正直嫉妬してしまいます。そこに居る彼のことを。だからこそ名人が、名人ですら見たことが無いこれ以上ない極地へと彼には行ってほしいと願ってしまうのです」

会長の目には夜空に光る月極地にいる悠斗の姿が見えていた。

閑話

ある初夏の日。大阪にある将棋カフェには死体の山が出来上がっていた。その原因はプロ棋士、一ノ瀬悠斗がやって来たこと以外の何物でも無い。

「はいつぎー」

悠斗は十面指しで次から次へとボコボコにしていくのだ。そりや悠斗は将棋の頂点である名人位についている。宇宙で一番将棋の強い人間なのだ。

「はいつぎー」

それにしても悲惨である。次々とアマ有段……それもアマ名人戦でかなり良いところまで行くような猛者も含めてだ。次々に切り捨てられていつているのだ。

「はいつぎー」

本当にボコボコである。

▲▼▲▼▲▼

「で、一ノ瀬名人はうちを潰したいの？ねえ……刺すよ？」

「別にそう言うわけじゃ無いです」

大阪は高槻にある将棋カフェ。最近、悠斗が発見して入り浸っているところである。

そしてその悠斗の頬を全力でつねっている女性店主。名前は双柳静。なみやなぎしずか

親が奨励会時代から悠斗のことを応援している関係で、悠斗自体が静の親が経営している将棋カフェに入り浸っているため知り合い。というか腐れ縁2号（1号は万智）である。現役高校生の女流2級。万智とは公私共にバチバチ。そしてこの将棋カフェを仕切っているしつかり者。ドsである。

美人であるが全然静かじゃ無い（悠斗に対してのみ）

「はあ……うちの親が良いって言ってるから許可してますけどいざとなったら切り捨てますからね？」

「お？我、名人ぞ？名人ぞ？」

「一ノ瀬名人。八寸盤の角で頭を思いつきり殴られたことがありますか？」

「無い」

「今ここで体験させてあげましょうか？」

「やだ」

「なら大人しくしてやがれください」

「棋士なのだからもうちよつと先輩に敬意を持って」

「一ノ瀬名人（笑）に払う敬意なんてどうの昔に消え去ってますよ？払って欲しいならもう少しクズ竜竜王ぐらゐの最低限の礼儀を覚えてくれませんかね？」

「竜王に対してもこの仕打ちよ。あ、その手悪手だから」

10秒将棋のさらに極めた5秒将棋をやりながらこんなことを喋っているのが常である。

「あ！待ってください！」

「やーだね☆」

え？もちろんフルボッコですよ？by悠斗

▲▼▲▼▲

10戦10勝で勝ったところで静の親。双柳金八が帰宅してきた。

「お？悠斗君じゃないか！お疲れ様」

「あ。金八さん。お疲れ様です」

立ち上がって仕入れてきた大量の荷物を運ぶ手伝いに入る悠斗。

「あく別に良いよ良いよ。座っててくれ」

「すみません」

申し訳なきように悠斗は座る。すると静は悠斗の脛をおもつきり蹴り飛ばす。

「名人ってほんとうに私にだけ態度クソですよね」

「イツた！やめろ！蹴るな！」

ドsである。

「うっさいです」

これマジで痛いのである。さらに蹴りを入れられていたところ更なる鬼が来る。

「悠斗はん？ やっぱしここにおったんだすなあ？ ほくと… すぐどつかにいつてまうさかい。 静ちゃん。一緒にご飯行かしまへんか？ もちろん悠斗はんの奢りで♡」

「はあ!!？」

「どうせ悠斗はん。 今日もこのカフェに来た人を片っ端からボコボコにしたんだすなあ？」

「そうなんですよ!! 万智さん！ この人、ほんとくにひどくないですか？」

「悠斗はん？」

「いや、俺は奢らない!!」

「月収100万は黙っとってください」

「え!!？ そんなに貰ってるんですか！ この人」

「そうどすよね？ 貰ってますよね？」

「…はい」

そう。名人は順位戦の対局料の代わりに100万円を月々貰っている。それにプラスで対局料が入り一般棋戦も入り相当額が月々入るのだ。

「奢ってくれるでなあ？」

「はい」

「ならお寿司食べに行きましょう！私、お寿司食べたいです」

「ええどすなあ」

正直言つて鬼である。この二人のダブルコンボはえぐいのだ。

「オゴラセテイタダキマス」

「お寿司！お寿司！」

両腕に抱きつく現役女子大生と現役女子高生。その中心には若干20代の将棋の頂点（名人）である。側から見たらヤバい。



マグロ☆時価☆というお店に連れて行かれた悠斗。数万は吹っ飛んだのだった。

その裏でこんなえげつないことが決まっていた。

『玉座戦五番勝負 挑戦者 九頭竜八一竜王』

この夏、兄弟の兄弟による…将棋界の玉座をかけた戦いが始まる。

第六十三局 兄弟という名のライバル

本年度の玉座戦は全国的にとても話題になった。一ノ瀬悠斗の史上最速永世位獲得や昨年の竜王戦における永世七冠の件。タイトル百期による名人の国民栄誉賞。そしてその名人からの一ノ瀬悠斗の名人奪取。さらに空銀子の奨励会三段。

何かとお茶の間に将棋と言うものが登る日が多いが、今回はまた一段と注目を集めている。理由は兄弟でのタイトル戦である。しかも空銀子の兄弟子と弟子。竜王と名人の対決だ。マスコミのネタにも良しで連盟からしても旨味なのだ。

あいちゃんによって整備された関西将棋連盟の棋士室。悠斗は部屋に置かれた将棋雑誌……じゃなくて某有名スポーツ紙を見ていた。その表面は悠斗と八一が飾っている。

踊る見出しは『天災vs西の魔王！空三段を手に入れるのは!?』

「はああああ……」

ちなみに書いたのは他でも無い。供御飯万智である。

「あいつピーピーしてピーしてピー……してからピー……するか」

「なんてこと言うてるんどすか!!?」

「ならこんな捏造記事書くんじゃねえ!!」

「ええやないどすか」

「良くねえ!」

「別に減るものぢやうやん?」

「減るんだよな」

「何がどすか?」

「万智とイチャイチャ出来ない」 チュツ

「ン~~~~!!」

「わかったか?」 アタマナデナデ

「は、はい……… って!悠斗さんこそこんな公衆の面前で何やってるんどすか!さつき

と将棋しましょう!竜王サンの対策するんどすか!!?」

「わーった。わーった。八一は何やってつかな」

▲▼▲▼▲

その頃八一は……

「うおおおおおおお!!!」

に打たれていた。

「八一。あと100分だから」

「師匠。頑張ってください☆」

「はいいい!!」

万智の書いた例の記事によってテレビに出て、女性アナウンサーとイチヤイチャして鼻を伸ばした結果がこれだ。2人の手によって制裁…ゲフンゲフン…そうタイトル戦に向けて心を清めるためだ。そう心を清めるために滝に打たれていた。

「ハアハアハア…ぎむい…姉弟子イ。これ必要なんですか!?!」

「必要よ?んなな地方テレビの美人アナウンサーにうつつを抜かしていて現“名人”の兄弟子に勝てると思う?喉仏食いちぎられて燃やされて灰にされてから畑の肥料になる事ぐらい想像つくわよ?」

「そんな事あります?」

「あら?もつと生ぬるいと思つてた?」

「違いますよ。兄弟子なら灰にした後、それを位牌に投げつけて位牌ごと火炎放射器で燃やすでしょ?」

「いや、野菜を使った後にそれを「食いたくない」って言って火炎放射器にかけるでしょ」

「それに違いなですw」

「おじさん先生の扱いがひどくなってる!?!?」



「なんだろう…今ものすごく銀子に1ヶ月のお菓子禁止を申し付けた挙句、八一をドラム缶に詰めて東京湾に沈めたい気分になった」

「?」

悠斗は何を感じ取ったのだろうか…

悠「時に万智。この戦法どう?」

タイトル戦に向けて、悠斗はとある一つの戦法を万智にぶつけて勝ち切ってみた。万智は戦法を耐え抜けず見事に崩れていった。そして万智は顔を上げると非常に悪い顔をしていた。

「へえ…悠斗はんも悪いこと考えるなあ?」

「そんな狐みたいな笑顔浮かべんなよ」

「狐はこなたじゃ無おす。こゝんな人を騙す様なこと考える悠斗はんの方どす」

「せやな〜」

第六十四局 名人の思考

ミーンミンミンミンミンミンミン……この世で最も鬱陶しいコーラスを聞きつつ灼熱の太陽と日本独特の湿っぽい風を浴びて悠太は対局会場である二条城に到着した。

歴史的には大政奉還が徳川慶喜によって決されたという場所だが、将棋的に見れば電王戦が行われた場所ですさらに人間が勝利を収めている。何かと縁深い場所ではある。

「一ノ瀬王座。今回の作戦は何かあるんでしょうか？」

「内緒で」

「名誉玉座を獲得して以降、初の玉座戦ですが？」

「今期も全力で挑む。ただそれだけです」

「弟子である九頭竜竜王との初のタイトル戦です。竜王は“最強”との呼び声高いですが？」

「天災が最強如きに負けると？」

「っ！いい、いえ」

あまりの気迫というか殺気に記者は引き下がる。

「あいつが全力で挑んでくるなら全力で叩き潰す。それだけです。例え竜王だろうがな

んだろうがそれはそれ。これはこれだ」

▲▼▲▼▲▼

翌日の朝、報道陣が詰めかける中で立会人の声がかかる。

「時間になりました。一ノ瀬玉座の先手で初めてください」

「よろしく願います」

▲2六歩：…居飛車明示である。△8四歩。八一も当然のように居飛車を宣言した。そのまま歩は突き出され、相掛かりの局面が作られた。

玉座戦は元々、待ち時間の少ないタイトル戦であり割りかしポンポンと局面は進んでいく。

互いが互いを牽制し合い、その上で戦いが成り立っている将棋において、どちらが発火をするかというのはとても大切なポイントと言える。

その点で、今日の八一はかなり冴えていた。天災相手に積極的な攻めを見せ。天災の台風の目を確実に突き、実世界では晴れ渡っている台風の目と呼ばれる場所をスルスルと通り抜けていつているのだ。

一方の悠斗は完全に八一に抑え込まれていた。どれだけ進めても打開の一手が出てこず、ただの温帯低気圧に等しいその威力は天災の見る影もなかった。

▲▼▲▼▲▼

「ああもう・なんでうちの師匠はこんなふうなのよ!」

そう憤るのは控え室にある天衣であった。自身の師匠は最近、中々相手をしてくれなかった。それはどれもこれもタイトル戦が多すぎのためである。

しかしながらいつもの悠斗らしいキレッキレの攻めや硬く絶対に破れない守り。ましてあり得ないほど深い読みなど全く見られない状況にいるのだ。それは天衣にとつてももどかしく、またイライラするのに十分すぎるものだった。

「小童。静かにしなさい。兄弟子にも調子の悪い時ぐらいあるわ。それぐらいわかるでしよ?」

あまりのイラつき具合に銀子も動き、控え室はかなりの大混乱に陥った。

すでに互いは秒読みに入っており100手などもう超えてしまっている。かなりの長期戦になることが予想され、そのために多くの人は深夜に向けて体制を整え始めていた。

八一は悠斗の金、銀など多くの駒を持ちAIの予想でも勝勢という情報が出ていた。

実際、八一本人も勝ちを確信しておりもはや時間の問題と考えていた。それ故に八一は内心かなり浮かれていた。(あの兄弟子に。名人に勝てる)という心境は浮かれるのも無理ないものだった。

そして運命の△2六歩。この一手で八一は悠斗の飛車を取り、もはやこれまでといっ

た空気が対局室や控え室を覆った。

「……」パチンツ!

▲2二銀打

「?」

八一は訳も分からずにその王手……八一にとっては悪あがきにしか見えない手を同金として取り返した。

すると悠斗はすぐに▲4三銀成と王手をかける。遠くから角が睨んでおり、同玉と移動する事はできない。

仕方がないので八一の玉は別方向に逃げる△2三玉

▲2四歩。王手である。

△同 玉。その駒を八一は取る。その手取りは凄まじく重くなっていた。

▲3六桂 △2三玉 ▲2四歩…… △投了。大逆転も大逆転。頓死である。

少し戻って八一が飛車を取った時。銀の後ろで睨んでいた角を八一は取ることが出来ていた。これを取れていれば八一は完全に勝つことができていた。

「……」

「八一。あそこで、飛車じゃなくて角を取れば俺は投了してた」

「……………はい」

「たしかに歩で飛車を取るか。角成で角を取るか。同じ一手でも確かにダメージが大きいのは前者だ。だけど、それは単純な計算しかしてない。いつておくが……今回は狙って”これをやった”」

「!?? そんな……」

「普通なら不可能だろう。でも、お前だからできた。お前は確かに強い。だけど、それ故にクソ単純なんだよ。もし、今のレベルで満足してるならそこで足掻いてろ。なーんにも雑音なんて聞こえない世界だろ? 真つ白で、将棋盤だけがある世界。ちがうか?」

「…… 違います」

「俺も初めてタイトルを取った時はそこだった。名人も。だけど俺、今は雑音ばっかだ。呼吸の声。駒の声……全部聞こえてきちゃう。でも、それは全てを教えてくれる。だからお前が、この頓死筋に迷い込むって自信があった。お前はぜーんぶ、名人の思考の上で転がってたんだよ」

「……」

「それで、『玉座』に座ろうとしたのか? 片腹痛い」

「……」

「まあ簡潔に言おう。もつと強くなりたくないなら。もし、本当に名人を目指すなら。最強になりたいなら…… 現状に甘ったれてんじゃねーぞ、竜王」

「っ！」



「と、まあ。喝を入れるための第一局だった訳だ」

観戦記の取材を万智から受けて一連のことを説明した。

「なんか…… 悠斗はんも鬼どすなあ」

頓死なんて気づくことなんていくらでもある。プロ棋士たるもの、それに気づいてひやっとする事が普通にあるのだ。しかし、八一はタイトル戦という大舞台でそれをやった。

”悠斗のマジック”で片付ければ簡単だが、相当なダメージを悠斗は八一に与えたのだ。

「それだけ最近、あいつは調子に乗ってたんだよ。C級から一向に上がってこない。それで竜王が許される訳ないだろ。喝を入れたかったんだよ。あとは、まあもつと強くなってほしいからな」

「全く…… 悠斗はん。もしこれで竜王サンの調子崩れたらどないするんどすか?」

「しらん。この程度で崩れてたら俺、何回死んでんねん」

「それもそうどすなあ」

「名人から『やりすぎ』ってお叱りを受けたけど、まあ12時間耐久将棋をやれば許して

くれる（）」

「なんどすか？その、この世の全ての将棋を大金で煮詰めた結果できた勝負みたいやで」
「12時間ぶつ通しでひたすら将棋をし続けるだけという世界最高のエキサイトスポ
、ツ」

「頭おかしいとちやいますか？」

「元からだ」

なお、将棋12時間耐久を本当にして将棋バカ（失礼すぎる）2人が仲良くダウンしたの
のは言うまでもない。

大事なお知らせ。

皆さん、ご無沙汰しています。作者の如月です。今回は本当に大事なお知らせです。既に投稿しており、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、このお話をリメイクしたものを再度投稿させていただく形を取ることになりました。ページのURLは下部にありますのでどうぞ。ここからはなぜ投稿できなかったなどの理由です。ご興味ない方は一番下まで飛ばしていただいても構いません。

まず、簡潔に申し上げますと色々私生活が変わりすぎたことです。

私は2022年冒頭から大学入試共通テストを受験したり、国公立はじめとする様々な大学の受験をしていました。また、昨年の秋ごろには某大学のAO入試を受ける運びになるなど本当に受験に向けて忙しい時期でした。

また、私はその時期にコロナでは無いものの体調を崩してしまい身体的にかなりしんどい状況でした。

さらに申し上げますと、家族が病気を患いその闘病が始まってしまいました。今すぐ

命に関わるような重い病気では無いものの、免疫が落ちるなどコロナがある環境では大変危険なものでした。

受験と闘病、自身の体調問題など様々な要因があり昨年から今年初めにかけて投稿することができませんでした。

今年に入ってからには単純に大学がかなり忙しいということでした。私は家から大学に通っているのですが、大学まで片道2時間を使います。また、多くのレポート提出や慣れない講義。さらに毎週の実習実験に向けた計画づくりなど様々なやる事が降ってくる状況でした。

結果的にそれらに多くの時間が取られてしまい、私は投稿にこぎ着けない状況が続きました。

さらに本作品を投稿しなすすぎで、私自身がどのようなスタンスでこのお話を書けば良いのかわからなくなっていました。

何度か編集ページを開いてお話の制作に取り掛かろうとしたのですが、どのように書いてあげよう・・・というところでキーボードの手が動かず書き方がわからなくなっていました。

これらの状況を踏まえると今の作品を無理して投稿し、投稿を待つてくださっている

方々をがっかりさせてしまうのでは無いかと考えました。そこで現在のスタンスでこの作品を投稿し直して皆さんに新しく読んでいただく形をとれると良いと考えました。

今回、『Re・兄弟子のおしごと!』を投稿する運びとなった理由と、なぜ投稿期間がこうも開いてしまったのかでした。

旧作の兄弟子のおしごと!ですが、こちらの作品は今後しばらく公開したのちに時期を見て非公開にさせていたたくつもりですが、ご要望などございましたら公開したままの状態を維持しようと考えています。公開のままが良いという方は気軽にコメントをください。

最後になりましたが『兄弟子のおしごと!』をありがとうございました。唐突なお引越しになりましたが『Re・兄弟子のおしごと!』をよろしく願います!

新作のURL←

<https://syosetu.org/novel/303074/>